

# 大学入試研究の動向

令和5年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回）



# 大学入試研究の動向

## 41号

独立行政法人大学入試センターは、令和5年5月18日～20日、北海道大学との共催で、令和5年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回）をオンラインで開催した。本報告書は、同大会における講演、討論等を当センターの文責で採録したものである。

\*本報告書で言及されている高大接続改革の進捗状況及び講演者の肩書等は、大会開催当日のものである。

## 目 次

### 令和5年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回）特集

● 全体会1（大学入試センターセミナー）

「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて」

..... **3**

● 全体会2

「国際入試の現状と展望」

..... **105**

● 全体会3

「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」

..... **183**



## 「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて」

司 会： 寺尾 尚大 (大学入試センター研究開発部准教授)

趣旨説明	大学入学者選抜における CBT の現状と最新動向 .....	5
	寺尾 尚大 (大学入試センター研究開発部准教授)	
報告 ①	佐賀大学の学校推薦型選抜における CBT .....	10
	西郡 大 (佐賀大学アドミッションセンター長)	
報告 ②	九州工業大学の総合型選抜における CBT .....	20
	播磨 良輔 (九州工業大学情報基盤課長)	
報告 ③	大学入試センターにおける令和7年度入試に向けた試行調査の遠隔実施事例 ....	29
	堀越 健一郎 (大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長)	
報告 ④	大阪大学の調査研究における CBT システム .....	45
	萩原 兼一 (大阪大学 名誉教授/大学院情報科学研究科招へい教授)	
報告 ⑤	国際技術標準に準拠した出題モジュールの開発・評価 .....	60
	宮澤 芳光 (大学入試センター研究開発部准教授) 水野 修治 (大学入試センター試験問題調査官)	
報告 ⑥	電気通信大学における CBT の取り組み .....	81
	植野 真臣 (電気通信大学大学院情報理工学研究科教授)	
全体討論	.....	95

---

### 内 容：

近年、民間の学力試験・資格試験においては、コロナ禍の影響も手伝って、コンピュータを用いたテスト (Computer Based Testing、CBT) が注目されている。大学入学者選抜においても、複数年にわたってCBTを導入する先駆的な大学・選抜区分がいくつかある。

大学入試センターが令和3年3月に公表した報告書「大規模入学者選抜におけるCBT活用の可能性について (報告)」(以下「令和3年報告」という。)では、現行の共通テストのような大規模入学者選抜でCBTを行う場合、全国的に均質で質の高い受験環境の確保、トラブルが生じた場合

の対応体制の構築、新しい試験のあり方に対する受験者を含めた社会の理解の3点が、実施上の主な課題であることを浮き彫りにした。同年7月に公表された大学入試のあり方に関する検討会議の提言では、CBTの優れた点を多数挙げながら、各大学の個別試験や総合型選抜・学校推薦型選抜における望ましい先行事例を拡大することの必要性も提言された。そして、翌年6月にはセンターより「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」を公表した。本事例集の作成過程において、CBTに取り組む大学が直面する課題には共通性があり、これらの大学が知見を共有することでCBT実施に伴う困難を軽減できるのではないかという示唆を得たところである。そこで本セッションでは、CBTに取り組む大学に、受験環境、トラブル対応体制、新しい試験に対する社会の理解等の試験実施上の課題について、その対応方法を発表いただくとともに、他の大学や機関と連携することでそれらの課題をさらに克服できる可能性について議論いただく。本セッションを通じて、CBTに関する知見を共有するプラットフォームを提供するとともに、CBTの実施に関する知見を複数大学・機関で共有し、入学者選抜でのCBTを活用する際の課題を共同で克服するための仕組みの構築の足がかりとしたい。

## 全体会1（センターセミナー）◎ 趣旨説明

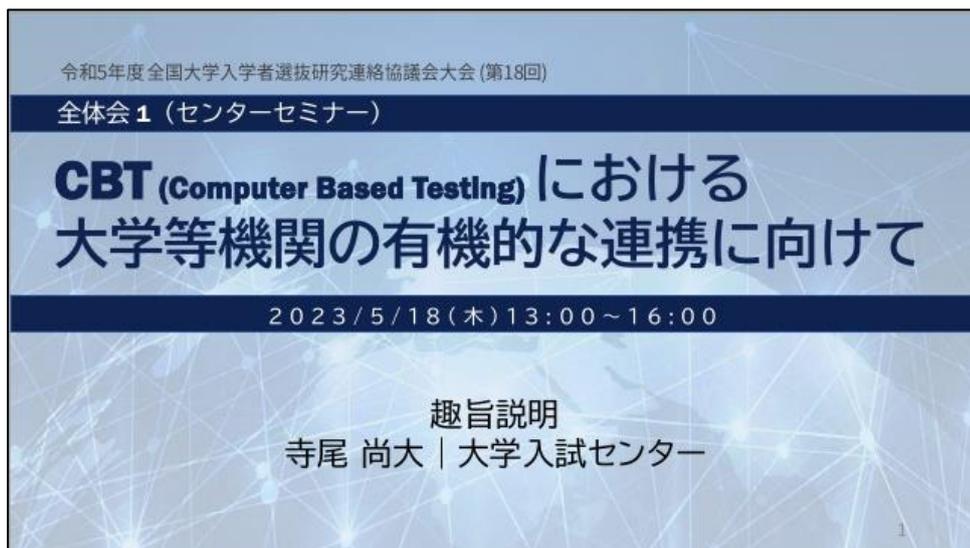
# 大学入学者選抜における CBT の現状と最新動向

■ 寺尾 尚大（大学入試センター研究開発部准教授）

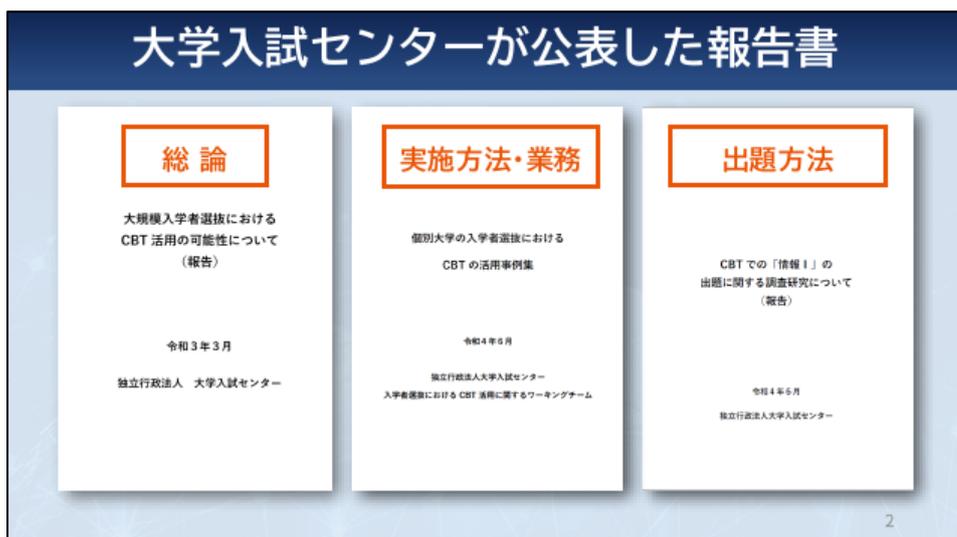
それでは、令和5年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回）の全体会1「CBT（Computer Based Testing）における大学等機関の有機的な連携に向けて」を始めたいと思います。本日の司会を務めさせていただきます、大学入試センター研究開発部の寺尾と申します。よろしくお願いいたします。

この全体会1では、新しいテストの方法としてのCBTについて、特に大学入学者選抜での取り組み、あるいは活動等について理解を深めていければと思います。

まず、趣旨説明ということで私からお話しさせていただきます。



CBT（Computer Based Testing）とは、コンピュータを使った試験ということです。入試関係者の中にはCBTに非常にお詳しい先生方、あるいは職員の皆さまもたくさんいらっしゃると思うのですが、初めての方、あるいはなかなかこの話題にキャッチアップしてこなかった先生方や職員の皆さまも多いのではないかと思いますので、少し丁寧にCBTの今の取り組み状況あるいは今後についてお話させていただきます。



まず、2021 年から 2022 年にかけて、大学入試センターから報告書を 3 点公表しました。

2021 年 3 月に公表した「大規模入学選抜における CBT 活用の可能性について(報告)」は、CBT に係る総論のような報告書であり、多様な観点を盛り込んだ形で、CBT について検討しなければならない事項、メリット、課題等を網羅的に報告したものです。

2022 年 6 月公表した「個別大学の入学選抜における CBT の活用事例集」は、CBT のワーキングチームを所内に立ち上げ、外部の有識者の先生方にもご協力いただきながら作成しました。後でも出てくるのですが、幾つかの大学・学部において、特に総合型選抜や学校推薦型選抜の枠組みの中で CBT を導入されるというケースが出始めており、その活用事例を示したものです。

同じく 2022 年 6 月に公表した「CBT での「情報Ⅰ」の出題に関する調査研究について(報告)」は、調査研究の一環として、もし仮に CBT で情報Ⅰの出題をやるとすると、ということが問えるだろうか、あるいは、出題の仕方としてどのような方法があり得るだろうかということをもとめた報告書です。まだお読みになっていない方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度お手に取っていただければと思います。

## 大学入試における CBT の利点と課題

- **利点**
  - ・測定対象とする学力の深化・多様化（出題方法、操作ログ等）
  - ・試験実施の簡易化・効率化（冊子や解答用紙の配布・輸送等）
  - ・複数回実施（IRT-CBT；等質な試験であれば得点を相互に比較可能に）
- **課題**
  - ・全国的に均質で質の高い受験環境の確保
  - ・トラブル等が生じた場合の対応体制の構築
  - ・新しい試験の在り方に対する社会全体の理解

総論の報告書の中でいくつかの利点と課題が示されています。CBTを使う利点として、その測定対象とする学力がより深化したり多様化したりするということが、紙という印刷媒体の物理的な制約がある中で、コンピュータを使うことによりそれが拡張されるということもあり得るでしょうし、解答の操作ログ等も残りますので、そういうものの分析を通して評価すべき学力の深化・多様化があり得るということです。

入試関係者にとっては、試験実施の簡易化や効率化にかなりご関心があるのではないかと思います。紙の場合は冊子を配ったり解答用紙を配ったり、あるいは数を数えたりというところに大変ご苦勞をされていると思うのですが、CBTで特定の方法で実施すれば、ある程度簡素化できたり効率化できたりします。あるいは、CBTの一つの理想形としてIRTを使った、問題をたくさん集めた問題バンクを構築した上で、かなり柔軟に難易度を等しくするような試験をいくつかつくって、複数の試験の得点を比較可能にするという枠組みなども提案されているところです。

ただし、CBTの実施に関しては課題もいくつかあげられます。1つ目は、受験環境を質の高いものにするということです。これは結構ハードルが高い課題です。2つ目は、トラブル等が生じた場合の対応体制の構築です。紙の試験以上に非常に高度な機械を扱いますので、トラブルが起こった時にどう対応するのか、そこまで考えておかなければいけません。3つ目は、今回のご発表にも出てきますが、CBTは新しい試験のやり方ですので、社会に理解してもらえ、納得してもらえ試験をつくることも非常に大事ですし、ご納得いただけるように丁寧に説明をすることも大事だと考えています。

### CBTに関する国内外の最新動向

- **国内の最新動向**
  - 大学入学者選抜：CBTを導入する大学・学部がちらほら
    - 総合型選抜：九工大・電通大，一般選抜：東京外国語大学等
  - 大学入学者選抜以外
    - MEXCBTや全国学調（文部科学省），その他民間の資格試験
- **海外の最新動向**
  - Digital SAT, TOEFL Home
    - 自宅または学校から，BYOD/BYAD端末を使って受験可能

4

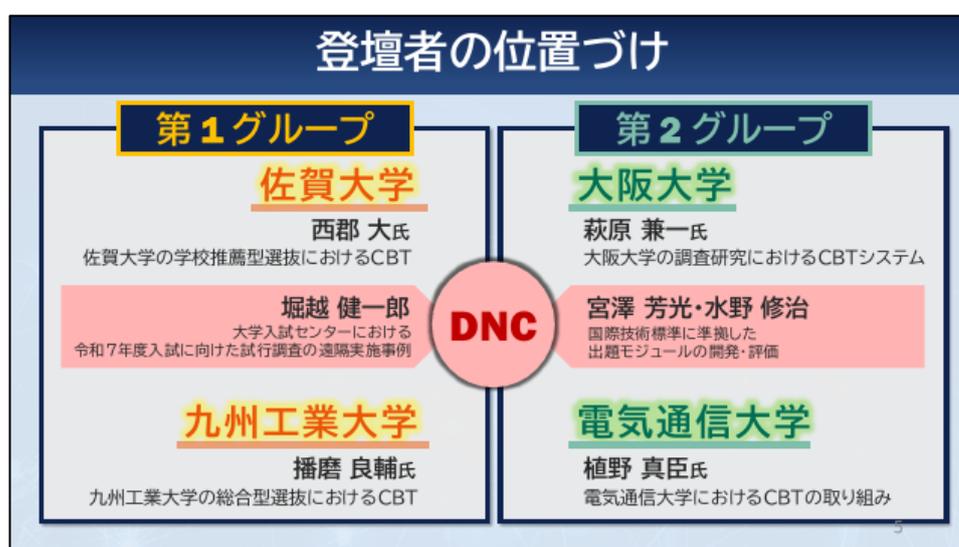
先ほど、大学入学者選抜でもCBTを導入する大学・学部があるという話をさせていただきましたが、先駆的な大学として佐賀大学がいち早く総合型選抜でCBTを取り入れられましたし、九州工業大学あるいは東京外国語大学でも取り組まれています。電気通信大学でも今後CBTを導入される方向で準備を進めておられるという状況です。

入試に限定しなければ、文部科学省がMEXCBT（メクビット）というCBTシステムをリリースして運用されておられますし、その他の民間試験等ではコロナ禍も拍車をかけ

## 全体会 1（大学入試センターセミナー）

て CBT 化しつつあるということです。

海外の大学入試、あるいはその関連というところでは、アメリカの SAT は Digital SAT という、CBT 版の SAT を開発し、リリースしているところです。これの大きな特徴は、自宅または学校等から特別な試験会場を用意することなく、生徒あるいは受験者の BYOD(Bring-Your-Own Device)/BYAD(Bring-Your-Assigned Device)端末を使って受験できるところが新しいところです。以上が最新情報のひとまとめになります。



この全体会 1 では、ご覧の先生方にご登壇いただいて話題提供を頂きながら、CBT の大学間の連携を見据えて議論を進めていきたいと思えます。

第 1 グループとして、佐賀大学の西郡先生からは、特にいち早く取り組まれた佐賀大の CBT のお話をしっかりと伺いながら、長く運用する中での課題についても幾つか話題提供を頂きたいと思えます。

九州工業大学の播磨課長からは、九工大での CBT についてお話しいただきたいと考えています。佐賀大と九工大は、実は綿密な協力体制にあったということです。佐賀大の知見をうまく生かして九工大でも活用されたというところで、ここでも既に大学間連携の芽はあると言えるかと思えます。

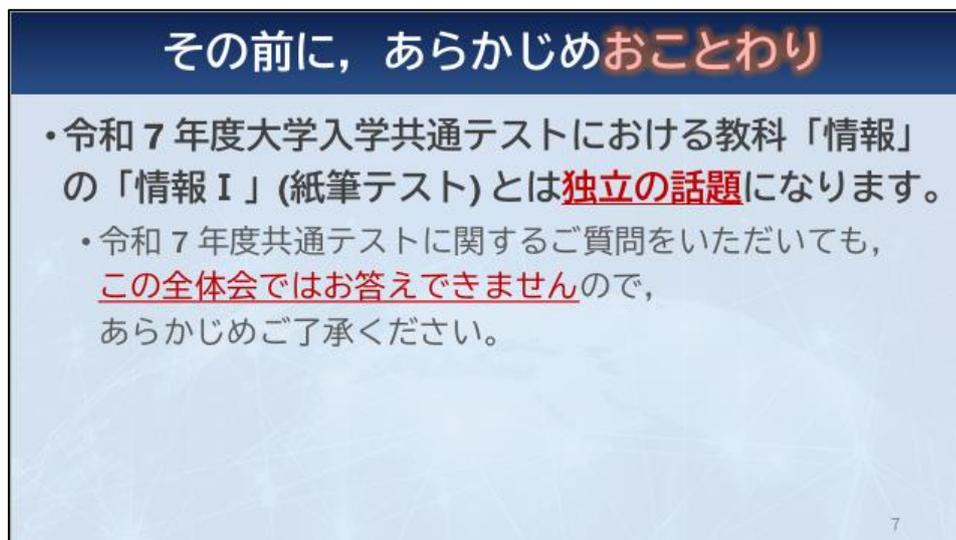
大学入試センターの堀越からは、紙のテストでの調査という事例ではありますが、昨年、令和 7 年度入試に向けて試行調査を遠隔で実施し、大学生から解答データを得たという取り組みがありましたので、それについての実施方法に注目してお話をさせていただければと思えます。

第 2 グループとして、これは連携があるというよりは少し枠組みに似た点があるというくらいだと思うのですが、大阪大学の萩原先生から、文部科学省の委託事業で調査研究として開発された CBT システムについて、特に情報というところを題材としての調査研究の取り組みについてご紹介いただきたいと思います。

大学入試センターの宮澤、水野からは、阪大の委託事業の結果をうまく活用させていただいて、国際技術標準に準拠した出題モジュール、具体的には情報 I を題材とした出

題モジュールの開発に挑戦しましたのでそのお話をさせていただければと思います。

電気通信大学の植野先生からは、電気通信大学での CBT の導入に向けた取り組み状況等を、オンゴーイングのものでなかなかお話ししづらいところもあるかもしれませんが、ぜひその野心的な取り組みについてご紹介いただきたいと思います。



**その前に、あらかじめおことわり**

- ・令和7年度大学入学共通テストにおける教科「情報」の「情報Ⅰ」（紙筆テスト）とは**独立の話題**になります。
- ・令和7年度共通テストに関するご質問をいただいても、**この全体会ではお答えできません**ので、あらかじめご了承ください。

7

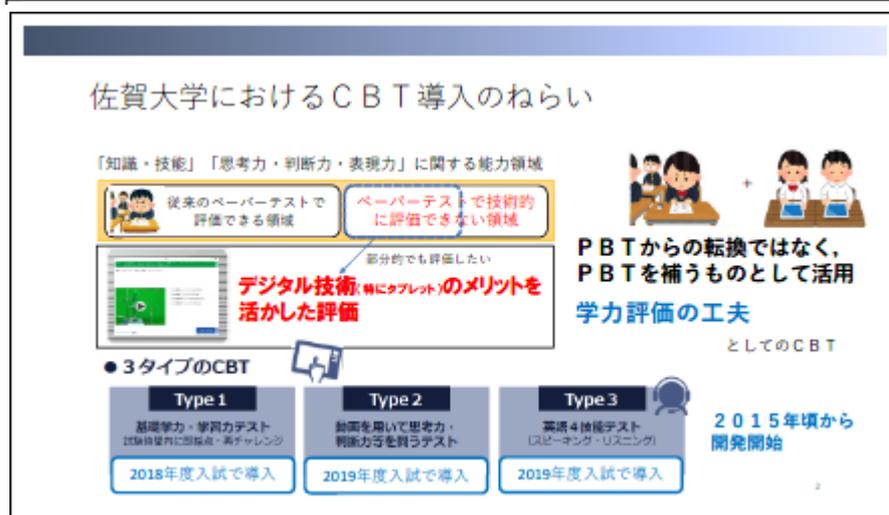
今回、まず共有しておかなければいけないこととして、本セミナーは、令和7年度大学入学共通テストにおける情報Ⅰの紙のテストとは独立の話題になりますこと、あらかじめご承知おきください。■

# 全体会1（センターセミナー）◎ 報告1

## 佐賀大学の学校推薦型選抜における CBT

### ■西郡 大（佐賀大学アドミッションセンター長）

それでは、「佐賀大学の学校推薦型選抜における CBT」ということで報告させていただきます。



まず、佐賀大学における CBT 導入の狙いです。ペーパーテストでは技術的に評価できない、評価しにくい領域に注目し、デジタル技術のメリットを生かして評価できないかということで開発を進めてきました。これは PBT を全部やめるということではなく、PBT を補うものとしての活用ということで、学力評価の工夫として CBT を位置付けようという発想のものです。

**CBTの導入学部と実績（2023年度入試）**

学部	CBTタイプ (導入年度)	選抜区分	募集人員	2023年度入試 志願者数
理工学部	I (2018年)	学校推薦型選抜	16名	26
	II (2019年)	総合型選抜	5名	11
農学部	I (2018年)	学校推薦型選抜	6名	9
	II (2019年)	総合型選抜	5名	10
教育学部	III (2019年)	総合型選抜	3名程度	14
経済学部	I (2022年)	学校推薦型選抜	60名	119
芸術地域デザイン学部	II (2022年)	編入学試験	5名	21
医学部	II (2022年)	編入学試験	若干人	1

合計：211名

現在、3つの種類のCBTがあります。タイプIは基礎学力・学習力テストというもので2018年度から導入しています。タイプIIというのは、動画を用いて思考力・判断力等を問うテストです。そして、タイプIIIがスピーキング・リスニングの技能テストというものになります。このCBT自体の開発は2015年度頃からいろいろとプロトタイプをつくってやってきたということです。佐賀大学は6つの学部がありますが、現在、編入学も含めて全ての学部でCBTを実施しています。

本日は、タイプI、学校推薦型選抜を中心にお話をしますが、総合型選抜でも実施をしています。今現在、全ての募集区分の志願者数の合計を見ますと大体211名で、多い年で約250名弱の規模でCBT、タブレット試験を実施しているということです。

**タイプI：基礎学力・学習力テスト①**

① 基礎的な問題を出題（15問程度）【当初問題】

 **解く** 数学、物理、化学、生物、英語から指定した2科目程度の問題  
☆メモ・計算用紙も一緒に配布

出題された問題を解くという行為はPBTと同じ

② 採点（当初問題を解き終えた時点）

 **自動採点**  間違いなし ⇒ 試験終了

 間違いあり ⇒ 試験は続く

※ 60分の試験時間内のいつでも採点を行うことが可能

このタイプIについて簡単にポイントをご紹介して、それを踏まえて話を進めていきたいと思えます。タイプIというのは、基礎的な問題を出題するというものです。数学、物理、化学、生物、英語からそれぞれの学部・分野に関連した科目を指定して15問程度出題します。それと同時に計算用紙、メモ用紙も一緒に配布し、それを解いていくということになります。試験時間は60分ですが、15問を解き終わると受験生自身が採点ボタンを押して採点をします。100点満点だったらそこで試験は終了ですが、間違いがあった

場合は試験が続きます。採点ボタンを押すのは、試験時間中いつでも構いません。

タイプ I : 基礎学力・学習力テスト②

③ 不正解問題の一覧と解説文を提示

**学習** 問題の解法を解説文として提示するのではなく、必要な知識や考え方を解説文として提示

配布された用紙にメモを取って良い

※ 日常的な学習活動を試験内に反映させるため

④ 再チャレンジ (上記学習を踏まえて類題に挑戦)

**学習力発揮** 時間内に類題に解答。試験時間終了到来で自動終了

再チャレンジは1回のみ

※ 再チャレンジ問題の採点は行わない。

間違った場合、不正解問題の一覧が出てきますが、それと一緒にその問題の解き方ではなく、その問題に必要な知識や考え方を解説文として提示します。受験生はそれを読んで必要な部分をメモ用紙などに取り、学習してもらうことになります。ある程度自分なりに理解したと判断したら、類似問題に再チャレンジしてもらいます。再チャレンジは1回のみです。再チャレンジは試験中には採点が行いませんが、試験終了後にそれが正解したかどうかを考慮して判定を行います。現在、こういったタイプのものを実施しています。

試験問題について

- 試験問題は、数学、物理、化学、生物、英語の5科目
- 各募集区分は、上記科目から1、2科目程度を選択。
- 試験問題の内容・レベルは、教科書の基本的な練習問題。
- 試験時間は60分。10～15問程度。
- 試験問題作成は、**全学体制**。

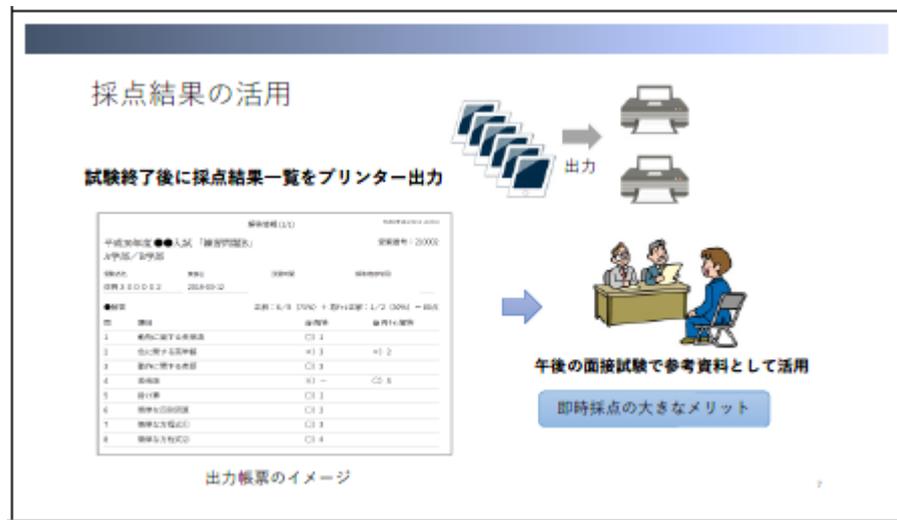
(受験生へのメッセージ)

教科書を中心に、しっかりと基礎固めしておくことが大切です。

試験問題ですが、先ほど言いましたように、数学、物理、化学、生物、英語の5科目があります。問題内容は教科書の一般的なレベルです。ミニマムの学力、最低限このぐらひは備えておいてほしいという学力を評価しようというものですので、そこまで難しいものはありません。

試験問題の作成は全学体制ということで、全学の中で作題体制を設けましてそこで完てっています。受験生には何か特殊なことを勉強しておいてくださいということではなく、

教科書を中心にしっかりと基礎固めをしておいてくださいと伝えています。学校推薦型で使いますので、基礎的な学力があるかどうか、そして、間違っただとしても学習できる力があるかどうかを評価するものです。



CBT のメリットとしてはすぐ採点が終わるということです。実際にタブレットで試験を午前中に行い、このような形で解答情報が出るのですが、それをすぐにプリンターで出力し、午後の面接試験、口頭試問の参考資料として活用しています。こういったことは従来の形ではできなかった点であり、CBT を使ったメリットということになります。資料には、当初の問題で正解したかどうか、再チャレンジで正解したかどうか、そういった情報がリストで出力されます。



こういったCBTの仕組み、システムの概要ですが、基本的にオフラインで実施しています。なぜオンラインにしなかったのかといいますと、やはりネットワーク通信について安定を担保しようとするとならぬにコストはかかりますし、同時にセキュリティの確保を考えますとかなり大きなコストを要するため、ちょっとこれは難しいなというところで、オンラインは選択肢から外しました。

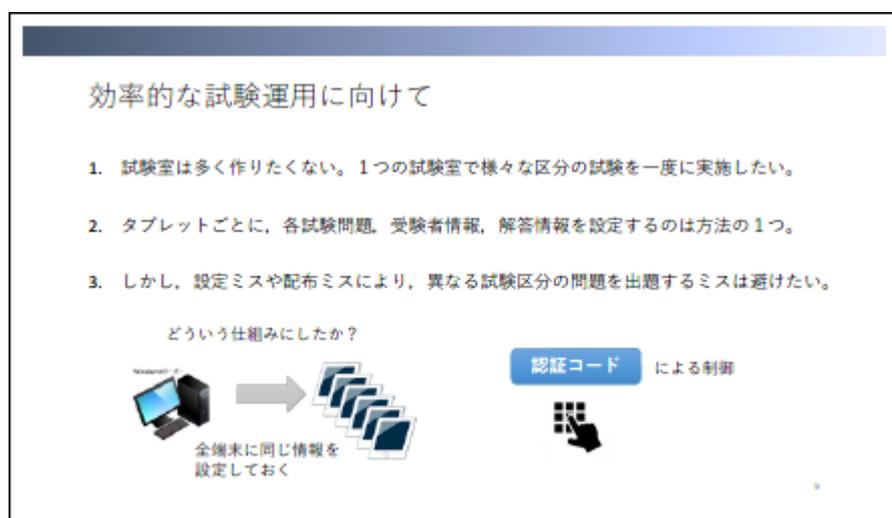
オフラインでタブレットにした訳は、タブレットであれば試験室などの条件の制約を受けず、通信経路などから問題が流出するリスクを避けられるためです。ただ、全てのタブレットに、試験に必要な情報、例えば受験者情報や設問、正解の情報を事前に設定する必要があります。仕組みとしては、試験管理や受験者管理の管理システムはPCを、CBTアプリはタブレットを使っています。

こちらはスライドのみの情報になります。タブレット画面のイメージといいたまいますか、一例です。数学であれば、選択肢の中から選んだり、センター試験や共通テストのように数値を入れたりします。実は、佐賀大学で開発した当初は選択肢のみでしたが、九工大さんがこのように入力させるという機能を追加したため、今はわれわれもこの機能を使っているところです。

こちらは管理システムの画面です。科目に関する編集画面や選択肢を設ける際の画面ですが、あまりシステムに詳しくなくても試験問題を管理できる仕組みになっています。

タブレットの管理は、このようなラックで管理していて、1つに40台ぐらい入ります。このパソコンからここにあるタブレットに情報を一括送信するという形です。タブレット自体は200程度あるのですが、手作業でできる範囲の量ですので、大体、多くても100、こういった形で管理しています。

試験会場に運ぶ時などはタブレットを傷付けないようにするため、このような箱の中に緩衝材を入れて学内のそれぞれの教室に運んでいるというところですよ。



できるだけタブレットを使って試験を行う際に効率的な試験運用をしたいわけですが、やはり試験室は多く作りたくない、1つの試験室でさまざまな学部の試験を一度に実施したいところです。そうした中、タブレットごとに試験問題や受験者情報、解答情報を設定するというのは一つの方法なのですが、設定ミスや配布ミスなどで異なる試験区分の問題を出題するというミスは避けたい。そこで、全てのタブレットに同じ情報を設定しておく。そして、認証コードというものにより制御する、コントロールするという仕組みにしています。

### 「認証コード」によって可能な運用

	認証コード	
A学部B学科△△入試	⇒ 「4284527」	複数の試験問題から認証コードによって受験科目を呼び出す
B学部C学科□□入試	⇒ 「5674569」	
C学部Z学科××入試	⇒ 「3994564」	
さらに 操作説明サンプル問題	⇒ 「1234567」	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 1つ試験室で複数の試験を実施可能</li> <li>■ 1日に複数の試験を実施可能</li> </ul>
さらに トラブル対応延長制御	⇒ 「1234999」	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 試験前の操作説明が可能</li> <li>■ 任意の試験時間延長が可能</li> </ul>

こういったイメージかといいますと、このように各学部の入試があって、このA学部B学科の入試はこの認証コードですということでそれぞれ設定して、この認証コードを打ち込むことによって対象となる受験科目を呼び出します。これによって1つの試験室で複数の試験を実施することができますし、1日に複数の試験を実施することが可能です。操作説明を試験前に行っていますが、そういった練習用のコードを設定することもできます。また、試験中のトラブル、予期しないトラブルがあった際の認証コードというものもあります。

### トラブル対応に伴う試験時間延長機能

試験中に生じるトラブル

停電 嘔吐 地震

深刻でない場合

試験を一時中断 (数分程度の想定)

全員に対して試験中断した時間だけ延長したい

認証コード

任意の時間分だけ手動で時間管理が可能

しかし  
タブレットの試験時間は止まらない

当初の試験時間で試験自動終了

トラブルにはさまざまなトラブルが考えられます。例えば、停電とか周囲の受験生が嘔吐してしまった、地震があった、など。かなり深刻な場合はすぐに試験自体が中止になるということもありますが、そこまで急を要さない場合、数分程度の試験の中断だった場合は、paper-based のテストであれば対応のノウハウはあるわけですが、タブレットを使いますとこのタブレットの中で試験時間が進んでいますので止めることができません。当初の60分の試験時間で終了してしまいます。

対応方法を考えた際に、全員に対して試験を中断した時間だけ延長したいということ

になるわけなのですが、当初の試験時間が終了した後に試験延長のための認証コードを打ち込んで、任意の時間分を例えば3分だったら3分だけ手動で時間管理をするという形で対応しています。

試験本番に向けた準備

○ すべての受験生が試験のルールを理解することが**大前提**  
**「テストの仕組みや操作方法が理解できずに解答できなかった」**  
↑ このような状況は絶対にあってはならない。

- テストの概要や操作方法説明動画の作成
- 試験時間前に操作説明時間の確保（共通テストの英語リスニングと同じ）
- 綿密なシミュレーションに基づく「監督要領」の作成
- 操作指示書（紙冊子）の工夫
- アドミッションセンターを中心とした実施体制
- システムトラブルが生じた場合の対応

試験本番に向けていろいろな準備が必要になりました。その中で重要視したのは、特殊な形の基礎学力・学習力を測る試験ですので、試験のルールをきちんと受験生が理解してくれることです。受験生がテストの仕組みや操作方法が理解できずに解答できなかったということは絶対避けたかったため、テストの操作方法などの動画を作成したり、試験時間前に操作説明の時間をきちんと確保したり、監督要領についても何度もシミュレーションをして作成しました。

さらに、アドミッションセンターを中心として試験の実施体制をつくっています。タブレットにトラブルが生じた場合には、システムをつくった業者さんにサポートしてもらうことが可能です。

試験のイメージとしては、これは試験開始前の様子なのですが、受験生はこのように並んでいます。私は試験監督をしていますが、学部の先生たちが机間巡視という形で関わっています。試験前にスクリーン等で操作の説明を十分に行いますし、受験生には注意事項を紙で配ってそれをしっかりと読んでもらいます。このような形で30分間操作練習をしっかりとしてもらって、不明な点を解消して本試験に挑んでもらいます。

これまでの「ヒヤリ」経験

- ・受験生の操作（スワイプ、ピンチアウトなど）により、画面が固まる**
  - ▶ システム開発者のサポートにより、その場で解消。
  - ▶ 対応に要した時間を試験時間延長機能を用いて対応。
  - ▶ アプリを改修するとともに、試験ルールの見直し（タブレットを持たない）
- ・試験問題等のミス**
  - ▶ 受験生の質問があったとき、どの問題に対するどのような質問なのか試験中の把握が難しい。
  - ▶ 1つの教室に異なる選抜区分の受験生がいるため全員を対象とした訂正指示ができない。
  - ▶ 試験中に「採点」させる場合、受験生ごとに状態が一律ではない。対応が困難。

いずれにしても最悪の場合、再試験の準備が必要。  
→ PBTよりも負荷が大きい。

このような形でやっているのですが、やはりこれまでヒヤリとした経験は幾つかあります。1つ目は初年度にありました。受験生が操作する際、スワイプやピンチアウトを頻繁に行いますが、あるタブレットの画面が固まってしまいました。システム開発をされた業者さんにその場で解消してもらい、対応に要した時間を先ほどの延長機能を用いて延長して対応したというところです。翌年はアプリを改修して、試験ルールを見直して受験生にタブレットを持たせない形で対応しています。

2つ目は、試験問題自体のミスです。受験生の手が挙がって質問があった時に、ペーパーテストに比べ、どの問題でどのような質問なのかを非常に把握がしづらいというところが難しい点です。また、1つの教室に異なる選抜区分の受験生がいるため、全員を対象とした訂正指示がしにくいのです。自身で採点させる仕組みを取っていますので、場合によっては採点が終わっている受験生もいます。そうなりますと対応が困難になります。これはヒヤリとしただけで終わりましたが、最悪のケースは再試験が必要になります。こういった仕組みにおいては、PBTよりも負荷が大きくなるということは言えるかなと思います。

これまでの実践を通して感じること①

**PBTと同じ形式の公平性確保を追求することの難しさ**

例えば、

- ・ 受験者数が増加すれば、試験室や試験時間の分散が必要。
- ・ システムトラブル等による再試験実施。

→ **全受験者が同一の試験問題を解くことが唯一の公平性** → PBTの方が適している  
→ **CBTに適した公平性確保の在り方を考えることが必要**

どんな解決の方向性があるか？

- **IRTを用いて等質な試験問題を複数セット準備する**  
→ 個別の大学では実現が難しい。
- **多面的評価の1つとしてCBT利用**  
CBTスコアをそのまま入試得点として評価すると1点刻みの公平性問題に帰着する。  
→ 例えば、基礎学力の有無だけをチェックし、他の選考資料で1点刻みの選抜を行う。

まとめに入ります。これまでの実践を通して、ペーパーテストと同じ形式の公平性確保を追求するのは非常に難しいと思います。受験者数が増えると試験室や試験時間の分散が必要となりますし、システムにトラブルが生じると再試験の実施が必要になります。全受験者が同一の試験問題を解くことが唯一の絶対的な公平性だということになれば、ペーパーテストのほうがより効率的だと言えます。そうなりますと CBT に適した公平性確保の在り方を考えることが必要になってくると思うわけです。

では、どのような方向性があるのかといいますと、例えば、IRT です。項目反応理論などを用いて等質な試験問題を複数セット準備することが考えられますが、個別の大学では実現が難しいなと思います。もしかすると電通大さんのような大学ではできるかもしれませんが、われわれのところでは難しいなと思います。

その他の方向性としては、多面的評価の一つとしての利用ということです。CBT の得点スコアをそのまま合算して入試得点として評価すると、結局、1 点刻みの公平性問題に帰着してしまう可能性がありますので、あくまでも基礎学力の有無のチェックに活用をとどめて、それ以外の選考資料で 1 点刻みの選抜を行うという使い方があるのかなと感じているところです。

これまでの実践を通して感じること②

**CBT実施に要するコストをどのように捉えるか**

例えば、

- CBTに必要な機器類の準備。
- システムトラブル回避に向けた準備、セーフティネットの構築
- CBTの運用ノウハウ（試験監督等も含め）
- 「CBTならではの」問題（例えば動画問題）の作成

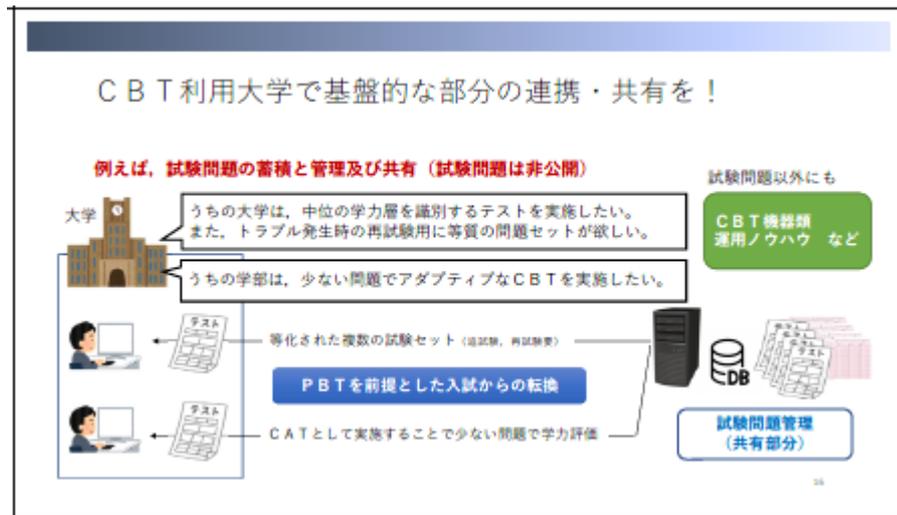
PBTよりもコスト高

→ **CBTに適した実施環境でコストを抑えることが必要**

どんな解決の方向性があるか？

- CBT実施に必要な基盤的部分（試験問題やノウハウ等）を大学間で共有する  
→ 大学間でコストを分担すれば、費用対効果が得られる可能性は高まる

次は、CBT 実施に要するコストです。これをどのように捉えるのかということですが、やはり機器をそろえるということはそれなりのコストが生じますし、システムトラブルを回避するための準備やセーフティネットの構築や運用ノウハウなども考えなければいけません。「CBT ならではの」問題もあります。このような点を考えると、PBT よりもかなりコストが高くなるのではないかなと思います。そうなりますと、CBT に適した実施環境でコストを抑えるということが必要になってきます。それらを考えるとやはり CBT の実施に必要な基盤部分、試験問題やノウハウを大学間で共有することがコストを抑えるための一つの方向性かなと考えています。



最後に、これは私の個人的な思いです。CBT を利用・活用しようと思っている大学が基盤的な部分の連携・共有をしていくことが、入試における CBT 活用の一つの筋道なのかなと思っています。いろいろな共有の仕方があると思うのですが、例えば、試験問題の蓄積と管理および共有です。この場合は、試験問題は恐らく非公開になると思いますが、このようなものをイメージしています。

例えば、中位の学力層を識別するテストを実施したい、トラブル発生時の再試験用に等質の問題セットが欲しい、少ない問題でアダプティブな適応型の CBT を実施したいなど、各大学にはそれぞれのニーズがあるかもしれません。それに対して、共有部分をしっかりとここで管理しておいて、ニーズに応じて等化された試験問題を提供したり、少ない問題数のアダプティブなテストを提供するなど。PBT を前提とした入試からの転換の一つの在り方なのかなと思います。

もちろん試験問題の共有だけではなく、機器類や運用ノウハウなど、基盤的な部分を共有できるような仕組みがあれば、利用しようかなと思うところも増えてくるのかなと思います。

私からの報告は以上です。どうもありがとうございました。■

# 全体会 1 ( センターセミナー ) ○ 報告 2

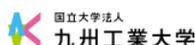
## 九州工業大学の総合型選抜における CBT

■ 播磨 良輔 (九州工業大学情報基盤課長)

九州工業大学の播磨と申します。どうぞよろしくお願いいたします。役職が情報基盤課長となっておりますが、今年の 3 月までは入試課長でしたので、入試課長として振り返ってお話をさせていただきたいと思います。また、佐賀大学さんと同じシステムを利用していますので、先ほどの西郡先生のお話と重複する部分も多々あるかと思いますが、ご了承いただきたいと思います。

### 九州工業大学の総合型選抜における CBT

播磨 良輔 (九州工業大学)



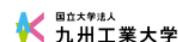
#### CBTを導入している選抜

選抜区分	年度(入試年度)	志願者数(募集人員)		CBTを利用している評価
		工学部	情報工学部	
総合型選抜 I	2020(R3選抜)	95 ( 26 )	101 (18)	適性検査 <sup>*1</sup>
	2021(R4選抜)	92 ( 26 )	91 (18)	適性検査
	2022(R5選抜)	87 ( 26 )	105 (18)	適性検査、レポート <sup>*2</sup>
学校推薦型 I	2020(R3選抜)	226 (104)	219 (83)	適性検査 <sup>*1</sup>
	2021(R4選抜)	207 (104)	239 (83)	適性検査
	2022(R5選抜)	228 (104)	245 (83)	適性検査

\*1:コロナ禍対応としてオンライン(CBTシステムはTAOを利用)で実施

\*2:レポートは、CBTシステムを利用して講義動画を再生し、解答题紙に解答

参考:2018,2019は学校推薦型選抜 I の合格者を対象とした入学前教育の中でCBTを実施



はじめに、本学が CBT を導入した年度と選抜についてです。令和 3 年度選抜から総合型選抜Ⅰと学校推薦型選抜Ⅰに導入しました。導入の規模としましては、本学は 2 学部（工学部、情報工学部）ですが、募集人員としては合わせて総合型選抜Ⅰが 44 名、学校選抜型選抜Ⅰが 187 名で、例年の志願者が約 200 名と約 400 名強となっています。

なお、令和 3 年度については、当初予定していたオフライン型の CBT ではなく、コロナ禍の緊急的な対応として、オンライン型の CBT で実施しました。本日は令和 4 年度から使っていますオフライン型の CBT について説明をさせていただきます。なお、総合選抜を導入する前に事前検証として 2018 年度・2019 年度に入学前教育の学力確認テストで CBT の試行運用を行っていますので、CBT システム自体は 2018 年度から利用しています。

### CBTの導入経緯

総合型選抜Ⅰは、**基礎学力**や**論理的に他者とコミュニケーションできる力**を多面的・総合的に評価する選抜方法を検討

- 第1段階、第2段階選抜を通じて、6種の手法により評価
  - 第1段階選抜: 講義レポート、課題解決型記述問題、
  - 第2段階選抜: 学びの計画書、適性検査、グループワーク、個人面接
- 複数の手法を導入することから、運用面の簡素化が必要
  - 基礎的学力を評価する適性検査に**CBT方式**を導入
  - 採点の**簡易化・迅速化**、試験問題印刷等の**コスト削減**
  - CBT方式ならではの使い方も継続的に検証
  - 令和5年度選抜からは、講義レポートにもCBTを活用



国立大学法人  
九州工業大学

3

続いて、CBT の導入経緯について説明させていただきます。CBT は総合型選抜Ⅰと学校推薦型選抜Ⅰの 2 つの選抜に導入していますが、検討は総合型選抜Ⅰの制度設計から始まっています。その経緯を簡単に説明させていただきます。

まず、総合型選抜Ⅰの制度設計では、基礎学力を持ち、論理的に他者とコミュニケーションできる力を持つ学生の獲得を目指して、多面的・総合的な評価による選抜方法の検討を行いました。その結果、第 1 段階選抜として講義レポート、課題解決型記述問題、第 2 段階選抜として学びの計画書、適性検査、グループワーク、個人面接の 6 種の手法を用いることにしました。

学力の 3 要素としては、思考力、判断力、表現力と主体性、多様性、協働性を重視した選抜となっています。また、一つの選抜で複数の手法を実施しますので運用面等の負担を軽減するための手段について同時に検討を行いました。その中で基礎学力を客観的に評価する適性検査は CBT 方式と親和性が高く、試験の方法からも採点の自動化や集計の迅速化、印刷コストの削減等が図れると考え、CBT 方式で実施することを決定しました。

また、導入時の検討では CBT の導入は適性検査のみでしたが、令和 5 年度選抜からは講義レポートにも CBT システムを活用しています。

### CBTシステムの選定

**制度設計の検討と並行して利用するCBTシステムの選定**

- 利用条件に合うシステムを調査
  - タブレットで利用可能、受験者が直感的に操作可能、学内で運用可能等
  - 佐賀大学が開発したCBTシステム(オフライン方式)を候補として検討
- 導入に向けた機能等検証
  - 佐賀大学の協力があり、試行運用を実施  
タブレットの借用や、運用ノウハウの情報提供
  - 学校推薦型選抜の入学前教育の学力確認テストで、CBTの試行運用

導入に向けた検討が大きく加速

国立大学法人  
九州工業大学
4

CBTシステムを選定するにあたり、適性検査へのCBT導入の検討と並行して、本学が考えている試験方法にマッチするCBTシステムの調査を行いました。その最中、タイミングよく佐賀大学さんからCBTシステムを開発していると連絡を頂きました。開発業者からも仕様等を詳しく聞かせていただいたところ、タブレットで利用でき、受験者が直感的に操作できるユーザーインターフェース、オフラインでの実施、大学職員によって管理システムを操作できるなど、本学が考えていた条件に近いことが確認できましたので、導入候補として機能検証を進めることにしました。

機能検証に当たっては、佐賀大学さんからタブレットの貸し出しや運用ノウハウの共有など、積極的にご協力を頂きました。そのおかげで、従来は紙で行っていた入学前教育の学力確認テストをCBTに置き換えて試行運用を実施することができました。一般的なデモではなく、自分たちで試行運用を行ったことで実際の試験に準じた流れが経験でき、さまざまなノウハウを得ることができました。それにより、CBT導入の検討や実施要領等の作成など、実施に向けた準備を円滑に行うことができました。

### 総合型選抜 I の概要

総合型選抜 I (R05) の選抜方法

第1段階選抜		第2段階選抜				
講義レポート	課題解決型 記述問題	学びの 計画書	適性検査 数学・理科	適性検査 英語	グループ ワーク	個人面接
約80分	60分	事前提出	60分	20分	約30分	約15分
CBT*			CBT			

理科については、事前に受験する科目領域を選択  
タブレットを用いたCBTにより、選択式問題を解答(理科の科目はパスワードによる制御)

講義動画をタブレット(イヤホン有)で視聴し、重要だと考えたキーワードとその概説、および講義の要約と、受講を通して感じた入学までの学びの必要性について考察レポートとして提出  
\* 令和5年度選抜からタブレットを利用した方式に変更

国立大学法人  
九州工業大学
5

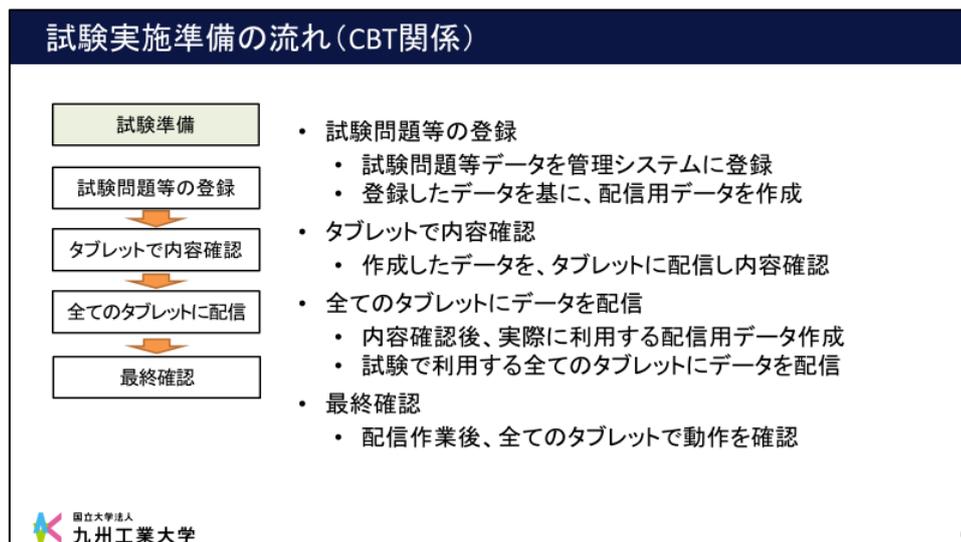
このスライドは総合型選抜Ⅰの選抜方法の概要です。先ほどの説明のとおり、総合型選抜Ⅰは2段階選抜方式であり、第1段階で講義レポートと課題解決型記述問題を、第2段階で学びの計画書、適性検査、グループワーク、個人面接を課しています。

適性検査は選択式問題で、数学・理科および英語の2つをCBTで実施しています。理科については、物理、化学、生物から受験する1科目を事前に選択し、試験当日は監督者が指示する各科目のパスコードのうち、自身が選択した科目のパスコードを入力することで、選択した科目を解答することができるようにしています。

タブレットの設定は全て同じで、受験科目をパスコードで制御していますので、例えば、物理と化学の受験者が同じ試験室で受験をしても問題はありせんし、タブレットを科目ごとに分ける必要もなく、受験者にひも付ける必要もありません。

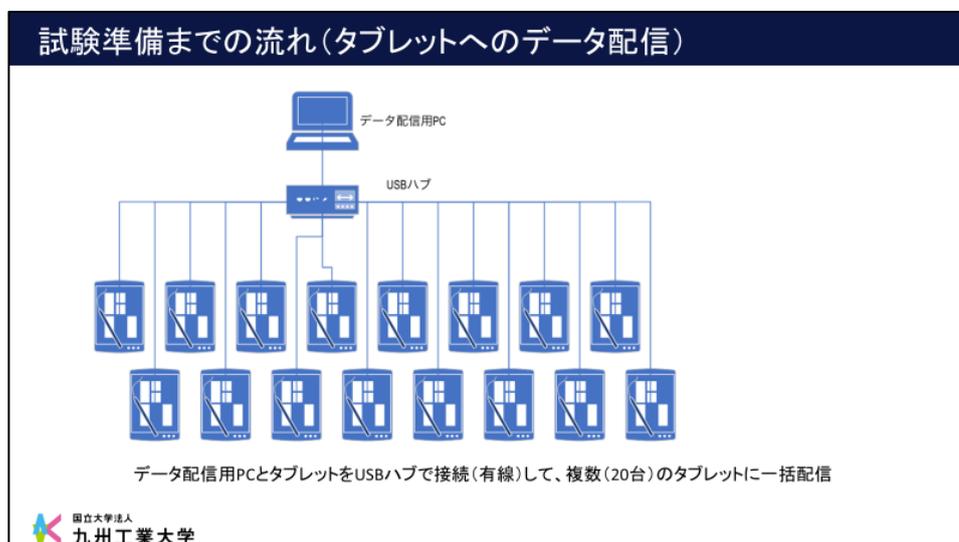
講義レポートについては、講義動画を視聴して重要だと考えたキーワードとその概説、講義の要約、及び受講して感じた入学までの学びの必要性について考察したレポートを作成してもらいます。当初は講義動画をパソコンで再生してプロジェクターに投影していましたが、スクリーンの大きさやスピーカーの位置などの条件を考えると、試験室として設定できる部屋が限られていました。また、座席の位置により不公平感が生じる懸念もあったことから、令和5年度選抜からCBTシステムで動画を再生する方式に変更しました。

なお、講義レポートの動画は実際の講義をイメージしていますので、再生を止めたり巻き戻したりはできないようにしています。音声については、イヤホンを配付し、イヤホンを装着して聞いてもらいます。イメージとしては共通テストのリスニングに近い形になっています。また、解答はレポート形式となっていますので、解答用紙は紙を使っています。

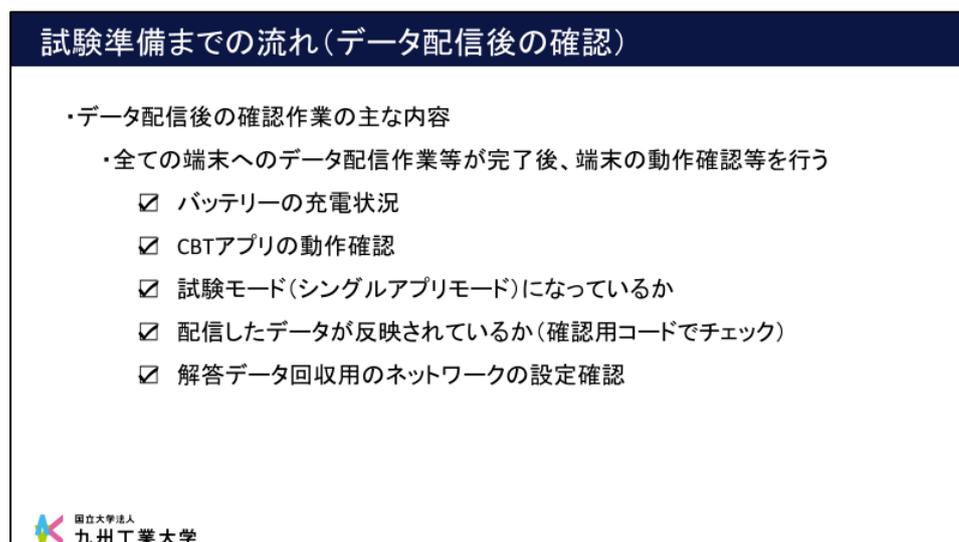


続いて、CBTシステムに関する試験実施準備の流れについて説明します。試験実施の準備として、まずCBT管理システムに試験問題データを登録します。その後、試験時間や配点などの試験実施に必要な設定を行います。設定が完了したら、検証のためにいっ

たん一部のタブレットにデータを配信して、出題者および入試課職員が確認を行います。主に問題の内容確認やタブレットで見た際の体裁の確認、試験時間の測定などのチェックを行います。問題がなければ、志願者データの登録後、実際の試験で使用する配信用データを作成し、試験で使用する全てのタブレットにデータを配信します。データ配信が完了したら全てのタブレットで最終動作確認を行います。



こちらのスライドは、タブレットに試験データを配信する際のイメージ図です。データの配信にあたり、データ配信用PCとタブレットを有線で接続する必要があるため、複数台接続できるUSBハブを利用して20台ずつ処理を行います。例えば、100台に配信が必要な場合は同じ作業を5回行う必要があります。

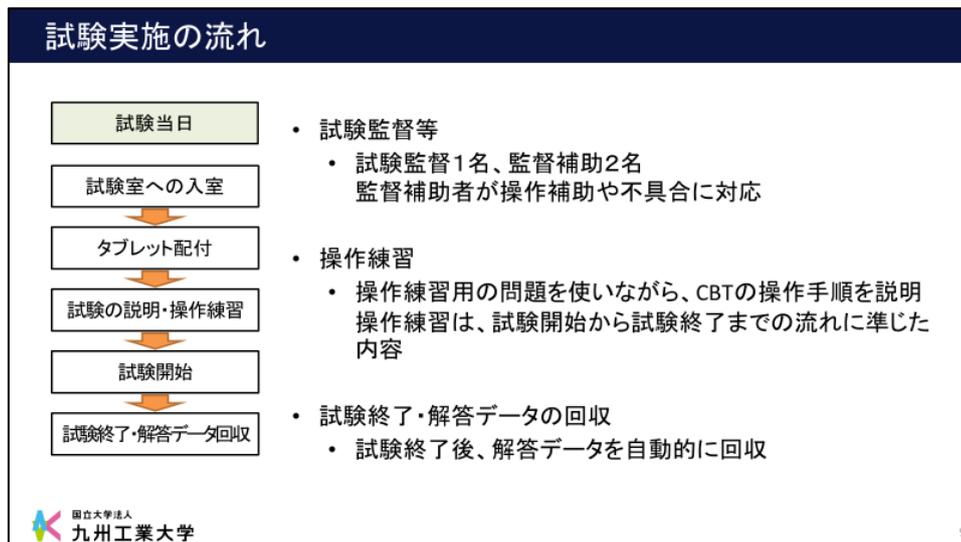


こちらのスライドは6枚目のスライドで説明した、データ配信後の最終確認作業の主な内容となっています。定期的に充電はしていますが、故障などもなく正常に充電できているかを確認するために、バッテリー残量等の確認を行います。

CBTアプリの動作確認については、CBTアプリは定期的にバージョンアップしていま

すので、最新のバージョンであるか、また、アプリが起動するかなどの確認を行います。試験中の誤操作等により他のアプリの起動を防止するため、CBT アプリしか起動できないように設定していますので、この設定がうまく反映されているかどうかの確認を行います。試験実施に関する最新版のデータが間違いなく配信できているのかを確認コードによって確認を行います。解答データ回収用のネットワークの設定について、設定したアクセスポイントに接続できるかの確認を行います。

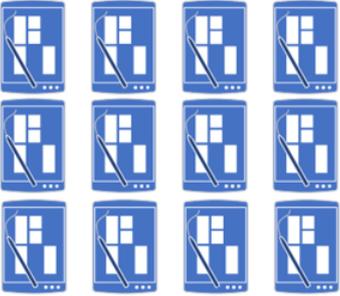
これらの最終確認作業のタイミングは試験直前であり、限られた時間で行う必要がありますので、入試課職員が手分けをして行っています。この辺りはCBTならではの人的なコストがかなりかかっている部分となります。



続いて、試験当日の流れの中で通常の試験と異なる部分について説明します。試験監督者の体制は、試験監督者が1名、監督補助者を2名です。タブレットの操作方法や不具合発生時に対応するため、監督補助者には入試課職員等が入っています。試験室に入室してタブレットを配付した後、操作練習用に作成している操作練習用問題を使って試験開始から試験終了までの流れに準じてCBTの操作手順を説明しながら、受験者にも実際にタブレットの操作を行ってもらいます。この時点で操作方法等の質問があれば監督補助者が対応し、機器の不具合があればタブレットの交換などを行います。

なお、タブレットの操作は落下等防止のため、手に持たず、机の上に置いたままで操作を行うようにしています。これらの事前の操作練習はトラブルを未然に防ぐために重要な手順だと考えています。試験が終了しましたら、通常は答案を回収しますが、適性検査の解答データは試験終了後にシステムで自動的に回収しますので、タブレットは答案回収のように試験終了時に回収する必要はありません。

### 試験実施の流れ(解答データの回収)



タブレット(机の上に置いた状態)




PC(管理端末)

試験終了後、自動的に解答データが、タブレットから管理端末にアップロード(ネットワークは、プライベートIPアドレスで運用)  
※導入当初は、タブレットを回収して有線接続で解答データを回収



国立大学法人  
九州工業大学

10

こちらのスライドは解答データ回収のイメージです。実際に解答データは Wi-Fi を使って各タブレットから事前に設定している管理端末にデータがアップロードされます。これによって試験終了後、即時に結果を確認することができます。なお、Wi-Fi 接続に関しては試験時のみルーターを立ち上げて外部との通信はできないように設定しています。導入当初はタブレットを回収して有線で接続して解答データを回収していましたが、現在の方式に変更したことで解答データ回収にかかる時間を大幅に削減することができます。

### CBTで使用する機器の概要

機器の種類	台数	備考
タブレット	240台	iPad第6～7世代
USBポートハブ	11台	データ配信・充電兼用(20台接続)
タブレットラック	6台	タブレット40台収納
MacBook	2台	データ連携・iPad設定用
WindowsPC	1台	システム管理用
WiFiルーター	2台	解答データ収集用



国立大学法人  
九州工業大学

11

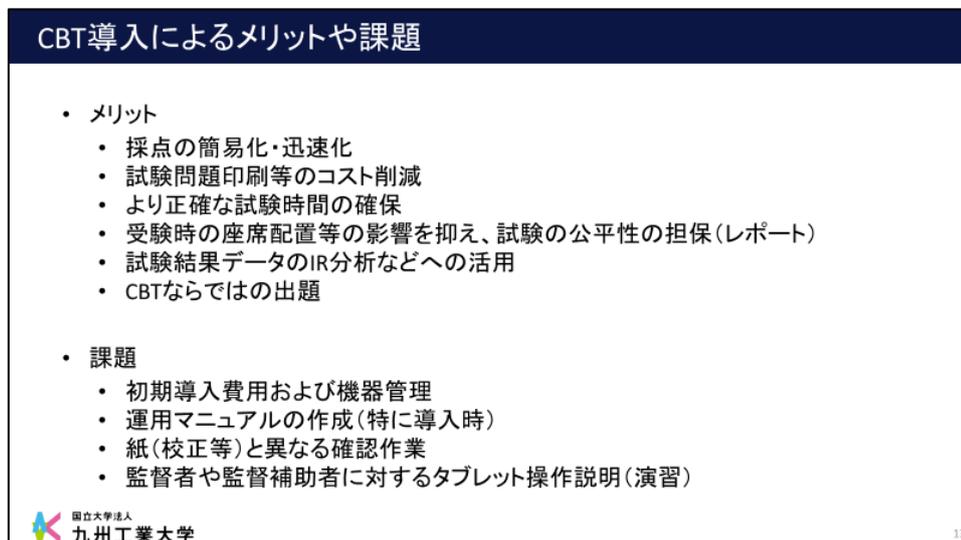
こちらのスライドは本学が保有している CBT に関する機器類についてです。タブレットに関しましては、iPad が 240 台あります。段階的に購入を行いましたので、複数の世代が混在していますが、試験の運用には問題はありません。

USB ポートハブが 11 台。このハブでデータ配信や充電を行っています。MacBook が 2 台。こちらは iPad へのデータ配信やタブレットを管理するためのものとなっています。Windows の PC が 1 台。こちらは CBT の管理システム用の PC となっています。Wi-Fi

ルーターが2台。こちらは先ほど説明しました解答データ回収用に使っているものです。以上の機器で本学のCBTを実施しています。なお、機器もいろいろとありますので、機器の管理にもかなり人手がかかっています。今後、管理の集中化などにより少しでもコストを減らそうと検討を行っています。



こちらは、ラックや実際にハブに接続して収納している写真です。ラックにはタブレットを40台収納できますので、このようなラックが計6台あります。また、タブレットは放電状態が続くと故障の原因になりますので、タイマー付きのテーブルタップを使って定期的に充電を行っています。



こちらは、ここまで説明したCBT導入によるメリットや課題についてのまとめです。CBTのメリットとして感じていますのは、採点の簡易化・迅速化、試験問題印刷等のコストの削減です。システムで試験時間を管理するため、正確な試験時間が確保できます。主に講義レポートに関しては、受験時の座席配置の影響を抑えたことによる試験の公平性が担保できます。また、試験結果データのIR分析などの活用があります。

課題としては、比較的、導入時の課題が多いのですが、初期導入費用や機器の維持管

理コストです。運用マニュアルの作成、CBT ならではの機器の確認作業、それから、監督者や監督補助者に対するタブレットの操作説明が必要となります。導入前は受験者がタブレットをうまく操作できるかを心配していましたが、こちらについては実際にやってみると特に心配する必要もなく、スムーズに操作をしていました。

**入学者選抜における大学間連携やICTの活用**

- 大学間連携
  - CBTに関する情報共有
  - 主体性等評価の評価支援システム(J-Bridge System)に関する情報共有
- ICTの活用
  - 総合型や学校推薦型選抜のCBTシステムの導入
  - 総合型、学校推薦型、一般選抜等で主体性等評価にJ-Bridge Systemを導入
  - 国際バカロレア選抜の個人面接にZoomを導入

 国立大学法人  
九州工業大学

14

最後に、CBT とは少し離れるところもありますが、大学間の連携や ICT の活用の状況を説明します。大学間の連携としましては、佐賀大学さんと CBT に関する情報共有や主体性等評価の評価支援システム、J-Bridge System に関する情報共有などを行っています。

これまでの経験からいいますと、実施時のノウハウや課題を共有することによるコストの削減など、さまざまなメリットを感じていますので、今後さらに連携や共有を広げていけば、さらなるコストの削減やよりよい環境整備につながるのではないかと考えています。

また、ICT の活用としては、総合型選抜や学校推薦型選抜への CBT システムの導入のほか、総合型選抜や学校推薦型、一般選抜での主体性等評価システムの J-Bridge System システムの導入、国際バカロレア選抜の個人面接への Zoom の導入などを行っています。これによる新たな課題もありますが、紙の書類やコピーなどの作業の大幅な削減など、業務の効率化に寄与していますし、受験生の利便性向上などの効果も生まれています。

簡単ですが、本日の説明は以上となります。ご清聴いただきありがとうございました。

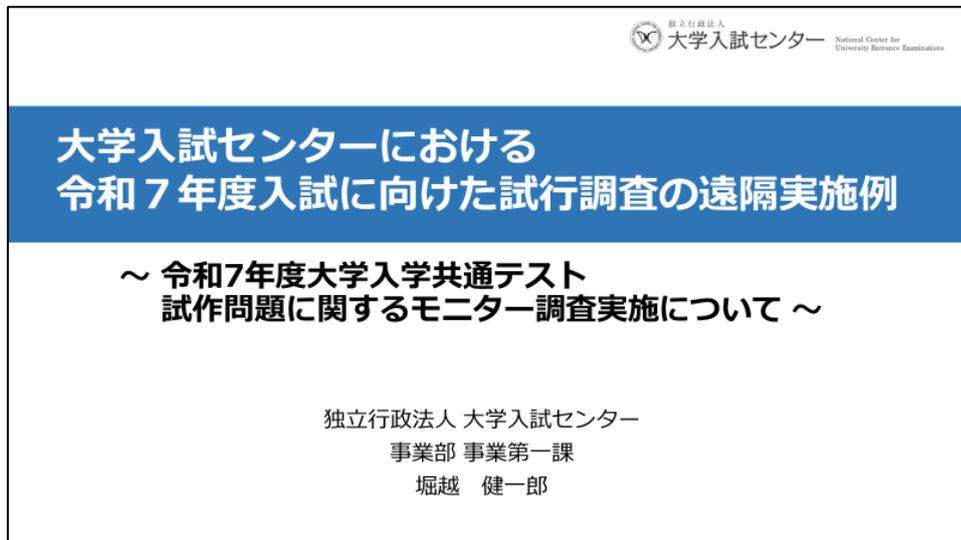


## 全体会 1（センターセミナー）◎ 報告 3

# 大学入試センターにおける令和7年度入試に向けた試行調査の遠隔実施事例

■堀越 健一郎（大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長）

大学入試センター事業部事業第一課の堀越と申します。私からは、「大学入試センターにおける令和7年度入試に向けた試行調査の遠隔実施例」としまして、昨年11月に実施した令和7年度共通テスト試作問題に関するモニター調査の実施について報告をします。



実施形式自体は問題冊子も解答用紙も紙を使用したPBT形式でしたので、CBTで実施をしたということではありませんが、先ほどご発表のありました九州工業大学さんにおいて、コロナ禍のため自宅での受験により実施された令和3年度入試の事例を参考にさせていただき、オンラインを活用して実施しました。どのような点を参考にしたかということと、また、私どもの調査でオンラインを活用した際に見られた課題などを少しでも共有できたらと思っています。

## 1. 調査の目的

令和7年度共通テストから、出題科目や内容等が、平成30年3月告示高等学校学習指導要領に対応した試験へと変わるため、大学入試センターにおいて令和7年度共通テストの問題作成に関して検討を行い、昨年11月に試作問題を公表。

[https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken\\_jouhou/r7ikou/r7mondai.html](https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r7ikou/r7mondai.html)



令和7年度共通テストの本番の問題作成に向けたデータを収集するため、大学生を対象に「試作問題モニター調査」を実施。

2

まず初めに、この調査の目的についてです。大学入学共通テストは令和7年度試験から新しい学習指導要領に対応したものとなります。出題科目や内容などが大きく変わりますので、大学入試センターでは令和7年度共通テストの問題作成に関して検討を行い、昨年11月に試作問題を公表しました。今回、ご説明するモニター調査は、この試作問題を使用して、令和7年度共通テストの本番の問題作成に向けたデータを収集するために大学生を対象として実施したものです。

## 2. 調査に向けての検討

### 2-1. 対象科目の検討

【対象科目】 計8科目

『国語』『地理総合』『歴史総合』『公共』

『英語リーディング』『英語リスニング』

『情報Ⅰ』『旧情報(仮)』



#### ○情報コース

『情報Ⅰ』、『旧情報(仮)』

#### ○3教科(国語、地理歴史、公民)コース

『国語』、『地理総合』or『歴史総合』or『公共』

#### ○英語コース

『英語(リーディング)』、『英語(リスニング)』

3

今回のモニター調査では3つのコースに分けて受験者を募りました。それぞれのコースにおける受験科目数は2科目です。なお、情報コースと3教科コースは、昨年11月中旬頃、3日間に分散して実施をしましたが、英語コースについては12月上旬に実施しました。実施方法につきましては、これら全コースともに同じ形ですので、今回の説明では、11月中旬頃に行った情報コースと3教科コースを例にして説明をします。

## 2. 調査に向けての検討

### 2-2. 調査実施方法の検討

東京近郊のみ  
ならず、全国各地  
の大学生に参加  
してもらいたい。

コロナ禍のため、  
対面での実施が  
困難になる  
可能性がある。

**Zoom**を利用し、受験者に**自宅等で受験**してもらう形を考案

4

続いて、調査実施方法の検討についてです。検討を始めた当初は東京近郊の大学生を対象にどこか大きな会場を手配して対面で行おうと考えていました。しかし、今回の調査では、特定の地域に偏らずに多くの大学生に参加していただきたく、また、コロナ禍にあって、感染状況によっては対面での実施が困難になる可能性も否定できませんでしたので、Zoomを利用して受験者には自宅などで受験をしてもらう形で実施できないかと考えました。

## 2. 調査に向けての検討

### 2-2. 調査実施方法の検討

大学入試センターでは、オンラインによる自宅受験の形での試験を実施した経験がなかった。

「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」\*に掲載されている  
**九州工業大学**の事例を参考にさせてもらえないかと考えた。

\*「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」  
(令和4年6月 独立行政法人大学入試センター 入学者選抜におけるCBT活用に関するワーキングチーム)  
([https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt\\_houkoku.html](https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt_houkoku.html))

5

ただ、われわれにはオンラインによる自宅受験の実施経験がありませんでしたので、令和4年6月に当センターで公表した「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」に掲載されており、われわれがイメージしていた実施方法と近かった、九州工業大学さんの令和3年度に行われた自宅受験での事例を参考にさせていただきたいと考えました。

## 2. 調査に向けての検討

### 2-2. 調査実施方法の検討

九州工業大学入試課に依頼し、以下の資料の提供を受ける。

**【実施者（教職員）用資料】**

- ・事前接続テストチェック表
- ・監督要領
- ・Zoomマニュアル

**【受験者用資料】**

- ・オンライン受験の手引き
- ・オンライン受験マニュアル
- ・オンライン接続テストの案内

当センターの試作問題モニター調査にも応用可能と判断し、オンラインによる自宅受験の形で本調査を実施することを決定。

6

参考にさせていただくにあたり、より詳細な情報を把握したかったため、九州工業大学さんより実施者用のマニュアルや受験者向けのマニュアルなどの資料をご提供いただきました。頂いた資料は大変分かりやすく、さらに非常に丁寧に作成されていましたので、われわれのモニター調査にもこれで十分応用できると判断し、オンラインによる自宅受験という形式でモニター調査を実施することとしました。

## 3. モニター受験者の募集・決定

- 情報コース・3教科コースのモニター受験者を募集。
- 受験希望者はWebフォームから応募。
- 一部の共通テスト利用大学に募集用ポスターの掲載を依頼。

- 短期間で予想を大きく上回る応募。  
当初予定募集期間 R4.8.29 ~ R4.9.20  
➡ R4.9.5 で募集打ち切り
- 受験予定者数
  - ・情報コース 1,323人
  - ・3教科コース 778人

8月下旬に大学に配付した募集用のポスター（一部抜粋）

**大学入学共通テスト試作問題  
調査モニター募集**

9/20(火)  
17:00  
応募締切

大学入試センターでは、新しい高等学校学習指導要領に対応した問題を予定している令和7年度以降の大学入学共通テストの試作問題の調査モニターを募集いたします。

募集対象 **大学1年生** 又は **大学2年生**  
(令和3年度又は令和4年度大学入学共通テストを受験していること)  
※詳細については、募集要項（右記QRコード）をご覧ください。

① 試作問題の解答  
解答する科目によって、以下の2コースに分けて募集する。

<p>【情報コース】 以下の2科目を解答する。 ・『情報Ⅰ』 ・『情報Ⅱ(※)』</p>	<p>【3教科コース】 以下の2科目を解答する。 ・『国語』 ・『数学総合』、『理系総合』、『公共』のうち1科目</p>
--	--

② アンケートの回答  
試作問題の解答終了後、オンラインフォームによるアンケートに回答する。

＜実施方法＞ 自宅等での受験（Zoomによる試験監視あり）

それでは、われわれセンターがどのように実施に向けて具体的な準備を行ったのかを説明いたします。

受験者はウェブ上の申し込みフォームにより募集しました。共通テスト利用大学に周知にご協力いただいたおかげもあって、短期間で当初の想定を大きく上回る受験者から応募がありました。最終的には、情報コースで 1,323 人、そして、3 教科コースで 778 人、合計でおおよそ 2,100 人の方に受験をお願いすることになりました。

32

## 4. 調査当日まで

### 4-1. モニター受験者への送付物

#### ◎ 調査1か月前～受験票の送付

<受験票に記載した項目>（抜粋）

- ・受験日、氏名、受験番号
- ・受験する科目  
（3教科コース受験者は地理総合、歴史総合、公共のうち選択するものを明示）
- ・事前接続テストの日時
- ・用意するもの（受験者の持ち物）
- ・時間割（当日のスケジュール）
- ・大学入試センターの連絡先

英語コースの受験票

英語コース		受験票	
受験日	11月17日	受験時間	10時～12時
受験科目	英語	受験科目	英語
受験会場	九州工業大学入試センター	受験会場	九州工業大学入試センター
受験料	10,000円	受験料	10,000円
受験料納入期限	11月10日	受験料納入期限	11月10日
受験料納入方法	現金	受験料納入方法	現金
受験料納入場所	九州工業大学入試センター	受験料納入場所	九州工業大学入試センター
受験料納入時間	10時～17時	受験料納入時間	10時～17時
受験料納入手数料	なし	受験料納入手数料	なし
受験料納入領収書	発行	受験料納入領収書	発行
受験料納入領収書の提出	必要	受験料納入領収書の提出	必要
受験料納入領収書の提出先	九州工業大学入試センター	受験料納入領収書の提出先	九州工業大学入試センター
受験料納入領収書の提出期限	11月10日	受験料納入領収書の提出期限	11月10日
受験料納入領収書の提出方法	郵送	受験料納入領収書の提出方法	郵送
受験料納入領収書の提出場所	九州工業大学入試センター	受験料納入領収書の提出場所	九州工業大学入試センター
受験料納入領収書の提出時間	10時～17時	受験料納入領収書の提出時間	10時～17時
受験料納入領収書の提出手数料	なし	受験料納入領収書の提出手数料	なし
受験料納入領収書の提出領収書	発行	受験料納入領収書の提出領収書	発行
受験料納入領収書の提出領収書の提出	必要	受験料納入領収書の提出領収書の提出	必要
受験料納入領収書の提出領収書の提出先	九州工業大学入試センター	受験料納入領収書の提出領収書の提出先	九州工業大学入試センター
受験料納入領収書の提出領収書の提出期限	11月10日	受験料納入領収書の提出領収書の提出期限	11月10日
受験料納入領収書の提出領収書の提出方法	郵送	受験料納入領収書の提出領収書の提出方法	郵送
受験料納入領収書の提出領収書の提出場所	九州工業大学入試センター	受験料納入領収書の提出領収書の提出場所	九州工業大学入試センター
受験料納入領収書の提出領収書の提出時間	10時～17時	受験料納入領収書の提出領収書の提出時間	10時～17時
受験料納入領収書の提出領収書の提出手数料	なし	受験料納入領収書の提出領収書の提出手数料	なし

受験者が確定した後の調査当日までの準備についてです。まず、調査のおおよそ1か月前に受験票を送付しました。受験票には受験日や氏名、受験番号はもちろん、時間割、調査当日に用意をするものなど、最低限把握してほしい内容を記載しました。

## 4. 調査当日まで

### 4-1. モニター受験者への送付物

#### ◎ 調査1週間前～調査用セットの郵送

<調査用セット>

- ① 問題冊子・解答用紙セット（厳封）
- ② 受験上の注意
- ③ Zoom操作マニュアル
- ④ 答案等返送用レターバックライト



次に、調査の1週間前までに問題冊子や解答用紙、それから、受験上の注意、Zoom操作マニュアル、答案等返送用のレターパックなど、調査当日に使用するものを同封した「調査用セット」を受験者に送付しました。事前の送付物についても九州工業大学さんの事例を参考に検討しました。

## 4. 調査当日まで

### 4-2. 事前接続テスト

#### ◎ 概要

- ・調査当日に安定した環境で受験できるために、調査当日と同じ環境下で参加。
- ・提示した3日間のうち、希望する1日に参加。

#### ◎ 運用手順

- ・受験者を、指定された日時にZoomに入室させる。
- ・テストの実施方法が表示されたスライド内容を、Zoomで画面共有。

(同時に自動音声でも案内) →次頁「実際に使ったスライド」

10

次に事前接続テストについてです。これも九州工業大学さんの事例を踏まえて実施することとしました。調査当日に安定した環境で Zoom 受験者に接続してもらうため、事前接続テストとして調査のおおよそ1週間程度前に Zoom への接続を確認してもらいました。調査対象日として3日間を用意して、受験者にはそのうち希望する1日のみに出席してもらいました。運用手順ですが、まず、受験者には事前にセンターからメールで送付された事前接続テスト用の Zoom の URL から入室してもらいます。入室後、受験者は画面上に表示された実施方法に従って自分で確認するための作業を行います。

### 実際に使用したスライド

#### 大学入試センター 試作問題に関するモニター調査 事前接続テスト

##### 1. はじめに確認すること

- ★カメラはON、マイクはミュートにしてください
- ①現在、スライドの内容を説明する約2分間の音声を繰り返し再生中です。音声は聞き取れますか？
- ②調査当日と同じ環境ですか？  
(端末、インターネット接続方法、調査を受ける場所)
- ★①、②を確認してから次の2.以降を順に読んでください。
- ★不具合等ありましたら「手を挙げる」ボタンでお知らせください。順番に対応します。

##### 2. 調査当日のZoomについて

- ★11/30までにメールで、調査当日のZoomの『ミーティングID』と『ミーティングパスワード』をお送りします。
- ★入室の際の『名前』は、「受験票に記載された受験番号(半角数字4桁プラス半角英字1桁)」にしてください。(氏名は入れないでください。例・1000A)

##### 3. その他諸注意

- ★調査当日までに、問題冊子等と同送する「受験上の注意」と「Zoom操作マニュアル」を読んでください。

##### 4. フォームへの回答

- ★以下のQRコード、またはチャット欄のURLから回答フォームにアクセスし、回答してください。
- ★チャット欄には数分おきに同一のメッセージが流れます。どのチャットのURLからアクセスしても構いません。

事前接続テスト参加確認  
回答フォーム



##### 問合せ先

大学入試センター  
試作問題  
モニター調査担当  
TEL :  
03-5478-xxxx  
Email :  
xxxxxx@cen.dnc.ac.jp

11

こちらが、実際に事前接続テスト中に画面に表示されていたものです。このスライドが表示されている最中は常にこのスライドの内容に沿った説明音声が続いています。まずこの音声聞き取れているのかということ、そして、調査当日と同じ環境で出席しているのかということを受験者に確認します。次に、調査当日の Zoom についての注意事項を読んでもらいます。それらの作業が全て終了しましたら、最後に、出席したことを確認するための参加確認回答フォームにアクセスしてもらい、それを回答してもら

った後に終了ということになります。

この方法でおおむねスムーズに実施をすることができましたが、1点、苦慮したことがありました。接続テスト中に不具合などがあった場合には手を挙げるボタンで知らせることとしていたのですが、3日間、各日ともに100名程度の手が挙がってしまいました。そのほとんどは顔と手元を同時にカメラに映すというセンターの指示に対応ができない、つまり、顔か手元かどちらかしか映すことができないというものでした。手を挙げた受験者にはブレイクアウトルーム機能を使用して別室に移動をしてもらい、そこで1人1人カメラ位置を指示するなど、個別に対応することで何とか対応ができました。

## 5. 調査の実施体制

### 5-1. Zoom設定、受験者部屋割り

- ◎ Zoom設定、受験者の部屋割りなど
  - ・ **フォーカスモード**を利用
    - ➡ 受験者のカメラの映像は監督者（ホスト・共同ホスト）にのみ表示され、他の受験者を見ることはできない。 ※このことは事前に受験者に周知
  - ・ Zoom上の名前は「受験番号」にしよう。  
（受験者の個人情報保護、当日の出欠管理をしやすくする。）
  - ・ 1つのZoom試験室ごとに約100名の受験者を割当。  
（監督者1人当たりがZoom上で巡視できる上限を考慮。）

	情報コース		3教科コース	
	試験室数	受験者数	試験室数	受験者数
11/10（木）	3室	298人	2室	213人
11/11（金）	3室	264人	3室	242人
11/12（土）	6室	761人	3室	323人

12

続きまして、調査当日の実施体制についてです。まず、Zoomの設定や受験者の部屋割について、今回はプライバシー保護の観点から、Zoomのフォーカスモードという機能を使用しました。これは受験者のカメラの映像は監督者にのみ表示がされて、他の受験者を見ることはできないという機能です。この機能を使用することは受験者に事前に知らせ、安心して受験していただけるようにしました。

Zoom上における受験者の名前は受験番号に統一しました。これによって受験者の個人情報を保護できるとともに実施においても当日の出欠管理がしやすくなったと考えています。また、監督者1人当たりがZoom上で巡視できる上限を考慮して、一つのZoom試験室ごとの受験者数を約100名程度としました。

なお、調査日ごとの情報コースと3教科コースの試験室数、それから受験者数は表のとおりです。

## 5. 調査の実施体制

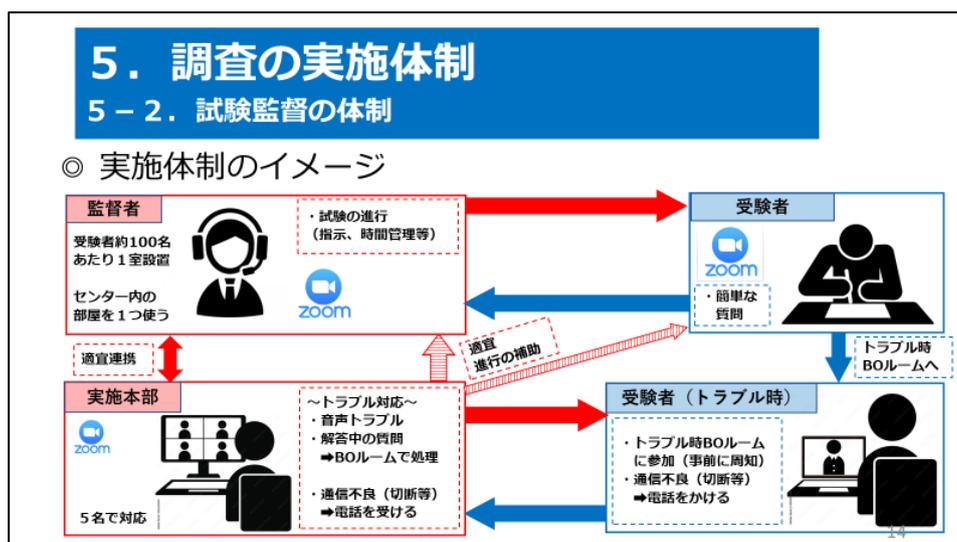
### 5-2. 試験監督の体制

#### ◎ 実施体制の概要

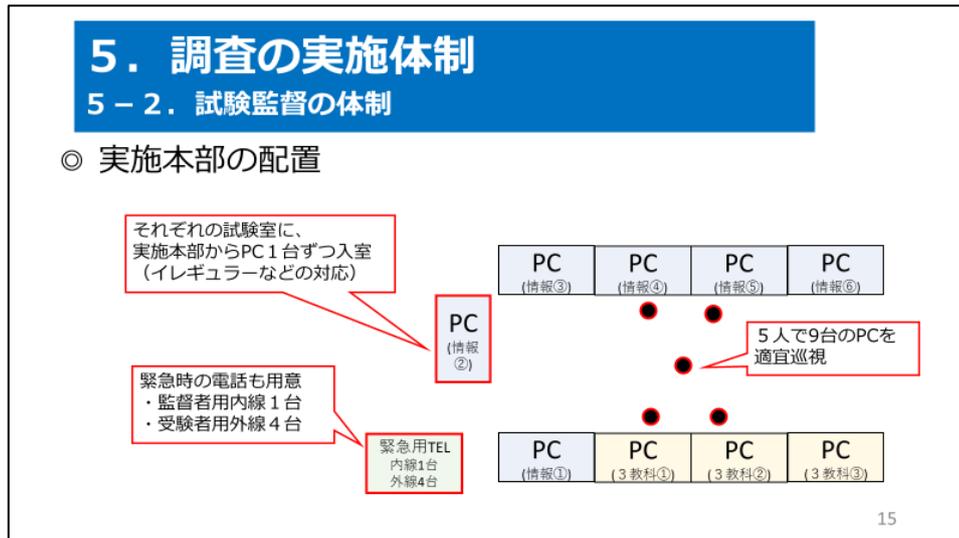
- ・ 1つの試験室に1人の**監督者**を配置。
- ・ **実施本部**を設置し、全体への指示や緊急時の対応を担当（5人）。
- ・ 監督者にはZoom操作に慣れている教職員を充てる。  
監督者に対して事前説明会を実施。
- ・ 当日の試験監督マニュアルとして監督要領を作成。  
九州工業大学入試課から提供いただいたものをベースに、  
今回の調査用にアレンジ。

13

次に、試験監督の体制についてです。まず体制の概要ですが、各試験室に監督者を1人配置しました。各試験室への統一的な指示をするため実施本部を置き、緊急時の対応要員として職員5人を配置しました。監督者用に監督要領も作成して事前説明会等で周知をしました。



こちらが調査当日の実施体制のイメージです。監督者はこの試験室に入り、受験者への指示、試験時間の管理や試験の進行を行います。そして、実施本部に試験室分のパソコンを用意して、監督者と連携をしながら全ての試験室の状況を把握できるようにしました。そして、受験者からの質問があった場合、簡単な質問であれば監督者がその場で回答しますが、短時間での対応が難しい場合には、試験室の進行を止めないために実施本部の職員がこの受験者にアプローチをして、この受験者をブレイクアウトルームに誘導をして個別に対応するという形式で対応をしました。



こちらが実施本部の配置図です。このようにコの字でテーブルを配置して、そこに各試験室に対応したパソコンを1台ずつ配置しました。実施本部の職員は部屋中央で、随時、各試験室の状況を確認していました。



こちらが実際の写真です。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

### 6-1. 解答開始前の対応

◎ 入室直後 ( 監督者の指示前 )

実際に使用したスライド

**冒頭説明開始までにご確認ください。** ◎ 本日はご参加ありがとうございます◎

**1. 音声設定 ( 曲が聞こえますか? )**

BGMで曲が流れています。聞こえない人は、以下の方法を試して、音声が聞こえるようにしてください。

- ・「オーディオに参加」と表示されていたら、クリックして参加。
- ・パソコン、タブレット、スマートフォンのスピーカーの設定を確認する。(音量がゼロになっていませんか?)
- ・別のパソコンなどからZoomに入り直す。(やむを得ない場合は、事前接続テストと別の端末でも構いません。)

《お困りのことはありませんか?》

監督者に質問がある場合は「手を挙げる」ボタンを押してお待ちください。

**2. 名前の変更 ( 受験番号にしていますか? )**

- ・「参加者」アイコンをクリック。

表示される参加者一覧の自分の名前にカーソルを合わせ、「詳細」から「名前の変更」を選択。

**3. カメラは正しく写りますか?**

自分の顔と解答中の手元の位置がはつきりと映るようセットしてください。

うまく映らない時は…

- ・端末と自分との距離を離す
- ・前ではなく横から写す
- ・カメラを斜めに向ける

・カメラの映像は監督者にもみ表示されます。

・セットが終わったら、冒頭説明開始まではカメラはオフで構いません。

続いて、調査当日から答案の返送までの実施方法について説明します。受験者はセンターが事前に送付した Zoom の URL から試験室に入室します。試験室では監督者の指示が始まるまでスライドにあるように「事前に確認してほしいこと」、「やってほしいこと」を画面共有で表示しておきました。

実はこの画面共有ですが、調査の 3 日目からこれを導入しました。最初の 1 日目と 2 日目は監督者の指示によって音声確認や名前の変更をしてもらっていたのですが、思ったより多くの受験者から「音声が聞こえない」「名前の変更方法が分からない」といった申し出があったため、2 日目の調査終了後に急遽このスライドを作成して、3 日目からこちらを導入しました。このスライドのおかげで 3 日目は受験者からの申し出もほとんどなく、非常にスムーズに開始前の準備を行うことができました。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

### 6-1. 解答開始前の対応

◎ 監督者による指示

- ・ 解答開始前の監督者からの指示は細かく丁寧に実施。受験者の進捗を確かめながらゆっくり進行。

【指示内容】

- ① 調査の目的、注意事項の説明
- ② 封筒 ( 問題冊子・解答用紙入り ) の開封 → 右絵
- ③ 解答用紙への必要事項 ( 氏名など ) の記入
- ④ 問題冊子・解答用紙の注意事項の確認



次に、解答開始までの監督者の指示ですが、オンラインによる自宅受験という性質上、やはり受験者の様子を十分に確認することはできないため、指示は細かく丁寧に行うようにしました。今回のモニター調査は、事前に送付した封筒をはさみで開封して問題冊子や解答用紙を取り出したり、解答終了後に返送用の封筒に答案などを封入してもらう

など、対面による受験ではなかなか発生しない作業を多くお願いをしましたので、作業の一つ一つで区切って監督者から受験者に進捗を確認するという行為を多く入れるように工夫しました。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

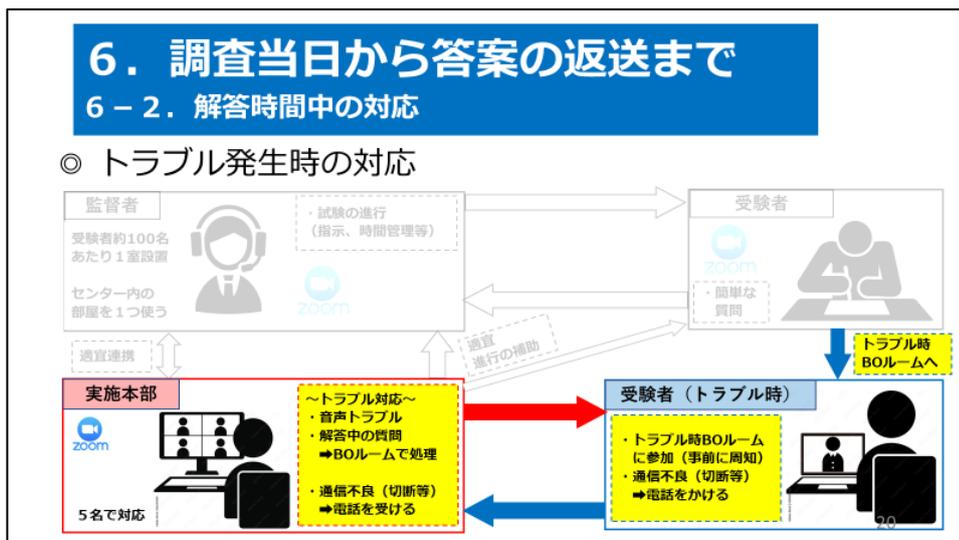
### 6-2. 解答時間中の対応

- 受験者全員をZoom上で巡視
  - ・不正行為と思われるような行為（カンニングなど）をしていないか。
  - ・誠実な態度で受験をしているか。（居眠りや解答放棄など）
  - ➡ 上記行為が確認できた場合は、監督者から実施本部に連絡。  
実施本部から速やかに受験者に電話で注意。
- トラブル対応
  - ➡ 発生時は実施本部の人員が介入・補助。 ➡次頁

19

次に、解答時間中の対応についてです。こちらは大きく二つあります。まず一つは、巡視です。カンニングなどの不正行為をしていないか、また、今回はモニター調査でしたので、居眠りや解答放棄などをせずに誠実な態度で受験をしているかということに留意して巡視を行いました。万一、監督者がこれらの行為を確認した場合は、監督者から実施本部に連絡をして、実施本部から当該受験者に電話で注意をするという体制を取りました。

解答時間中に行ったもう一つはトラブル対応です。発生時は実施本部の人員が速やかに介入をして補助をするという体制を取りました。



実施本部では、先ほども申し上げたように、常に全ての試験室の様子を確認していますので、ある試験室でトラブルが発生した際にはすぐに実施本部の人員が当該受験者に声をかけて、そしてすぐにブレイクアウトルームに誘導するというようにしていました。ブレイクアウトルームに誘導した後は受験者から詳細な情報を聞き取り、対処方法を指示して、解決したら速やかに通常の試験室に戻すという形で対応しました。また、通信不良などによってネットワークが切断されてしまったとか、そういった場合には事前に周知をしていた問い合わせ先に電話をしてもらって、実施本部でこちらも対応をしました。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

### 6-3. 解答終了後の対応

◎ 問題冊子と答案の封入

- 解答終了後は、監督者の指示により問題冊子と答案を封入後は開封厳禁とする。

問題冊子

1. 試験開始後、この問題冊子を開いてください。  
2. 問題冊子の各ページには、試験問題が記載されています。  
3. 問題冊子の各ページには、解答欄が記載されています。  
4. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 問題冊子の各ページには、注意事項が記載されています。

答案

1. 試験開始後、この答案を開いてください。  
2. 答案の各ページには、解答欄が記載されています。  
3. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
4. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 答案の各ページには、注意事項が記載されています。

封入

(解答終了後に監督者が指示)

返送用

開封厳禁

1. 試験終了後、この返送用封筒に問題冊子と答案を封入してください。  
2. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
3. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
4. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。

21

続きまして、解答終了後の対応です。受験者には監督者の指示に従って毎時間問題冊子と答案を返送用の封筒に封入する作業をしてもらいました。封入後はもちろん開封厳禁としていました。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

### 6-4. 答案の返送

例・情報コース 答案等の返送

返送用

情報Ⅰ

1. 試験終了後、この返送用封筒に問題冊子と答案を封入してください。  
2. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
3. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
4. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。

返送用

旧情報（後）

1. 試験終了後、この返送用封筒に問題冊子と答案を封入してください。  
2. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
3. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
4. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。

封入

返送用

情報Ⅰ

旧情報（後）

1. 試験終了後、この返送用封筒に問題冊子と答案を封入してください。  
2. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
3. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
4. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
5. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
6. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
7. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
8. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
9. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。  
10. 返送用封筒の各ページには、注意事項が記載されています。

調査終了後、速やかに投函

22

次に、答案の返送作業についてです。全ての科目終了後、監督者の指示に従って、問題冊子と答案を封入してある二つの科目の返送用封筒をレターパックに封入する作業をってもらいました。

## 6. 調査当日から答案の返送まで

### 6-5. アンケートへの回答

#### ◎ アンケートへの回答

- ・全科目終了後、Googleフォームを使ったアンケートへ回答してもらう。
- ・アンケートフォームのURLは、事前にメールで全受験者に連絡。  
また、当日もチャットや画面共有を使って、フォームのQRコードを表示。  
→次頁「実際に使ったスライド」
- ・原則、回答するまでZoomにとどまらせる。アンケート提出後、退出。

23

そして、次にアンケートへの回答です。全ての科目終了後、受験者に今回のモニター調査に関するアンケートにウェブフォーム上で回答してもらいました。

### 実際に使用したスライド

#### Webアンケート回答フォームのご案内

##### 【Webアンケートについて】

- ① 右のQRコード、またはチャット欄に流れるURLから、回答フォームにアクセスし、回答してください。
- ② 謝金支払いの要件となりますので、**必ず回答してください。**  
(できる限りこの場で回答してください。)
- ③ 不明な点等がある方は「手を挙げる」ボタンでお知らせください。順次対応いたします。
- ④ 回答が終了し次第本日の調査は終了となります。フォームを送信し、回答を終了した方から、このZoomから退出してください。

##### 【答案の返送について】

返送するレターパックは出来るだけ早くポストに投函してください（切手等の塗布は不要です）。返送の切ちは、**【11/18(金) 大学入試センター必着】**です。

#### Webアンケート 回答フォーム



24

こちらはアンケート回答の際に画面に表示させておいたスライドです。アンケートフォームのURLは事前に全ての受験者に連絡していましたが、調査当日もこの画面共有や、さらにはチャットでも知らせることで、受験者がスムーズにアンケートフォームに入れるように工夫をしました。

以上、大変駆け足になってしまったのですが、ここまでがモニター調査の実施までの準備、それから調査当日の実際の流れになります。

## 7. 調査実施面での振り返り

### 7-1. 受験者からの感想

#### ◎ **受験者** から出た実施面の意見

##### 【良い点】

- ・ 円滑な進行を評価する意見や、自宅での受験ができて快適だった、遠隔地からの参加もできてありがたい、という意見が一定数あった。
- ・ 監督者と1対1の試験のようで緊張感があった。
  - ➔ 受験者のプライバシーに配慮したフォーカスモードの副次的作用。

##### 【悪かった点】

- ・ **顔と手元が映るようなカメラのセットが難しかった**という意見。
- ・ 通信の不具合等による苦情の意見（指示が聞こえなくなる等）。

25

最後に調査実施面の振り返りをお話ししたいと思います。まず、アンケートの際に受験者から出た実施面での意見ですが、良い点としましては、「監督者の指示が分かりやすく丁寧だった」、地方の受験者からは「遠隔地から参加できてありがたかった」という意見が多くありました。また、「監督者と1対1の試験のようで緊張感があった」という意見も頂きました。これは受験者のプライバシーに配慮し導入したフォーカスモードの副次的な作用でもあるのではないかと実感しているところです。

一方、悪かった点ですが、「顔と手元を映すことが難しかった」という意見や、「通信の不具合などのよって監督者の指示が聞こえなかった」といったオンライン特有の意見が多くありました。オンラインは接続環境によって試験の円滑さは左右されるため、一定程度はこのような意見が出ることは想定していましたし、多少、仕方がない部分があったと思いますが、もしこれがハイクラスな選抜試験のようなものであった場合には仕方がないでは済まされませんし、この点は非常に難しい点だと感じました。

## 7. 調査実施面での振り返り

### 7-2. 実施側から見た所感

#### ◎ **実施側** から見た所感

##### 【利点】

- 遠隔地からでも受験者を募集できた。
  - ➔ 多様なモニター受験者に受験していただけた。
- 受験者にとっての手間は少なく、参加しやすかったと考えられる。

##### 【課題】

- ・ 今回の方式で厳密に不正行為等を確認するのは難しい（ほぼ不可能）。
  - ➔ 実際の試験で用いるには、改善の余地が大いにある。  
不正行為をする必要性がない、「調査」だからこそ実施できた。

26

続いて、実施側から見た所感です。まず利点としては、やはり「遠隔地からでも受験者を募集できた」ということが挙げられます。また、「受験者にとっても移動が少なく、自宅で受験ができ、手間が少なくて参加がしやすかった」のではないかと感じます。これは想定以上に多くの受験者に参加いただけたことの裏付けにもなっているのではないかと考えています。

一方で、課題ですが、やはり「オンラインによる限界がある」ということは感じました。特にスライドにもありますように、不正行為を確認するのは非常に難しかったです。画面に映っている範囲でしかわれわれも確認することができませんし、今回の方法では、例えば、共通テストのような、大規模でハイステークスな使われ方をする試験を実施するのはその点は非常に難しい、ほぼ不可能ではないかということも感じました。

この点は実際に試験として行う場合には改善の余地は大いにあると思いますし、今回は受験者にとって不正行為をする必要性のない調査という形式のものであったからこそ無事に実施ができたのではないかと感じているところです。

## 最後に・・・

- **九州工業大学のCBTの活用事例が非常に参考になった。**

- ① 実施に向けてどのようなものを準備しなければならないか  
例) 監督要領、受験上の注意、Zoom操作マニュアルなど
- ② 実施に向けてどのようなことをしなければならないか  
例) 事前接続テストなど
- ③ 実施する上で、どのような点に気を付けなければならないか  
例) 調査直前の音声確認の方法、監督者の指示の細かさなど

➔ **複数の機関の連携や、ノウハウの共有が重要。**

- **実施方法には改善の余地は大いにあるが、大学等で同様の形態での調査・試験を検討する際の参考になれば幸い。**

27

最後に、今回は、九州工業大学さんの令和3年度のCBTの活用事例を非常に参考とさせていただきます。九州工業大学さんの事例がなければこのモニター調査のオンライン実施に踏み切ることができなかったと言っても過言ではありません。

実施するに当たって参考になった点は大きく三つあります。まず一つ目に、実施するに当たってどのようなものを準備しなければならないかということです。特に監督要領は共通テストのものをベースに作成をしたというところもありますが、それにどのような形でオンライン形式に対応した指示事項や注意事項を入れ込むかという視点は、九州工業大学さんのものがなければ作成は難しかったと感じています。

二つ目は、実施に向けて何をしなければならないかということです。マニュアル類の作成もそうですが、特に事前の接続テストについては、われわれは想定していなかったため非常に参考になりました。

三つ目は、調査を実施する上でどのような点に気を付けなければならないかというこ

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

とです。調査開始直前の試験室での受験者の音声確認の方法や、一つの作業に対してどの程度細かく丁寧に受験者に指示を出さなければならないかという、ある種、感覚的なところはこちらも九州工業大学さんが作成した監督要領などを非常に参考にさせていただきました。

今回のこのモニター調査を通じて、従来とは異なる形式で試験を実施しようとした場合に、先行して取り組んでおられる他の機関から共有いただくノウハウは本当に重要だということを実感しました。

今後も、各大学における試験実施のノウハウについて私ども大学入試センターが参考にさせていただくこともあると思います。また、私ども大学入試センターからも、改善の余地は大きくありますが、今回の事例も含めて試験実施のノウハウについて今後もお伝えできる範囲で共有させていただきたいと考えています。

**ご清聴ありがとうございました**

28

以上、大変駆け足で恐縮でしたが、私からの報告は以上になります。ご清聴ありがとうございました。■

全体会 1（センターセミナー）◎ 報告 4

## 大阪大学の調査研究における CBT システム

■萩原 兼一（大阪大学 名誉教授／大学院情報科学研究科招へい教授）

大阪大学の萩原です。



「大阪大学の調査研究における CBT システム」というタイトルで講演してくださいというご依頼が大学入試センターの石岡先生よりありました。石岡先生、関係者の皆さま、発表の機会を頂き、ありがとうございます。

**大阪大学の調査研究におけるCBT システム**

II

2016~2018年度文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業 (情報分野)  
情報学的アプローチによる  
「情報科」大学入学者選抜における評価手法の研究開発

 大阪大学  
OSAKA UNIVERSITY  
受託機関

 東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO  
連携大学等

 情報処理学会  
INFORMATION PROCESSING SOCIETY OF JAPAN

「情報学的アプローチによる」は  
「**Computational Thinking** は  
大学入試を変えられるか」という試み

2

まず、発表タイトルの「大阪大学の調査研究」について説明します。2016年度から18年度までの約3年間、文部科学省の大学入学者選抜改革推進委託事業というものがありました。その情報分野を大阪大学が受託し、東京大学と情報処理学会を連携大学等として実施しました。タイトルにある「情報学的アプローチによる」というのは「Computational Thinking は大学入試を変えられるか」という意味を込めています。

**委託事業の要求**

- 高校の**新学習指導要領** (2022年度から学年進行で実施)の内容を対象とする
- 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な**思考力・判断力・表現力**を評価する
- 試験問題の**作問方法**を研究・開発する
- 成果を各大学の**個別入試**に普及させる

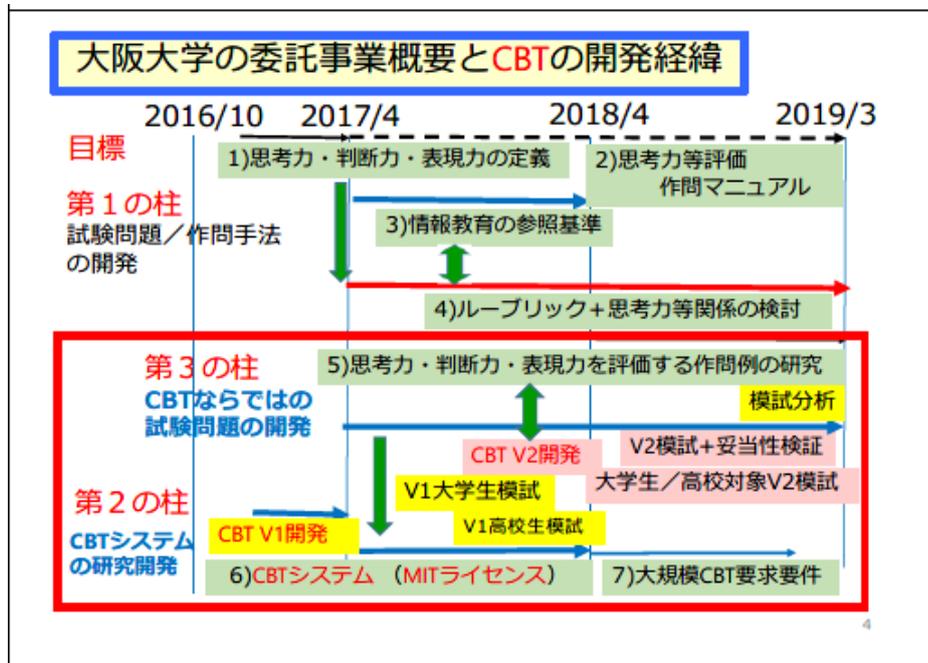
• **情報分野**では**CBT (Computer Based Testing)**により  
思考力・判断力・表現力を評価する  
試験問題の幅を広げることを研究・開発する

• 委託事業でCBT化を求められているわけではない

3

必要となる CBT 機能は評価内容や使用目的によって異なると思います。それを示すためにまず委託事業の内容についてご説明します。委託事業で要求されたことは、個別入試において思考力・判断力・表現力を評価する、情報分野における試験問題の作問に関して研究・開発することです。

委託事業では CBT を求められているわけではありませんが、後で説明しますとおり、情報分野では思考力・判断力・表現力を評価する試験問題の幅を、CBT を使うことにより広げることができるという信念の下、CBT についても研究開発しました。



上記スライドの緑色の1) から7) まだが主な成果物です。そして、赤い枠で囲んだところが CBT に関する研究開発をしたところです。5) に関しましては、後で少し説明します。

まず初年度に、V1 と名付けた CBT システムを開発しました。2 年目にその V1 を用いて模擬試験を実施しました。2 年目に V1 システムを拡張した V2 という CBT システムを開発し、3 年目に V2 システムを用いて模擬試験を実施しました。

知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力

**思考力・判断力・表現力**

パスワード (buzzword)  
実際には定義や意味があいまいな用語

評価対象なので、これらを**定義**（ブレイクダウン）しなければ試験問題がこれらの力を評価できているかを議論できない！？

研究成果の1) 思考力・判断力・表現力の定義について述べます。この思考力・判断力・表現力はバズワード、すなわち実際には定義も意味も曖昧なものです。したがって、これらの定義が曖昧なままで、これらの能力を試験で評価せよといわれても難しいことです。したがって、これらをまず定義しました。この講演では詳しく説明する時間がないので、参考資料としてスライド24から27にその抜粋を付けています。このような定義から始めるのが Computational Thinking の一つの考え方です。

**何のためにCBTを使うかにより  
望ましい CBT システムは異なる**

**CBT(Computer Based Testing)にすれば  
思考力・判断力・表現力を評価する  
設問の幅が広がるはず！**

**情報分野は紙の試験（PBT）では  
評価できる能力に限界がある**

プログラミング、シミュレーション、  
情報デザイン、データサイエンス

6

CBT を使う目的は、実施する試験によりさまざまですが、大阪大学の委託事業では、CBT を用いれば情報分野で思考力・判断力・表現力を評価する設問の幅、問題の幅が広がることを示すために CBT を使いました。

情報分野にはプログラミング、シミュレーション、情報デザイン、データサイエンスという領域があります。これらに関する能力を紙の試験で評価するには限界があると考え、CBT を活用することにしました。

## 発表内容

- なぜPBTではなくCBTなのか
- 阪大CBTシステムを  
どのようなコンセプトで開発したか
- なぜ独自のCBTシステムを開発することになったのか
- 大学入試にどのようなCBT機能が必要か
- CBTで継続的に大学入試をするために何が必要か

7

前置きが長くなりましたが、上記スライドの5つの項目について発表いたします。なぜPBTではなくCBTなのか、阪大CBTシステムをどのようなコンセプトで開発したのか、なぜ独自のCBTシステムを開発することになったのか、大学入試にどのようなCBT機能が必要か、CBTで継続的に大学入試をするために何が必要かに関して述べたいと思います。後半の3つの項目が、本セッションで議論する内容に関係すると思います。

## プログラミングは 「エンジニアリング・デザイン」である

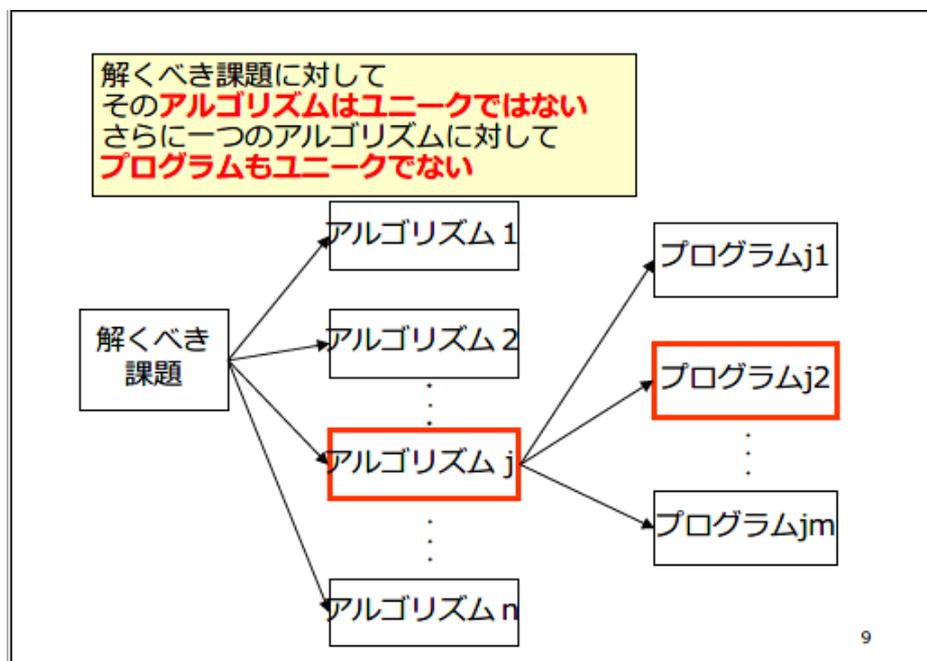
- 「エンジニアリング・デザイン」とは
  - 単なる設計図面制作ではない
  - **必ずしも解が一つでない課題**に対して、  
種々の学問・技術を利用して、  
制約条件の中で、実現可能な解を見つけ出していくこと
  - そのために必要な能力が「**デザイン能力**」
  - 対象とする課題はハードウェアでも**ソフトウェア**（システムを含む）でも構わない
- プログラミングの試験は、  
**解答がユニークであることを重要視するPBT文化に合わない**

8

まず、なぜPBTではなくCBTなのかをプログラミングを例に説明します。

プログラミングはエンジニアリング・デザインです。エンジニアリング・デザインとは、単なる設計画面の制作ではなく、必ずしも解が一つではない課題に対して種々の学問・技術を利用して、制約要件の中で実現可能な解を見つけていくことです。

したがって、プログラムを作成するためには多種多様の「思考力」と「判断力」を必要とします。また、作成されたプログラムは、情報分野での「表現」の一つですので、「表現力」も必要とします。



解くべき課題が1つあったとして、解き方であるアルゴリズムは複数あります。さらに、1つのアルゴリズムに対して、それを実装するプログラムは複数あります。したがって、プログラミングというものはそもそも解がユニークではないのです。PBT に限りませんが、解がユニークであることを重要視する試験問題を作成する文化には合わないと思います。

**PBT でプログラミング能力を評価には限界がある**

PBTでは原則いずれかの**プログラム (アルゴリズム)** を固定

- ・受験生が発想するプログラムとは異なる可能性ある  
受験生が戸惑う
- ・**プログラムを作成する能力**を評価するのではなく、  
指定された穴あきプログラムの**説明文を読み、穴を埋める能力**を評価  
**大学人が想定する「プログラミング能力」とギャップ**
- ・解答がユニークとなるように設問する作問文化では  
**そもそも解がユニークでないプログラムの作成能力評価が難しい**

10

次に、プログラミングをPBTで試験する場合にはどうなるかについて考えてみます。まず、これらのアルゴリズム、あるいはプログラムをどれか一つ固定せざるを得ないため、受験生がイメージするアルゴリズムとは異なる可能性もあるわけです。その場合は受験生が戸惑います。なぜこのような処理をするのかなと戸惑いながら解答するわけです。このような状況ですと、PBTの場合、プログラムを作成する能力を評価するというよりは、指定された穴あきプログラムの説明文を読み、穴を埋める能力を評価することになります。もちろん、ある種の論理的判断能力は必要ですが、大学が期待するプログラミング能力とはギャップがあります。したがって、繰り返しになりますが、解答がユニークとなるような設問・作問文化では、そもそも解がユニークではないプログラムの作成能力を評価するのは難しいのです。

**受験生が発想するプログラムとは異なる例**

**試作問題\* 第3問 問3 最小交換硬貨枚数** \* 2022年11月9日公表

```

(1) kakaku = 46
(2) min_maisu = 100
(3) サ を シ から 99 まで 1 ずつ増やしながら繰り返す:
(4) shihara = kakaku + tsuri
(5) maisu = ス + セ
(6) もし ソ < min_maisu ならば:
(7) タ = ソ
(8) 表示する (min_maisu)
        
```

図2 最小交換硬貨枚数を求めるプログラム

**・この釣銭の値でループを回す方法**

- ・効率のよいアルゴリズムだが、ほとんどの学生が思いつかない
- ・「客も店も十分な枚数の硬貨を持っていると仮定しましょう。」この仮定があるので使える方法

財布の中の硬貨枚数が指定された場合への一般化不能

11

受験生が普通に発想するプログラムとは異なる例としては、2022年11月9日に大学入試センターが公表した教科「情報」の試作問題の第3問の問3があります。プログラミングの問題です。詳しい説明はできませんが、3行から7行目のループは、釣銭の値でループは制御されています。ほとんどの学生は、このプログラムを直接思いつきません。このプログラムに至るまで、数ステップの思考が必要だからです。

あと、もう一つ、「客も店も十分な枚数の硬貨を持っていると仮定しましょう」という仮定があり、この仮定があるので使えるループ制御なのです。

さらに、明確には書かれていませんが、発展問題として次に解きたい状況、すなわち客の具体的な財布の中身の内容が具体的に与えられた場合、例えば、10円玉がたくさんあるのではなく2枚しかないという状況に一般化をしようとする、このプログラムを拡張する形では一般化できません。そのような意味で、この問題の流れとして問題があると言えます。

### 解がユニークでない例

盤面をロボットが進むプログラムを考える。ロボットは、次の3種類の動作が可能である。

- 「前進」：1マス前に進む。
- 「右回転」：現在の向きを右に90度変更する。移動はしない。
- 「左回転」：現在の向きを左に90度変更する。移動はしない。

プログラムを作るときは、次の方法で命令を組み合わせる。

- プログラムは「スタート」から始まり、最初、ロボットは0に居て、図の上方向を向いている。
- プログラムを上下に並べると、上から順に対応する動作を行う。
- プログラムを「繰り返しN回」ではさむと、内側の動作をN回繰り返す。
- ロボットが盤面からはみ出すプログラムは、動作エラーとなる。

1	2	3
▲:8		4
7	6	5

12

次に、単純な問いであっても解がユニークではない例を説明します。

まず、上記のような碁盤の目状に 0, 1, 2, 3, 4 と数字が書かれており、この番号順にロボットを移動させるプログラムを作るという問題を考えます。実行できる命令は「前進 (前に進め)」、「右に 90 度回転」、「左に 90 度回転」の 3 つだけです。これらの移動命令は、それぞれ前, 右, 左と一文字で省略することにします。初期状態としてロボットは 0 番の場所に北を向いているとします。

### ロボットをどのような手順で移動させるか

- **前右前前右前前右前前右前** と動かせばよい
- この中で**繰り返し**できる部分を探し  
それを**ループ**を用いて構成する

13

この例の場合は、赤字で書いた<前右前前右前前右前前右前>と移動すれば、与えられた順番どおりに移動できます。ここで、かぎ括弧<>内の文字系列は、命令の系列を表します。この (ループのない) 直線状プログラムは一つの解となります。

### ループ（繰り返し）できる場所を見つける

前右前前右前前右前前右前

1	2	3
0:8		4
7	6	5

・このプログラムを実行し  
 意図通りに動くかを確認したい

ただ、この中で繰り返し実行できる部分を探し、ループを用いてコンパクトに表現できます。例えば、上記スライドの青い矢印の部分の移動です。＜前前＞と一直線に進んでいます。ここは繰り返しのできると考えます。さらに＜前前＞の直前に常に＜右＞があるので、これも含めて＜右前前＞として、それを3回繰り返せばよいと考えます。その3回のループの、直前に＜前＞と、直後に＜右前＞を付け加えれば全体として指定通りに動くことができる（上記スライドの青い四角形内部の部分）。このように考えてプログラムを作ります。

### プログラム実行型問題

15

話がそれますが、プログラムの実行機能について説明します。

受験生はプログラムを作った後、目標の移動順とおり移動するのかなと思い、プログラムを実行したくなります。上記スライドは異なる目標の問題ですが、阪大が委託事業で開発したCBTシステムでは、プログラムを実行し、実行結果を見ることができます。

画面の左上に、問題として与えられる目標の移動順が表示されています。左下に「ブロックペイン」というものがあります。ここはプログラムで使える命令、つまり前進、右回転、左回転という移動命令、さらにループ命令が使えることが書かれています。

画面の右下には「プログラミング領域」があります。ブロックペインに書かれている命令をプログラミング領域へダウンロードし、プログラムを作っていきます。このようにプログラムを作り「実行ボタン」を押せば、そのプログラムが実行され、画面右上の「実行結果表示領域」に移動順に番号が表示されます。

実行結果を目標の移動順と比べると、このプログラムは間違っているかがわかります。

上図の課題に関してはスライド30で説明します。

**ループを見つける (2)**

**解はユニークでない**

1	2	3
0:		4
7	6	5

前右前前右前前右前前右前

**この程度の単純な課題でも複数の解がある**

**エレガントな解**

スタート  
繰り返し 4 回  
前進  
右回転  
前進

スタート  
前進  
繰り返し 3 回  
右回転  
繰り返し 2 回  
前進  
右回転  
前進

解はユニークでない説明に戻ります。ループを使った別の解があることを説明します。上図の青い部分の移動系列<前右前>を繰り返せばよいと考える受験生もいるでしょう。この場合は4回繰り返し、上図の右上のプログラムとなります。これも解となります。

上のほうがエレガントな解で、もし異なる点数を与えたとすれば、上のほうが点数は高いでしょう。

この程度の単純な課題でも解が複数個あるという例でした。

17

## 出題可能な問題形態

出題単位	問題形態	説明
小問	記述型	解答欄に単語、式、数値、文を記述する問題
	ラジオボタン選択肢型	縦並び/横並びの選択肢から一つ解答を選択する問題
	チェックボックス選択肢型	縦並び/横並びの選択肢から解答を複数選択する問題
	プルダウンメニュー選択肢型	プルダウンメニュー形式の選択肢から解答を一つ選択する問題
	短冊型	選択肢欄から選択肢を解答欄にドラッグ・アンド・ドロップし、解答欄の選択肢を並べ替える問題
	プログラム実行型	ブロック形式プログラミングを行い、実行させる問題
中間	穴埋め型	中間の問題文中の解答欄に解答する問題
	ゲームブック型	中間を構成する小問の解答結果に依存して次に出題する小問の表示を変更できる問題
大問	ランダム出題型	受験者毎に大問を構成する中間の出題内容を可変にする問題

情報分野向きの他の問題形式には上のスライドに示すように短冊型、ゲームブック型があります。これらは後ろのスライド 32 から 34 に例を示しています。

### プログラミング問題を解答するときの好ましいCBT機能

- ・ プログラムの完成版を一度で作成することは難しい
- ・ プログラムの**作成、実行、テスト、デバッグの試行錯誤を繰り返す**

- ・ **基本命令**（代入文、if then else文、while文）のレベルで大きな内容をプログラム化することは難しい
  - 基本命令（釘、金槌、板）で大小屋は作れるが、人が住む住居を作るのは大変である。
  - プレハブ工法的な作り方が必要である。
- ・ **ブラックボックス化が重要**
  - ・ 意味のあるプログラム断片（手続き／関数）を自ら作成する
    - プレハブ部品（部屋のユニット等）そのものを作成する
  - ・ **すでに存在するライブラリ関数**を用いてプログラムを作成する
    - プレハブ部品を用いて住居（複雑な内容）を作成する
- ・ データサイエンス、他の科目のプログラム処理に使える**プログラム言語**が好ましい

**そのような解答環境をCBTシステムで提供したい！**

18

プログラミング問題を解答するとき好ましい CBT 機能を上のスライドにまとめました。

詳しくは説明できませんが、プログラミングにおいてプログラムの完成版を一度で作成することは難しいです。プログラムの作成、実行、プログラムが正しいかどうかを確認するテスト、正しくない場合はどこがだめなのかを見つけるデバッグ、これらの 4 つのステップを試行錯誤を繰り返して、プログラムの完成版ができあがります。

このような解答環境が好ましいのですが、CBT では可能ですが、PBT では難しいでし

よう。このようなプログラミングの解答環境を実現する CBT システムを開発することが委託事業の一つの目的でした。

また、今回時間の都合で上図のピンクの部分は説明できませんが、プログラムを作るときに「ブラックボックス化」というものも重要で、これはプログラムにおける「関数」を使うことに相当します。スライド 31 に関数を使う例が示されています。

高校でどのような情報能力をつけるべきかに関しては、委託事業の成果物 3 の「情報教育の参照基準」を作り、そこにまとめてあります。そのうち、プログラミングに関する部分のみスライド 28 と 29 で概略を説明しています。

**CBTシステムを自作した理由** 情報の専門家だから

- 「情報科」特有の出題機能を持つ既存システムがない
- 開発に使える期間が短い
- 各年度末にそれなりの完成品とする必要がある
  - 初年度（2016年度）は実質数か月
  - 2017年度は1年
- TAOなど既存CBTシステムを改造する手間が不明
- 研究開発なので、四択や穴埋め設問など  
実装できるとわかっているCBT機能の優先度は低い
- 端末機故障時に耐性のある解答記録機能の実装

↓

- 「情報科」特有の出題機能を実装する場合、  
スクラッチで自作開発するのが安全
- 実装したい機能を完全に実装できない場合でも、自作システムならば次善策の実装がしやすい

19

以降の3枚はこのセッションで議論する内容だと思います。まず、CBT システム TAO などの既存システムを改造するのではなく、CBT システムをゼロから自作した理由をこの1枚で説明します。

先に説明した情報科の出題に必要な機能を持つ既存システムが、探す範囲では存在しなかったということが第一の理由です。さらに、委託事業では開発に使える時間が短いことが挙げられます。初年度は実質6か月しかなく、そのうちの3か月ぐらいしか CBT システムの実装時間がありません。2年度は12か月あります。そのため、開発期間が短いことが既存システムを改造しない一番大きい要因です。TAO などの既存システムを改造するには、そのシステムの内部実装を解明する必要があり、委託事業で欲しい機能をシステムに追加するための手間が不明なのです。したがって、既存システムを改造する勇気がなく、それならばゼロから作ろうということになりました。

さらに研究開発なので、実装できると分かっている四択とか穴埋めとか、そういうものは優先度が低いということになります。

そして、CBT システムを使う目的が大学の入学試験なので、CBT システムに故障が起きたときに、受験生が故障するまでに解答した内容が消えてしまったりすると大問題と

なります。その対策のための実装が、既存システムを改造して実現できる保証がありません。

**大学入試にどのようなCBT機能が必要か**

- ・ **思考力・判断力を評価するには**
  - ・ 比較的多くの文章・表・図を一覧性よく表示する機能
    - ・ コンピュータ画面の表示の工夫が必要
  - ・ 問題文・図・表に**メモ書き**をする機能
- ・ 受験生にとって**操作性のよい**CBTシステムであること
- ・ CBTシステムとして**故障耐性**があること
  - ・ 受験生が使う端末機の故障対応
    - ・ **受験生の解答状況を別の端末機上に復元できること**
  - ・ 情報ネットワーク、サーバ機の故障対応
- ・ 試験実施に必要な**セキュリティ**を備えること
- ・ 受験生数に応じて **Scalability** があること
- ・ 受験生にとって**公平なCBT環境**
  - ・ 端末機の**画面の大きさ**や**応答時間**の差が無視できる範囲
  - ・ 端末機故障時に受験生が端末機を交換する場合、  
受験生の解答可能時間を把握して、  
他者と同様の**解答時間**を与えるようにできる

20

次に、大学入試にはどのような CBT 機能が必要かということについてまとめました。

思考力・判断力を評価するには簡単な四択の問題では難しいと個人的には思います。思考力等を試すときには、比較的多くの文章・表・図を見比べたりする必要があり、小さなコンピュータ画面ではそれが難しいのです。一覧性が紙に比べると良くありません。それを何とかできるようにコンピュータ画面の表示に関する工夫が必要になってきます。

さらに、人は何かを思考するときに、紙にいろいろとメモ書きします。問題文・図・表に書き込んだりします。CBT システム上でそのようなメモを書くことができる機能も必要です。

受験生にとって操作性の良いシステムであることは自明です。

あとは、大学入試として大事なのは CBT システムとして故障耐性があることです。受験生が使う端末が故障した場合、受験生は予備の端末に移って解答を続けることとなりますが、その予備端末で受験生の解答状況が復元できている必要があります。解答を最初からやり直させるのは論外です。さらに、情報ネットワークやサーバーを多重化するなどして、故障したときにうまく切り替えられるような故障耐性のあるソフトウェアシステムである必要があります。

受験生の人数に応じて Scalability があること、これは例えば、受験生が 100 人だったらスムーズに動くが、10 倍の 1,000 名になったらほとんど動かないということでは困るということです。受験生的人数が多くなっても、サーバーなどを追加して CBT システムとして稼働することが必要です。

受験生にとって公平な CBT 環境であることは重要です。たとえば、端末の画面の大きさが、17 インチと 12 インチとを比べたら 17 インチのほうがたくさんの情報が見られま

す。画面サイズが違くとそれは不公平です。また、古いCPUを使っている端末ですとレスポンスタイムが遅く、受験生はいらいらしますので、コンピュータの処理性能に本質的な違いがあってはいけません。

いわゆる端末が故障し、端末を交換した受験生に関しては、交換に要したロスタイムを加味して解答時間の延長を設定できること、すなわち、他の受験生と同じ解答時間を与えるようなことができること、そのようなシステムになっていることが重要だと思います。

### CBTで継続的に大学入試をするために何が必要か

- あまり手間をかけずに、  
**作題者のイメージ通りに試験問題に仕上がるツール**
- **多くの者がCBTシステム開発に関与できるように**  
**カスタマイズしやすいCBTシステムであること**
  - システムのソースプログラムが公開されていること
  - システムの実装内容などを説明する**ドキュメント**が完備されていて、公開されていること
  - 機能分割のよいシステム
  - 必要な機能のみ組み立てて**軽いシステム**にできること
- **ランニングコスト**が適切であること
  - 関係するシステムのバージョンアップ時の動作確認
    - CBTシステム実装言語、CBTシステム、PCI、OS、ウェブブラウザ
  - 運営の手間、**端末PC**などハードウェアの準備

21

最後に、CBTで継続的に大学入試をするために何が必要かについて述べます。

まずは作題者が、作題者のイメージどおりに問題作成できるようなツールであることです。多くの方がCBTシステム開発に関与できるようにカスタマイズしやすいCBTシステムであることが重要だと思います。たとえば、システムのソースプログラムが公開されており、システムの内部資料、実装内容などを説明するドキュメントが十分にあり、それも公開されていることです。

また、CBTシステムのある部分を改造するのに、CBTシステムの多くの箇所を修正しなければならないようでは不適切で、少ない部分だけを修正すれば済むようにうまく機能分割されたシステムであることです。

さらに、必要な機能だけをうまく選択して軽いシステムとして構築できることです。これはScalabilityを上げるためには軽いシステムが好ましいことにも関連します。

最後に、ランニングコストが適切であることが挙げられます。年が経過するとCBTシステムを構成するいろいろなソフトウェアがバージョンアップされます。具体的には、CBTシステムの実装言語、OS、ライブラリ等のバージョンアップ、CBT画面を表示するウェブブラウザ等のバージョンアップなどです。そのときに今まで動いていたCBTシステムが正しく動くかどうかを確認する必要があります。きちんと動くようにバージョン

アップしてほしいのですが、動かないことが多いので、確認が必要です。

最後に運営です。先ほどの九工大さんの話のように、運営の手間や端末、PCなどのハードウェアの準備にランニングコストがかからないこと、これが重要だと思います。

## まとめ

- ・なぜPBTではなくCBTなのか

**プログラムは解がユニークでないので、**

**プログラミング能力を評価にPBTでは限界があるから**

- ・阪大CBTシステムをどのようなコンセプトで開発したのか

**教科「情報」の能力を評価できるコンピュータならではの出題方式**

- ・なぜ独自のCBTシステムを開発することになったのか

**改造しやすい既存システムがなかったから**

- ・大学入試にどのようなCBT機能が必要か

**思考力・判断力を評価できる出題ができ、故障耐性があること**

- ・CBTで継続的に大学入試をするために何が必要か

**CBTシステムがカスタマイズしやすいこと**

22

最後にまとめです。上記スライドの内容に関して説明しました。

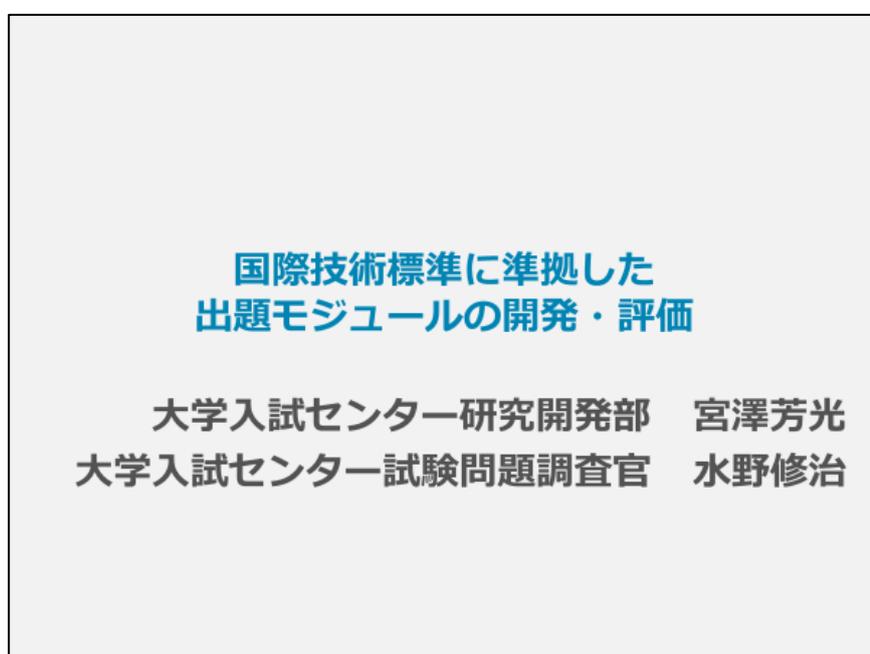
この写真に写っている方々は大阪大学の委託事業に参画しご尽力していただいた方々です。これらの方々に感謝いたします。以上です。よろしくお願ひします。■

## 全体会 1（センターセミナー） ○ 報告 5

# 国際技術標準に準拠した出題モジュールの 開発・評価

■宮澤 芳光（大学入試センター研究開発部准教授）/  
水野 修治（大学入試センター試験問題調査官）

【宮澤】 よろしくお願ひします。



本講演では「国際技術標準に準拠した出題モジュールの開発・評価」を紹介します。  
講演者は大学入試センター研究開発部の宮澤と、情報の試験問題調査官である水野先生  
です。

## Computer-based Testing: CBTの導入

国内外におけるCBTの実施例\*

医療系大学間共用試験、英検S-CBT、SPI、ITパスポート試験、TOEFL iBT® テスト

共通テストにおけるCBTの活用に関する提言

**教育再生実行会議第四次提言（H25）**

大学入学希望者を対象とする達成度テストでは、将来的に、試験問題データを蓄積しCBT方式で実施することも検討。

**中央教育審議会答申（H26.12）**

**「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」**

CBT方式での実施を前提に、出題・解答方式の開発や、実施回数等の検討等を行う。

**「未来投資戦略2018—「Society 5.0」「データ駆動型社会」の改革—」（平成30年6月15日閣議決定）**

（中略）早期に方向性を示すとともに、コンピュータ上で実施する試験(CBT)などの試験の実施方法等について検討

独立行政法人大学入試センター CBT報告書

[https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt\\_houkoku.html](https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt_houkoku.html)

2

近年、紙と鉛筆を用いる方式からパソコンやタブレット等のコンピュータを用いる CBT に置き換わる事例が見られるようになりました。例えば、ETS が実施する TOEFL では、日本で平成 12 年から CBT が導入されており、OECD が行う国際的な学力調査である PISA も平成 27 年から全面的に CBT に移行しています。国内では、医学部や歯学部の学生が受験する医療系大学間共用試験やITパスポートといった試験でCBTが導入されています。

## 独立行政法人大学入試センターにおける CBT調査研究

大学入学者選抜におけるCBT化の課題\*

- ① 全国的に均質で質の高い受験環境（パソコンやネットワーク等）の確保
- ② トラブル等が生じた場合の対応体制の構築
- ③ 新しい試験の在り方に対する受験者や保護者を含む社会全体の理解

→大学入学共通テストへの早々なCBT化は困難

CBT化の利点

ペーパーテストでは実施困難だった出題形式の実現

令和3年度～令和4年度の調査研究

[CBTを用いた教科「情報」で扱う内容の学力測定](#)

[Tao（CBTシステム）のPCIモジュールを開発・評価](#)

\*独立行政法人大学入試センター、大規模入学者選抜におけるCBTの可能性について、令和3年3月

[https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt\\_houkoku.html](https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt_houkoku.html)

3

大学入学共通テストは、受験者数が40万人以上に上る大規模試験であり、かつ、受験者や関係者に重大な結果をもたらすハイスタークスの試験として実施されています。共通テストは、紙媒体の問題冊子とマークシートを使用し、OMRで読み取って解答データ

を取得するという形式で実施しています。

この共通テストについても、提言の中でCBT化の検討が求められてきました。大学入試センターでは、各分野の専門家を交えて検討を行い、令和3年3月に「大規模入学者選抜におけるCBT活用の可能性について」という報告書を公開しました。

報告書では、大学入学選抜におけるCBT化の課題として3つを挙げています。1つ目に全国的に均質で質の高い受験者環境（パソコンやネットワーク等の確保）。2つ目にトラブル等が生じた場合の対応体制の構築。3つ目に新しい試験の在り方に対する受験者や保護者を含む社会全体の理解。これらの課題を踏まえて共通テストへの早々なCBT化は困難であるということが述べられています。

一方、この報告書では、CBT化の利点として、ペーパーテストでは実施困難であった出題形式の実現を指摘しています。

### 「情報」の問題に特化した問題形式に 組み込む機能

- ① 測りたい資質・能力が、その機能を使った問題でより測ることができる。
- ② その機能进行操作できるか否かが測りたい資質・能力に影響を与えない(その機能を誰もが容易に操作することができるよう、場合によっては試験前に説明や練習が必要)。
- ③ 単なる解答の正誤だけでなく、解答を導くまでのプロセスを評価することができる。
- ④ その機能を使って問題を解くプロセスが、日ごろ学習において実施しているような双方向性のあるものになっている(日ごろの学習プロセスと問題が乖離していない)。
- ⑤ その機能を使い、さまざまな問題を作成できる汎用性がある(特定の試験のために作られたスペシフィックな機能でない)。

水野修治(2022)、「CBTならではの”問題とは～「情報」のCBT試験を考える～」  
[https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt\\_houkoku.html](https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/cbt_houkoku.html)

4

大学入試センターでは、令和3年度に各分野の専門家からの意見を踏まえ、CBTを用いて教科「情報」の試験問題を出題できるモジュールの開発に取り組みました。

開発では、まず、情報Ⅰの試験問題に特化した問題形式に組み込む機能を整理しました。1つ目は、測りたい資質・能力を、その機能を使った問題でより測ることができる。2つ目は、その機能进行操作できるか否かが測りたい資質・能力に影響を与えない。これには、その機能を誰もが容易に操作することができるよう、場合によっては試験前の練習が必要です。3つ目は、単なる解答の正誤だけではなく、解答を導くまでのプロセスを評価することができる。4つ目は、その機能を使って問題を解くプロセスが、日ごろの学習で実施しているような双方向性のあるものになっている。これは普段の学校の中での授業であり、日ごろの学習プロセスと試験問題が乖離していないことを意味します。5つ目が、その機能を用いて多様な試験問題を作成でき、汎用性がある。これは、特定の試験問題のためにつくられたスペシフィックな機能ではないということです。これらを満た

すようなモジュールの開発を検討しました。

## 大学入試センターで開発したPCIモジュール

Code Block Programming (CBP)

短冊型コードを用いてプログラミング問題を出題

Scatter Plot Interaction (SPI)

散布図を用いたデータ活用問題の出題

Pivot Table Interaction (PTI)

クロス集計を用いたデータ活用問題の出題

5

大学入試センターでは、3つのモジュールを開発しました。1つ目が、Code Block Programming(CBP)であり、短冊型コードを用いてプログラミング問題を出題するモジュールです。2つ目が、Scatter Plot Interaction(SPI)で散布図を用いたデータ活用問題の出題するモジュールです。3つ目が、Pivot Table Interaction(PTI)、クロス集計を用いたデータ活用問題を出題するモジュールです。

## QTIとTAO

QTI (Question & Test Interoperability) とは

1EdTechが策定したCBTの国際技術標準  
システム間の互換性や相互運用性の向上

TAOとは

QTIに準拠したオープンソースのCBTシステム  
(Open Assessment Technologies S.A.)  
ドラッグ&ドロップで多くの操作が可能  
項目作成, テストの配信, 受験が可能

PCI(Portable Custom Interactions )とは

QTIに準拠したCBTシステムに  
Technology-enhancedな試験問題を  
導入することができる仕様

6

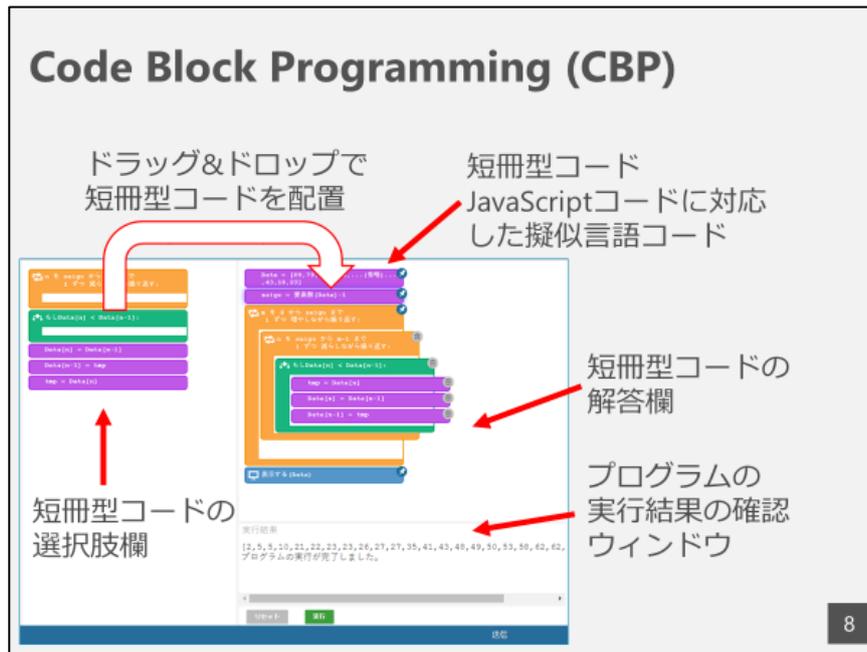
センターでは、CBTの技術標準に沿った試験環境の構築を検討しました。CBTの技術標準には、国際標準化団体である1EdTechが作成したQTIがあります。QTIは、XML形式のデータ構造を用いて、オーサリングツール、アイテムバンク、テスト構成ツール、学習プラットフォーム、スコアリング、分析エンジン間で試験問題やテストコンテンツ、解答データの共有を実現しています。

QTIに準拠したCBTプラットフォームには、OATのTAOが知られています。TAOは近年、OECDのPISAや文科省で開発されているMEXCBTで使われています。TAOは、ドラッグ&ドロップ(D&D)で多くの操作が可能であり、D&Dで項目作成、テストの配信、受験が可能です。

センターでは、QTIに準拠したCBTにTechnology-enhancedな試験問題を導入することができる規格であるPCIに準拠したモジュールを開発しました。

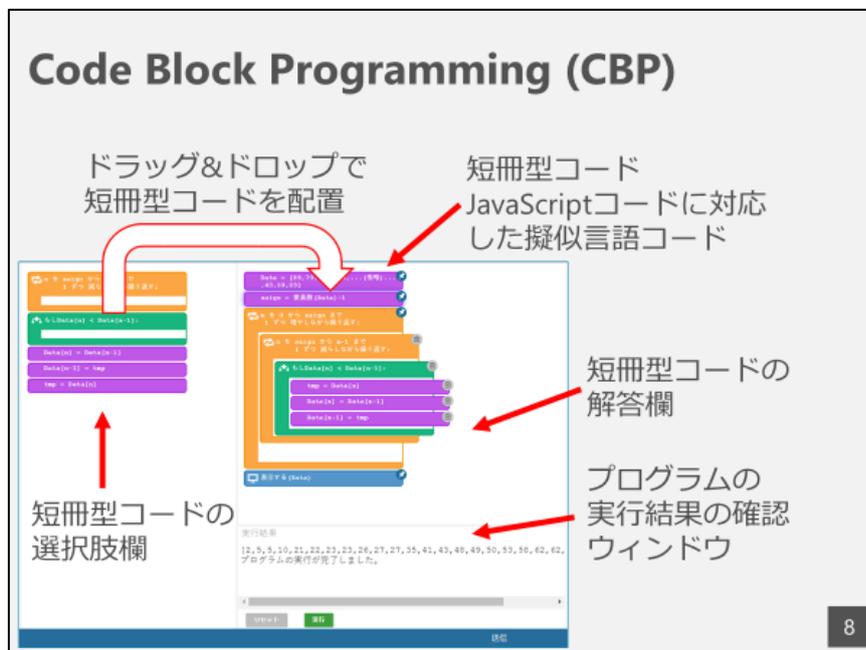


開発したモジュールは、試験問題の1つとしてTAOで出題することができます。TAOはGitHubで公開されており、パソコンやサーバーにインストールして実際に使うことができます。



CBP は、作問者が自由にプログラミング問題を作成し、CBT で出題させることができます。受験者は、短冊型コードを並び替え、その実行結果を踏まえてプログラムを完成させます。

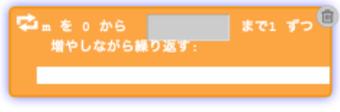
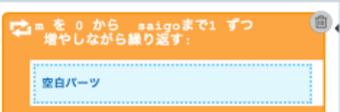
短冊型コードとは、プログラムのコードを機能単位で分割し、その分割されたコードのまとめりです。作問者は、短冊型コードに表示する擬似言語コードと、その短冊型コードが実行する JavaScript コードを設定します。



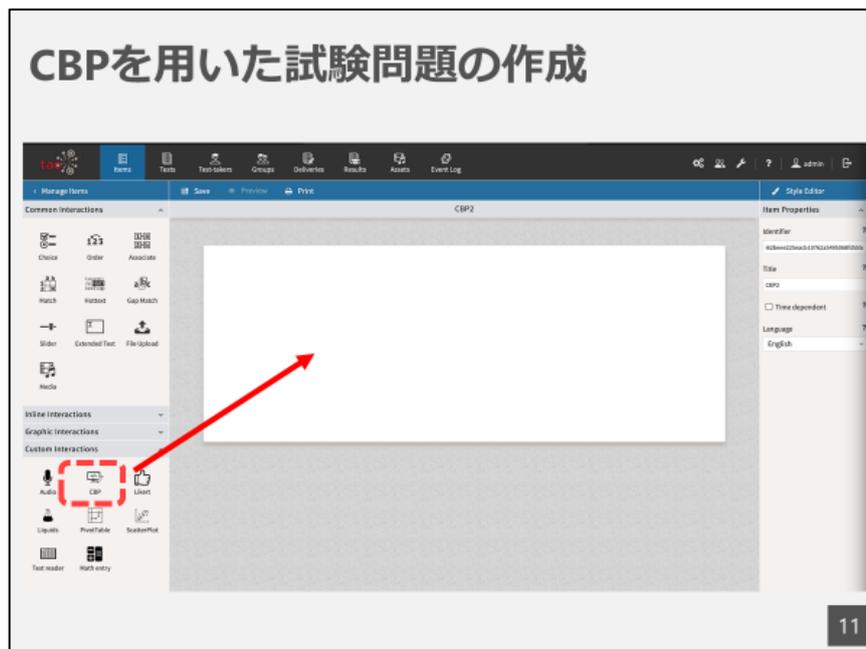
短冊型コードの種類は 6 種類です。単純処理は、変数の定義や演算を記述し、複数行のコードを登録できます。while 型の繰り返しは、繰り返し条件を記述でき、同様に for 型で繰り返し条件を記述できる短冊もあります。条件分岐 if は、分岐条件を記述でき、

if-else 型は、条件に不一致した時に処理されるコードを記述できます。print は、変数の値をコンソールに出力する短冊です。

### 受検者が入力する欄の作成

種類	短冊型コードの形状	説明
テキストボックスの追加		受検者の入力欄
ドロップダウンの追加		受検者はドロップダウンから選択
空白		受検者がドラッグ&ドロップしやすいように空白を追加

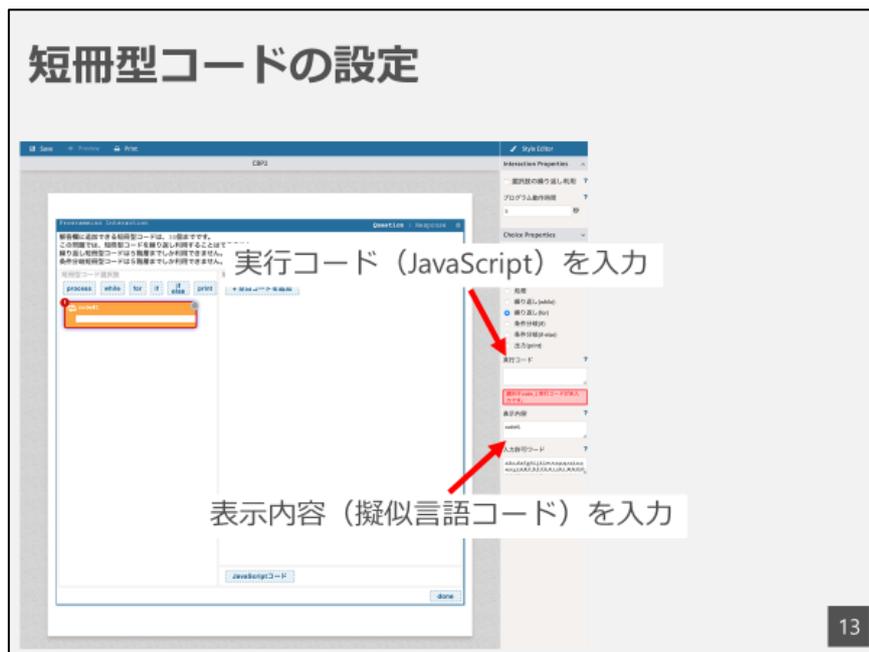
さらに、短冊型コードには、入力欄を設定できます。入力欄には、テキストボックスやドロップダウンリストを追加できます。この他にも、短冊中に別の短冊を埋め込むような場合、空白パーツというものを入れ込み、受験者がドラッグ&ドロップしやすいようにすることができます。



試験問題の作成では、CBP のモジュールを作問画面にドラッグ&ドロップします。



次に、短冊型コード選択肢欄に短冊型コードを追記します。



短冊型コードに JavaScript のコードを登録し、擬似言語コードを入力します。

## バブルソートのPBT

**配列の要素を昇順に並べ替える基本的なプログラミングの問題。バブルソートの二つの考え方どちらも正答となるようにしている。**  
(情報1「3.コンピュータとプログラミング」に類似する問題(中級))

**第1問** 次のプログラムの空欄「ア」～「オ」に入れる最も適当なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。

トランプ10枚の数字（絵札のJは11,Qは12,Kは13とする）が、次のように配列Dataに格納されている。この配列の値を昇順に並べ替えるバブルソート（隣接交換法）のプログラムを図1のように作成した。

なお、配列の要素を指定する添字は0から始まり、プログラムには次のような関数要素数を用いている。

```

1  0  1  2  3  4  5  6  7  8  9
Data 11  7  5  1  5 12  7  6  3  7
    
```

要素数 (m) → 配列の要素数を返す。  
例：Data=[10,20,30,40,50,60,70]の時  
要素数 (Data) は7を返す

(実行結果例)  
1,3,5,5,6,7,7,11,12

```

(01)Data = [11,7,5,1,5,12,7,6,3,7]
(02)saigo = 要素数(Data)-1
(03)m を saigo から saigo-1 まで1ずつ増やしながら繰り返し返す:
(04) m を 「ア」 から 「イ」 まで1ずつ 「ウ」 から繰り返し返す:
(05)     | 6,12 | 「エ」 なら「ア」 swap      「ア」 0
(06)     |     | tmp = Data[m]   「イ」+1     「イ」 saigo-1
(07)     |     | Data[m] = 「オ」
(08)     |     | 「オ」 = tmp      「ウ」減らし 「ウ」 saigo
(09)表示する(Data)      「 Data[m] < Data[m-1] 「エ」 Data[m] > Data[m+1]
                        「 Data[m-1]      「 Data[m+1]
    
```

図1 バブルソートのプログラム

「ア」～「オ」の解答群

<input type="radio"/> Data[m-1]	<input type="radio"/> Data[m+1]	<input type="radio"/> 0
<input type="radio"/> 1	<input type="radio"/> saigo	<input type="radio"/> m
<input type="radio"/> m+1	<input type="radio"/> saigo-m-1	
<input type="radio"/> 増やし	<input type="radio"/> 減らし	
<input type="radio"/> Data[m] < Data[m-1]	<input type="radio"/> Data[m] > Data[m+1]	

マークシート方式では、プログラムに空欄が埋め込まれており、その空欄に解答群から適切なコードを選択する方式でした。

## CBPを用いた試験問題の例

**問題例**  
配列Dataに格納されている値を昇順に並べ替えるバブルソート(隣接交換法)のプログラムを完成させよ。  
配列Data  
89,79,89,23,5,21,22,27,62,98,62,53,35,27,49,50,41,2,5,58,26,48,43,10,23

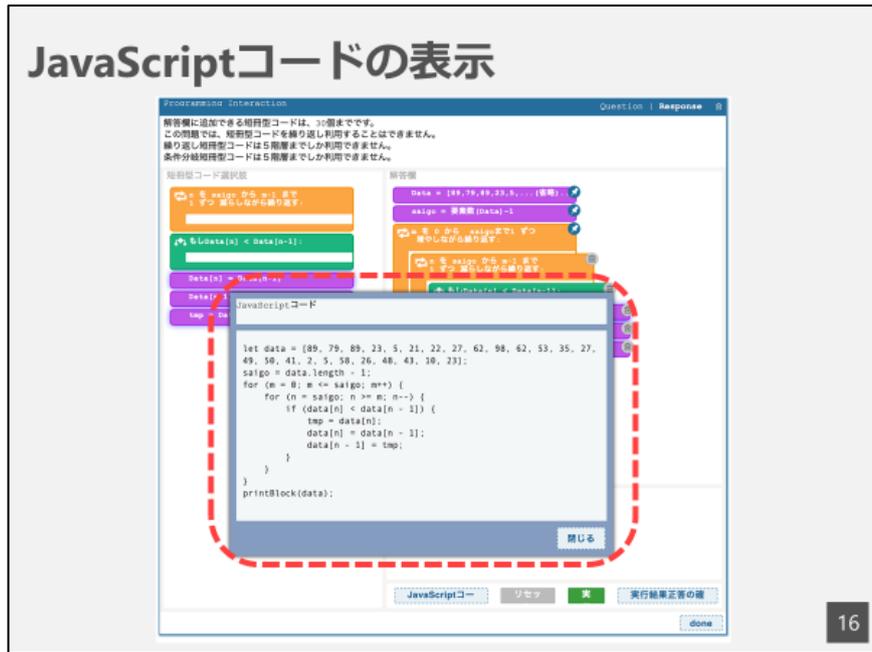
短冊型コード選択肢

- process while for if else print
- n を saigo から m-1 まで1ずつ減らしながら繰り返し返す:
- もしData[n] < Data[n-1]:
- Data[n] = Data[n-1]
- Data[n-1] = tmp
- tmp = Data[n]

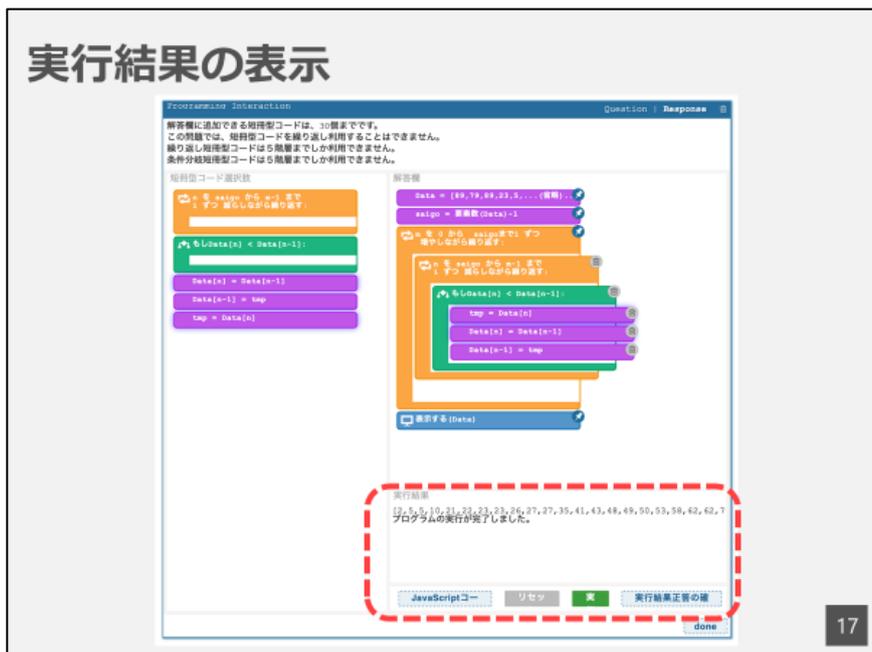
解答欄

- + 空白コードを追加
- Data = [89,79,89,23,5,... (省略)]
- saigo = 要素数(Data)-1
- m を 0 から saigoまで1ずつ増やしながら繰り返し返す:
- 空白パーツ
- 表示する(Data)

CBPでは、短冊型コード選択肢から解答欄にドラッグ&ドロップしてプログラムを作成することができます。



作問者の画面では、JavaScript の表示内容を確認することができます。



また、作問者の画面では、プログラムの実行結果をコンソール画面に表示できます。



プログラムが適切でない場合はエラーを表示します。



受験者は、短冊型コードを選択肢から選び解答欄にドラッグ&ドロップしてプログラムを作成し、そのコンソール結果を踏まえながらプログラムを完成させます。

## 受検者側の画面例（実行結果）



作問者と同様、コンソールにプログラムの結果が表示されます。

## 短冊型コードのエラーと対処方法

エラー内容	発生条件	対処方法
識別子が未入力です。	未入力	識別子を入力してください。
識別子が他の短冊型コードと重複しています。	他の短冊型コードと重複している	識別子重複部分を確認して重複しないよう再設定してください。
実行コードが未入力です。	未入力	実行コードを入力してください。
表示内容に入力したテキストボックスが、実行コードにありません。	表示内容にテキストボックスキーワードが存在するが、実行コードにない	実行コードにテキストボックスキーワードを入力してください。
表示内容に入力したドロップダウンリストが、実行コードにありません。	表示内容にドロップダウンリストキーワードが存在するが、実行コードにない	実行コードにドロップダウンリストキーワードを入力してください。
利用できるテキストボックスは一つのみです。	テキストボックスキーワードが複数存在する	テキストボックスのキーワードの重複を削除してください。
利用できるドロップダウンリストは一つのみです。	ドロップダウンリストキーワードが複数存在する	ドロップダウンリストの中の重複を削除してください。
表示内容が未入力です。	未入力	表示内容を入力してください。
実行コードに入力したテキストボックスが、表示内容にありません。	実行コードにテキストボックスキーワードが存在するが、表示内容にない	表示内容にテキストボックスキーワードを入力してください。
実行コードに入力したドロップダウンリストが、表示内容にありません。	実行コードにドロップダウンリストキーワードが存在するが、表示内容にない	表示内容にドロップダウンリストキーワードを入力してください。
テキストボックスの入力許可ワードが未入力です。	実行コードにテキストボックスキーワードを設定しているが、入力許可ワードが未入力	入力許可ワードを入力してください。

プログラムが適切でない場合、コンソールエラーが表示されます。エラーの一覧は、スライドの通りです。

## 解答データの形式

**RESPONSE JSONの構造**

- “result” : 解答の実行結果
- “code” : 受検者が解答したJavaScriptのコード
- “codeblock” : 解答の短冊型コードの並び順
- “textbox” : 解答のテキストボックスの入力値
- “dropdown” : 解答のドロップダウンリストの選択値

受験者が回答した内容

実際に送信された解答のJSON

```

{
  "result": [2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10],
  "code": "
s = 1;
var flag_code_3 = 0; /* SYSTEM */
while (a < 10) {
  flag_code_3++; /* SYSTEM */
  if (!flag_code_3 === 1000) throw -10; /* SYSTEM */
  a = a + 1;
}
printBlock(a);
",
  "codeblock": [
    { "id": "code_1", "type": "process" },
    { "id": "code_3", "type": "while", "nests": [
      { "id": "code_4", "type": "if", "nests": [
        { "id": "code_5", "type": "process" } ] ] } ] ],
  "textbox": ["123456"],
  "dropdown": []

```

プログラムの実行結果

システムが付加したコード /\* SYSTEM \*/

解答された短冊型コード

- id : 識別子
- type : 短冊型コードの種類
- nests : ネストの中身 (繰り返し短冊型コードと条件分岐短冊型コードの場合に付加)

テキストボックス、セレクトボックスの入力値

22

解答結果は、JSON形式で蓄積されます。コンソールの出力結果のみならず短冊型コードの並び順を保存します。

### Wカップデータ分析問題(PBT)

**第3問** 次の文章を読み、後の問い(問1～4)に答えよ。

S高等学校サッカー部のマネージャーをしている鈴木さんは、「強いサッカーチームと弱いサッカーチームの違いはどこにあるのか」というテーマについて研究している。鈴木さんは、ある年のサッカーのワールドカップにおいて、予選で敗退したチーム(予選敗退チーム)と、予選を通過し、決勝トーナメントに進出したチーム(決勝進出チーム)との違いを、データに基づいて分析することにした。このデータで各国の代表の32チームの中で、決勝進出チームは16チーム、予選敗退チームは16チームであった。

分析対象となるデータは、各チームについて、以下のとおりである。

- 試合数…大会期間中に行った試合数
- 総得点…大会で行った試合すべてで獲得した得点の合計
- ショートパス本数…全試合で行った短い距離のパスのうち成功した本数の合計
- ロングパス本数…全試合で行った長い距離のパスのうち成功した本数の合計
- 反撃回数…全試合において審判から取られた反撃回数の合計

鈴木さんは、決勝進出チームと予選敗退チームの違いについて、このデータに基づき、各項目間の関係を探ることにした。データの加工には、表計算ソフトウェアを用いて、表1のデータシートを作成した。

決勝進出チームと予選敗退チームの違いを調べるために、決勝進出の有無は、決勝進出であれば1、予選敗退であれば0とした。また、チームごとに試合数が異なるので、各項目を1試合当たりの数値に変換した。

表1 ある年のサッカーのワールドカップのデータの一部(データシート)											
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
1	チーム	試合数	総得点	ショートパス本数	ロングパス本数	反撃回数	決勝進出	1試合当たりの総得点	1試合当たりのショートパス本数	1試合当たりのロングパス本数	1試合当たりの反撃回数
2	T01	3	1	334	323	5	0	0.33	111.33	107.67	1.67
3	T02	5	11	1823	510	12	1	2.20	364.60	102.00	2.40
4	T03	3	1	650	269	11	0	0.33	216.67	89.67	3.67
5	T04	7	17	2287	711	11	1	3.27	326.43	101.57	1.57
6	T05	3	7	751	234	8	0	0.67	247.00	78.00	2.67
7	T06	5	8	1400	595	9	1	1.60	320.00	111.00	1.80

また、データシートに基づき、統計処理ソフトウェアを用いて、図1を作成した。

図1 各項目間の関係

図1の1～7は、それぞれの項目の全参加チームのヒストグラムを決勝進出チームと予選敗退チームとで色分けしたものであり、●～○は決勝進出チームと予選敗退チームに分けて作成したヒストグラムである。あ～むは、それぞれの二つの項目の全参加チームと決勝進出チーム、予選敗退チームのそれぞれに限定した相関係数である。またA～Fは、それぞれの二つの項目の数本回を決勝進出チームと予選敗退チームをマーカーで区別している。例えば、図1のAは縦軸を「1試合当たりの得点」、横軸を「1試合当たりのショートパス本数」とした数本回であり、それに対応した相関係数はあで表されている。

1試合当たりの得点

ショートパス本数

ロングパス本数

反撃回数

1試合当たりのショートパス本数

1試合当たりのロングパス本数

1試合当たりの反撃回数

データ活用問題では、データを分析し、その分析結果から解答を考える必要があります。従来のマークシートの解答では、分析後の図表を示し、その図表から解答を考えるものでした。このため、受験者自身がデータを分析し、図表を作成することが困難でした。

## Scatter Plot Interaction (SPI)

分析対象のデータ

受検者が散布図の縦軸と横軸を設定

散布図の回帰直線や相関係数を表示

24

SPIでは、事前に作問者がCSV形式でデータを登録し、そのデータについて受験者が分析軸を選ぶことで散布図を表示できます。受験者は、散布図の回帰直線や相関係数の結果を踏まえて試験問題に解答することができます。なお、SPIは、外れ値を除外して分析結果を表示することが可能です。

## SPIを用いた試験問題の例

■ 次の文章を読み、空欄に入れる最も適当な語句を答えなさい。

太郎さんは、ある年のサッカーワールドカップ大会のデータ（W杯データ）を分析した。分析対象となるデータは、各チームについて、以下のとおりである。

- 試合数...大会期間中に行った試合数
- 総得点...大会で行った試合すべてで獲得した得点の合計
- ショートパス本数...全試合で行った短い距離のパスのうち成功した本数の合計
- ロングパス本数...全試合で行った長い距離のパスのうち成功した本数の合計
- 反則回数...全試合において審判から取られた反則回数の合計

チームごとに試合数が異なるので、各項目を1試合あたりの値に変換して、項目間の相関を調べたところ、予選結果（決勝進出または予選敗退）によって次のような興味深い結果が得られた。

「-- 選択肢を編集 --」チームについては、1試合あたりの「-- 選択肢を編集 --」が増えると「1試合あたりの得点が増える傾向が強い。」

W杯データ

チーム	試合数	得点数	ショートパス数	ロングパス数	反則回数	予選結果	1試合あたりの得点	1試合あたりのショートパス数	1試合あたりのロングパス数	1試合あたりの反則回数
イタリア	7	32	2,267	711	31	決勝進出	4.57	322.43	301.67	4.43
フランス	7	9	2,273	553	35	決勝進出	1.29	324.71	79	4.99

25

SPIを用いた試験問題の例です。SPIを用いてデータを分析し、その分析結果を踏まえて選択肢から解答を選択します。

## SPIを用いた試験問題の例

例 次の文章を読み、空欄に入れる最も適切な語句を答えなさい。

大塚さんは、ある年のサッカーワールドカップ大会のデータ（Wカップデータ）を分析した。分析対象となるデータは、各チームについて、以下のとおりである。

- 試合数…大会期間中に行った試合数
- 獲得点…大会で行った試合すべてで獲得した得点の合計
- シュートパス数…全試合で行った射い撃撃のパスのうち成功した本数の合計
- ゴールの本数…全試合で行った射い撃撃のうちゴールした本数の合計
- 反射回数…全試合において審判から受けた反則回数の合計

チームごとに試合数が異なるので、各項目を1試合当たりの値に変換して、項目間の関係を調べたところ、予選結果（決勝進出または予選敗退）によって次のような異変が観察された。

「…試合回数が増える→チームについては、1試合あたりの…」

「…ゴール回数が増える→チームについては、1試合あたりの…」

「…ゴール数が増える→1試合あたりの得点が増える傾向が強い。」

### Wカップデータ

チーム	試合数	獲得点	シュートパス数	ゴールの本数	反射回数	1試合あたりの試合数	1試合あたりの獲得点	1試合あたりのシュートパス数	1試合あたりのゴールの本数	1試合あたりの反射回数
イタリア	7	12	2,287	71	12	1.71	324.43	101.57	1.71	1.71
フランス	7	9	2,273	63	18	1.71	324.43	79	2.57	2.57

散布図

Y軸: 1試合あたりの得点数  
X軸: 1試合あたりの反射回数

データ系列: 予選結果

決定係数: 0.5968 回帰直線:  $y = -0.2504x + 2.2518$   
予選敗退: 決定係数: 0.0469 回帰直線:  $y = 0.0229x + 0.6103$

26

受験者には、試験問題、データ、散布図が表示されます。

## SPIを用いた試験問題の散布図の例

散布図

Y軸: 1試合あたりの得点数  
X軸: 1試合あたりの反射回数

データ系列: 予選結果

決定係数: 0.5968 回帰直線:  $y = -0.2504x + 2.2518$   
予選敗退: 決定係数: 0.0469 回帰直線:  $y = 0.0229x + 0.6103$

27

受験者は、散布図を作成しながら適切な選択肢を選ぶという形式になっています。

### 季節と天気と気温分析問題(PBT)

■ 次のデータシートは、ある都市の3時,9時,15時,21時のそれぞれの気温と天気をまとめたものである。このデータシートとクロス集計結果から分かることを一つ答えよ。

年月日	月	時間	気温(°C)	天気
2016/1/1	01月	03時	5.6	晴れ
2016/1/1	01月	09時	7.2	晴れ
2016/1/1	01月	15時	11.5	晴れ
2016/1/1	01月	21時	7	晴れ
2016/1/2	01月	03時	6.4	晴れ
...	...	...	...	...
2016/12/31	12月	15時	9.4	晴れ
2016/12/31	12月	21時	4.5	晴れ

① 春(3月-5月)は各時刻の平均気温はいつも盛りく晴れの順になっている。  
 ② 夏(6月-8月)は9時の平均気温が15時を上回る月がある。  
 ③ 秋(9月-11月)は曇りの日の方が1日の平均気温が高い。  
 ④ 冬(12月-2月)は雨の日の方が曇り時の平均気温が高い。

さまざまなクロス集計表を提示しなければならない

ここからは、クロス集計についてです。従来のマークシート方式ではさまざまなクロス集計表を表示しなければなりません。

## Pivot Table Interaction (PTI)

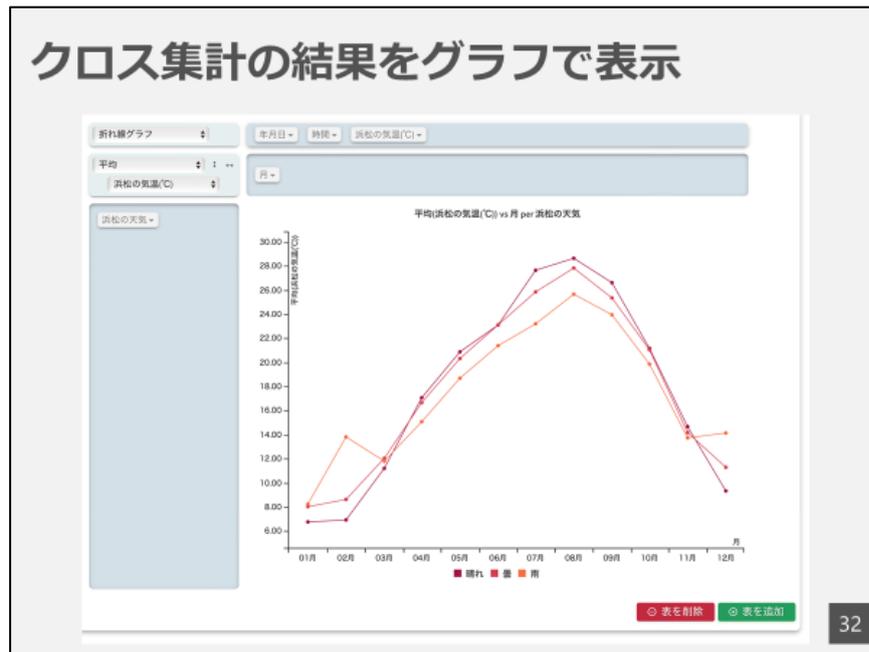
分析対象のデータ

- 受検者がクロス集計の種類を設定
- 受検者がクロス集計の縦軸と横軸を設定
- クロス集計の結果をグラフで表示  
縦軸と横軸を設定

29

PTIでは、受験者がクロス集計の分析軸等を設定し、その集計結果やグラフを踏まえて試験問題に解答できます。なお、集計値には、件数合計、平均最大・最小を設定でき、グラフには表形式やヒートマップ、折れ線グラフ、棒グラフ、積み上げ棒グラフ、積み上げ折れ線グラフを表示できます。





また、クロス集計の結果をグラフで表示することができます。

## 評価実験

**参加者**  
 令和5年度大学入学共通テストモニター調査に参加した  
 大学1年生86名  
 CBT群：42人、紙筆テスト群：44人

**試験問題**

- 出題モジュールを用いた試験問題
- 令和4年度大学入学共通テストの「情報関係基礎」の第3問（プログラミングに関する大問）

調査研究では、モジュールの操作性を評価するために評価実験を実施しました。評価実験は、参加者は令和5年度大学入学共通テストモニター調査に参加した大学1年生102名、2023年1月15日の総合領域と呼ばれるところで統計・情報の時間枠で実施しました。参加者は、欠席者を除き、CBT群は42名、そのうち文系22名、理系20名でした。紙筆テスト群は44名、そのうち文系が21名、理系が23名でした。

テストには、センターのCBTの情報Ⅰの出題に関する調査研究で作成された試験問題を用いています。また、従来の試験問題の形式としてセンターの問題バンク構築に関する調査研究で作成された試験問題の一部、及び令和4年度大学入額共通テストの情報関

係基礎のプログラミングに関する大問を利用しました。

SPI と PTI では、散布図やクロス集計表の縦軸・横軸を受験者が設定し、その結果を踏まえて設問文に解答する出題形式を実現できます。紙筆テスト群では、事前に幾つかの散布図やクロス集計表を提示し、その図表を踏まえて解答する試験問題を参加者に出题しました。なお、紙筆テスト群のテストは、CBT 群と同様な試験問題になるよう作問されています。

実験結果					
問題番号	内容	正答率		I-T相関	
		CBT	P&P	CBT	P&P
第1問	擬似乱数のプログラミング穴埋め問題	0.38	0.30	0.27	0.35
第2問	素因数分解のプログラミング穴埋め問題	0.07	0.09	0.45	0.50
第3問	バブルソート (CBTではCBPを用いた試験問題を出题)	0.24	0.20	0.54	0.52
第4問	シーザー暗号 (CBTではCBPを用いた試験問題を出题)	0.14	0.05	0.64	0.29
	~~~~ (中略) ~~~~				
第7問ア		0.64	0.59	-	-
第7問イ	データ活用問題	0.48	0.80	-	-
第7問ウ	(CBTではSPIとPTIを用いた試験問題を出题)	-	0.55	-	-
第8問		0.14	-	-	-

実験結果には、CBT 群と紙筆テスト群の正答率と I-T 相関係数を示しています。なお、配点は 1 点としています。

第 3 問と第 4 問は、CBT では CBP を用いた試験問題であり、紙筆テスト群と比較して正答率が高いことが分かります。CBP では、プログラムの結果を参加者にフィードバックしています。このため、このフィードバックが試験問題のヒントとなり、正答率が向上したことが予想されます。

一方、プログラミングの穴埋め問題では、CBT と紙筆テストの正答率の差は小さいことが分かります。

データ活用問題については、紙筆テスト群の正答率が高い傾向があります。紙筆テスト群では事前に散布図やクロス集計表が掲載されています。一方、SPI と PTI を用いた試験問題では、散布図やクロス集計表を各自作問する必要があるため正答率が低くなったと考えられます。

I-T 相関性については、CBT を用いた試験問題の値が高いことが示唆されました。このことから、この試験問題は十分な識別力のある項目であるということが示唆されています。

### 実験結果（理系）

問題番号	内容	正答率		I-T相関	
		CBT	P&P	CBT	P&P
第1問	擬似乱数のプログラミング穴埋め問題	0.50	0.43	0.43	0.24
第2問	素因数分解のプログラミング穴埋め問題	0.15	0.17	0.42	0.47
第3問	バブルソート (CBTではCBPを用いた試験問題を出題)	0.50	0.35	0.45	0.52
第4問	シーザー暗号 (CBTではCBPを用いた試験問題を出題)	0.30	0.09	0.62	0.25
	~~~~ (中略) ~~~~				
第7問ア		0.55	0.74	-	-
第7問イ	データ活用問題	0.50	0.91	-	-
第7問ウ	(CBTではSPIとPTIを用いた試験問題を出題)	-	0.70	-	-
第8問		0.15	-	-	-

理系学生の結果についてです。CBT を用いた試験問題は、紙筆テストと比較して文系を含めたものよりも正答率が高く、理系参加者の正答率の差、紙媒体とCBTとの差が大きいです。

### アンケート結果

	P&P	CBT
プログラミング問題の試験問題の 解きやすさ 1. とても解きにくい、2. 解きにくい、3. 普通 4. 解きやすい、5. とても解きやすい	1.27	1.23
上記で「とても解きにくい」「解きにくい」と回答した理由（複数回答）		
1. 問題冊子で解いたから	0.16	-
2. ノートパソコンで解いたから	-	0.75
3. 時間が足りなかったから	0.36	0.28
4. テストのシステムがわかりにくから	0.25	0.40
5. 試験問題が難しいから	0.45	0.45
6. プログラミングの経験がないから	0.48	0.58
7. テストのシステムの操作方法がわからなかったから	0.02	0.23
統計分析の試験問題の解きやすさ 1. とても解きにくい、2. 解きにくい、3. 普通 4. 解きやすい、5. とても解きやすい	2.95	1.85
上記で「とても解きにくい」「解きにくい」と回答した理由（複数回答）		
1. 問題冊子で解いたから	0.05	-
2. ノートパソコンで解いたから	-	0.40
3. 時間が足りなかったから	0.07	0.23
4. テストのシステムがわかりにくから	0.05	0.25
5. 試験問題が難しいから	0.14	0.15
6. プログラミングの経験がないから	0.25	0.38
7. テストのシステムの操作方法がわからなかったから	0.02	0.25

最後にアンケート結果です。本実験の試験問題はCBPと紙筆テストの両方で解きにくいということが分かっています。紙筆テストでは、その解きにくさがプログラミング経験と試験問題の難易差によるものであることが分かります。

しかし、CBTでは、「ノートパソコンで解いたから」が最も回答が多かったです。ここでは小型のノートパソコンを用いて、試験問題の内容を全て画面に表示することができず、しばしば画面をスクロールする必要がありました。また、CBTには、メモ用紙を配布しましたが、設問に直接書き込むことができないという問題もあります。

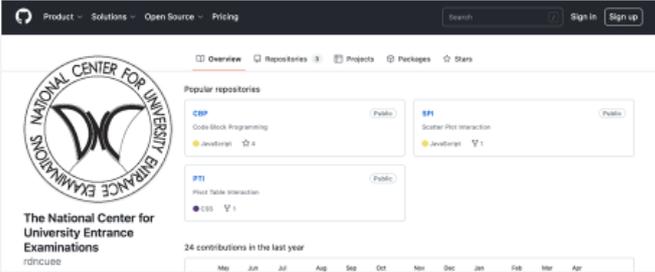
アンケート結果		P&P	CBT
プログラミング問題の 解きやすさ 1. とても解きにくい、 4. 解きやすい、5. とて	<b>改善事項</b> TAOの操作方法やPCIモジュール を用いた試験問題の丁寧な事前説 明		1.23
上記で「とても解きにくい」「解き にくい」と回答した理由 (複数回 答)	4. テストのシステムがわかりにくから 5. 試験問題が難しいから 6. プログラミングの経験がないから 7. テストのシステムの操作方法がわからなかつ たから	0.25 0.45 0.48 0.02	0.75 0.28 <b>0.40</b> 0.45 0.58 <b>0.23</b>
統計分析の試験問題の解きやすさ 1. とても解きにくい、2. 解きにくい、3. 普通 4. 解きやすい、5. とても解きやすい		2.95	1.85
上記で「とても解きにくい」「解きに くい」と回答した理由 (複数回答)	1. 問題冊子で解いたから 2. ノートパソコンで解いたから 3. 時間が足りなかったから 4. テストのシステムがわかりにくから 5. 試験問題が難しいから 6. プログラミングの経験がないから 7. テストのシステムの操作方法がわからな かったから	0.05 - 0.07 0.05 0.14 0.25 0.02	- 0.40 <b>0.23</b> <b>0.25</b> 0.15 0.38 <b>0.25</b>

改善事項としましては、TAO の操作方法で PCI モジュールを用いた試験問題の丁寧な事前説明が必要であると考えています。

**おわりに**

PICモジュールはGithub上で公開  
<https://github.com/rdncuee>

報告書  
<https://www.dnc.ac.jp/research/cbt/index.html>



The screenshot shows the GitHub profile of 'rdncuee' with the 'PIC' repository highlighted. Below it, the report page is visible. The page number '38' is in the bottom right corner.

PCI モジュールは、GitHub 上で公開しており、各自でダウンロードし、自分の手元で実際に試してみることができます。ご興味がある方は実際にこちらからダウンロードしてみてください。■

## 全体会 1（センターセミナー）◎ 報告 6

# 電気通信大学における CBT の取り組み

■ 植野 真臣（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）

電通大の植野と申します。よろしくお願いします。

## 電気通信大学における CBTの取り組み

植野真臣  
電気通信大学

それでは、電通大における CBT の取り組みについてお話しさせていただきます。

### 1. 文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業 （個別大学の入学者選抜等におけるCBTの活用） （2022年度～2024年度）

電気通信大学において「情報」、「数学」、「非認知能力」のアイテムバンク（問題バンク：非公開形式）システムを構築し、CBTを用いて2024年度に学校推薦および総合型選抜の入試を実施する。

また、「物理」「化学」「英語」「読解力」のCBT入試実施についても検討する。さらに、CBT導入に係る課題点（①均質で質の高い受検環境の確保、②トラブルが生じた場合の対応体制の構築、③新しい試験のあり方に対する受検者を含めた社会全体の理解）の解決に向けた小規模試験等におけるCBTの活用についての知見を集積する。

2022年度から文科省の委託事業として CBT による入試を 2024 年度に行いました。事業内容は、情報、数学、非認知能力のアイテムバンクシステムを構築して学校推薦および総合型選抜の入試を実施すること、それから、物理、化学などの他教科についても検討してほしいということでした。特に委託の研究調査として大事なものは、冒頭に寺尾先

生からご解説があったように、均質で質の高い受験環境の確保、トラブルが生じた場合の対応体制の構築、新しい試験のあり方に対する受験者を含めた社会全体の理解であり、この3つに対して調査することがミッションです。

## 2. 電通大のCBT入試の特徴

- ① CBTの実施や運営に関する世界標準(ISO/IEC 2007, JIS X 7221)に従い、項目反応理論(IRT)を用いた問題バンク方式をとる。世界最高精度の測定精度を持つテスト構成技術を持つ最先端人工知能搭載システムを開発する。
- ② 日本で初めて「情報I」を含むCBT入試を 総合型選抜、学校推薦型選抜で、実施し、1. 実際のプログラミング環境でプログラムを編集・実行しながら解答を求める問題、2. データ解析ツールを用いて実際のデータを分析しながら解答を求める問題など、従来の紙による試験や口頭試験だけでは測定ができなかった実践的な力を評価できる大学入試センターのシステムを用いる。
- ③ プログラミング問題やデータ解析問題の 受検者の実行しエラーを表示するなどの試行錯誤の解答プロセスも保存され、自動採点の評価に加味できる。

電通大の CBT の特色を簡単にご紹介しておきます。まず、先ほど宮澤先生からお話があったように、世界標準のシステムに対応すること、CBT の運用に対する世界標準にも対応することがミッションとしてありましたので、これを入れるようにしています。この中で何度か話に出てきました IRT という数理モデルを使わないといけません。それから、情報Iを含むような、先ほどの宮澤先生たちがご発表された PC 対応のものを用いて、実際にプログラミングをしながらデータ解析ツールを用いて問題を解くことができる入試を行います。それからその試行錯誤の解答プロセスを評価し、採点に入れていくということを考えています。

### ①世界標準(ISO/IEC 2007, JIS X 7221)

世界標準に従い、**項目反応理論(IRT)を用いた問題バンク方式**をとる。

問題バンクから 複数の異なる問題よる構成されるテストを構成する場合、すべてのテストの等質性を保証しないといけない。すなわち、同一受検者が異なる版のテストを受検してもほぼ同一得点を返さないといけない。

これら一つずつ見ていきますと、世界標準に従うということはこの項目反応理論、IRTを使うということです。問題バンク方式を採用し、問題のデータベースを使います。このメリットは、西郡先生のご発表でもあったように、複数の異なる問題によって構成されたテストを用いてテストを行っても、全てのテストで等質性が保証される点です。すなわち、違う日に行っても等質なテストを実施することができます。



それから、先ほど宮澤先生たちからご発表のあった、大学入試センターが開発したプログラミング環境のシステムを電通大用に改変しています。どのような改変かといいますと、萩原先生のご発表でもあったように、このプログラムでは、一つのプログラムしか正解にはなりません。しかし複雑な課題を出すといろいろなパターンでプログラムが書けます。そのようなものは全て自動採点できます。それから、最後だけ間違えてしまった、そのような非常に惜しい場合も途中過程を見て部分採点ができる仕組みをつくっています。

**③プログラミング問題やデータ解析問題の受検者の実行エラーを見て修正するなどの試行錯誤の解答プロセスも保存され、自動採点の評価に加味できる。**

それをもう少し拡張しますと、プログラム問題やデータ解析問題において、受験者が修正するプロセスも全部含めて残していけるわけです。それも含めて自動採点し評価できる、そのような仕組みを開発中です。

### なぜIRTを使うのか？

- 条件の等しいコンピュータ数が164個と限られており、それを超える受験者を想定すると複数回異なる問題の試験で受験を実施しないといけない。例えば、本学の学校推薦受験者は全学で160を超える。
- 不測の事態が起こった場合の追試などで異なる問題の試験で受験を行わないといけない。

⇒

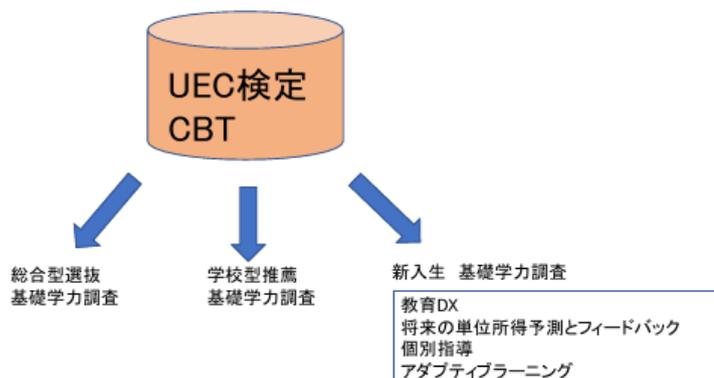
IRTを用いて異なる複数の等質テストを時間を分けて容易に行える。

なぜIRTを使うかといいますと、本学ではIRTを使わないと実施できないためです。タブレットであれば数を揃えられますが、コンピュータの場合、条件の等しいものが本学では現在164個と限られています。それを超える受験者が来た場合複数回に分けてテストを行わなければいけません。

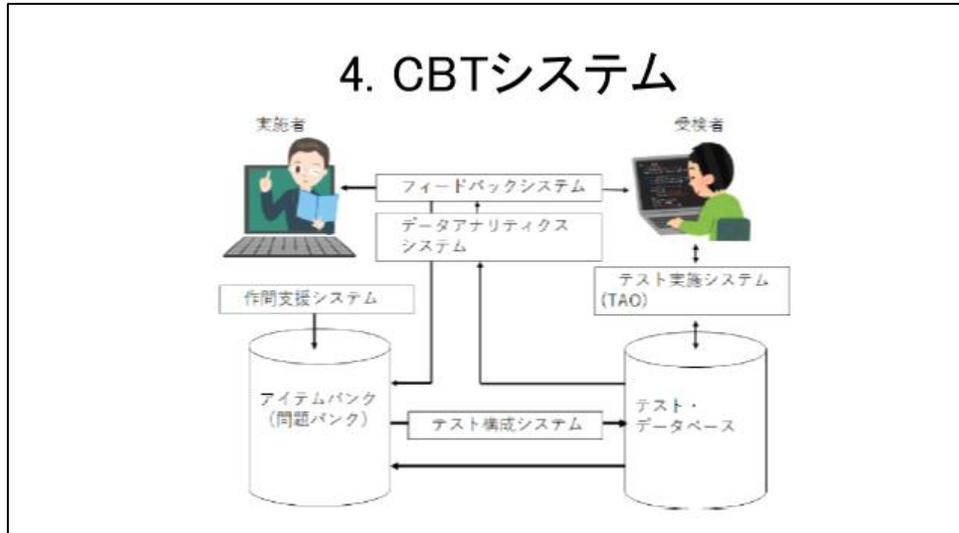
例えば、本学の学校推薦では受験者が160名を超えていますので、その時点で複数回のテストを行わなければいけません。また、不測の事態が起こった場合の追試などのために、異なる問題の試験を準備する必要があります。

なぜコンピュータでやらないといけないのかといいますと、世界標準に従った仕様のソフトウェアによる実行のためには、パーソナルコンピュータを使わなければならないためです。今、われわれが頂いているミッションの中では、このような環境でやらざるを得ないということなのです。

### 3. UEC検定を基本とする枠組み



われわれは UEC 検定という基礎学力調査を開発しました。本学が開発した、一般的な数学検定、英語検定のようなものだと思います。本学の入試にも耐えられるようなものとして行っています。これを入学時や、総合型・学校推薦型選抜時に受けさせることで、基礎学力を見るという使い方をします。英検を入試にも使うとか、そのような感覚だと思っていただければいいと思います。



CBT システムを作っています。アイテムバンクとは問題のデータベースのことで、テスト構成システムができますと、AI を使って自動的に複数の等質のテストを即座につくることができます。実施システムは世界標準のシステムがありますのでそれを使います。それから、データアナリティクスや自動採点のシステムをつくっています。

### アイテムバンクシステム

TAOのみでは管理できない  
項目の属性情報を管理するシステム

TAOと内部的にデータ連携して動作する  
(問題内容の登録・編集はTAOで行う)

現在、このようなアイテムバンクのシステムができています。問題の内容だけではなく、IRT のデータや領域などを設定することができます。ユーザーがこういう領域からも何本ずつ出してくださいとか、誤差がこれぐらいになるようなテストをつくってくださいと指示することで、AI がテストをパラメータから等質になるようにつくってくれる、

そのような仕組みです。

## 5. 作問状況

**情報:**69問(プログラミング問題16問、データサイエンス3問、基礎知識の選択肢問題:50問)  
プログラミング問題はPythonを基準とするが、関数の定義や繰り返し文の引数の書き方などCやJAVAユーザーに不利益のないように解説を問題に組み込むことにした。

**数学:**100問

**物理:**基礎64問、その他70問

**英語:**UEC検定用問題50問(Listening 10問、Reading 40問)、1年次～3年次の学力調査用問題(New Academic Word List):40問、1年次～3年次の学内TOEIC練習兼レベル調査用問題:323問、(Listening:169; Reading 154)

### 3)非認知テスト作成

非認知テストを作成した。問題数は80問(問題解決能力10問、批判的思考力10問、協働能力10問、コミュニケーション力10問、主体性10問、自己管理能力10問、自己肯定感10問、独創力10問)

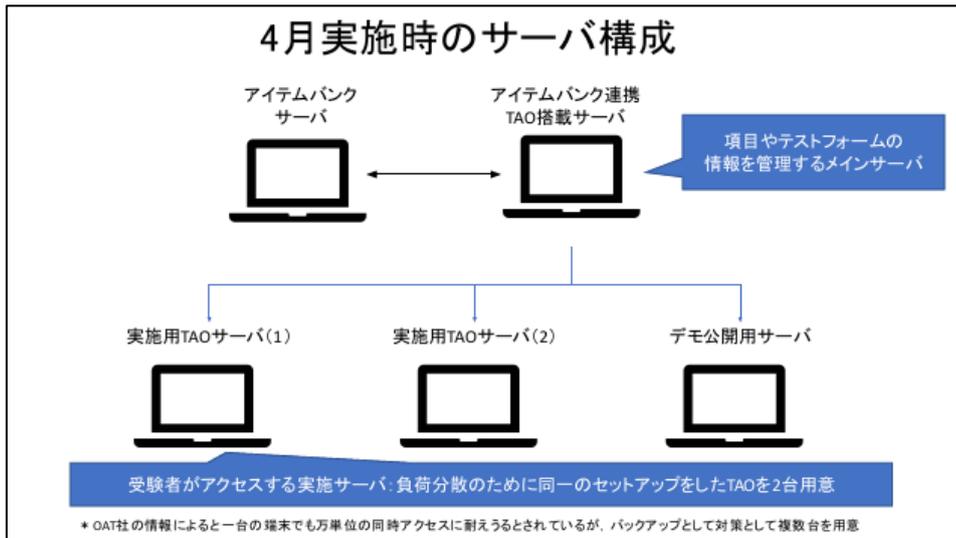
今、事業が始まってまだ半年ぐらいですが、情報では情報部会の先生が頑張ってくれていて、先ほどのプログラムをつくる問題が16問、データサイエンスの問題が3問、それから、基礎知識の選択肢問題が50問できています。プログラミングの問題はPythonを基準にしています。

それから、数学は100問、物理は134問、また、英語はCBTに慣れていらっしゃるみたいで、すでになんかの数ができています。それから、非認知テストは既にできています。問題解決の批判能力やコミュニケーション力を測るテストであり、既に実施しています。

## 6. 4月からの新入生学力調査(UEC検定)でのCBT(約800人弱)実施

- 2部屋 PCは164名 同時使用可能
- 数学90分(30問ほど)、物理80分(30問ほど)、非認知能力テスト10分 英語120分(30問ほど)
- 火、水、金の5、6時限に実施
- 日時ごとに異なるテストを実施
- 各部屋に CBT専門家教員2人、技術支援員3人(計5人)を監督として配置

4月からは新入生を対象に基礎学力調査を行っています。数学、物理、英語と非認知能力テストを大学として行います。これが数年後のCBT入試の練習にもなっています。各部屋にCBTの専門家教員を1人、技術支援員が2人を監督として配置し、計3人体制で実施します。



## サーバ構成の利点と課題

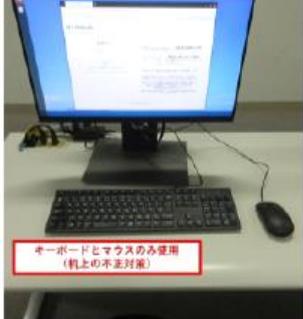
### 利点

負荷分散が可能であり、万が一どちらかの実施用サーバに問題が生じても他のサーバで試験を再開できる

### 欠点

1. それぞれの実施用TAOで収集した回答履歴データを一つのTAOにまとめることができない(理由:TAOの仕様上、回答履歴のExportはできるがImportができないため)
2. サーバトラブルにより、途中で試験が停止してしまった場合、別サーバで開始する場合には最初の項目から回答開始となる

サーバ構成については、TAO という CBT サーバーを 2 台用意しています。安全のために分散して 2 台で行っています。事前の負荷テストにおいて特段問題がなかったため、このような設定にしました。



## ロックダウンシステム

- 大学のコンピュータ教室の使用を前提
- CBT用のロックダウンシステム環境
  - CBT専用の共通アカウントでログイン
  - ブラウザを閉じると自動シャットダウン
  - アプリケーション起動不能
  - ファイル保存不能
  - 試験用サーバ以外との通信不能
- 試験用サーバには各自の大学統合アカウントとパスワードでログイン
  - 試験用コースは時間中のみアクセス可能、それ以外は不可視の設定

それから、ロックダウンシステムです。これは海外のCBTだと必ず使われているものなのですが、いろいろな会社があります。ネットワークは完全に遮断されますし、CBTを行う時に不審な操作をするとすぐ動かなくなるというようなセキュリティシステムを使っています。学生さんは全員違うテストを受けていますので、一人一人にこのような違うCBTのパスワード等が与えられることになります。

## 実施・監督体制

- 座席指定
- 試験時限ごとに異なる設定
  - CBT専用の共通アカウントのパスワード
  - 試験用コースの背景色
  - 試験用リファレンス(PDF)と
  - 計算用紙の色および透かし
- 指示通り受験しているか巡視
  - 通常時と異なる画面の配色
  - 背景色と計算用紙の視認



**受験手順指示(投影)**

1. コンピュータの電源を入れ、画面OSで右側のCentOSを選択し、次のユーザ名とパスワードでログインする。

ユーザ名 **cbt**

パスワード **Uec2120-2023**

(大文字小文字、小文字、数字、記号)

2. ブラウザが起動するので、Module 4自分のUECアカウントとパスワードでログインする。

**受験上の注意(表画)**

**計算用紙(裏画)**

## 実施・監督体制

- 試験監督実施要項を配布
  - 入学試験と同様に発言内容、行動、注意事項を記載
- 監督1名および監督補助者2名の業務
  - 試験室は82席(70名程度受験)
  - 巡視
  - 計算用紙の配布と回収
  - 遅刻者、質問、お手洗い中座への対応

**試験監督実施要項**

項目	内容	注意
入室	入室時、試験監督が入室許可を叫ぶまで入室してはならない。	入室許可を待たずに入室すると、入室許可を待たずに入室した受験生は入室禁止となる。
試験開始	試験監督が入室許可を叫ぶまで入室してはならない。	入室許可を待たずに入室すると、入室許可を待たずに入室した受験生は入室禁止となる。
試験終了	試験監督が入室許可を叫ぶまで入室してはならない。	入室許可を待たずに入室すると、入室許可を待たずに入室した受験生は入室禁止となる。

このような試験監督実施要項も作成していただきまして、これに従ってやってあげれば実施できるということです。

## のぞき見防止フィルタの効果



受験者ごとに問題は異なりますが、念のためフィルターを付けて横が見えないようにしています。斜めから見ると真っ黒に見えますが、正面から見るときちんと見えています。これは実験していた時のものです。

## トラブルが生じた場合の対応体制

- 試験監督者とは別に、実施支援者が1名在室
  - コンピュータの操作、およびトラブル対応手順を熟知
  - 全体の進行に影響しないよう、個別に対応
- あらかじめ予備のコンピュータ数台を立ち上げ
  - 試験中にコンピュータの応答がない場合はただちに挙手
  - コンピュータ教室は満員とせず9割まで、必ず予備の座席を用意する

それから、試験監督者及び監督補助者のほかに実施支援者を1名配置し、トラブル対応をお願いしています。また、予備のコンピュータが1割あり、トラブル時にはそちらに移ってもらいます。

## トラブルが生じた場合の 対応体制の構築

- 予備コンピュータへ移動
- もしサーバ停止の場合(これまでの事故は無し)
  - 全体の試験終了時刻の繰り下げ
  - 再試験のための予備日をあらかじめ確保

今回はありませんでしたが、もしもサーバが停止した場合は試験日を変えて実施することになります。

## 6.2. CBT数学実施の結果

- 実施日 4/11(火)~4/28(金) 試験時間90分 問題数30問
- 対象者 703名 (12クラス+予備1クラス)
- 参加者 650名 (対象者の92.5%)
- 機器トラブル数(実施時移動)合計人数 14名(参加者の2.2%)
  - 開始前のネットワークトラブルのみ(CBTシステムの不具合はなし)
- 1クラスにつき最大6名, 8クラスでは移動者なし
  - [0,0,0,0,0,0,0,0,1,1,2,4,6]

4月から始め、今も実施しているところですが、数学は完全に終わりました。対象は703名、そのうち受けていただいたのが650名です。約50名は欠席しました。650名中14名が席を移動しました。ただ、これは開始前のネットワークトラブルがあったようで、CBTシステムが悪いとか故障があったということではありませんでした。

問題の平均正答率は0.7、標準偏差が0.2です。平均所要時間3分程度の問題が出て、標準偏差が104ですので1分から5分ぐらいの問題が出ています。90分で30問です。大体、平均時間は3分ですのでうまくいっていると思います。

初期値はアイテムバンクにデータがありませんので、専門家がこれぐらいの問題でこのようなものだろうと大体の推定値を決めてテストを作成しています。横軸が点数で、縦軸が誤差です。軌道に乗ってきて良いアイテムバンクになると2点以下の誤差になります。

他の値から大きく外れている人が点在していますが、すごく誤差が大きいので、6~7点ほど実力より高く又は低く出てしまいます。アイテムバンクの利用を重ねていくうちに、このような誤差が段々となくなってきた、この幅も一致していきはらずです。今までの経験では、問題数が増えてデータ数が増えてきますとそのようになってまいります。

今、初期状態ですので良いほうだと思っています。これは大体、誤差が3点程度です。実施状況として毎日150名程度が受けていただいたということです。

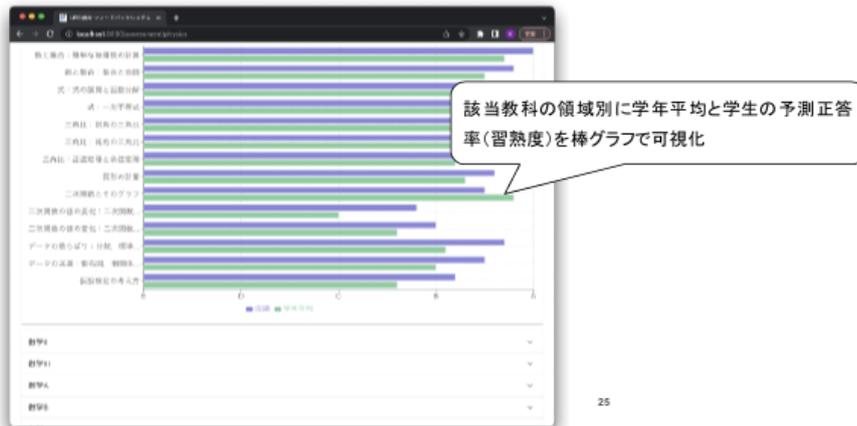


問題が非公開であることと、データの使用についての同意書を取ります。それを承諾した人だけがテストを受けます。実際のテストはこのような形でほぼ単答式、半角で入れていく問題が多いです。非認知だけはアンケート的な感じのものになります。

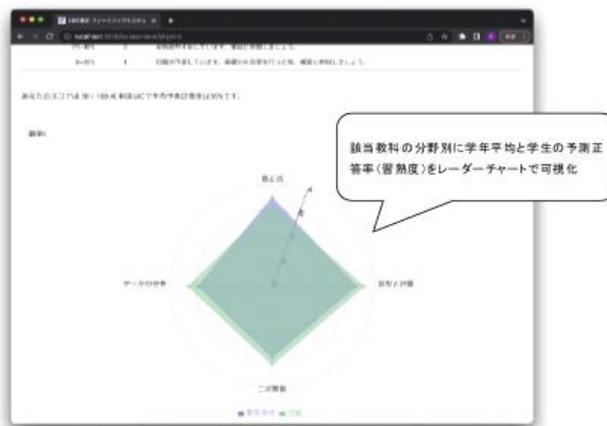
### 6.3. フィードバック画面

フィードバックは各教科ごとに図2のスコアと習熟度(予測正答率)、各分野ごとの習熟度(予測正答率)、各領域ごとの習熟度(予測正答率)をフィードバックする。

## 領域別フィードバック



## 分野別フィードバック



## 非認知能力調査のフィードバック



学生さんへのフィードバックですが、これが項目反応理論での能力値の分布です。全30問のうちどの分野ができていないか、またその人がその問題を解いていたらどれぐらいできるかをAIが予測していきます。これは Knowledge Tracing という AI 技術です。9割程度の精度で予測できます。どの分野がどれぐらい正答できるのか、平均と比べてどうかを出していきます。さらにこれを詳しく各教科の領域ごとに出すことで、苦手な領域や、平均よりできていない領域が分かります。

将来的にはこれと単位や授業を紐付けて、この授業を取るためにはこれぐらい解いてほしいということをフィードバックに書くことができます。それも入試にも関係してきます。本学の授業についていけるのかを予測できるということになります。

## 7. アンケート分析

27

1. CBTを受検することに抵抗感はありましたか？  
¼の受検者が抵抗感あり（CBTに慣れていないことが理由）
2. CBTを受験した、不具合がありましたか？  
画面がスリープ状態になることにより、ログインしなければならなくなる事、ロードや画面遷移に時間がかかること  
（1/10 程度の受検者）

アンケートはあまり詳しくは出せませんが、「CBTを受験することに抵抗はありましたか」について、全学生に聞きました。「全くなかった」という回答がかなり多かったですが、「かなりあった」という回答も一部ありました。「不具合がありましたか」という質問については、「あった」という回答が少し見られました。

自由記述部分における不具合の内容を ChatGPT でまとめたものです。授業の途中であ

り、スリープになる仕組みがまだ残ったままで、15分ごとログインしなければならず、それが面倒だということです。それから、たまに押してから反応が遅いという指摘もされています。

### 総合型選抜、学校推薦型選抜合格者へのアンケートの実施

1. 本学合格者にCBT実施に関するアンケートを実施した。
2. 対象者は60名（内訳：総合型選抜11名、学校推薦型選抜49名）であり、
3. ほとんどの受検者がCBT入試に対して好意的であった。

この試験は総合型選抜と学校推薦型選抜だけで用いるつもりです。その人たちだけへのアンケートをお見せしますと「大学入試においてCBTを進めてよいか」では90%以上が「進めてよい」、「自分はCBT入試を受けてもよいか」では少し減って73%でした。これは物理系や機械系の学生も入っているのですが、情報系の学生に絞りますとご本人たちは情報処理資格試験などを受けていられますので、90%以上がポジティブな反応を取っていました。

## 8. まとめ

- 700人余りの受検者にIRTを用いたテスト（異なる項目から構成される等質のテスト）によるCBT受検を1カ月で行い、大きな問題なく実施できることを示した。
- 大人数の受検者に不測の事態も考慮し、安全にCBTを実施するためには、少なくとも本学では世界標準で提示されているIRTによるテストの準備は必須である。
- アンケートから一般選抜の学生にはCBTに抵抗感はある。
- 総合型選抜、学校推薦で入学する学生にとってCBT入試に抵抗感は少ない。

今回、700人余りの受検者にIRTでのCBTを実施しました。IRTを使わないと、追試等の不測の事態への対応ができず、安心感がないことが分かりました。そしてアンケート結果から、一般学生はCBTに抵抗があることが分かりました。先ほどのとおり、単位等との関係も見ていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。■

## 全体会1（センターセミナー）◎ 全体討論

# CBT (Computer Based Testing) における大学等 機関の有機的な連携に向けて

■西郡 大（佐賀大学アドミッションセンター長）/播磨 良輔（九州工業大学情報基盤課長）/堀越 健一郎（大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長）/萩原 兼一（大阪大学 名誉教授／大学院情報科学研究科招へい教授）/宮澤 芳光（大学入試センター研究開発部准教授）/  
水野 修治（大学入試センター試験問題調査官）/植野 真臣（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）/寺尾 尚大（大学入試センター研究開発部准教授■司会）

---

【寺尾・司会】 それでは、総合討論を始めたいと思います。まずは、いくつかご質問をいただいています。「Zoom のフォーカスモードについて具体的にはどのようなものでしょうか」というご質問です。堀越さん、お願いできますでしょうか。

【堀越】 フォーカスモードというのは、ホストや共同ホストからは参加者の顔が見られるが、参加者同士は見られないという機能です。これはアカウント設定時にフォーカスモードを有効にしておいて、ミーティング開始時に設定で「フォーカスモードを開始する」とすれば簡単にできる機能となっています。

【寺尾・司会】 どうもありがとうございます。これは事前知識としてお伺いしておきたいのですが、開発費あるいは導入費用について、はっきりとお答えいただけるものを冒頭に頂きたいと思うのですが、西郡先生、いかがでしょうか。

【西郡】 やはり何も無いところからはかなり開発にかかりましたが、そこは文科省からの、国立大学でいうと第3期の中期目標計画の時に支援していただいた財源でやりました。結構かかります。

【寺尾・司会】 ありがとうございます。播磨課長はいかがでしょう。

【播磨】 総合型選抜を新たに導入するというので、ある程度お金がかかることは承知

して学内予算申請をして今やっているところです。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。QTIとTAOのところに補足説明が必要かなと思いましたので、私から一言申し上げたいと思います。

QTIは宮澤先生、植野先生のご発表で出てきましたが、試験問題とテストの書き方に関する文法あるいは相互運用できるようにするための決まり事のことです。TAOは、Open Assessment Technologies社がつくっているオープンソースの、無料でどなたでもダウンロードできるCBTのプラットフォームです。QTIの書き方で試験問題を書くと、TAOでももちろんそうですし、TAOではないQTI準拠のシステムにおいても同様の表示形式あるいは解答データの蓄積の仕方で相互運用できるということが大きなメリットであると。これは一言添えておきたいと思います。

では、総合討論へ移りたいと思います。進め方としては、まず第1グループを深める質問、次に第2グループを深める質問、最後にグループ間での論点ということで、大学間連携に向けて必要なものは何だろうかというところへ行きたいと思います。

ご登壇者の先生方のご発表を聞いていただいても分かるとおりに、CBTと一口に言っても大変多様なCBTの姿があるということはよくご理解いただけたのではないかなと思います。入試業務を支えるCBTもありますし、採点の即時性、あるいは、入試課の皆さんや入試に関わる教員の先生方の効率性というところもあります。より出題や測定できる能力にフォーカスしたCBTもあるでしょう。また電通大の例で言えば、初年次教育での必要なスキルセットあるいは資質・能力というところから入試を考えていくという発想もあります。大変多様で、登壇者間でも意見が違ってくることもあることと思います。

まず、第1グループに問いかけたいこととして私が用意したことは、九工大と佐賀大とセンターの間で有機的な連携が既にできている状況だと見受けられました。互いの取り組みをどのように見ているのか気になるなと思っています。

例えば、西郡先生は九工大の取り組みをどのようにご覧になっているか、あるいは、佐賀大、九工大からご覧になってセンターの試行調査の実施方法はどのようにご覧になったか、お伺いできますでしょうか。まず西郡先生からお願いします。

**【西郡】** 九工大さんとは以前から、CBTに限らず共に試行錯誤しながらやってきていますので、ある意味同志のような感じです。九工大さんで検討された、試験終了後にデータを一気に吸い上げる機能など、新しい機能については、同じ基盤を使っているため、すぐに取り入れることができます。佐賀大学・九工大で出たアイデアをうまく共有して自分のところで使えるものはどんどん使っていきたいと思っています。

センターとのやりとりに関しましては、九工大さんからいろいろとコロナ時の運用については聞いていたのですが、かなり大変だっただろうなという印象を持っていましたので、ちょっとここには手を出せないなというところが私の個人的な印象としてはありました。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。播磨課長はいかがでしょうか。佐賀大の取り組みあるいはセンターの試行調査の実施方法をご覧になっていかがでしょうか。

**【播磨】** 佐賀大学さんとは、今、西郡先生がおっしゃったようにかなりいろいろと連携はしていますので、お互いに良いところを取り合っってより良いものをつくっていただければいいなと思っています。

センターの試行調査は、本学もオンラインでやりましたので非常に大変だったろうなと思っています。実際にコロナ対応で行いましたが、やはり緊急的なものでしたので、それを恒常的にやるにはハードルがまだまだ残っているなというのが正直な感想です。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。佐賀大と九工大の連携でメリットになっている部分もたくさんあるということですね。やはり一大学ではなかなか難しいことも、連携すればいろいろなアイデアが出てきたり、あるいはリソースをシェアできたりするということですかね。ありがとうございます。

堀越さんから、例えば九工大の取り組み、あるいは佐賀大の取り組みを聞かれて参考になった点は、ご発表の中でおっしゃっていたと思いますが、改めていかがでしょうか。

**【堀越】** 九工大さんからはいろいろと資料を頂き、参考にさせていただく中で、スライドでも示したのですが、やはりオンライン独特の実施方法の仕方は、やはり対面にはないいろいろな難しさがあるなとすごく感じました。

特に佐賀大学の西郡先生のご発表にもあったとおり、問題訂正があった時や、あとは、試験時間延長があった時など、対面でもなかなか難しい対応を強いられる中で、CBTでもそれをやっていくというところは非常に難しいだろうなと。いろいろな課題があるなと感じていました。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。佐賀大と九工大にお伺いしたいのは、何カ年か運用されていくつもの課題も乗り越えてきた中で、今もなお課題になっていることは何だろうかということです。播磨課長のご発表で、入試課の職員の方で手分けして事前準備に臨まれているというお話があり、佐賀大でもそういった体制を組まれていて、佐賀大の場合は解答データの吸い上げも、現状、手作業だということだと思うのですが、いま課題になっていることがあれば、差し支えない範囲で率直にシェアしていただければと思います。いかがでしょうか。

**【西郡】** 課題としては2点あります。まずは試験問題をしっかりと管理してそれをブラッシュアップしていく。例えば、学習指導要領が変わったらまた問題設定を更新しなければいけないとか、そういったところを考えなければいけないというところが1つ。ず

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

っと考えなければいけない課題です。

学部教員の負担は恐らく軽くなっているはずですが、アドミッションセンターや入試課の職員など、問題を管理する側の負担が過重になっている点もう1つの課題としてあります。単独の大学でのやり方だけではなく、大学間で分散して効率化できる仕組みがあるといいのかなと感じています。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。播磨課長、いかがでしょうか。

**【播磨】** 本学でも同じような課題があります。あともう1点言うとしたら、機器の管理と維持です。機械には耐用年数がありますので、ある時期では入れ替えないといけません。使わなくても定期的な管理・保守が必要であり、手間が少しかかっています。これをどこまで自動化できるのかというのは今検討中です。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。ご質問の中にもバッテリー等の経年変化があるものもたくさんある中で「五月雨的に交換が発生する」「長期運用に不安を感じる」というご質問もあるのですが、やはりそういうところが現状も課題ですし、管理という面でも課題があるということでしょうか。

**【播磨】** そうですね。あとはOSのサポート問題があります。今の使用頻度であれば、バッテリーよりもOSのサポートが切れる可能性を考えています。タブレットの機能としてはそこまでOSが新しくならなくてもいいのですが、OSがアップデートされますので、それについていけないといけないということが問題ではあります。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。これも多様な考え方があるかなと思っています。OSをどこかのバージョンで固定しておくということもできるでしょうし、最新のものにキャッチアップしていくということもあるのかなと感じました。

続いて第2グループへ行きたいと思います。第2グループの大きなテーマは、情報という題材と国際技術標準だと思のですが、例えば、センターで新しくTAOに載せることのできる出題モジュールをつくったわけですが、新たな出題モジュール、それは情報に絞ってもいいですし、情報以外の他教科への派生というところも考えてもいいのかもしれない。

萩原先生にお伺いしたいのは、例えば、情報の先生方でこういったPCIモジュールがもっと欲しい、いろいろな種類が欲しいと思った時に開発の可能性にどれほどの魅力があるものなのかということです。

**【萩原】** 開発の可能性というのは。できるのはできますが。必ずしもご関心はなくても各大学がやりたいことができればよいので、必ずしもご関心があるとか国際標準でなければならないということはないかなと。

【寺尾・司会】 なるほど。

【萩原】 先ほども質問をしたかったのですが、佐賀大さんと九工大さんがこの TAO に移管するような気はお持ちですかと。それは大変だなと勝手に思っているのですが、そういう点はいかがでしょう。

【寺尾・司会】 ありがとうございます。西郡先生、播磨課長、いかがでしょう。

【西郡】 やはりそこはどれだけ試験問題を利用できるかとか、あとは、オンライン環境で実施できるかどうか、そこら辺を考慮して実装できそうだったら検討に進めるかなとは思っています。

【播磨】 令和3年度のオンラインで、CBTはTAOを使いましたので、一応、TAOを使った経験はあるのですが、インフラなどの受験環境について、どのように確実なものを準備できるのかという目途が立てば、そういうことも考えられるかなとは思っています。

【寺尾・司会】 ありがとうございます。端末もそうですし、インターネット環境をどのように接続するか、速さや帯域はということもやはり問題にはなってくるということなのでしょう。

他教科への派生という点で、他教科にどのようにこの PCI モジュールの開発が派生できそうか、ご意見をお伺いできますでしょうか。

【水野】 情報を担当する試験問題調査官の水野と申します。「情報Ⅰ」の CBT ならではの問題ということで今回ご紹介した三つの PCI のモジュールを開発したわけですが、恐らくそれぞれの教科・科目において、その特性に応じた CBT ならではの問題形式があるのではないかなと思います。

これまでの大学入試では、CBT を利用した試験はあまりなされていませんでしたので、今後は、CBT を利用した問題形式などの知見が大学間で共有されていくことで、ますます CBT の活用が広がるのではないかなと思います。

新しい学習指導要領のもとでは主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善が図られ、学校での学びも大きく変わってきています。また、GIGA 端末も整備され、授業では当たり前のようにパソコンやタブレットを使うようになってきているわけですから、そういう授業で学んだ生徒の資質・能力を測る試験もこれからどんどんと変わってくるのではないかなと思います。学校でどのような授業が実践されているかを注意深く見ていき、それぞれの教科・科目の特性に応じた CBT の問題形式を考えていく必要があると思います。

【寺尾】 どうもありがとうございます。

【萩原】 どのように流用できるかというのは、例えば、今は PCI ではありませんが、シミュレーションの PCI のようなものができたとして、シミュレーションというのはいわゆる理科、それから社会学で実際によく使われるものです。ですから、物理とか化学とか生物とか、それから、社会は分かりませんが、そういう分野でそのようなシミュレーションを使った出題をされるかもしれません。

【寺尾・司会】 ありがとうございます。社会科学でも、例えば、経済学とかにおいては投資シミュレーションなどもあり得るとは思います。

植野先生にお伺いしたいのは TAO の利用可能性についてです。国際技術標準に準拠しているため、試験問題の流通や共有、蓄積というところには大きな利点があると思います。大学同士を巻き込んだ場合の TAO の利用可能性について、TAO というよりは国際技術標準準拠のプラットフォームということだと思うのですが、その辺りのご意見を頂きますでしょうか。

【植野】 私は以前から世界標準に従うべきであると思っています。文科省が関わる入試ではないところでは、もう既に世界標準のプラットフォームを用いて試験が実施されています。ハイステークスではないテストかもしれませんが、データの数もかなり増えてきています。実はそのようなデータも活用の可能性がありますし、ありとあらゆるところに世界標準の形式で問題が存在していて、これを集めてくるとそれなりの財産になります。使うのにお金もそこまでかかりませんし、他業者を雇わなくてはいけないとかそのようなこともありませんでした。リーズナブルですし、良いところは多いのではないかなと考えています。

ただ、コンピュータがある部屋が必要です。コンピュータの数が足らなくなるので、アイテムバンク方式を採らないと困ってしまうことがあるかもしれません。その辺は全体でアイテムバンクをつくっていけばそういう心配はなくなるのかなと思っています。

【寺尾・司会】 ありがとうございます。ちなみに、電通大で BYOD、受験生が自分で端末を持ち込んで制御された状況にした上での試験実施については今のところは考えておられますか。その写真を見る限りにはコンピュータールームのようにお見受けしました。

【植野】 文部科学省の委託事業では完全に公平な環境をつくるという条件がありましたので、そのために CBT のルームが必要だということでコンピュータールームを残しています。

【寺尾・司会】 分かりました。受験者の端末の多様性というよりは、公平性のためにある程度、統制されたコンピュータールームを残したということですね。大学においてはコ

コンピュータールームをなくしていくという動向もありますので、なかなか世知辛い状況だと思います。

例えば、大学間でアイテムバンクを何かシェアするとか、あるいは、試験問題のファイルを共有したり、受験生には見せない上で関係者だけで流通させたりするということはある展開の一つかなと思います。例えば、電通大では作題も TAO のオーサリングシステム、作題に使えるシステムを使って TAO 上でやられているということなのか、そこはちょっとまた別口なのか、いかがでしょうか。

**【植野】** TAO のオーサリングシステムを使っています。普段あまり使わない形式の作題でも大抵フリーで開発されてオープンソースで公開されていることが多いので、インターネットで調べると見つけてこれられるという良さもありますね。すごく流通していますので。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。やはり作題というトピックでは作題者の負担がとても大事な観点だと思います。電通大では作題の先生がかなり充実されているようにお見受けしましたが、特にその作題の先生からのアイテムバンクを開発する中での意見、あるいは課題だというご指摘などがあれば幾つかご紹介いただきたいのですが、いかがでしょうか。

**【植野】** 作題の先生にはボランティアでやっていただいている、本当に頭が下がる思いです。ただ、皆さんがご興味を持っていらして、特に情報では、コンピュータサイエンスが専門の業績のある先生方が、自分たちの分野でこういう問題を出さなければいけないという強い思いがあり、モチベーションをもって一生懸命やってくださっています。その意味では今のところはすごく良いのですが、やはり作問は、僕自身も作問しているのですが、かなり負担になっています。また、作問の後の問題チェックがわれわれの負担になってきているのは事実です。この辺をもう少し電通大以外の先生方と分担したり、共有したりしていくことができるのかなり楽になるのではないかなと思っています。

あとは、試験中に問題の間違いが発覚した時に、その場で紙のテストのように「問題を間違えていましたのでこのように直してください」とやられると言われていましたが、われわれの大学はそれを諦めてしまっています。もし間違いがあった時、発覚した時は、そこは採点に入りませんということでその場では対応をしないようにしています。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。そういったところもやはり紙のテストとは少し違った考え方だが、納得していただけるロジックをつくらなければいけないということかなと拝聴しました。

**【植野】** 問題数を増やしておけば、1問ぐらいなくしても全体で信頼性がカバーできると

という考え方です。

**【寺尾・司会】** なるほど。ありがとうございます。まとめに入っていきたいと思います。

今回の全体会1のタイトル「大学等間連携に向けて」。もちろん大学入試センターも重要なエージェントの一人だと思いますが、複数の大学が力を合わせて解決できそうなものは何かがやはり気になるところです。現状では、大学はそれぞれ総合型選抜や学校推薦型選抜のアドミッション・ポリシーに沿って選抜方法を考えておられるということで、単独でやられていると。佐賀大や九工大のように連携しましょうと手を結んだところもあるのだと思うのですが、たくさんの大学が集まった時のパワーがどういうものなのかというところをご意見をお伺いしておきたいです。

西郡先生のご発表の中ではノウハウの共有等も重要な財産だというご意見が最後のほうにありました。その辺りはいかがでしょうか。

**【西郡】** やはり複数の大学が集まることで、負担の分散というメリットももちろんありますが、いろいろなアイデアが出てきて発展につながるということが非常に重要だと考えています。

関心を持つ大学がどの程度ありそうかということにも関わるのかもしれませんが、関心は持っていても、CBTのメリットは何なのだというところが、多くの大学が一番感じるところです。CBTを導入するメリットが共有できない限りなかなか進まないのかなと思います。複数の大学が力を合わせてアイデアを共有することで、メリットについて具体的なものが出てくるとまた違うのかもしれない。

今は私自身に具体的なアイデアはありませんが、少なくとも大学間で連携して、例えば試験問題などを共有して、それぞれ個別の大学が問題を作成する負担を分担して、全体でみればコスト減といったところに行き着けばいいのかなと思っています。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。この発表の中でも多様に幾つかのメリットが出てきたと思いますが、それぞれの大学にメリットだと思われるところが一つでも引っかければよいなと思う次第でして、別のいろいろなやり方のCBTがあると思いますので、必要なものを探って関心を持っていただきたいと思います。

萩原先生は入試に直接携わられているというお立場ではないかもしれませんが、複数の大学の連携に関して力を合わせられそうなところというのはどのような点だとお考えでしょうか。

**【萩原】** 個人の意見を申し上げますが、IRTのようにある程度レベルを評価することにしたいのであれば、問題をたくさんシェアしていくことができると思いますが、大学のいわゆる個別入試で、自分の行っていた大阪大学で考えると、問題をシェアすることはおおよそ考えられません。しかし、問題のシェアは難しくてもシステムとかノウハウは当然シェアできると思っています。シェアしたほうが、皆さん、ありがたいと思いま

す。ただ、IRTのような問題のシェアをよしとするところもあれば、試験問題は難しいというところもあると思っています。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。試験問題とは誰のものかというところで、各大学の独自性の部分だと考えるのであれば、やはりシェアはできないですね。ただ、みんなに使ってもらっても構わないというのであれば、みんなでシェアして、他の大学のものも入れて、自分の大学のところも提供してというところで、そこはやはり合意というところと試験問題に対する所有権の考え方なのかなという気はしています。PBTとは全く違った考え方でいくのか、同じ考え方でいくのか、そこも分水嶺なのだろうなとは思っています。

**【萩原】** システムなどはきっとシェアしたほうがいいと思います。各教科で必要な機能が違うと思うので、それをまずリストアップして見比べてみると。中心になるところはシェアできるところがきっとありますので、例えば、セキュリティの問題をどうしようかとか、採点のセキュリティをどのようにキープしておこうとか、そういうやり方の部分はシェアできますし、できたらありがたいなと。いい方法が出てきたら。

**【寺尾・司会】** ありがとうございます。現状、大学入試の関係者の間でもほとんどと言っていいほど流通されていないと思いますので、秘密にしたい部分もあるでしょうし、共有できる部分は積極的に共有して他のアイデアも取り入れてということなのだろうなと。

デジタル庁には協調領域と競争領域という考え方がありますが、大学間で協調・協力すべきものは協力するし、入学者の獲得という点では各大学はライバル同士ですので競争領域というところもあると思います。そこはやはりCBTにおいても明確に考えていけないだろうなと先生方のお話を聞いていて思いました。

議論が足りないというのが私の正直な印象ですが、お時間が参りました。たくさんのご質問をお寄せいただきありがとうございました。

入試関係者の方々の中には、このトピックは初めてという方もいらっしゃると思いますが、CBTにご関心を持つきっかけが一つでもあればいいと思いますし、うちの大学でもCBTをやってみようかな、あるいは興味があるなと思っていただければ大変幸いです。長期的には大学等間の連携というところを模索していければと思いますし、センターもそのお手伝いができたらなと願っています。

登壇者の先生方、本日はありがとうございました。いろいろなお話をお伺いできてよかったです。大変充実した会になったかと思っています。どうもありがとうございました。

**【一同】** ありがとうございました。■



## 「国際入試の現状と展望」

司 会： 池田 文人（北海道大学教授）・岩間 徳兼（北海道大学准教授）

報 告 ①	APUにおける国際入試～留学生リクルート事情とポスト・コロナの日本留学～	.....	<b>106</b>
	大嶋 名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）		
報 告 ②	公立大学における国際入試への取り組み	.....	<b>124</b>
	中島 範行（富山県立大学教授）		
報 告 ③	北海道大学における国際入試の改革と今後の展望	.....	<b>136</b>
	飯田 直弘（北海道大学高等教育推進機構准教授）		
報 告 ④	IB校である札幌開成中等教育学校のキャリア教育はなぜ大きな挑戦なのか？	.....	<b>155</b>
	西村 里史（市立札幌開成中等教育学校副校長）		
全体討論	.....		<b>170</b>

---

### 内 容：

大学進学率の向上により大学の大量化が進む一方で、急激な少子化の影響で定員割れを起こす大学も出てきている。また、政府は大学のグローバル化を進め、研究・教育における国際競争力の強化を推進する一方で、国際バカロレア（IB）の教育プログラムを導入する高校を増やそうとしている。このような状況の中で、日本の教育の国際的通用性を確保するために、海外の優秀な留学生や帰国子女、IBのディプロマプログラムの修了者に対して適切な選抜を行うことが重要となる。

そこで本全体会では、国公私立大学のそれぞれの立場において、国際入試を中心とした国際化への取り組みと展望について話題提供するとともに、高校の側からIB校における国際入試への対応の現状と課題について話題提供する。国際入試の対象としては、留学生のみならず、帰国子女や、国内のIB等の国際的な教育の修了者なども含む。

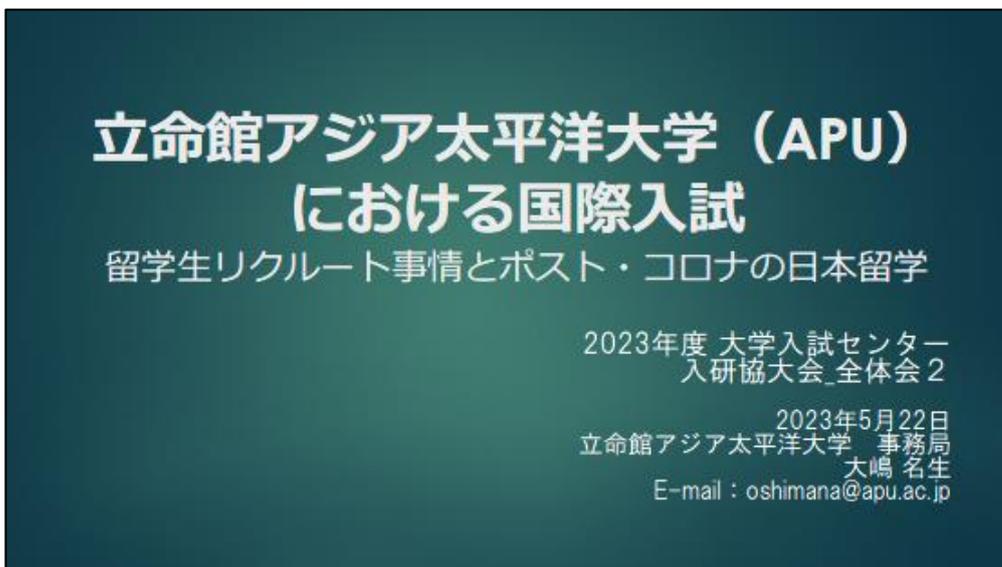
話題提供の後、参加者からの質問に基づき、話題提供者を交えてパネルディスカッションを行い、国際入試の現状について理解を深めるとともに、今後の国際入試に関する各大学の取り組みの課題とその解決策について議論する。

## 全体会 2 ○ 報告 1

# APU における国際入試～留学生リクルート事情 とポスト・コロナの日本留学～

■大嶋 名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）

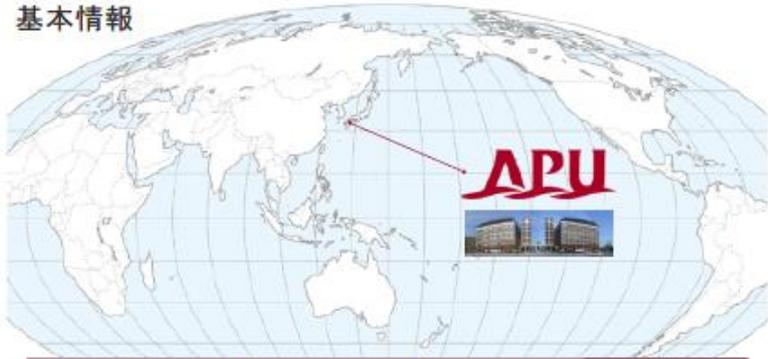
大嶋です、おはようございます。今日はよろしく申し上げます。



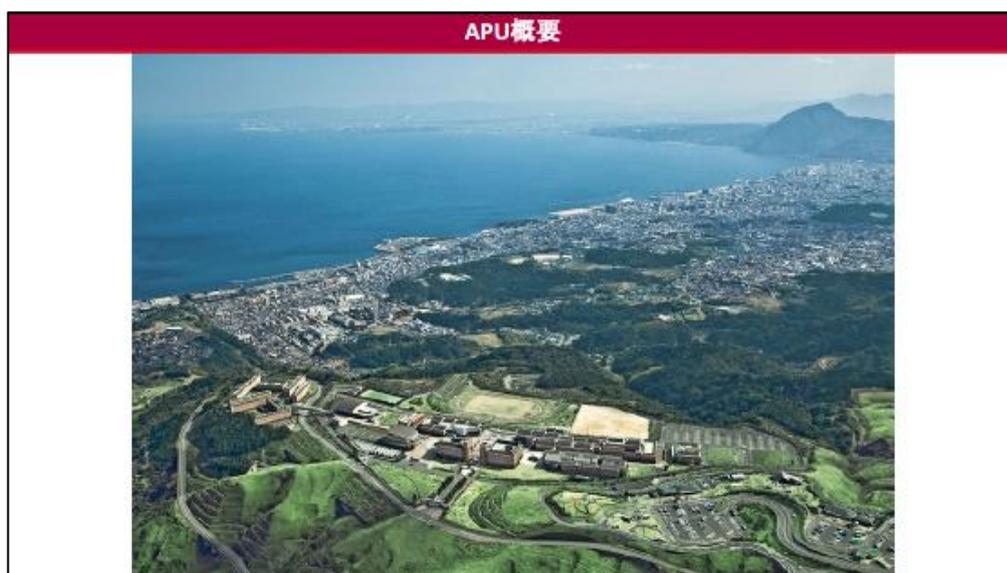
本日私は、大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学（APU）キャンパスから参加しています。

**APU概要**

**基本情報**



●大学名	立命館アジア太平洋大学 Ritsumeikan Asia Pacific University	●学生数	5,643名 (大学院生、非正規生含む)
●所在地	〒874-8577 大分県別府市十文字庫1-1	●教員数	175名(専任教員のみ)
●開学	2000年4月	●職員数	226名
●設置者	学校法人 立命館 ※大分県、別府市との公私協力による	●卒業生	※2022年5月1日現在 出口 澄明(ライフネット生命保険 創業者)



立命館アジア太平洋大学（APU）は、大分県別府市にあります。大分県と別府市からの多大な支援を得て、「公設民営型大学」として 2000 年に開学しました。この写真は今のキャンパスで、別府湾を臨む高台にあります。



コロナ禍のために、学生募集に苦労された大学は多いと思います。とりわけ留学生入試ですね。APU では、開学時から、全学生の半数が留学生で構成される大学を志向しています。そのため、学生の半数が海外からの留学生ということになりますので、立命館アジア太平洋大学（APU）は、コロナ禍による入国制限などで、もっともネガティブな影響を受けた大学の一つであることは、間違いのないと思っています。

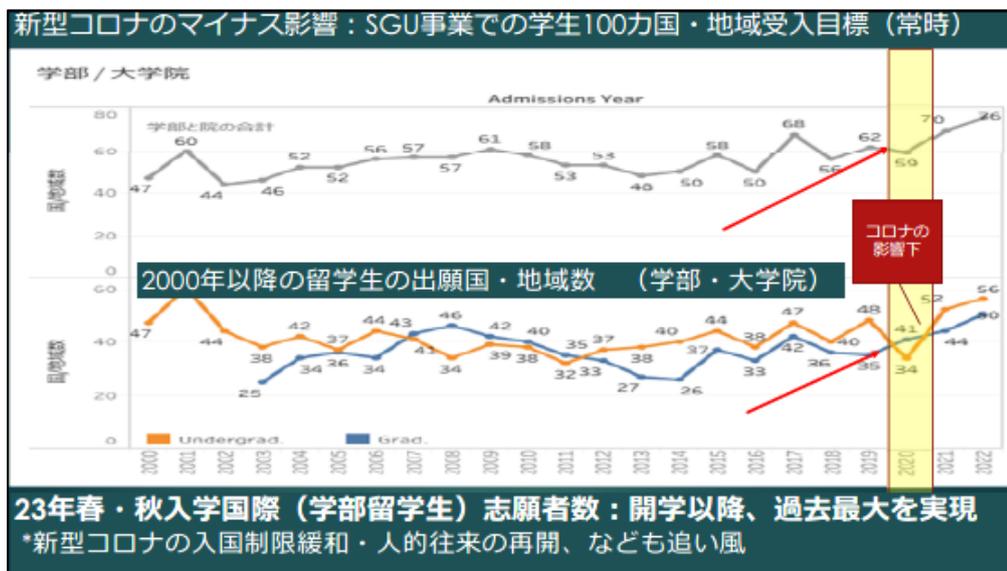


今日はコロナ禍の話と、ポスト・コロナの話ということで話題提供をします。今、APU キャンパスには世界 106 カ国から学生が集まっています。朝、キャンパスを歩いていると、学生たちがほぼマスクを外して授業に向かっていく様子やグループでいろいろな取り組みをしている場面を見るにつけて、学生が対面で学ぶ環境で、ポスト・コロナが動き始めてきていると感じているところです。

# 留学生募集の現場

## 1. 新型コロナウイルス対策に活かした過去の取り組み

さて国際入試・留学生募集の現場の話題提供ということで、コロナ禍の振り返りですが、APU は、常に世界 100 カ国・地域からの学生がいることを目指しています。その前提として、APU は日本の大学の中では先駆的に学生募集の DX 化を進め、2016 年以降、留学生の出身国・地域数は大きく増加していました。しかし、2020 年以降は、コロナ禍のため大きく減少し、国・地域のバラエティーが相当削がれてしまったと思っています。



しかし今は他の大学も同様に、留学生募集面では、かなり追い風が吹いているのではないかと思います。APU は、開学時から春・秋入学制度を導入しており、年間を通して留学生入試を運用しています。世界各国の学生を受け入れるためには春入学のみでは到底足りず、現在は大半の留学生を秋入学で受け入れています。この秋入試の出願が、先日完了し、大変うれしいニュースですが、学部の留学生の志願者数は、2000 年の開学以降、過去最大数を更新しました。コロナ禍の入国制限等の施策がマイナス要因として働いていたと思いますが、2022 年春からの人的往来の再開等が、大きな追い風になっています。

**新型コロナはあったが、18年から世界標準の入試改革を掲げ、留学生入試のオンライン化に挑戦していた**

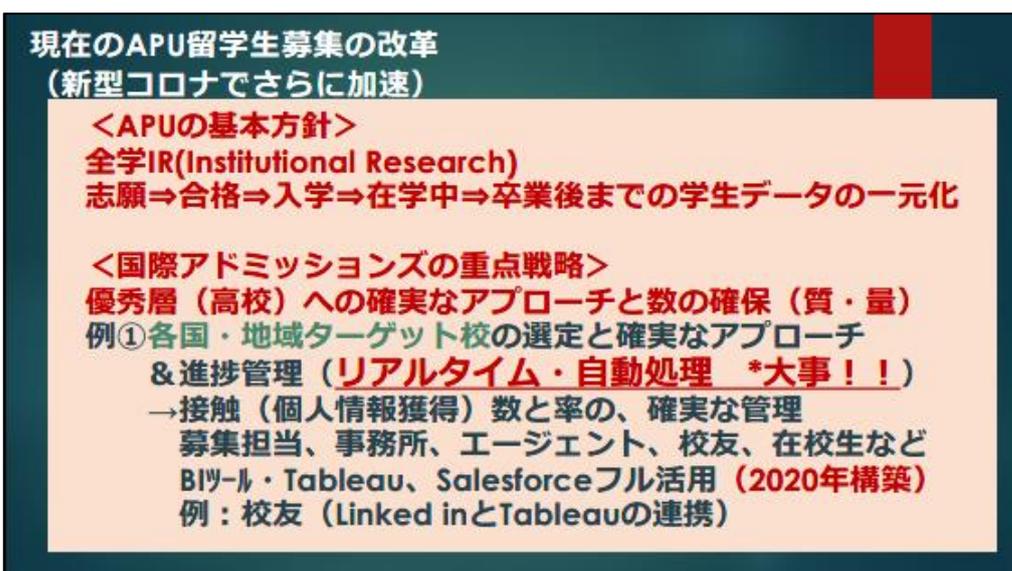
- ①オンラインでの出願・決済（ウイスク・エウ社）
- ②ビデオ面接（HireVue）、オンライン試験（Pearson社）導入
- ③留学ビザ取得に必要な証明書（COE）のオンライン対応

**新型コロナ下での往来制限、ストップする海外郵便事情などに対し、さらに下記の実施も推進して、問題なく対応できた**

- ④合格後の手続き書類のデジタル署名対応（Adobe社）
- ⑤オンラインでの学籍簿や合格通知書（+奨学金結果）対応、など

APU では、留学生向けの国際入試の DX 化を、2018 年から本格的にスタートしていました。こういった取り組みを先駆的に進めていなければ、コロナ禍での 2020 年からの留学生入試は、全く機能しなかった、乗り越えられなかったと、今でも背筋が寒くなる思いです。学生の半数が留学生となりますので、APU として、どのように世界中から優秀

な留学生を集めてくるのかというポリシーや哲学は、開学以降から脈々と続き、高度化してきています。組織に根付くかたちで、どのような改善プロセスをつくるかは、世界の大学の先進例に、常に学んできました。



その一つです。APU では基本、全ての留学生入試をオンラインで行っています。前提としてAPU はたかだか学生数 6,000 名の私立大学です。ただし、他大学と違う点は学生構成の多様性であり、学生の半数が海外の留学生ということが一つの指標になっています。その点では学生の多様性をどのように評価していくのか、様々な国から来ている学生のデータをどのように組織的に取り込み、分析・可視化したうえで、大学経営に活かしていくのかという観点で、2010 年頃から全学 IR (Institutional Research) に取り組んでいます。

その全学 IR の一つとして国際アドミッションズの重点課題をデータ化し、それに基づいて学生募集戦略を立てることを脈々としてきました。重要なのは、リアルタイムで様々なデータを確認できること、そしてそれを国・地域ごとの数値の受け入れ目標や入学者

目標に落とし込んでいるということです。

**現在のAPU留学生募集の改革  
(新型コロナでさらに加速)**

**<重点戦略>**  
**潜在的志願者／合格者への確実なアプローチ**

**②オンラインをフル活用した募集活動・手続促進**

- ・日本ではじめてSlateアプリケーション導入
- ・個人情報獲得→志願への誘導のしかけ
- ・志願者と教員との接点増 (オンライン企画・VMUPなど)
- ・合格者と教員の接点 (合格者プレセミナー)
- ・学生の半数が留学生 = 在學生・世界中の卒業生の協力

**これまで各国 (事務所) や現地協力者、国・地域担当が個別におこなってきたことの転換→横ぐしと可視化**

また、日本で初めて Slate という入試・出願・広報アプリケーションを導入しています。検索エンジンで「APU Slate」と検索していただくと、プレスリリース等の情報が出てきますので、関心がある方はご覧いただければと思います。

**個人情報の獲得→出願→合格→手続促進→入学 (2023年から3学部735名)**

Numbers	Countries	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	Choice number Restricted
1	7,628	147	200											217
Country		2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	Year 2012 ~ 2023
INDONESIA		1,086	7,609	7,491	8,109	8,117	8,206	8,900	2,323	2,407	2,597	2,597	2,597	88,683
Thailand		90	125	135	145	155	165	175	185	195	205	215	225	235
Malaysia		101	111	121	131	141	151	161	171	181	191	201	211	221
Vietnam		215	225	235	245	255	265	275	285	295	305	315	325	335
United States		143	153	163	173	183	193	203	213	223	233	243	253	263
Nigeria		73	83	93	103	113	123	133	143	153	163	173	183	193
Japan		89	99	109	119	129	139	149	159	169	179	189	199	209
India		95	105	115	125	135	145	155	165	175	185	195	205	215
Bangladesh		162	172	182	192	202	212	222	232	242	252	262	272	282
Uzbekistan		181	191	201	211	221	231	241	251	261	271	281	291	301
Egypt		70	80	90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190
Taiwan		54	64	74	84	94	104	114	124	134	144	154	164	174
Korea		48	58	68	78	88	98	108	118	128	138	148	158	168
China		38	48	58	68	78	88	98	108	118	128	138	148	158
Sri Lanka		195	205	215	225	235	245	255	265	275	285	295	305	315
Afghanistan		31	41	51	61	71	81	91	101	111	121	131	141	151
Mongolia		40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160
Holaryto		152	162	172	182	192	202	212	222	232	242	252	262	272
Ethiopia		35	45	55	65	75	85	95	105	115	125	135	145	155
China		14	24	34	44	54	64	74	84	94	104	114	124	134
Caribbean		94	104	114	124	134	144	154	164	174	184	194	204	214
Saudi		14	24	34	44	54	64	74	84	94	104	114	124	134
Philippines		10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130
Myanmar		5	15	25	35	45	55	65	75	85	95	105	115	125
Nepal		217	227	237	247	257	267	277	287	297	307	317	327	337
Kenya		13	23	33	43	53	63	73	83	93	103	113	123	133
Somalia		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Morocco		26	36	46	56	66	76	86	96	106	116	126	136	146
Algeria		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

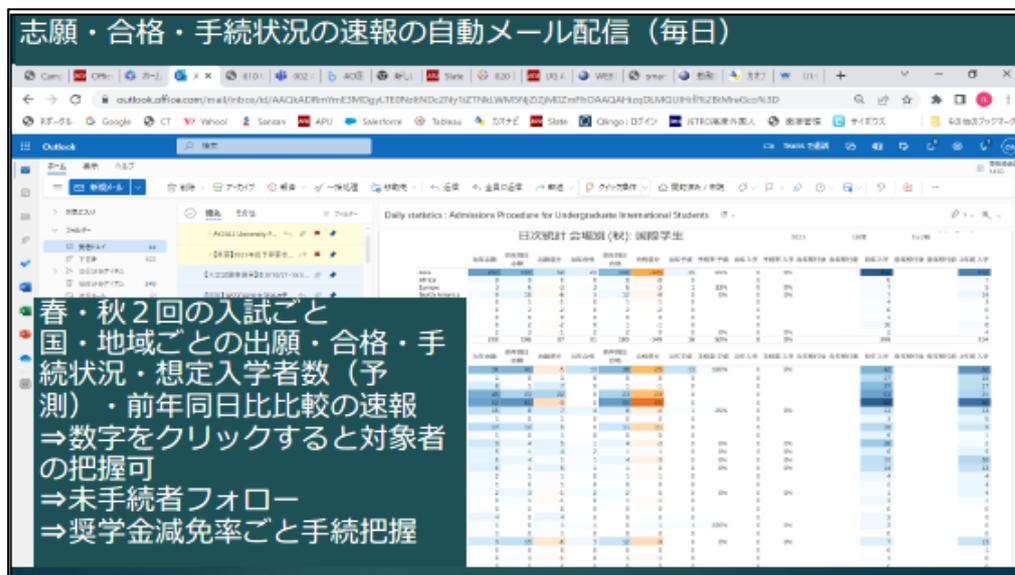
**個人情報の獲得がすべての基本**

**個人情報目標数→オンライン登録数 (APUは完全オンライン入試) →出願者数→合格者数→入学者数**

**国・地域ごとの目標を設定 Inquiry Managementの時代へ**

多くの大学では日本人学生の受け入れ戦略を立てていらっしゃると思います。APUの国際アドミッションズの戦略も、それと大きな違いはありません。アドミッションズ戦略を国際学生・留学生という軸で設定しているということですね。基本的な考えですが、世界中からの学生の個人情報、問合せ・Inquiryを適切にマネジメントします。海外では「Inquiry Management」はどのアドミッションズ・オフィスでも普通にやっていることですが、それと同じです。基本的に獲得すべき個人情報の目標数を立てて、個人情報を獲得し、その人(潜在的志願者)たちと関係づくり(ナーチャリング)をして出願者の

情報を管理し、合格後には手続きの促進・マネジメントをして、最終的な目標である国・地域ごと、学部ごとの入学者確保につなげていくというプロセスで回しています。



上の図は、私のある日の Outlook メールをコピーしたものです。APU は年間を通して入試をしますので、国・地域、学部ごとに、例年と比較した、現在の出願件数が自動メールの日報で入ってきます。入試を統括する副学長、学部長、研究科長、入試担当の役員、アドミッションズ・オフィスの全関係者に自動的に届きます。「うちの学部がこれぐらい伸びてきているがどうだ」とか、「今日一日で一気に出願が増えているのだが、それはどの国・地域の傾向からなのか」といったことも可視化でき、6月1日の入試開始日から翌5月まで、毎日このメールが届く仕組みとなっています。



次に Slate システムでのリアルタイム管理ですが、基本的に、国・地域別に全ての最新の出願状況のデータを、リアルタイムで見ることができます。データは 1 分単位で自動更新されます。あとは、イベントの管理やイベント参加者のデータ、合格後の手続き状況がクリック一つで分かるような設定になっています。

さらに APU では、世界の高校ごとにユニークなコード番号を付けており、国・地域ごとにどの高校からいつ志願があり何名入学したか、2000 年の開学から 2023 年の入試を通して、高校単位で把握できるようになっています。

例えば、〇〇国××シティにある▽▽高校コードを持った□□学校から、▼▼年に何名出願があったか、またその学生の合否、そして入学に至った学生については入学時期や奨学金の有無、メールアドレス、在学中の GPA、それから卒業後の活動状況が分かります。卒業後の情報は Linkedin に紐付け、その高校にアプローチをする際に、これまで入学した学生のバックグラウンドをあらかじめ確認できるようデータを整備しています。



国ごと志願・合格・入学者別の高校確認→在籍学生・卒業生の抽出・コンタクト可能

Classification - (国別/地域)	School Location - 高校所在地	Country/Region - 国籍/地域	City - 高校所在地都市	G12 Code	G12 High School	Enrollment Status - 入学状況	Admissions Classification ...	Tuition Reduction - 奨励	入学年度 / Academic Year												
									2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	Total
Total									25	18	35	11	14	21	10	57	73	34	26	352	
Africa - South Africa																					88
Africa - Kenya																					8
Africa - Rwanda																					7
Africa - Nigeria																					4
Africa - Liberia																					4
Africa - Kenya																					4
Africa - Uganda																					4
Africa - Tanzania																					3
Africa - Nigeria																					2
Africa - Botswana																					2
Africa - Zimbabwe																					2
Africa - Uganda																					2
Africa - Uganda																					2
Africa - Tanzania																					2
Africa - South Sudan																					2
Africa - South Africa																					2
Africa - South Africa																					2
Africa - Rwanda																					2
Africa - Rwanda																					2
Africa - Nigeria																					2
Africa - Nigeria																					2
Africa - Nigeria																					2
Africa - Nigeria																					2
Africa - Mali																					2
Africa - Mali																					2

①出身高校・期間  
 ②氏名  
 ③学籍番号  
 ④学部  
 ⑤奨学金有無  
 ⑥メールアドレス  
 ⑦GPA  
 ⑧卒業後コンタクト (Linkedin) etc.

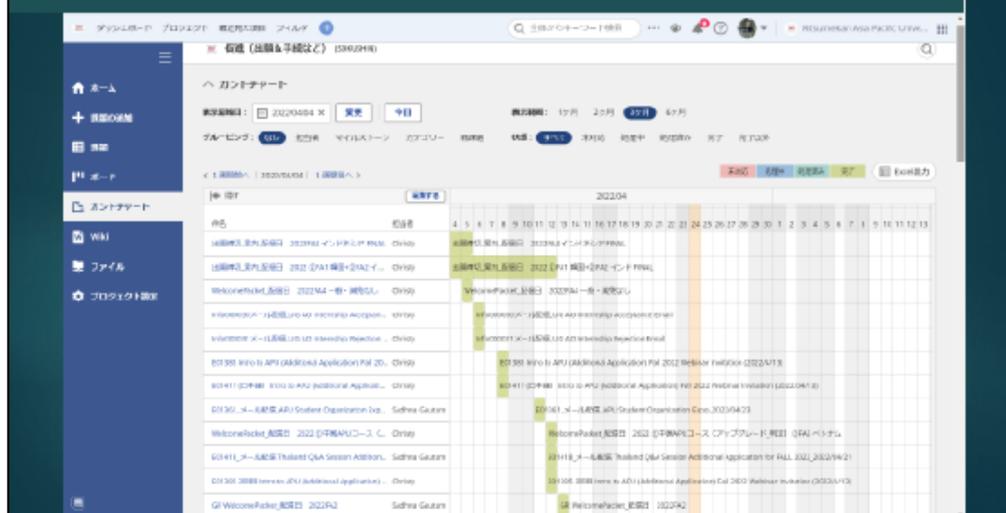
さて次は国際入試・留学生募集における卒業生のかかわりです。APU は、半数が海外の学生ですから、卒業後は再び世界に拡散していきます。日本国内で働く場合もありますし、自国ではなく第三国に行くケースもあります。学生の在学時の満足度を少しでも上げることで、世界中にひろがった卒業生と、卒業後もつながることができます。そのような卒業生が主体的に、あるいはこちらからお願いをすることも含まれますが、「アドミッションズ・アンバサダー」というタイトルをもって、または APU の一校友という形で、学生募集に協力をしてきています。



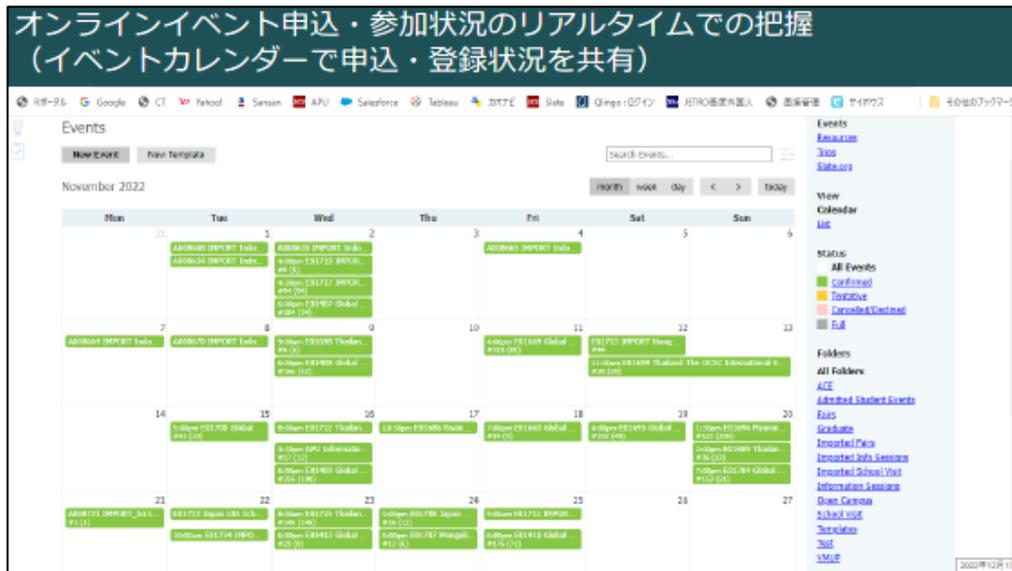
APU の留学生の多くはアジアなどから来ており、アジアでの留学生募集では、現地語でいろいろな展開ができています。実はこの 2 年ぐらい、意識的にミャンマー学生受け入れ戦略プロジェクトを立てて、実行しています。その成果として、ミャンマーの志願者が増えているのですが、戦略プロジェクトのなかで、在学生や卒業生たちとわれわれアドミッションズ・オフィスの担当者が、ミャンマー語での活動を行い、学生募集を強化することで、優秀な学生のリクルートが成功しています。留学生や卒業生との対応・調整力、スピード感をもった企画の具体化など、APU 担当者の高い力量に、上長として、いつも感服をしていました。

# 各種リクルートイベントの デジタル・マネジメント

月次・週次でイベント配信：22年度オンライン・イベント269回開催



さて APU では 2022 年度, オンラインで学生募集のイベントを 269 回行いました。APU のマーケットは世界であり, 国・地域単位での対面でのリアルなイベント・経験は当然大事なのですが, 一方デジタルでできることもありますので, 様々な取り組みを行ってきました。先日, 2023 年春・秋入試が終わりましたので, 今度は 24 年の春入学, 24 年の秋入学に向けて, うまく出願につながったオンラインイベントの内容, 出席率といったデータを見ながら, 卒業生が関わる企画を増やす, 学部イベントでの教員構成を見直すなど, オンラインイベントのコンテンツの見直しをしています。



これはある月のイベント情報です。毎日何かしらのイベントをしていることがよくわかります。このイベントをクリックすると、即座に、国・地域ごとの登録者数、出席率、その後他のAPUのイベントに参加をしているかどうか、出願に至ったかどうか等を可視化でき、それらのデータを管理し、他のデータとも紐付けています。

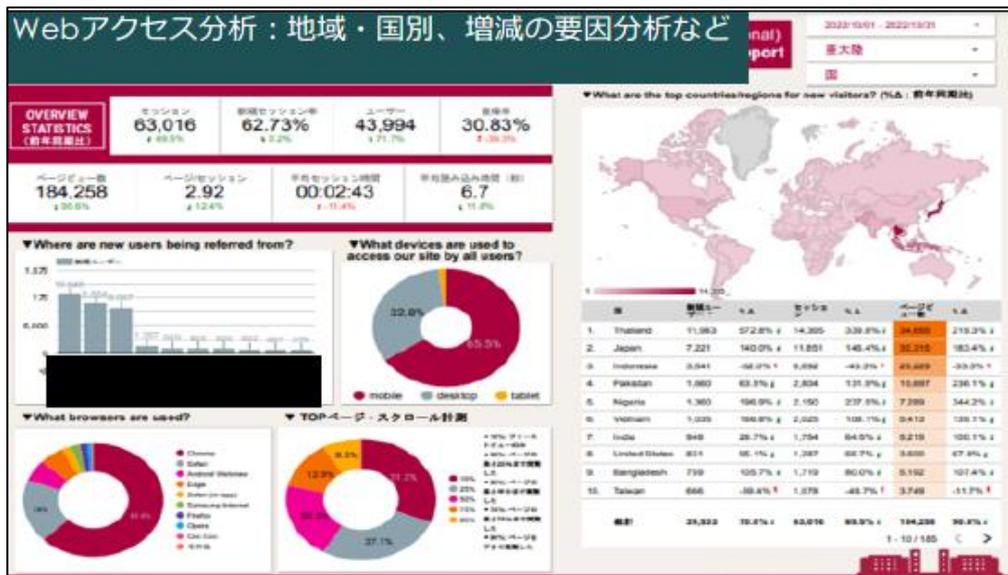




現地語でのローカライズ配信企画については、対象者に対して、自動（オート）メールによる情報提供をしています。APU では、例えば、ベトナムでは、ベトナムからの潜在的志願者に対して、英語の情報だけではなく、ベトナム語でローカライズされた情報を挟むことで、様々なイベント等の回答率や出席率を上げるなどを意図的にしています。一番左上はベトナムの企画、右の下と右側はタイ語での企画の情報提供です。

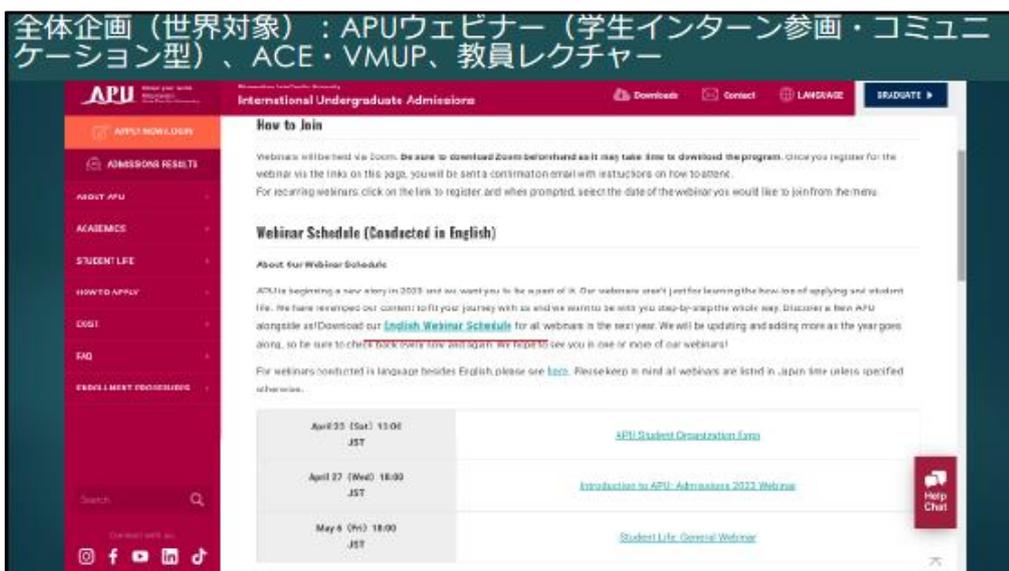
また、インフルエンサー、各国の大使館や諸団体との連携はとても重要です。APU は6,000名規模の小さな大学で、一大学でできることは限られます。その点で優秀な留学生を受け入れていきたいという志をもつ他大学との連携も重要だと思っています。オールジャパンで日本への留学を進めている「日本留学海外拠点連携推進事業」の海外6拠点とは密に連携しており、共同企画やプロジェクトなども非常に有効に機能しています。また拠点事業の現地担当者からも適切に助言を頂き、大変助かっています。





DX化の進展により、多くの大学がオンライン入試やオンライン出願に挑んでいると思います。実はAPUでも完全オンラインで入試を行っていますが、完全オンラインということはすなわち、APUのウェブサイトへアクセスができないとそもそも出願が開始できないわけです。これについて、Google Analyticsを使って、国や地域ごとにどのような広告を打つか、広告を打ったことによるウェブサイトへのアクセス数の変化等を分析しています。国・地域ごとのユーザー数の変動、新規のユーザーの流入はどの広告・企画に起因するのか、といったことも毎月細かく分析しています。





23 年春・秋入学者向けの配信コンテンツについては、多くの大学が行っていることと大きく変わりはありません。大学の魅力をどのように伝えていくのかという点で、一番力を入れていたことは、オンライン・ウェビナー形式での学生主体の企画の実施です。また文化交流（カルチュラル・エクスチェンジ）の企画をオンラインでやってみたり、教員によってアカデミックな魅力を伝える「バーチャルミニユニバーシティプログラム（VMUP）」というレクチャーシリーズをオンラインで実施したりしていません。



先ほど申し上げたとおり、国際入試・留学生募集において、一大学でできることには限りがあります。その点で、APU 自体の認知獲得は後回しにして、他大学と連携して、「Study in Japan」や日本への留学を促すような企画を、コロナ禍で大きく進めてきました。例えばタイの学生に対して、大阪大学と連携して「Japan University Joint Online」というイベントを行ったり、ベトナムの学生に対し、長岡技術科学大学と連携してウェビナーをしたり、複数大学と共同で「STUDY IN JAPAN MINI FAIR」というウェビナーをしています。



オンライン活用例②: APU単独型	
	00: 18:00 – 18:30 Opening Session
OCT 24	01: 18:30 – 20:00 Management of workforce diversity in global environment
	02: 18:30 – 20:00 Why is Southeast Asia a region?
OCT 31	03: SDGs -its background and implementation
	04: What is management and how can you start your own business?
NOV 07	05: The United States, Japan, and Security and Prosperity in the Indo-Pacific
	06: Tourism: Development or De-development?
NOV 14	07: Beginner level Japanese (same contents as Session 08)
NOV 21	08: Beginner level Japanese (same contents as Session 07)
NOV 28	09: Invisible sceneries and the links with our lives
DEC 05	10: International law and its impact on our everyday life
	11: Diversity and Inclusion: Making Teamwork Work
DEC 12	12: 16:00 – 18:00 Leadership decision making in crisis: Covid-19
	00: 18:00 – 18:30 Closing Session

一方で、APU 単独でのオンライン企画も当然やっています。われわれはアドミッションズですから、企画終了後、世界中の参加学生たちが、その後どういった形で APU とつながっていき、またリピーターとして他の企画に参加をして、最終的に APU への出願に至ったかどうか、そして合格したのかどうか、さらには合格後に APU へ入学してくれたかどうか、こういったことを全部フォローしなければなりません。その中で企画内容の見直しを常に進めていきます。

オンライン活用例② : APU単独型
<ul style="list-style-type: none"> <li>Virtual Mini University Program (VMUP) 参加者 322名47か国・地域から応募 選考の結果、238名35カ国・地域が合格</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>VMUP参加者のAPU出願（出願可能性のあるG12 or 既卒の参加者） 1/25 現在 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 国際（留学）生 124名中31名（25%）出願</li> <li>- 国内学生 16名中7名（44%）出願</li> <li>- G10,11などの2022年度以降での出願意思ありが100名弱</li> </ul> </li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>VMUP参加者の事後アンケート <ul style="list-style-type: none"> <li>- APUへの出願 : I will apply. 57 (42%)、I might apply. 46 (34%)</li> <li>- 満足度 : Very satisfied/satisfied 131 (98%)、Neutral 2 (2%)</li> </ul> </li> </ul>

この VMUP は先ほどお伝えした、オンラインでのアカデミック・レクチャーシリーズですが、APU 教員のレクチャー内容もよく、速報ベースですが参加者の 25%が、最終的に APU への出願に至りました。こうした振り返りをしながら、入学者目標の達成を目指しています。

## 国際学生募集の現場

### Ⅲ.現在～今後の課題

これまでの業務スタイル・フローは、大きく変革

0. まず考えるべきこと：アドミッションズ職員（カウンセラー）のモチベーション維持・向上

1. オンラインでできること

2. 個別最適化された情報の提供・ローカライズ展開：学生・卒業生

3. 国・地域マーケット分析、募集活動の可視化、オンライン・SNS戦略、・・・

4. 新たな選考プロセス・・・

5. 我が国の国際化をけん引してきたAPUのダイバーシティキャンパスの未来像

6. オフラインの価値創造（オンラインとオフラインの相乗効果）

さて、まとめとなります。われわれアドミッションズのスタッフは、最終的にAPUの理念に、そして学部のポリシーにあった優秀な入学者を確保することが重要なミッションですよね。その中で大事なことは、留学生と直接対峙する、アドミッションズの職員やカウンセラーのモチベーションの維持・向上です。コロナ禍においては、自分の国にも帰れない、あるいは当たり前だった海外出張にも行けない、コロナでの働き方やキャリアの見直しなど、モチベーションダウンにつながるが多かったですし、デジタル対応など、新しいことに取り組むことは負担にもなります。そうした際に、職員やカウンセラーがアイデアを出しやすい雰囲気づくりや、成果をポジティブに評価していくことは、とても大事なことだと思っています。また振り返ると、周りの同僚のアイデアや迅速な企画・対応力などに、いつも助けられていました。

それらを前提として、やはり国際入試・留学生募集現場に必要なことは、オンラインでできることと、対面でやっていくことを整理するということです。また、個別最適化された情報を、適切に提供することです。国・地域によってローカライズされた情報も

ありますし、国・地域によって、求められる情報は異なります。そこで、APU で学ぶ世界中からの学生や、世界中に散らばった卒業生という稀有なネットワークを頼り、様々な形で協力を得ながら取り組みをしていくことが、アドミSSIONの高度化には必須ではないかと思っています。

次に、国・地域マーケットの分析の重要性です。APU は、手前みそですが、国・地域の最新情報に大変敏感です。募集活動を可視化していく際に、その国・地域が今どうなっているのか、その国の高校生たちは何を考えているのか、その国の大学ではどのような学びや留学のトレンドがあるのか、そのようなことに関心を持てると、業務の幅も広がっていくのではないかと考えています。

そしてやはりオンラインとオフラインの価値創造のため、アドミSSIONズに関わるスタッフが率先して新たなチャレンジをすることで、大学の戦略もさらに高度化されていくのではないかと考えています。



---

【池田・司会】 非常に先進的な取り組みをご発表いただきましてありがとうございます。後ほどまたパネルディスカッションで深く伺わせていただければと思います。ありがとうございました。■

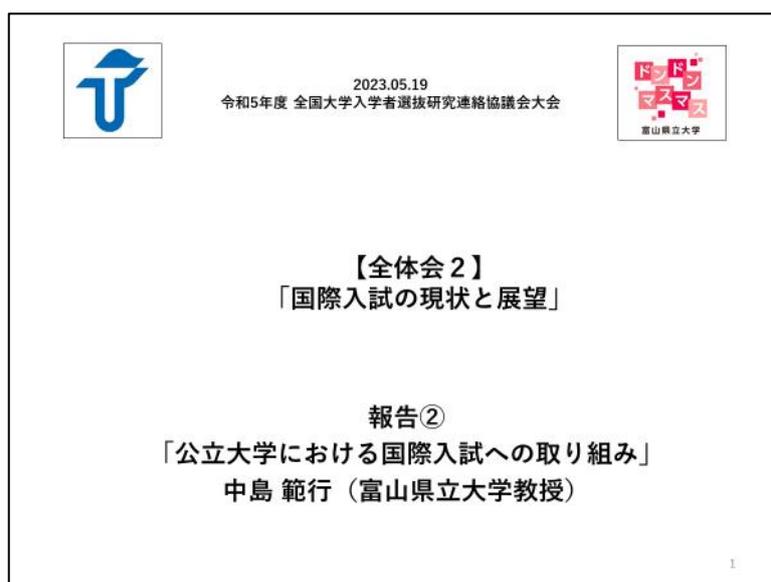
## 全体会 2 ○ 報告 2

# 公立大学における国際入試への取り組み

## ■中島 範行（富山県立大学教授）

富山県立大学の中島です。今日は、よろしくお願いします。本報告にあたり、公立大学に対し、公立大学協会（公大協）を通じて国際入試に関するアンケートを実施させていただきました。この場を借りて、アンケートにご協力いただいた公立大学の関係する皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

前半では特に日本留学試験を踏まえた本学の入試の話をさせていただいて、その後、公立大学のアンケートとその結果についてお話をさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。





本学は平成元年に日本海側で初の工学部の大学として設立し、現在 30 年を超えています。最初は 160 名の定員でしたが、現在は看護学部もできまして定員は 460 名です。今回は工学部のみの話とさせていただきますので、その点をご容赦いただければと思います。

**富山県立大学  
私費外国人留学生入試**

募集人員 工学部

- 機械システム工学科 若干名
- 知能ロボット工学科 若干名
- 電気電子工学科 若干名
- 情報システム工学科 若干名
- 環境・社会基盤工学科 若干名
- 生物工学科 若干名
- 医薬品工学科 若干名

工学部では、私費外国人留学生試験を行っています。学校推薦型選抜、選抜の前期及び後期が定員を決めた入試です。私費外国人の留学生試験は、この図のとおり定員を若干名として実施しています。この入試を始めて以来 20 年間で志願者数が 86 名、受験者数が 75 名、合格者が 39 名、入学者が 16 名です。志願者は毎年 4～5 人いますが、受験者はそこから 1 名減り、合格者がおよそ半分、入学者は 1 名いるかないかというのが現状です。

当初は中国からの私費外国人が多かったのですが、近年はアフリカのガボン、マレーシア、オランダ出身者が在籍するなど様々です。定員枠を設定している他の大学ではど

のように人を集めているのか、どのような活動を行っているのかというのは非常に興味深いことと考えています。

## 富山県立大学 私費外国人留学生入試

---

### 出願要件

次の各号のいずれにも該当する者

- (1) 日本の国籍を有しない者
- (2) 独立行政法人日本学生支援機構が実施する令和3年度（2021年度）日本留学試験において本学が指定する教科・科目を受験した者
- (3) Test of English as a Foreign Language (TOEFL) を受験した者
- (4) 出入国管理及び難民認定法において、大学入学に支障のない在留資格「留学」（又は在日のまま「留学」へ変更できる在留資格）を有する者及び取得できる見込みの者
- (5) 次のア又はイのいずれかに該当する者
  - ア 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者及び令和4年（2022年）3月31日までに修了見込みの者又はこれらに準ずる者で文部科学大臣が指定した者（注）
  - イ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局から国際バカロレア資格を取得した者、ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を取得した者、フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を取得した者又はグレート・ブリテン及び北部アイルランド連合王国において大学入学資格として認められているジェネラル・サーティフィケート・オブ・エデュケーション・アドバンスト・レベル資格を取得した者

（注）日本の高等学校又は中等教育学校を卒業した者（卒業見込みの者を含む。）及び日本永住許可を待っている者は、本選抜に出願することはできない。

## 富山県立大学 私費外国人留学生入試

---

### 入試方法（1月末の実施）

1) 入学者の選抜は、大学入学共通テストを免除し、次に示す学力検査等の結果、その他出願書類審査の結果学力検査等の配点を総合して行う。

日本留学試験			本学が実施する 学力検査等
受験を要する教科・科目	主題言語の指定	実施時期の指定	
日本語 理科（物理、化学、生物 から2科目選択） 数学（コース2）	日本語、英語 どちらでも可	6月・11月 どちらでも可	面接 （英語能力の試問を含む。）

2) 学力検査等の配点

日本留学試験の成績			面接	計
日本語	理科	数学		
400点	200点	200点	400点	1,200点

本学では 1 月末に試験を実施しており、主に日本留学試験を活用しています。配点については、日本語・理科・数学で 800 点、本学で対面にて行う面接点を 400 点とし、計 1,200 点です。日本留学試験での主題言語は日本語・英語のどちらでも可能ですが、多くの受験生が日本語を選択するため、面接で英語の能力を問うことにしています。

現在在籍しているマレーシアとガボン、オランダの留学生の英語能力は非常に高いです。日本語もぺらぺらで母国語が話せますので、日本の学生からすると僕らより優秀だという印象を抱いているのではないかと個人的には思っています。

## 日本留学試験（EJU）

外国人留学生として、日本の大学（学部）等に入学を希望する者について、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行うことを目的に実施する試験



留学生事業部 留学試験課  
<https://www.jasso.go.jp/ryugaku/eju/index.html>

日本留学試験は JASSO（日本学生支援機構）が行っている試験です。この点について最初にご紹介します。

## 日本留学試験（EJU）

### 試験の方法、内容等

- 1) 対象：外国人留学生として、我が国の大学等に入学を希望する者
- 2) 試験日：第1回 第2回 2022年(令和4年)6月19日(日) 2022年(令和4年)11月13日(日)
- 3) 実施地：
 

	(国内)	北海道、宮城県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、石川県又は福井県、静岡県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、岡山県又は広島県、高知県、福岡県及び沖縄県
	(外国)	インド(ニューデリー)、インドネシア(ジャカルタ及びスラバヤ)、韓国(ソウル及びプサン)、シンガポール、スリランカ(コロンボ)、タイ(バンコク及びチェンマイ)、台湾(台北)、フィリピン(マニラ)、ベトナム(ハノイ及びホーチミン)、香港、マレーシア(クアラルンプール)、ミャンマー(ヤンゴン)、モンゴル(ウランバートル)及びロシア(ウラジオストク)(注)

(注)2022年度の実施は、現地情勢の影響により中止。

昨年は6月と11月に2回行われていて、実施地は国内と国外だそうです。

### 日本留学試験 (EJU) 出題科目等

科目	目的	得点	範囲
日本語	日本の大学等での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)を測定する。	125 分	読解 聴解・聴読解 0~400 点
			記述 0~50 点
理科	日本の大学等の理系学部での勉学に必要な理科(物理・化学・生物)の基礎的な学力を測定する。	80 分	0~200 点
総合科目	日本の大学等での勉学に必要な文系の基礎的な学力、特に思考力、論理的能力を測定する。	80 分	0~200 点
数学	日本の大学等での勉学に必要な数学の基礎的な学力を測定する。	80 分	0~200 点

### 日本留学試験 (EJU) 出題科目等

**【出題科目等】**

- ① 日本語の科目は、記述、読解、聴解・聴読解の3領域から構成される。
- ② 理科について、受験者は、受験希望の大学等の指定に基づき、物理・化学・生物から2科目を選択する。
- ③ 数学について、受験者は、受験希望の大学等の指定に基づき、文系学部及び数学を必要とする程度が比較的少ない理系学部用のコース1、数学を高度に必要とする学部用のコース2のどちらかを選択する。
- ④ 理科と総合科目を同時に選択することはできない。
- ⑤ 上記の得点範囲は、日本語の科目の記述を除き、素点ではなく、共通の尺度上で表示する。また、記述については基準に基づき採点する。
- ⑥ 出題範囲は、各科目のシラバスを参照のこと。

**【出題言語】**

- ・ 日本語及び英語により出題するので、受験者は、受験希望の大学等の指定を踏まえて、出願の際にどちらかを申告する(日本語の科目は日本語による出題のみ)。

**【解答方式】**

- ・ 多肢選択方式(マークシート)(日本語の科目は記述式を含む。)

先ほどの繰り返しになりますが、日本語、理科、総合科目、数学という科目の中から各大学が対象科目、得点範囲、配点を決めて利用します。日本語は 125 分、理科あるいは総合科目のどちらかを選択して 80 分、数学を 80 分ということで、本学は先ほどお示しした配点で実施させていただいています。本学では面接しか実施していませんが、これは日本留学試験に対する本学の評価がある程度高いためにこのような形とさせていただいているということです。

日本語の科目は、記述、読解、聴解・聴読解の 3 領域から出題されています。理科については、進学する学部や学科により大体決まってきますが、物理、化学、生物からの 2 科目。数学は「数学を高度に必要とする学部用のコース 2」を使用しています。

### 2022年度日本留学試験（第2回）

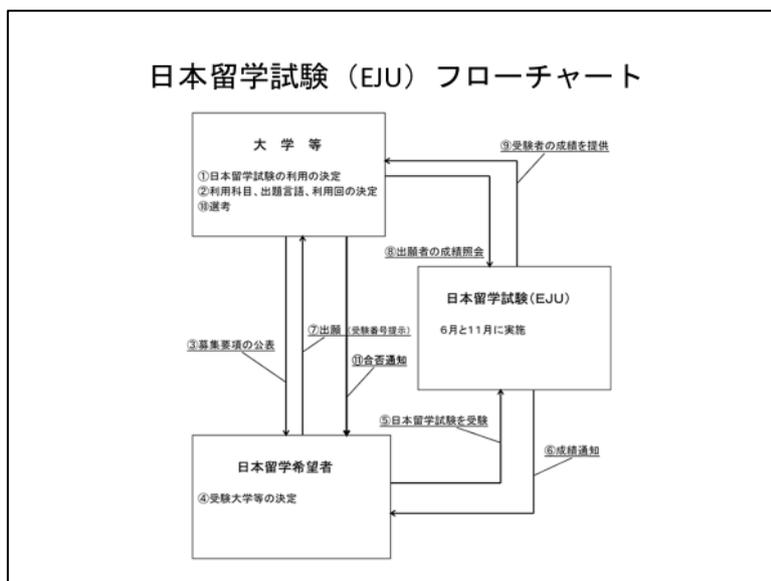
実施地			応募者数(人)	受験者数(人)
国内	北海道		65	42
	東北	宮城	170	123
		群馬	53	43
	関東	埼玉	365	298
		千葉	215	165
		東京都	12,143	9,679
		神奈川県	301	234
	中部	福井	13	13
		静岡	96	69
		愛知	217	194
	近畿	京都	991	865
		大阪	1,459	1,209
		兵庫	224	184
	中国	広島	216	184
	四国	高知	53	39
	九州	福岡	744	637
	沖縄		17	12
国内小計			17,342	13,990

昨年度の実施形態を見ますと、国内では応募者、受験者ともに実施域は東京が非常に多く、次が大阪という順になっています。海外から直接本学を受験する学生は年々減っており、東京や大阪にある専門学校等を経由して試験を受けるケースが増えていますので、やはり東京が一番多いのかなと感じています。

### 2022年度日本留学試験（第2回）

実施地			応募者数(人)	受験者数(人)
国外	インド	ニューデリー	137	65
	インドネシア	ジャカルタ	150	123
		スラバヤ	84	63
	韓国	ソウル	2,376	1,807
		プサン	505	400
	シンガポール		8	7
	スリランカ	コロンボ	5	3
	タイ	バンコク	122	83
		チェンマイ	14	12
	台湾	台北	254	199
	フィリピン	マニラ	20	14
	ベトナム	ハノイ	112	83
		ホーチミン	47	29
	香港		293	149
	マレーシア	クアラルンプール	151	145
	ミャンマー	ヤンゴン	189	122
	モンゴル	ウランバートル	144	103
	ロシア	ウラジワ(注)	---	---
国外小計			4,611	3,407
合計			21,953	17,397

海外では、韓国が一番多く、次が東南アジア圏です。昨年はロシアでは実施できませんでした。総受験者数は約 17,000 人、そのうち約 14,000 人が国内で受験しているとのこと。

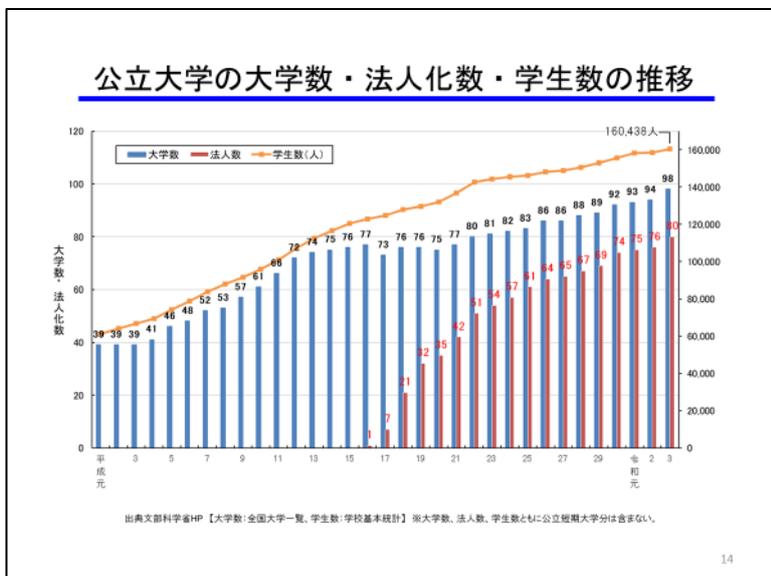


こちらは大学，日本留学希望者と日本留学試験の関係性を示したフローチャートです。それぞれがどのように使うかを考慮して利用しているというのが現状かなと思います。

### 大学等での日本留学試験の取扱い

- 日本留学試験の受験を課す大学等では、学部・学科ごとに日本留学試験の受験科目や出題言語等を指定している。
- また、日本留学試験の成績については、2年間（過去4回実施分）有効であるが、大学等によっては、利用する年度や回を指定する場合がある
- 日本留学試験を受験しなくてもよい大学等や学部・学科もあるなど、大学等によって日本留学試験の取扱いが違うことからちがうことから、日本留学試験に出願する前に、必ず受験希望の大学等に問い合わせ、最新の情報を確認すること。
- 入学者の選抜に日本留学試験の成績を利用している大学等は、下記のページで見ることができますので、参考のこと。

日本留学試験利用校  
<https://www.jasso.go.jp/ryugaku/eju/examinee/use/>  
 国立78校、公立56校、私立346校



### 地方公共団体の区別の大学設置状況

青字＝医学部を有する 緑字＝直営型大学 赤字＝学校法人からの設置者変更

	都道府県 43/47	政令市 8/20	中核市等 12/84	一般市 15/686
総合大学	5学部、学生5,000名以上（それに相当する規模の大学を含む）	首都大学東京、大阪府立、兵庫県立	横浜国立、名古屋市立、大阪市立、北九州市立	(合 併特例等)
	複数分野の学部を有する大学	岩手県立、秋田県立、宮城、新潟県立、山梨県立、長野県立、富山県立、福井県立、静岡県立、静岡県文化芸術、愛知県立、滋賀県立、京都府立、鳥取県立、岡山県立、島立広島、山口県立、高知県立、高知工科大学、福岡女子、長崎県立、熊本県立(22大学)	札幌市立、広島市立	高崎経済、福山市立
単科大学	看護系以外同一分野の複数学部を持つ大学を含む	札幌医科大学、国際医療、山形県立米沢栄美、福島県立医科、会津、群馬県立女子、産業技術大学院、石川県立、情報科学芸術大学院、愛知県立芸術、京都府立医科、奈良県立医科、奈良県立、和歌山県立医科、公立鳥取環境(併、非共同設置)、九州歯科、福岡県立、沖縄県立芸術(18大学)	京都市立芸術、神戸市外国語	公立はこだて未来(広域連合)、青森公立、秋田公立美術、前橋工科大学、長岡造形、金沢美術工芸、岐阜薬科、公立鳥取環境(併、非共同設置)、下関市立、宮崎公立(10大学)
	看護系看護医療系の単科大学	青森県立保健、山形県立保健医療、茨城県立医療、群馬県立県民健康科学、埼玉県立、千葉県立保健医療、神奈川県立保健福祉、新潟県立看護、長野県看護、石川県立看護、岐阜県立看護、三重県立看護、香川県立保健医療、愛媛県立医療技術、大分県立看護科学、宮崎県立看護、沖縄県立看護(17大学)	神戸市看護	創設公立(総合立)、公立千歳科学技術(総合型)、都留文科大学、福知山公立、山陽小野田市立、山口東京理科大学(5大学)

大学の区分はあくまでも参考。事務組合等については、組合を構成する町、村も関与する自治体となるが本表では表現されていない。

これも繰り返しになりますが、われわれは定員制ではなく、若干名を取る形ですので、先ほどの APU さんのような募集活動を系統立てては行っていません。国際化ということを考えますと、留学生入試をどのように運用していくかがこれからの課題なのだろうと感じています。

JASSO のホームページによると、国立では 78 校、公立では 56 校、私立では 346 校で、合わせて 500 まではいきませんが、数多くの大学がこの試験を利用していることになりうかと思えます。この辺に関しては JASSO さんにどういうことでやっているのか、国の政策や施策を伺う機会があればいいなと個人的には思っています。

### 公立大学における国際入試の現状に係るアンケート (集計結果)

**【調査の目的】**  
 (独) 大学入試センターの「全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会」において、公立大学の国際入試（いわゆる外国人特別選抜/（帰国子女特別選抜は含まない））の実施状況についての報告をするため。

**【調査実施者】**  
 (独) 大学入試センター 全国大学入学者選抜研究連絡協議会  
 企画委員 中島範行(富山県立大学副学長・工学部長)

**【事務取扱】** 公立大学協会事務局

- ・ 回答方法：Google フォームを用いたのオンラインでの回答
- ・ 調査期間：令和5年3月7日(火)～3月24日(金)
- ・ 調査対象：公立大学 (99大学)
- ・ 回答率：87.9% (87大学)

次に、公立大学におけるアンケート結果についてお話しさせていただきます。これは一昨年の表です。令和 4 年時点では公立大学数は 99 校になりました。学生数が多くなっていますが、国立大学に比べ急激に学校数が増加し、学生数も 16 万人になってきたということになります。

設置形態別で見ますと、単科大学が非常に多く、そのうち看護系あるいは芸術系が非常に多くなっています。昔からあった皆さんがよくご存じの大学は総合大学が多いですが、このような大きな大学の他は小さい大学が多いのが現状ですので、なかなかまとまった取り組みができないことが課題になろうかと思えます。

公立大学協会に国際入試に関する取り組みについて、これまでアンケートを取ったことがあるか、講習会とか講演会で何か話をしたことがあるかを伺ったところ、実績はないということでしたので、アンケートを取らせていただきました。Google フォームを用いて、2週間程度の期間を設けてオンラインで回答していただきました。対象校は 99 大学、このうち 87 大学から回答が得られました。回答率は約 88%です。

この結果については以下に述べますが、大学ごとの個別の回答内容の提示は致しませんのでご容赦ください。

**公立大学における国際入試の現状に係るアンケート**  
貴学では、国際入試（留学生を受け入れるための試験）を行っていますか

- ◆ 行っている場合
  - ・ 入試の規模（定員や倍率、入学者数など）はどのくらいですか？
  - ・ 出願資格（学修歴等）の審査をどのように行っていますか？
  - ・ 日本留学生試験を活用していますか。活用している場合は、どのように評価（点数化など）していますか？
  - ・ 受験者の非認知能力（学習意欲や学び続ける力など）をどのように評価していますか？
  - ・ 国際入試を行う利点や国際入試に期待する点は何ですか（例えば、多様性、グローバル化に寄与するなど）？
  - ・ 国際入試について、今後新たに取り組んでいく予定などあれば教えてください（例えば、定員を増やしたいなど）？
  - ・ 留学生等へ向けた入試広報活動を行っていますか？行っていればどのように行っているか教えてください。
  - ・ 国際入試にかかる業務負担をどのように捉えていますか？ お考えなどあれば教えてください。
- ◆ 行っていない場合
  - ・ 国際入試について、現状をどのように考えますか？
  - ・ 今後取り組んでいく予定などあれば教えてください？

国際入試を「留学生を受け入れるための入試」と定義し、国際入試の実施について質問したところ、実施している大学が 56 大学で、実施していない大学が 31 大学でした。およそ 3 分の 2 の大学で国際入試を実施していることがわかりました。実施している大学には、詳細についてのアンケートをお願いしました。

なお、このアンケートの質問内容については、共催大学であります北海道大学の先生ともお話をさせていただいた上で決定した経緯があります。

公立大学における国際入試の現状に係るアンケート  
出願資格（学修歴等）の審査において  
どのような書類の提出を求めていますか？

- 履歴・志望理由書、最終出身校の卒業証明書(または卒業見込み証明書)、成績証明書、日本留学試験受験票あるいは成績通知書の写し、住民票等
- 国際バカロレア資格証書の写し、アビトゥア資格証明書「一般的大学入学資格証明書」の写し
- ACT, EJU, GCE A-level, IB, AP
- 日本留学試験成績通知書、志望理由書、TOEFLスコアシートの写し又はTOEIC公式認定証若しくはスコアレポートの写し
- 住民票等
- パスポートの写し(もしくは在留カードの写し)、日本大学連合学力試験の一次オファー通知書の写し、日本語能力試験の合格証明書の写し、経費支弁方法計画書など
- 日本留学試験、TOEFL(PBT又はIBT)又はTOEIC L&R公開テスト日本留学試験の受験票及び成績確認書または成績通知書(写し)、TOEFL・TOEICのスコアなど
- 最終学校の卒業証明書及び成績証明書、旅券の写し等
- 在留カードの写し(国内在住者)、パスポートの写し

「出願資格審査においてどのような書類の提出を求めているか」という質問に対し、履歴書、志望理由書、卒業証明書、先ほども出てきました日本留学試験の受験票あるいは成績表の写し、あるいは日本にいる人は住民票が挙げられました。国際バカロレアの試験を別にやっている大学ではその資格書の提出を求めているようです。他に住民票、パスポートの写しといった回答がありました。

公立大学における国際入試の現状に係るアンケート  
日本留学生試験をどのように活用していますか？

- 出願の基準として活用している（12大学）
- 総合得点に絡むことで合否判定に用いている（10大学）
- 出願の基準としつつ、得点を合否判定にも用いている（20大学）
- 提出は任意とし、提出があった場合は合否を決定する際の参考としている（1大学）
- 出願の基準としつつ、得点を合否判定にも用いている（8大学）

非認知能力（学習意欲や学び続ける力など）をどのように評価していますか？

- 面接あるいは面談（49大学）
- 志望理由書、推薦書、エントリーシート等の出願書類（13大学）
- 小論文（4大学）
- 口述試験、口頭試問（2大学）
- その他
  - ・ プロジェクト、イベントに参加した終了証明書
  - ・ グループディスカッション（春入学のみ）
  - ・ 実技試験（美術学科）

留学生に向けた入試広報活動をどの様に行っていますか？

- ・ 大学公式ウェブサイト
- ・ 各種進学雑誌アンケートへの回答により雑誌掲載
- ・ 日本語学校向けの説明会
- ・ Zoomによる日本留学フェアへの参加
- ・ JPSSへの入試情報掲載
- ・ JASSOや文科省の「日本留学海外拠点連携推進事業」が主催するイベント
- ・ 留学生向け入試ポータルサイトへの掲載

日本留学生試験の活用方法は 5 つのタイプに分けられました。出願基準として使う、合否判定に使う、両方というところがスライドに示す割合です。また、非認知能力については、ほとんどの大学が面接や面談といった、実際に対面することで評価しているようです。他には小論文や口述試験、口頭試問がありました。これらは面接あるいは面談に含まれるのかもしれませんが、このように使っているということになります。

留学生確保のための広報活動については、大学の公式ウェブサイトや関係雑誌への掲

載、現地の大学で開催される日本留学フェアへのオンライン参加、JASSO が主催するイベントへの参加が挙げられ、大学独自の取組みについてはアンケートから拾い上げることができませんでしたので、後日このようなことをやっているよとお知らせいただければありがたいと思います。

### 公立大学における国際入試の現状に係るアンケート

#### 国際入試を行う利点や国際入試に期待する点は何ですか？

- 多様性と多様性の確保
- 多様性、日本人学生への好影響
- 多様な能力を身につけた学生を求めため。
- 多数を占める日本人学生へのグローバルな視点の涵養と醸成
- 国際社会への貢献
- 多様性による大学の活性化。
- グローバル化、日本人学生との国際的なコミュニケーション（他文化交流）。
- 大学のグローバル化、学生の価値観の多様化
- 世界から優秀な人材を獲得し、世界的に評価される大学研究を行うため。
- 留学生の獲得に伴う学生の多様性、国際感覚を身に付ける機会の増加に期待している。
- ダイバーシティを推薦することで、学内の学生に新たな気づきや学びを与えること。
- 学習意欲の高い外国人留学生を選抜することで、日本人学生に刺激をもたらすことに期待。
- 対人関係の構築や多様性を受け入れ、共感する力に優れたグローバルな視野を持つ人材育成への期待。
- 大学の国際化の推進、多様性による幅広い学びの場の提供。

国際入試に期待する点については、「多様性」という言葉が非常に多く見受けられました。日本人以外の学生が入ってくることで多様な価値観に触れ、日本人学生に良い影響を及ぼす、大学の活性化、国際化への貢献等を期待する回答が多くありました。優秀な人材獲得という目的から「研究の面で活性化したい」という回答もありました。

### 公立大学における国際入試の現状に係るアンケート

#### 国際入試を行ううえで負担に感じていることは何ですか？

- 志願者の獲得
- 英語で記載された出願書類を確認しなければならないことや、出願書類の不備が多く、出願者とのやり取りが多いこと。
- 出願書類の情報入力、原本提出の郵送に時間が掛かること（特に国外在住者）。
- 出願資格・要件を確認する作業(各国の教育制度や提出書類の確認、受験者との連絡など)に負担を感じる。
- 募集要項の説明や、出願に必要な書類の説明が難しいこと。
- 受験者の能力評価。
- 出願書類の不備対応、在留資格の変更について
- 広報活動、受験生との連絡・調整、作問等の手配・対応等
- 出願資格の確認作業が煩雑である。また、提出書類が整わない志願者も多く事務処理上の負担が大きい。
- 願書受付まで志願者の有無が分からないため入試の準備が不要となるがある。
- 手続に時間がかかる、日本語のレベルの差が大きい
- 此度の新型コロナによる出入国規制や国際情勢の変化に左右されやすく、安定した入試の実施が難しいこと。
- 国内外での入試を実施しているため、体制を整えることに苦慮している。また、積極的な広報を行っているが、志願者数確保にも苦慮している。
- 書類が紙ベースであること、書類がさまざまな種類があること。

それから、ある意味でこれが一番気になっているところなのかもしれません。国際入試における実施上の負担についてです。定員を定めている大学にとっては、志願者の獲得が大きいと思います。アンケートにお答えになったのは事務職員の方が多いと思いますので、出願書類の確認や不備への対応、郵送等に係る作業時間の多さが問題点にあげ

られていました。また。受験者の能力評価の困難さも挙げられました。  
私からの報告は以上です。

---

**【池田・司会】** 今回、アンケートまで取っていただきありがとうございました。なかなか公立大学というところは見えづらいところもあったのですが、一口に公立大学といっても非常に多様なということもよく分かりましたし、入試の目的や選抜方法も非常に多様性があるということを感じました。また、後ほどパネルディスカッションの際に深く聞かせていただければと思います。■

## 全体会 2 ○ 報告 3

# 北海道大学における国際入試の改革と今後の展望

■飯田 直弘（北海道大学高等教育推進機構准教授）

北海道大学の国際入試について報告させていただきます。北海道大学の飯田と申します。本日はよろしくお願いいたします。

2023年5月19日  
令和5年度入研協大会(第18回)全体会2

北海道大学

北海道大学における国際入試の改革と  
今後の展望

飯田 直弘(北海道大学)

0. 目次	1
1. はじめに	
2. 北海道大学の国際入試	
3. 国際入試の現状と課題	
4. まとめと今後の展望	

北海道大学

本報告はこちらの4つのパートに分かれています。

<div data-bbox="1193 264 1214 293" style="text-align: right;">2</div> <div data-bbox="730 499 954 544" style="text-align: center;"><h2>1. はじめに</h2></div> <div data-bbox="1034 779 1214 824" style="text-align: right;"> 北海道大学</div>	<div data-bbox="1193 871 1214 900" style="text-align: right;">3</div> <div data-bbox="480 898 612 927" style="text-align: left;"><h3>1. はじめに</h3></div> <div data-bbox="480 949 1198 1160"><ul style="list-style-type: none"><li>・「国際入試」とは<ul style="list-style-type: none"><li>➤ 本報告では、学位の取得を目的とする教育プログラムへの入学を目的とする選抜を国際入試と呼ぶこととし、短期の教育プログラムへの参加を除く。</li></ul></li></ul></div> <div data-bbox="1034 1384 1214 1429" style="text-align: right;"> 北海道大学</div>
---	---

まず、本報告では、学位の取得を目的とする教育プログラムへの入学の際に行われる選抜を国際入試と呼ぶこととし、短期の教育プログラムへの参加等を除くこととさせていただきます。

<p style="text-align: right;">4</p> <p style="text-align: center;"><b>2. 北海道大学の国際入試</b></p> <p style="text-align: right;"> 北海道大学</p>
<p style="text-align: right;">5</p> <p style="text-align: center;"><b>2. 北海道大学の国際入試</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>①国際総合入試</li><li>②帰国子女入試(帰国生徒選抜)</li><li>③私費外国人留学生(学部)入試</li><li>④Integrated Science Program (ISP) 入試</li><li>⑤現代日本学プログラム課程 (Modern Japanese Studies Program) 入試</li></ul> <p style="text-align: right;"> 北海道大学</p>

北海道大学の 5 つの国際入試について、趣旨や目的、概要、選抜方法等について順を追ってご説明します。

2. 北海道大学の国際入試
6

**①国際総合入試**

- 「グローバル人材の育成のため、国や地域、学問分野を越えたボーダーレスなグローバル社会を生き抜き、リードする意欲と資質を持った人材を人物本位で選抜する」ことを目的として、平成30年度入試から導入。
- 平成23年度入試から導入された「総合入試」の国際版であり、入学者は本人の希望と1年次の成績により、2年次以降の移行先の学部・学科等が決定される。

 北海道大学

1 つ目は、国際総合入試です。本入試の目的は、「グローバル人材の育成のため、国や地域、学問分野を越えたボーダーレスなグローバル社会を生き抜き、リードする意欲と資質を持った人材を人物本位で選抜する」ことで、平成30年度入試で導入されました。平成23年度入試に導入された総合入試の国際版であり、入学時には学部・学科等の所属は決まっておらず、本人の希望と1年次の成績により、2年次以降の学部・学科等が決定されることになっています。

2. 北海道大学の国際入試
7

**・国際総合入試の概要**

<b>募集人員</b>	総合入試文系: 5名 総合入試理系: 10名
<b>要件</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IB</li> <li>・SAT Reasoning Test (又はACT) 及び SAT Subject Test</li> <li>・SAT Reasoning Test 又は ACT 及び AP Test</li> </ul>
<b>履修科目 受験科目</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IB、SAT、AP Test 及び ACT について、文系・理系のそれぞれで設定</li> <li>・日本語を母語とする者とししない者で履修科目等の条件が異なる。</li> </ul>

 北海道大学

国際入試の募集人員、要件、履修科目等については、こちらの表にあるとおりです。募集人員は文系・理系合わせて15名で、要件としてIB、SATまたはACT、AP Testが設定されており、それぞれ履修科目・受験科目が指定されています。

2. 北海道大学の国際入試		
IBの履修指定科目		
区分	対象	履修指定科目
総合入試 文系	日本語を母語とする者	English A (SL/HL)又はEnglish B (SL/HL)
	日本語を母語としない者	Japanese A (SL/HL)又はJapanese B (HL)
	全員	Group 3【Individuals and societies】の中から1科目(SL/HL)又はGroup 5【Mathematics】の中から1科目(SL/HL)ただし「applications and interpretation SL」を除く。
総合入試 理系	日本語を母語とする者	English A (SL/HL)又はEnglish B (SL/HL)
	日本語を母語としない者	Japanese A (SL/HL)又はJapanese B (HL)
	全員	Group 4【Sciences】の中から2科目(SL/HL)(うち1科目はPhysics、Chemistry、Biologyのいずれかであること)及びGroup 5【Mathematics】の「analysis and approaches HL」
<small>※言語科目については、それぞれの対象でTOEFL-IBTや日本語能力試験N1等の成績証明書等の提出に替えることができる。</small>  北海道大学		

ここでは、時間の都合上、IB、つまり国際バカロレアの履修指定科目のみをご紹介します。IB は文系・理系のそれぞれで全員共通で履修しなければならない科目が指定されており、また、日本語を母語とする者としらない者で指定科目が異なります。

2. 北海道大学の国際入試	
<p><b>・国際総合入試の選抜方法</b></p> <p>➤ 同一募集単位で、IB、SAT、ACT、AP Testを要件としているため、独自の方式で成績換算を行い、それに基づき選抜している。</p>	
<p><b>【多様な資格・テストの比較可能性・同等性】</b></p> <p>①シラバスや評価基準に関する資料</p> <p>②外国の資格承認機関の情報(次のスライド表1)</p> <p>③他の競合大学の要件(次のスライドの表2)</p> <p>④民間企業のサービスを利用</p>	
 北海道大学	

国際総合入試の選抜方法の特徴として、同一募集単位でIB、SAT、ACT、AP Testを要件としているため、独自の方式で成績換算を行い、それに基づき選抜している点が挙げられます。これは他大学の国際入試ではあまり見られない特徴であるかと思えます。これらの多様な資格、テストの比較可能性もしくは同等性を確保する方法としては、①シラバスや評価基準に関する資料の検討、②外国の資格承認機関の情報の参照、③競合大学の要件の参照、④民間企業のサービスの利用といった方法が挙げられます。また、これらに加えて、入学後の成績について追跡調査し、それに基づき成績換算表を再調整することも重要な点になります。

10

## 2. 北海道大学の国際入試

UCASタリフにおけるIBとAPのポイント換算  
 (出典: UCASウェブサイト(<https://wwwucas.com/ucas/tarif-calculator>) (2021年9月10日アクセス))

UCASタリフポイント	IB(全科目レベル)	IB(標準レベル)	AP
56	7		
48	6		
32	5		
28		7	5
24	4	6	4
20			3
16		5	2
12	3	4	1
8		3	
0	1-2	1-2	

バーミンガム大学の成績段階別比較表  
 (出典: バーミンガム大学ウェブサイト  
 (<https://www.birmingham.ac.uk/international/students/country/usa/index.aspx#EntryRequirementsTab>)に基づき報告者が作成  
 (2021年11月9日アクセス))

レベル	IB	AP	SAT/ACT
AAA	IB(DL)	555	SAT (得意科目): 1200, 100, 100 SAT R: 1380 ACT composite: 29
AA+	IB(DL)	555	SAT (得意科目): 1200, 100, 100 SAT R: 1380 ACT composite: 29
AA	IB(DL)	554	SAT (得意科目): 1200, 100, 100 SAT R: 1380 ACT composite: 29
AA-	IB(DL)	554	SAT (得意科目): 1200, 100, 100 SAT R: 1320 ACT composite: 27

※上では原典を示した。2つの表の出典は、飯田直弘(2023)「イギリスコロナ禍におけるイギリスの大学入学者選抜の現状と課題—GCE-Aレベル試験の中止と代替措置を中心として」、倉元直樹(監)、倉元直樹・久保沙織(編)『コロナ禍に挑む大学入試(2) 世界と日本編』所収、金子書房、pp. 71-95。

**北海道大学**

②外国の資格承認機関の情報については左上の表に示しました。また、③競合大学の要件については、右下の表に例を示しました。これらを参照することにより、IB, AP, SAT の成績が相互にどのように対応しているのかが分かります。

11

## 2. 北海道大学の国際入試

**【第1次選考】**

- 成績評価証明書、調査書、志望理由書・自己推薦書等に基づき選考を行う。

**【第2次選考】**

- 面接、成績評価証明書等に基づき総合的に判定する。面接は課題論文(IBの場合はEE)を含む出願書類の内容に基づき実施する。

区分	第1次選考		第2次選考	
	総合入試	成績評価証明書 (IB, SAT(ACT), AP Test)	60点	面接
文系・理系	調査書 自己推薦書・志望理由書	40点	出願書類等	30点

**北海道大学**

国際総合入試の選抜は2段階で行われています。第1次選考では成績評価証明書、調査書、志望理由書・自己推薦書等に基づき選考を行います。第2次選考は面接と成績評価証明書等に基づき総合的に判定することになっており、面接は課題論文を含む出願書類の内容に基づき実施します。それぞれの配点については、表に示したとおりです。

2. 北海道大学の国際入試
12

②帰国子女入試(令和6(2024)入試から帰国生徒選抜)

➤ 日本国籍を有する者又は日本国の永住許可を得ている者で、海外に在住し、外国の学校教育を受け、一定の基礎資格・要件(12年の課程を修了(見込み)又は同等の学力)を備えた者を対象とする。

 北海道大学

2. 北海道大学の国際入試
13

・帰国子女入試の概要

募集人員	全募集単位(学部・学科・専攻)で若干名
基礎資格	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国において、学校教育における12年の課程を修了(見込み)</li> <li>・国際バカロレア、アビトゥア(独)、バカロレア(仏)、GCE-Aレベル(英)</li> </ul>
要件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国において、在住国の正規の教育制度に基づく高等学校に最終学年を含む2年以上継続して在学</li> <li>・基礎資格取得後2年以内</li> <li>・TOEFL-iBT又はTOEIC L&amp;Rのスコア(医学部医学科のみ)</li> </ul>

 北海道大学

2つ目の国際入試である帰国子女入試の説明に移りたいと思います。出願資格に関するこちらのスライドの説明は、他の大学と共通する部分になるかと思しますので割愛させていただきます。帰国子女入試の募集人員は若干名であり、基礎資格として、12年の課程の終了の他に、IB、ドイツのアビトゥア、フランスのバカロレア、イギリスのGCE-Aレベルが設定されています。また、要件として、医学部医学科のみ英語資格のスコアを課しているのが特徴といえます。

2. 北海道大学の国際入試

・帰国子女入試の選抜方法

【第1次選考】

➤ 出願書類により選考を行う。

【第2次選考】

➤ 課題論文・総合問題・適性試験及び面接により選考を行う。



学部・学科等	出願書類		学部・学科等	出願書類		配点
	資格・成績証明書等	配点		資格・成績証明書等	配点	
文学部	資格・成績証明書等	50	文学部	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	30		推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	30	
教育学部	資格・成績証明書等	50	教育学部	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書	20		推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	20	
法学部	資格・成績証明書等	60	法学部	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	40		推薦書 自己推薦書	30	
経済学部	資格・成績証明書等	60	経済学部	資格・成績証明書等	60	
	推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	40		推薦書 自己推薦書	40	
数学科	資格・成績証明書等	60	数学科	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書	40		推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	30	
物理学部	資格・成績証明書等	40	物理学部	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書	20		推薦書 自己推薦書 課外活動の記録	20	
化学部	資格・成績証明書等	60	化学部	資格・成績証明書等	40	
	推薦書 自己推薦書	40		推薦書 自己推薦書	40	
生物科学部	資格・成績証明書等	40	生物科学部	資格・成績証明書等	50	
	推薦書 自己推薦書	20		推薦書 自己推薦書	20	

第1次選考の配点

学部・学科等	配点	おこい
文学部	推薦論文 50	推薦文、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 30	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
教育学部	推薦論文 50	推薦文、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 20	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
法学部	推薦論文 60	推薦文、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 40	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
経済学部	推薦論文 60	推薦文、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 40	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
数学科	適性試験 100	基礎的な知識及び技能の検定、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 30	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
物理学部	適性試験 100	基礎的な知識及び技能の検定、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 20	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
化学部	適性試験 100	基礎的な知識及び技能の検定、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 40	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
生物科学部	適性試験 100	基礎的な知識及び技能の検定、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。
	推薦書 20	推薦書、推薦状の提出、推薦状の提出、推薦状の提出。

第2次選考の配点

帰国子女入試の選抜は2段階であり、第1次選考では出願書類により選考を行い、第2次選考では課題論文、総合問題、適性試験および面接により選考を行うことになっています。参考までに、各募集単位の第1次選考と第2次選考の配点を示しましたが、時間の都合上、こちらの説明は割愛させていただきます。後ほど各自でご参照いただければ幸いです。

2. 北海道大学の国際入試
18

**③私費外国人留学生(学部)入試**

➤ 日本国籍を有していない者、かつ、日本国の永住許可を得ていない者で、一定の基礎資格・要件(外国において、学校教育における12年の課程を修了(見込み)又は同等の学力など)を備えた者を対象とする。

 北海道大学

2. 北海道大学の国際入試
19

**・私費外国人留学生(学部)入試の概要**

<b>募集人員</b>	全募集単位(学部・学科等)で若干名
<b>基礎資格</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国において、学校教育における12年の課程を修了(見込み)又は同等の学力</li> <li>・国際バカロレア、アビトゥア(独)、バカロレア(仏)、GCE-ALレベル(英)</li> </ul>
<b>要件</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国の学校において、最終学年を含む2年以上継続して在学</li> <li>・日本留学試験(科目・スコア指定あり、過去2年以内)</li> <li>・TOEFL-iBT又はTOEIC L&amp;Rのスコア(医学部医学科のみ)</li> </ul>

 北海道大学

3つ目の国際入試である私費外国人留学生入試についてご説明します。こちらに出願資格を示しましたが、先ほどの帰国子女入試と同様に、他大学と共通する部分になるかと思えます。私費外国人留学生入試の募集人員、基礎資格および要件については、日本留学試験の科目とスコアが要件として設定されている点以外は、帰国子女入試と共通する部分が大きいです。



学 部 / 学 科 名 義	日本語中級以上の読解力と日本語能力	入 試 科 目	
		入 試 科 目	備 考
理 学 部 理 学 科	日本語 理科 物理、化学、生物(中心科目) 数学 (コース2)	英語 物理 (物理、化学、生物) の基礎的知識 を有し、その中心科目 を修得した。	
工 学 部 応 用 理 工 学 科 (応用数理工学コース)	日本語 理科 化学、生物(中心科目と物理) 数学 (コース2)	英語	
工 学 部 応 用 理 工 学 科 (応用化学コース)	日本語 理科 物理、化学、 生物(中心科目と化学)		
工 学 部 機 械 工 学 科	日本語 理科 化学、生物(中心科目と物理) 数学 (コース2)	英語、専攻領域 の専門知識。	
工 学 部 機 械 工 学 科	日本語 理科 化学、生物(中心科目と物理) 数学 (コース2)		
農 学 部 生 物 資 源 科 学 科	日本語 理科 化学、生物(中心科目と物理) 数学 (コース2)	英語、専攻領域 の専門知識。 [理科、専攻領域 科目、英語] [英語 I、II、III、 IV、V、VI、VII、 VIII、IX、X、XI、 XII] の修得。同時 英語能力検定試験 [TOEFL iBT、TOEFL PBT] のスコアが ある。[TOEFL iBT スコア] のスコアが ある場合は、その スコアを提出する。	
農 学 部 生 物 資 源 科 学 科	日本語 理科 物理、化学、生物(中心科目) 数学 (コース2)		
農 学 部 生 物 資 源 科 学 科	日本語 理科 化学、生物(中心科目と物理) 数学 (コース2)	英語	
農 学 部 生 物 資 源 科 学 科	日本語 理科 物理、化学、生物(中心科目) 数学 (コース2)		
新 学 部 新 学 部	日本語 理科 物理、化学(中心科目と生物) 数学 (コース2)	英語 理科 (物理、化学、 生物) の基礎的知識、海 外の進路先も修得した 場合、その進路先 - I (英語 試験) がある。	
主 任 学 科	日本語 理科 物理、化学、生物(中心科目) 数学 (コース2)	英語 物理	

見にくくて恐縮ですが、こちらの表は実施科目等の一覧になります。帰国子女入試の配点と同様に、後ほどご参照ください。

2. 北海道大学の国際入試
23

### ④ Integrated Science Program (ISP) 入試

- 外国人留学生を対象とした、英語による理系学士・修士課程プログラム(H29年度入試～)。
- 一流の研究者や技術者となるスキルのみならず、現代の研究者や技術者に必要とされるリーダーとしての資質も育成し、理系での国際的リーダーの輩出を目指す。

(北大ウェブサイトより)

北海道大学

2. 北海道大学の国際入試
24

**・ISP入試の概要**

<b>募集人員</b>	全募集単位(物理・化学・生物)で若干名
<b>基礎資格</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国において、学校教育における12年の課程を修了(見込み)又は同等の学力</li> <li>・国際バカロレア、アビトゥア(独)、バカロレア(仏)、GCE-Aレベル(英)</li> <li>・認定を受けた、外国人を対象に教育を行うことを目的として日本国内に設置された教育施設で12年の課程を修了(見込み)</li> </ul>
<b>要件</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を母語とする者</li> <li>・英語を教授言語とする中等教育又は高等教育を4年以上受けた者</li> <li>・TOEFL-iBT又はIELTSのスコア(過去2年以内)など</li> </ul>

北海道大学

4つ目の国際入試である Integrated Science Program 入試の説明に移りたいと思います。本入試は、外国人留学生を対象とした英語による理系の学士・修士課程プログラムであり、平成 29 年度入試で導入されました。一流の研究者や技術者となるためのスキルのみならず、現代の研究者や技術者に必要とされるリーダーとしての資質も育成し、理系での国際的リーダーの輩出を目指しています。

スライドには示していませんが、本入試は理学部が実施しており、学部卒業後は理系の大学院への進学が可能となっています。また、募集区分として、物理重点選抜群、化学重点選抜群、生物重点選抜群があり、各選抜群単位で募集を行っています。所属学科の決定は、本人の希望および成績に基づき 1 年次の第 1 学期終了時に行います。

Integrated Science Program, ISP の募集人員は若干名となっています。基礎資格については、帰国子女入試や私費外国人留学生入試と同様に、12 年の課程の修了や IB, アビトゥア, バカロレア, そして, GCE-A レベルが設定されています。また、英語に関する要件があります。

2. 北海道大学の国際入試
25

**・ISP入試の選抜方法**

**【第1次選考】**

➤ 出願書類により選考を行う。

配点	
成績証明書、国家試験等の統一試験成績評価証明書、推薦書など	100点

**【第2次選考】**

➤ スカイプ面接により総合的に判定する。面接では重点選抜群ごとの基礎学力を確認するための口頭試問を行う。

配点	
面接	100点

北海道大学

選抜は 2 段階で実施しています。第 1 次選考では成績証明書，国家試験等の統一試験成績評価証明書，推薦書などの出願書類により選考を行い，第 2 次選考では Skype 面接により総合的に判定することになっています。なお，面接では，重点選抜群ごとの基礎学力を確認するための口頭試問を行うことになっています。

2. 北海道大学の国際入試
26

**⑤現代日本学プログラム課程( Modern Japanese Studies Program )入試**

- 外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラム(H27年度入試～)
- 英語で入学することができ、日本語能力が十分でない学生に対しては入学前の6ヶ月間、初級日本語教育を行う予備課程がある。
- 日本語及び日本の文化・社会に関する総合的な教育を行う。

(北大ウェブサイトより)

 北海道大学

最後の 5 つ目の国際入試である現代日本学プログラム課程入試についてご説明します。本入試は，外国人留学生を対象とした 4 年間の学士課程プログラムであり，平成 27 年度入試で導入されました。英語で入学することが可能で，日本語能力が十分でない学生に対して，入学前の 6 か月間，初級日本語教育を行う予備課程があります。カリキュラムの特徴は，日本語および日本の文化・社会に関する総合的な教育を行う点にあります。

2. 北海道大学の国際入試
27

**・現代日本学プログラム課程入試の概要**

<b>募集人員</b>	第1期: 12名 第2期: 8名
<b>基礎資格</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国において、学校教育における12年の課程を修了(見込み)又は同等の学力</li> <li>・国際バカロレア、アビトゥア(独)、バカロレア(仏)、GCE-Aレベル(英)</li> <li>・認定を受けた、外国人を対象に教育を行うことを目的として日本国内に設置された教育施設で12年の課程を修了(見込み)</li> </ul>
<b>要件</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を母語とする者</li> <li>・英語を教授言語とする中等教育又は高等教育を4年以上受けた者</li> <li>・TOEFL-iBT又はIELTSのスコア(過去2年以内)など</li> </ul>

 北海道大学

現代日本学プログラム課程入試の募集人員は、10月に募集が開始され2月に合格発表がある第1期が12名、2月に募集が開始され5月に合格発表がある第2期が8名となっています。基礎資格と要件については、先ほどご説明したISPとほとんど同じものになりますので、説明は割愛させていただきます。

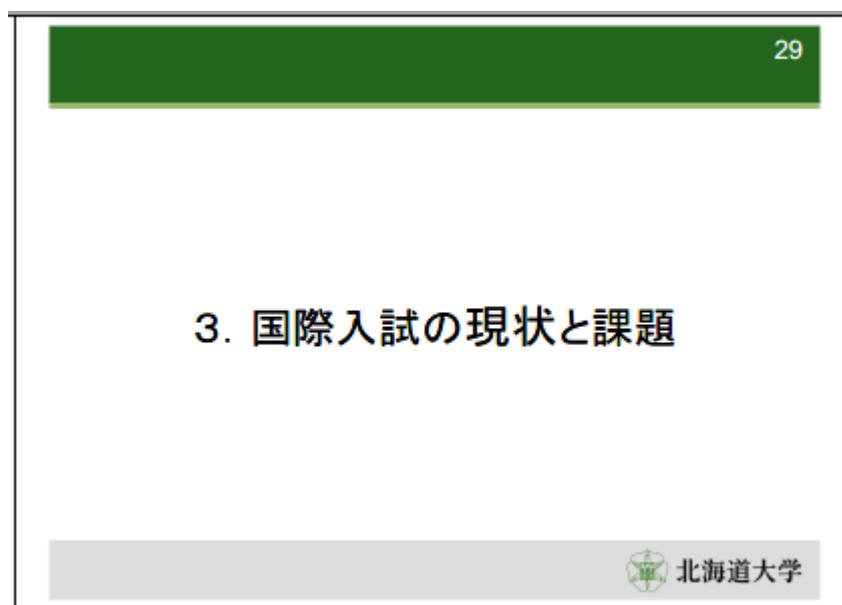
選抜方法については、成績証明書やpersonal statementなどの出願書類の審査および面接の結果を総合的に評価して選考を行うことになっています。面接ではSkypeを利用し、基礎的能力および適性を判定します。

以上で、5つの国際入試の説明は終わりです。こちらに示したデータは配付資料にはありませんが、国際入試の志願者数の過去5年間の変化を示したものです。この5年間では、私費と帰国が減少傾向にあるのに対し、ISPは増加傾向にあります。令和5年度の合格者数については、国際総合が36名中14名、帰国が52名中8名、私費が109名中4名、ISPが145名中12名、現プロ（現代日本学プログラム課程入試）が91名中23名となっています。

こちらの円グラフは、令和5年度のISPの国別志願者数の割合を示したものです。タイが最も多く、フィリピン、インドネシア、中国がそれに続きます。

一方で、こちらは同じく令和5年度の現代日本学プログラム課程入試の国別志願者数の割合を示したものです。ISPと同じくタイが最も多く、それにアメリカ、中国を含めた上位3カ国が全体の6割を占める状況です。また、アメリカの志願者が20%と多いのがISPと異なる特徴だといえます。

北大の国際入試の制度に関する説明は、以上です。



3. 国際入試の現状と課題
30

**・入試制度としての現状と課題**

- 多様な入試(募集単位)が存在するが、一部でお互いが志願者を取り合うようなことが起こる可能性がある。
- 国際総合入試と帰国子女入試は、同一日程で実施されることになったが、国際総合入試は入学時点では学部・学科等は決定されないため、差別化できる部分もある。

 北海道大学

続いて、国際入試の現状と課題について4つの視点からまとめたいと思います。

1つ目の視点は入試制度に関するものです。国際総合入試と帰国子女入試は以前から同一日程で実施されていますが、令和6年度入試から、国際総合、帰国、私費はすべて同一日程で実施されることになっています。また、国際総合入試については総合型選抜の影響も受けます。そのため、一部で志願者を取り合うようなことが起こる可能性があります。その一方で、国際総合入試は入学時点では学部・学科等が決定されないため、その他の入試と差別化できる部分もあります。

3. 国際入試の現状と課題
31

**・入試広報に関する現状と課題**

- この数年間はコロナ禍の影響により、入試広報を組織的・戦略的に行うことに限界があった。
- 後述する入学辞退者の問題にも関連するため、外国・国際資格の制度に関する知識及び国際入試の概要についてしっかり把握したうえで入試広報を行い、適切なマッチングを実現する必要があります。
- 入試広報の際に、さまざまな情報を収集する。

 北海道大学

2つ目の視点は、入試広報に関するものです。この数年間はコロナ禍の影響により、入試広報を組織的・戦略的に行うことに限界がありました。後述する入学辞退者の問題にも関連するため、外国・国際資格の制度に関する情報および国際入試の概要についてしっかり把握した上で入試広報を行い、適切なマッチングを実現する必要があります。また、入試広報の際に、各学校のカリキュラムや進路指導の実態に関する情報を適宜収集することも重要な点になります。

3. 国際入試の現状と課題
32

**・要件と選抜方法に関する現状と課題**

- 同一募集単位で多様な資格・テストの科目や成績を要件とし、さらにその成績に基づき選抜を行う場合、いかに比較可能性・同等性を担保するかが重要となる。
- 成績換算には限界があるので、書類審査や面接の妥当性・信頼性の向上とあわせて考える必要がある。

 北海道大学

3つ目の視点は要件と選抜方法に関するものです。国際総合入試の部分でご説明したとおり、同一募集単位で多様な資格もしくはテストの科目を要件とし、さらにその成績に基づき選抜を行う場合、いかに比較可能性・同等性を担保するかが重要となります。成績換算には限界があるので、書類審査や面接の妥当性・信頼性の向上と併せて考えていく必要があります。

3. 国際入試の現状と課題
33

**・入学前後に関する現状と課題**

- ①入学辞退者等の問題
- ②IBの予測スコアと最終スコアの格差の問題
- ③入学後の教育

- ISPと現代日本学プログラムを除き、一般選抜による学生と同様の教育を受けることになる。
- 国際総合入試ではメンターを配置。英語の授業、新渡戸カレッジへの参加。

 北海道大学

4つ目の視点は、入学前後の手続きや教育に関するものです。具体的には、入学辞退者や中途退学者などの問題、IBの予測スコアと最終スコアの格差の問題、入学後の教育の問題が存在します。特に3番目の入学後の教育については、ISPと現代日本学プログラム課程を除き、国際入試の入学者は一般選抜による学生と同じ教育を受けることになるため、ミスマッチを引き起こす可能性があります。その一方で、国際総合入試では、メンターの配置やグローバル人材育成プログラムである新渡戸カレッジへの入校など、入学者のニーズに応えるための取り組みが存在します。

34

## 4. まとめと今後の展望

 北海道大学

最後にまとめと今後の展望について私見を述べさせていただきます。

35

4. まとめと今後の展望

- ・世界の趨勢としては、多様な学位・資格を承認し、より円滑なクロス・ボーダーが可能となりつつあるが、日本の国際入試は小規模・局所的なものにとどまる。
- ・新自由主義的な政策背景により、高等教育の市場化が一層進み、今後グローバルな競争が激化する。
- ・インドやアフリカといった第三世界の高等教育ニーズの拡大にどのように対応するのが重要となる。

将来、国際入試の規模が拡大し、志願者数や倍率が増加した際、改めて評価の妥当性・信頼性及び入学者選抜の公平性・公正性が問題になることが予想される。

 北海道大学

第 1 に、世界の趨勢としては、多様な学位・資格を承認し、より円滑なクロス・ボーダーが可能となりつつありますが、日本の国際入試は小規模・局所的なものにとどまるといえます。第 2 に、新自由主義的な政策背景により、高等教育の市場化が一層進み、今後グローバルな競争が激化することが予想されます。第 3 に、第 2 の点と関連して、インドやアフリカといった第三世界の高等教育ニーズの拡大にどのように対応するのが重要になると考えられます。最後に、以上の点が大学入学者選抜に与える影響として、将来、国際入試の規模が拡大し、志願者数や倍率が増加した際、改めて評価の妥当性・信頼性および入学者選抜の公平性・公正性が問題になることが予想されます。

主要参考文献・資料
36

- ・飯田直弘 (2023)「イギリスコロナ禍におけるイギリスの大学入学者選抜の現状と課題—GCE-ALレベル試験の中止と代替措置を中心として」、倉元直樹(監)、倉元直樹・久保沙織(編)『コロナ禍に挑む大学入試(2) 世界と日本編』所収、金子書房、pp. 71-95。
- ・北海道大学 (2022)「令和5(2023)年度学生募集要項(国際総合入試)」。
- ・北海道大学 (2022)「令和5(2023)年度学生募集要項(帰国子女入試)」。
- ・北海道大学 (2022)「令和5(2023)年度学生募集要項(私費外国人留学生(学部)入試)」。
- ・Hokkaido University (2022) "2023 Enrollment Application Guidelines: For Self-Supported International Students Applying to the Integrated Science Program, Undergraduate Program".
- ・Hokkaido University (2022) "2024 Enrollment Application Guidelines: Self-Supported International Students Applying to the Modern Japanese Studies Program".

JSPS科学研究: JP23K02102


北海道大学



ご清聴いただきありがとうございました。


北海道大学

北海道大学の報告は以上となります。なお、本報告資料の作成にあたって、本学入試課の国際入試担当である山田係長にさまざまなご助言をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。ご清聴いただきありがとうございました。

【司会・池田】 本学国際入試ということでいろいろなタイプをやっていますが、特に国際総合入試において国が進める IB だけではなく、SAT や ACT でも受験できるということが特徴なのかなと思います。また後ほどパネルディスカッションで詳しくお話を聞かせてください。■

## 全体会 2 ○ 報告 4

## IB校である札幌開成中等教育学校のキャリア教育はなぜ大きな挑戦なのか？

■西村 里史（市立札幌開成中等教育学校副校長）

市立札幌学校開成中等教育学校の西村と申します。どうぞ今日はよろしくお願ひします。



## 自己紹介



## 西村 里史(にしむら さとし)

- 北星学園大学英文学科(1996年卒業)
- 北星学園大学大学院  
言語文化コミュニケーション専攻(2004年修了)
- 清田高校グローバルコース設立(2005年)
- 開成中等教育学校設立(2015年)
- 国際バカロレア(IB)公式ワークショップリーダー
- IB 確認訪問メンバー

こういった場面でお話をさせていただく機会を頂戴しまして、私としては本当にうれしく思っています。実態として私たちの学校の取り組みなどをお話しさせていただきながら何か参考になることが少しでもあればと思っています。

開成中等学校の開校が 2015 年になりますが、私はその時からこちらに赴任をしています。これまでの流れを含めながら、この学校で育っていった生徒、学生たちについてもお話しできればと思っています。

## 札幌市の挑戦



課題探究的な学習と国際バカロレア

札幌市の教育が目指す人間像

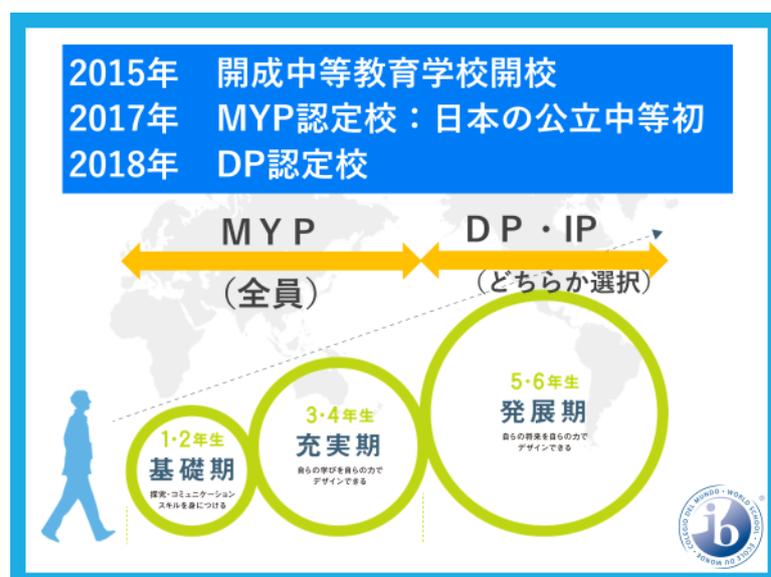
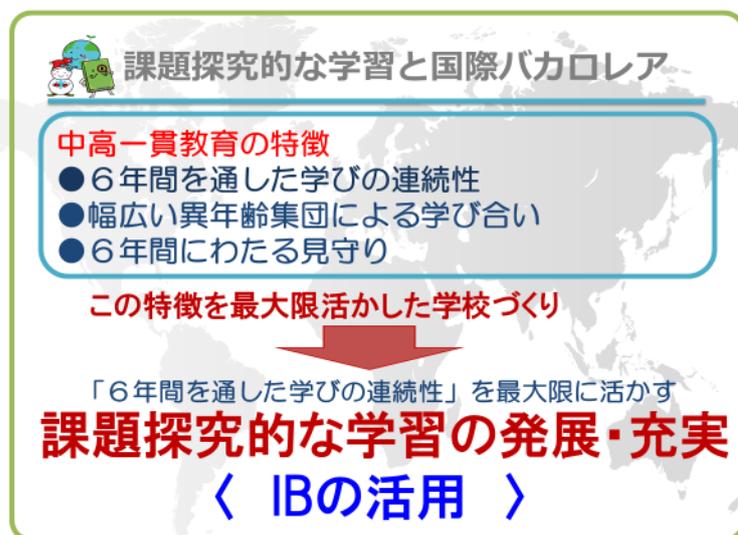
**「自立した札幌人」の育成**

「生涯にわたって学び続ける力」が必要

「なぜ？」 「どうして？」  
からはじまる探究を繰り返す  
**課題探究的な学習**

札幌市内には 300 校の公立の学校があります。小学校が 200 校、中学校が 100 校、そして高等学校、本校の中等教育学校を含めて 8 つあり、それでほぼ 300 校ということになります。札幌市教育委員会としては、この開成中等教育学校をつくる上でどういった学校づくりをしていこうかということで、自立した札幌人、つまりは生涯にわたって学び続ける力を持った人として成長していくことにより、その中でふるさと札幌に思いを持ちながらさまざまな場所で活躍し、平和的に生きていく、そういった人を育成していこうということを掲げています。そのためには、課題探究的な学習にしっかりと取り組

んでいくことが強く望まれているし、これこそが人として成長していく、育っていくことにつながると考えた経緯があります。

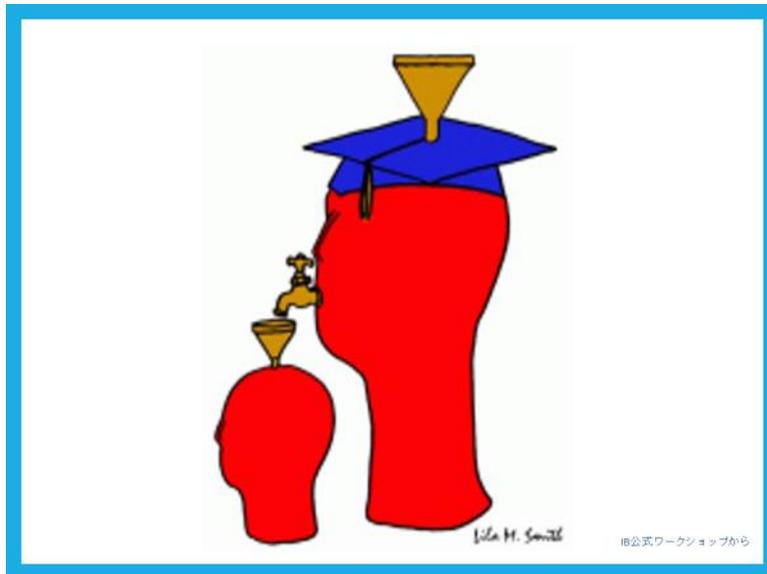


こうして、中等教育学校の6年間にわたってこのような特色、特徴を持たせた学校づくりをしていくことになりました。その際、いかにして課題探究的な学習を実践するかが議論になり、IBの活用によって実践・達成していけるのではないかと考えました。

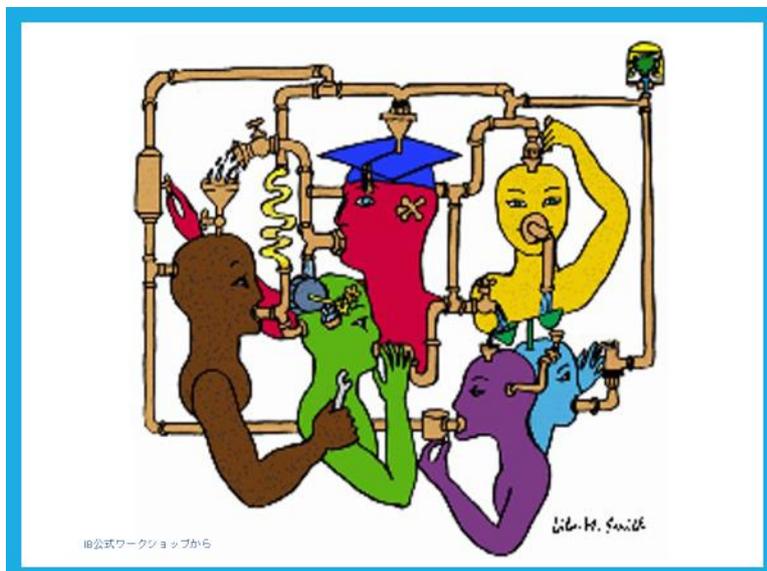
基礎期・充実期・発展期と2年ごとに区分を設定する形が決まり、2015年に開校しました。その後MYPの認定を受けて現在に至っています。2018年度までに日本国内でIBの学校を200校つくろうという文部科学省のプロモーションと開校時期が重なったため、多くの注目を浴びることになりました。

あなたは、

国際バカロレア (IB)  
を知っていますか？



簡単ではありますが、少し IB についてもお話をさせていただきたいと思います。  
これが一つの教育のイメージです。



もう一つがこのようなイメージです。皆さまが携わっている教育、もしくは教育現場、学校、大学ではどのようなイメージをお持ちでしょうか。どちらのイメージに近いでしょうか。



### IBの特徴



- ◇学習者を中心に置く
- ◇学習者が身につける「学習の方法 (ATL)」が設定されている
- ◇グローバルな視野を育てる
- ◇探究的な学習によって学びを深める

➡ 「主体的・対話的で深い学び」

IB は後者が学びであり教育であるという考えを持っています。学習者が中心であり、学習者が学習の方法を身に付けていくということです。グローバルな視野を育て、探究学習によって学びを深めることが柱として置かれている教育プログラムになっています。

## IBの学習 = 構成主義

- 探究・調査
- 知識や創造性の表現
- 学習とは知識の獲得より創造する過程

この構成主義的な考え方が土台になっており、私たち教職員もこの考えを踏まえて授業づくりや授業以外での教育活動に取り組んでいます。

とりわけ、私たちが授業づくりにおいて重視しているのは ATL（学習の方法）と呼ばれている 10 項目です。こういった力を育み、伸ばすことが非常に大事だとして、IB のプログラムとして規定されているものです。

## IBの使命

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心を持って生涯にわたって学び続けるように働きかけます。

## 国際バカロレアの教育

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指す。



このような IB の使命を持ちながらそれぞれのプログラムが進んでいるところです。特に、人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人。国際入試、それからこれからのグローバル社会においてとても大事な視点となってくるのではないかと考えています。



本校ではこのIBのプログラムMYP（Middle Years Programme）に全員が取り組んでいます。これはIBが作成したプログラムモデルです。中心に学習者の像が書かれています。外側の白枠には学習の方法，概念としてのCONCEPTSがあります。



本校で行っているもう一つのプログラムはDP（ディプロマプログラム）と呼ばれているもので、大学受験、大学進学のためのプログラムです。本校では5年生、6年生、つまり高2、高3に当たる生徒たちが選択して取り組んでいます。学年160名のうち、DPを選択するのが10名前後ぐらい、1割もいかないぐらいです。



### 開成中等の総括的評価課題の例

- ① 日常会話を文法的に分析する **レポート**
- ① 自分の日常生活を紹介する **ビデオ作成**
- ① 朝廷と鎌倉幕府の職制の特色を比較する **レポート**
- ① 「人はなぜ歌うのか」に関する **レポート**
- ② 原始モデルを検証する実験 **レポート**
- ② 子どもが喜ぶおもちゃの **仕様書を作成する**
- ③ テーマにふさわしいダンスを班で **つくり、まとめ、表現する**
- ③ 子供や家族に役立つものを考案し **作成する**
- ③ 英語の「**災害パンフレット**」を作成する



MYP における課題の一部をお示ししています。朝廷と鎌倉幕府の職制の特色を比較するレポートや人はなぜ歌うのかに関するレポートを書く、テーマにふさわしいダンスを班でつくり、表現するといったことに中学校 1 年生から取り組んでいます。「総括的評価課題」というのは、これで成績をつけているということです。



### DPの外部試験（過去問）

**【英語 (Paper 1 =90分ライティング)】2021年11月 ※一部抜粋**

- 課題のテーマと記述の様式(メールやSNS投稿等)を選択
- 450～600語

最近聞いたポッドキャストの内容が協力的な友情関係が10代の幸福に大きく関わるというものであった。ポッドキャストを聞いて自分自身の友情について考えさせられた。ポッドキャストの内容を要約し、自身の考えや経験と照らし合わせ、どの程度その内容に同意できるかについて、親友にテキストを書くことにした。



DP を選択した生徒たちはどのような学問的な取り組みをしているのかといいますと、せっかくですので DP の実際の試験を一部ご紹介します。これは英語, Language B のテストですが、こういった問題が出されています。

IB 入試を導入している大学の中には、TOEFL や TOEIC の点数の提出を求める大学もありますが、本校の生徒たちの様子を見ていますと非常に英語のレベルが高いです。大体、英語の準 1 級は持っていないと DP の英語、もしくは DP の学習は非常に難しいです。DP へ進んだ生徒たちはそういったような英語のレベルのイメージを持って学習しています。

 **DPの外部試験（過去問）**

---

**【歴史 (Paper 3 =90分)】2022年5月 ※一部抜粋**

**○課題のテーマを3つ**

- **貿易と交流：中世の世界におけるシルクロード (750～1500年)**
  - ・東西を結ぶうえで商人は探検家よりも重要であったとする主張にどの程度同意するかを述べなさい。
  - ・「環境の問題は、15世紀にシルクロードが衰退した主な原因であった」。この主張について論じなさい。
- **東アジアの初期の近代化と帝国の衰退 (1860～1912年)**
  - ・「明治時代の日本における社会的な発展は、経済的な発展よりも重要であった」。この主張について論じなさい。



これは History の試験の一部です。ある主張について論じる問題がほとんどです。

 **DPの外部試験（過去問）**

---

**【生物 (Paper 2 =75分)】2021年11月 ※一部抜粋**

- **海面水温の上昇がサンゴ礁に与える悪影響について、左ページの表から得られるデータから根拠を詳しく述べなさい。**
- **研究者は、サンゴ被度 (%) にはある閾値が存在し、それを下回ると罹患率がかなり低く維持される傾向にあると結論づけた。表のデータを用いて、その閾値を特定しなさい。**



これは Biology の試験の一部です。表は省略していますが、こういった表を読み解く、あるいは実際の実験手順を確認した上で問題に取り組んでいます。



## DPの外部試験（過去問）

【言語と文学（HL Paper 1 =90分）】2022年5月 ※一部抜粋

○課題文の設問に対する分析

■ 次のテキストは、お笑いタレントのタモリ（本名：森田一義）が、著名な漫画家であった赤塚不二夫の葬儀において読んだ弔辞を書き起こしたものである。この葬儀には多くの人が参列し、また、その模様はテレビで中継された。

設問：この弔辞における言葉遣いを分析し、これがどのような効果をもたらしているか論じなさい。



Language and Literature という外部試験は非常にユニークです。この問題ではこの弔辞における言葉遣いを分析し、どのような効果をもたらしているかを論じる問題が出題されました。DP の 45 点満点で採点されます。

札幌開成中等では  
どうしているのか？

「なぜ大きな挑戦なのか？」とタイトルをつけさせていただきましたが、日本の多くの中学校や高校であまりやっていない取り組みをこの IB を活用することによって実践しているということがあろうかと思えます。

 開成中等の特徴（IB校として）

### 1. 評価基準を生徒に提示

- 目標・ゴールがわかる
- 自己評価ができる
- 評価が公正・公平である



 開成中等の特徴

### 2. 2時間連続の100分授業

- じっくり探究ができる
- 協働の学びの場面を設定しやすい
- まとめ・発表・振り返りができる



 開成中等の特徴

### 3. 宿題を出さない

- 勉強は「するもの」
- 自分の「？」を大切にする学び
- 自己管理スキルの育成



 **開成中等開校の特徴**

---

### 4. 定期試験をしない

- 単元毎に総括的評価課題がある
- 全ての教科が等しく大切である
- テストに作用されない教育活動



その特色の一つとしては2時間連続の100分授業を行っており、中学校1年生からじっくりと探究しながら取り組んでいます。宿題は出していないというのもユニークかもしれません。先ほどお話ししたように、レポート、動画作成、プレゼンテーションで評価していますので、定期試験は行っていません。

 **開成中等開校の特徴**

---

### 5. キャリア支援

- 自分プレゼン(生徒主体の三者面談)
- 模試は校外で自主的に受ける
- キャリアコミュニティ(異学年合同進路探究)



それから、キャリア支援については、多くの学校では、教員がある程度主導する進路指導が行われていると思いますが、本校では違うやり方を採っています。



## よく問われること

この教育で大学進学は  
大丈夫ですか？



## 日本の大学のIB入試

日本の大学難関校  
DPスコア(45点) 平均約38点  
※24点以上でDP資格取得

海外の大学

- マサチューセッツ工科大学 39点
- ロンドン大学 37点
- シカゴ大学 30点



## よく問われること

大学の大学ランキングの  
上位大学に進学している

- ロンドン大学 (英)
- マンチェスター大学 (英)
- メルボルン大学 (豪)



本校を訪れる方から「大学進学は大丈夫でしょうか」と聞かれることがあります。ただ、探究の学びを通じ、自分たちの将来について非常にクリティカルに、建設的に、プロダクティブに考えることができる生徒たちが多いです。世界ランキングの上位大学に進学している生徒もいます。この部分はあまり表立った言い方はしないですが、そういった生徒が育っていることをお話ししています。

DP のフルスコアは 45 点ですが、日本の大学進学に求められる平均点数は 38 点程度です。海外の大学ではこのようなスコアが求められます。



### 日本の大学入試とのギャップ

## 学生に何を求めますか？

- 知識量
- 解答のスピード
- 応用力・転移
- 協働性





### Approaches To Learning



- ◇ コミュニケーション (communication)
- ◇ 協働 (collaboration)
- ◇ 情動 (affective)
- ◇ 振り返り (reflection)
- ◇ 情報リテラシー (information literacy)
- ◇ メディアリテラシー (media literacy)
- ◇ 整理整頓 (organization)
- ◇ 批判的思考 (critical thinking)
- ◇ 創造的思考 (creative thinking)
- ◇ 転移 (transfer)

➡
「資質・能力」


大学としてどういった学生を求めているのかというところを思いつつ、実際に本校で行われている学びは、大学でもかなり活用できるのではないかと思います。

改めて、こういった力を育む学びのあり方を、大学入試の中においても見取っていたきながら、DP を選択する生徒たち、探究の学びをしている生徒たちが進んでいけるとうれしく思っています。こういった取り組みをしている中等教育学校があるということを知っていただけるととてもうれしく思います。

## 参考文献

&lt;書籍・ガイド&gt;

江里口歌人 (2014) 『IB教育がやってくる! 「国際バカロレア」が変える教育と日本の未来』松柏社

大迫弘和 (2013) 『国際バカロレア入門』学芸みらい社

大迫弘和 (2014) 『国際バカロレアを知るために』水王舎

大迫弘和 (2016) 『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア』

坪谷ニューエル郁子 (2014) 『世界で生きるチカラ 国際バカロレアが子どもたちを強くする』ダイヤモンド社

国際バカロレア機構 (2014) 『国際バカロレア (IB) の教育とは?』

\_\_\_\_\_ (2014) 『一貫した国際教育に向けて』

\_\_\_\_\_ (2019) 『プログラムの基準と実践要綱』

\_\_\_\_\_ (2021) 『学問的誠実性』

\_\_\_\_\_ (2014) 『IBプログラムにおける「言語」と「学習」』

\_\_\_\_\_ (2014) 『DP: 原則から実践へ』

\_\_\_\_\_ (2016) 『MYP: 原則から実践へ』

国立教育政策研究所 (2015) 『21世紀に求められる資質・能力』

International Baccalaureate Organization (2011) *Academic Honesty*\_\_\_\_\_ (2021) *Academic Integrity*\_\_\_\_\_ (2014) *Effective citing and referencing*\_\_\_\_\_ (2014) *Individuals and Societies*\_\_\_\_\_ (2014) *MYP: From principles into practice*\_\_\_\_\_ (2014) *MYP Projects Guides from 2014&2015*

&lt;Webサイト&gt;

文部科学省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/))国際バカロレア機構ホームページ (<http://www.ibo.org/>)札幌市教育委員会ホームページ (<https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/ibkadaitankyu.html>)Univ-it ホームページ (<https://univ-it.net/>)

## 開成中等の学校教育目標

わたし、アナタ、min-na  
そのすがたがうれしい

以上で私からの話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

【池田・司会】 社会に出てから本当に役に立つ能力、資質といったものを育てているように感じました。ただ、現状の日本の大学入試の中ではなかなか評価することが難しいのかなとも思いますので、そういった課題についてもパネルディスカッションで伺えるかと思います。ありがとうございました。■

## 全体会 2 ○ 全体討論

### 国際入試の現状と展望

■大嶋 名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）/  
中島 範行（富山県立大学教授）/飯田 直弘（北海道大学高等教育推進  
機構准教授）/西村 里史（市立札幌開成中等教育学校副校長）/  
池田 文人（北海道大学教授■司会）/岩間 徳兼（北海道大学准教授■  
司会）

【岩間・司会】 ここからは全体討論ということで、司会を担当します、北海道大学の岩間と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

パネリストの 4 名の先生方、ご報告をどうもありがとうございました。少し簡単な資料を用意しましたので、まずは、それを使って 4 名の先生方のご報告を振り返っていきたいと思います。その上で、すでに頂いている質問が、回答済みのものも含めて、10 個ほどありますので、各先生に回答していただきます。最後に幾つかの論点を提示させていただきますのでそれについて討議をするという形で考えています。

まずは、大嶋先生のご報告についてです。APU は私立大学でありリソースが多く、人員配置や実際の企画などといった面でも柔軟性があるという特徴はあるかと思います。また、大学として国際学生の割合が半数に近く、非常に比率が高い点、英語の授業が多い点も特徴かと思います。

今日のご報告の中では、IT・デジタル技術をフル活用するという点、具体的には、広報、選抜、修学状況の把握など個人のデータを利用して最適化を図っていくという点が非常に魅力的な話だったと思います。また、卒業生に協力を仰ぐことで、入試もしくはその前のリクルートなど全部を含めて好循環を生んでいました。今後の展開としては、そういったデータを活用して個人へのアプローチを考えているというお話だったかと思います。

それでは、大嶋先生に届いている Q&A にご回答いただこうと思います。「入試をオンラインで完結」という内容を拝見しました。実際の試験は面接が主となりますでしょうか。それから、筆記試験も行う場合、それらの具体的な手法について。例えば、不正行為の対策などといった部分はどのように実施されているのか。というご質問です。選抜に当たっての実務的な部分は答えづらい部分もあるかもしれませんが、可能な範囲で回答をお願いします。

【大嶋】 ある日時にどこかの入試会場に行って何時間か拘束をされて、ペーパーのベースの試験を受けるというよくある入試がありますよね。APU の国際学生入試はそのような入試ではありません。世界の高校においては、高校時代の学びを積み重ねたアカデミックなトランスクリプトを持って卒業するケースもありますし、卒業試験という形で証明（サーティフィケート）を得るケースもあります。例えば GCE-A レベルなどですね。

APU の国際入試、一発の試験でかなりのウエートを占めるという入試ではなく、アメリカの大学などと同様に、むしろ高校の生活やアカデミックな内容により重点を置いて評価したいという哲学に基づいています。

入試の現場でわれわれが大事にしているのは学校のそういった書類、情報ですね。アカデミックトランスクリプト、IB や SAT のスコア、国ごとの卒業試験という形で出てくるものです。

そしてオンラインテストも一部には課していますが、全体の割合としてはごく一部です。面接もオンラインで実施していますが、面接だけで合否が決まるというような制度ではありません。

それから不正行為の観点からお話ししますと、完璧な対策とは思っていませんが、オンラインテストの際には SEB (Safe Exam Browser) を PC に入れさせて、不正行為をなくすという取り組みはしています。

実はオンラインで不正を防止する仕組みは他にもあり、海外大学ではかなり進んでいますので、どのように担保するかというのは、世界の事例も見ながら引き続き検討が必要な課題と思っています。

面接の本人確認については、かなり細かな願書をオンラインで出させています。願書の中で回答いただいた様々な質問について、細かく Zoom で確認しています。

【岩間・司会】 ありがとうございます。続いての質問です。留学生の獲得には大学間の協力が重要だという話をご発表の中でありましたが、協力した大学との留学生の奪い合いの観点からは留学生の獲得についてどうお考えでしょうか。昨日の全体会において、協調領域と競争領域の話がありましたが、学生獲得については競争という側面が強いのではないかと、という質問です。

【大嶋】 考え方・とらえ方ではないかという気がします。学生の獲得競争という点は当然あると思いますね。ただ、長期的なトレンドでいくと、私はそこについてはかなり悲観的です。つまり、海外の大学に行きたい学生にとって、日本は本当に魅力的なのかという点において、長期的なダウントrendが極めて深刻であると受け止めています。その点では、他大学・機関と協調して、日本の魅力をより大きな視点で打ち出し、他の国への留学を希望する学生を日本に呼び込むことが必要ではないでしょうか。その意味での協調と見ていただければと思っています。

また、本学の学生の専攻分野で見ても、APU は社会学（ソーシャルサイエンス）がベースになります。現在理系の学部はありません。そういうことを考えていくと、大学の

分野によっては適切に他大学と協調できる場所もあると思いますし、仮に APU と日本の他大学を併願した結果、他大学に行かれたとしても、なぜ APU が選ばれなかったのかということは考えたらいいと思います。

ただし、競争領域がまったくないのかと言われると、一部にはあるような気がしますので、立ち位置や考え方、マインドセットによって、協調と競争は両方見られるのではないかなと思います。

**【岩間・司会】** 続いての質問です。グルーヴノーツ社と連携して機械学習、AI を駆使してエッセイを分析しているという点について、具体的に、どのような内容のエッセイをどのように分析・評価されているのか、可能な範囲でご紹介いただければありがたいとのことです。

**【大嶋】** オンライン願書には、志望理由など本人が記載しなければならない項目が結構あります。それらを AI で読んでデータを蓄積し、過年度の志願情報と比較して、過去に類似したエッセイや志望理由がないか、願書内の個別の質問内容について剽窃（ひょうせつ）に近いものがないかなど、AI で見ているということです。今後のアドミッション戦略面で、願書の情報にある学生の学習履歴を蓄積したり、国・地域ごとの特性を分析するかどうかということにも関わってくる面もあるかなと思っています。

しかし ChatGPT も出てきましたし、今後、エッセイというものをどのように考えていくのかについて、すでに様々な大学が考え方を公表しています。APU（立命館アジア太平洋大学）でもかなり議論をしたうえで、先日声明を出していますが、このような状況を踏まえると、過去のデータとの比較がどのような意味を持つのか、限界も出てきているかなという気もしています。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。続いての質問は合格手続き後の在留資格の認定申請についてです。①在留手続き担当は入試の部署か、それとも専門部署か。②認定申請に係る入管への提出書類もデジタルなのかどうか、③その他、在留資格の手続きに係る工夫はありますかという質問です。

**【大嶋】** 在留資格については、国際入試・留学生募集を行う大学の部局はどこも悩みどころだと思います。APU は、開学時から留学生が半数というコンセプトですので、早々に在留資格の手続きについて行き詰まりました。多様な国・地域からの入国に関わるやりとりは、やはり非常に大変です。われわれは私立大学ですので、人的リソースも限られます。その中で、職員がやるべき業務は何かということを議論していく中で、学内で全部やり続けることは無理があるのではないかと、むしろ、職員はより高度な業務に特化し、業務の一部について専門的な力がある方々の力を借りようということになりました。そしてかなり前から、在留資格にかかる学生の対応、督促、やりとりも含めて委託をして、力を借りながら迅速対応を実現しています。リクルート戦略、学生の評価の仕組み

や関係性づくり、そして入学手続率の強化等、本当に必要な部分に、教職員のリソースを使っていることとして、ご理解いただければと思います。

なお入管でも去年からオンライン申請の導入が進みつつありますが、APU ではかなり早くからオンライン申請の準備をしてきていましたので、現在入管申請はオンラインで対応しています。各地域の入管のオフィスに行って申請することは基本ありません。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。それでは、次のご報告を振り返りたいと思います。

中島先生のご報告については、APU と比べるとコントラストがはっきりする部分がありました。富山県立大学は公立大学ということで、リソースなど、難しい部分が多々あるかと思います。公立大学も国立大学も似たようなところかなとは思いますが、国際学生は割合としてはさほど多くはないと。例外的な学校もありますが、そのような状況かなと思います。また、英語の授業もあまり展開されていないのが実情かなと思います。

公立大学へ行ったアンケートでは、多くの出願書類を取り扱うこと、面接による評価を実施することがなかなかの負担になってくること。また広報の機会も限られており、既にある機会に相乗りをする形で広報していくとか、規模も自分たちで大きなものを選ぶわけでもないという実情があると思います。

その一方で、国際入試をやる意味、期待する部分としては、学生の多様性、大学自体の多様性、それからグローバル化、そのようなことを求めているという結果が出ています。

ただ、これもまた国立大学と重複する部分がありますが、業務の負担はかなり大きく、志願者の確保、出願書類をペーパーで頻繁にやりとりし確認する必要があること、不備が出た際の志願者の対応といった点に難しさがあるというお話でした。

飯田先生からのご報告について、国立大学、北大の場合には総合大学としてという話にはなりますが、公立大学と似たような状況かなと思います。報告の中では、業務の複雑な部分について、選抜日程を共通化することで少し省力化を図ったということが工夫として挙げられていました。

その一方で、多様な入試をやっているため、それぞれの選抜をどのように差別化するのか、どのような意味を持たせるのかという課題が生じているということでした。

また、広報に関しては、組織的・戦略的な広報活動というのが必要だということです。選抜に係る様々な資格や試験プログラムの比較可能性を求めることは難しいかもしれませんが、そうした選抜に携わる者においては、さまざまな試験プログラム、教育プログラムについて理解することが重要であるという話がありました。

それでは、これら2件の報告に関して、Q&Aに回答いただきます。

中島先生へのご質問です。①渡日前の入学許可について、日本留学試験受験のための日本入国手続きにかかる期間はどのくらいか、②入国手続きについての大学側の関与の

範囲を合理化されると留学生の入試も活性化するのではないかとということで、お分かりの範囲で教えてくださいということです。

【中島】 日本国内にいる学生が受験した記録しか残っておらず、基本的にはうちの試験のために来日するという手続きを取った学生がいません。そのためお答えができないというのが実情です。

それから、大学側の関与に関しては、入学が決まった学生に対しては、できるだけ早く必要書類を発行するようにしています。これに関しては本学では事務局の方が県の職員ですので、様々な部署と連携しながらやっていたというのが現状で、教員がそこに携わるということは一切ありません。

面接準備など、試験に関しては教員が行いますが、報告の中でも述べたとおり、地方大学だからというのが大きいのか、入学を辞退されることが何回も続くと、ちょっとなという気持ちが教員の中にはあります。

ただし、本学の授業のカリキュラムがやはり海外の人向けになっていませんので、この辺を充実させないと海外からの留学生というのは増えないだろうなどは思っているところです。

【岩間・司会】 そうですね。①の点などは、実際には日本学校とかにいったん入ってという流れがありそうな気がしますが。

【中島】 今はそういったケースが非常に多く、日本語に関してはほとんど問題ないという学生が多いです。

【岩間・司会】 ありがとうございます。続いて、飯田先生へのご質問です。出願要件の確認について、留学生等の入試における事務作業のネックとして世界各国の学校教育制度、資格確認、入学資格の確認があると認識しています。この点について北海道大学の工夫があれば、教えてくださいとのことです。

【飯田】 直接の担当ではないため、今現在の取り組みの詳細についてこの場でお話することはなかなか難しいです。質問の意図としては、私費やISP、MJSP など、アフリカも含め世界中から留学生が来ているような状況にあって、GCE-A レベルといったメジャーな資格を持っている生徒ではなくて、日本ではあまりなじみのない資格についてどのように認めるのか、そのような意図でご質問を頂いたのだと思います。

それについては、恐らく北大で何か独自の取り組みをやっているという可能性は低いのではないかと思います。インターネットで情報を調べたり、本人や学校、もしくは文科省のホームページにあるとおり大使館に聞いたり、そのような他大学でもやられているような取り組みを北大でもやっているのではないかと思います。

ただ、東京規約というものがありますが、それに基づき令和元年度に大学改革支援・

学位授与機構に高等教育資格承認情報センターが設置されました。外国資格に関する情報については、同センターのウェブサイトには、外国で取得された学歴・学位を証明する書類の紹介、ベリフィケーション（verification）ができる外国の公的機関のウェブサイトやサービスに関するページがあります。世界中の国を網羅しているわけではありませんが、ウクライナ、韓国、台湾、中国、ベトナムといった国や地域の情報はある程度そこで得られるようになっていきます。

今後、高等教育資格承認情報センターが様々な国・地域の詳しい情報を提供できるようになれば、われわれはこういったウェブサイトを活用して、志願者のもつ資格の背景や、その真偽も含めて、様々な情報を収集・確認できるようになるかもしれません。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。続いて、4件目の報告について振り返ります。

西村先生には日本語 DP の IB 校としてご報告していただきました。教育プログラムを通して国際的な視野を持つ人間の育成を目指しており、自立を促す教育に基づいて大学での学習や研究への準備がされているというお話でした。

ただ、国内の大学の入試、IB を利用した入試を考えてみますと学校で育成される能力・資質と入試で求められるものにミスマッチが生じていると考えられるとのことでした。要求される学力水準が高すぎる、求められる能力や資質を入試の場面では発揮できないなど、大学入学後はある程度重複する部分もあるのではないかという話でしたが、入試においてはそのような課題があるということでした。

それでは、本報告に関して、Q&A に回答いただきます。ATL のオーガナイゼーションは習得事項間の関連をつける、体制化という意味だと理解をしていましたので、整理整頓という言葉が使われていたところで違和感を持ちましたということで、この点について確認させてください。

**【西村】** ATL（学習の方法）のオーガナイゼーションという言葉の捉え方はご指摘のとおり、幾つかあります。IB の ATL というスキルの部分でいいますと、このオーガナイゼーションは、例えば、タイムマネジメント、プランニング、あとは学習に必要なものをしっかり関係づくるというところに視点を置いた言葉です。そのため、整理整頓が完全に正しいのかといいますとそれが全てを網羅しているものということにはならないのですが、とりわけ中学校の段階の子どもたちがある程度そこを理解していけるようにということで大きな言葉としてつけていたところでした。

なお、例えば、学びを紐付けていく、その学びを転化させていく、結び付けていくようなものを transfer というスキルとして置いています。IB のプログラムでは、そういったような言葉の使い方をしていきます。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。続いてのご質問です。IB の特徴として主体的、対話的、深い学びとありますが、学力の 3 要素にも通じると思います。一般の大学入試でどのように評価する方法があるとお考えでしょうかということでした。

【西村】 この部分が一つの課題としてあるのかなと感じています。つまり、様々な大学でユニークな入試、選抜方法を採用されていますが、知識の量や、スピード感を持ってその問題を解き、答えを導くというところが求められがちなのかなと感じています。

そういった意味で、実際に生徒たちが学習して身に付けたものや、高校段階もしくは中学校段階も含め実際に生徒たちがどういった学びをしていたかという、学びの学習のポートレートで選抜を行う総合型選抜や推薦入試で評価されて、進学につながっている現状のかなと思っています。

実際に大学関係の方など、様々な方が本校の視察に来られますが、実際にご覧になっていただいて、「このような学生が欲しい」「こういった学びがまさに必要なのではないか」という言葉を頂くことがよくあります。

本校のように探究的な学習を全ての授業で行っている学校としては、ChatGPT の登場により、難しい状況がこれから出てくるかなとは感じています。ただし、本校では中学校 1 年生の段階から年間 20~30 のレポートを書きますが、コピー & ペーストをするようなことを防止するために、Turnitin を活用しています。そういった工夫の中で進めていますが、大学入試の中で見取っていただけるような状況は非常に限られています。今後少子化が進んでいく中で、各大学がアドミッション・ポリシーをどのように展開していくのかという点を非常に注目しているところです。

一方、懸念していますのは、本校において非常にアカデミックなものに興味関心が強い生徒は、国内というよりも、国外の大学に目を向けることが増えてきているのではないかと感じています。そういった点も今後の動向を注視する必要があると考えています。

【岩間・司会】 続いての質問です。①貴校の入試のアドミッション・ポリシーはどのようになっていますか、②SSH との両立はうまくいきますか、どのように工夫されていますかということです。

【西村】 アドミッション・ポリシーについて、本校は高校からの入学はできないため、よりシンプルに伝えてはいるのですが、探究的な課題解決にしっかりと向き合って協働的に楽しんで取り組める生徒を求めていると伝えていきます。そういったところをベースとして小学校 6 年生を受験生の対象としているところです。

それから、SSH は本校では 3 期目の 2 年目を迎えているところです。SSH がどのように IB と絡んでいるのかといいますと、大きな部分ではやはり探究活動をどのようにしていくのかといった点です。探究活動のポイントは仮説を設定するということですが、仮説を設定するためには、やはり批判的思考力、クリティカルなものを見方が重要になります。中学校 1 年生段階から全教科でクリティカルなものを見方を育むための取り組みをしています。例えば、実際にデータ分析や実験を通して仮説の検証をするという取り組みを進めています。

一方で、SSH 自体が高校段階の教育課程開発の大きな柱になっていますので、実際に

DPを取っている生徒向けというよりは、DPコースを選択していない生徒たちがサイエンスの分野での課題探究的な活動を進めていく際に活用するプログラムという位置付けになっています。

**【岩間・司会】** それでは、いったんここで個別のQ&Aは終わりにして、私が用意した論点についてご回答いただければと思います。

まず、今日の4名の先生方のご報告の中で非常にはっきりとしていたのは、IT・デジタル技術の活用という点です。大嶋先生には導入に向けて苦勞をした部分、現在さらに残っている課題についてお聞かせいただければと思います。

また、中島先生からは、公立大学のアンケートから事務的な手続きに難しさがあるというお話がありましたが、IT・デジタル技術を活用することによってそのような点が解決されるのか教えていただきたいと思います。

中島先生と飯田先生については、国公立大学での現状、IT・デジタル技術の活用の現状と導入の可能性について、私立と国公立では状況が異なりますので、そういった状況の中でどれぐらい導入の可能性あるのかというところを伺ってみたいと思います。

西村先生には、われわれには実際に大学に志願する学生がIT・デジタル技術に慣れているのかどうか、大学として見えていない部分もあるということで、学習場面でのIT・デジタル技術の活用状況や、出願の場面でそのようなことを求められた際の指導の難しさのようなものがあれば教えていただきたいと考えています。

**【大嶋】** 総論ですが、デジタル化によって、相当解決するものがあるのではないのでしょうか。その上で、大学のミッションと、いわゆる留学生入試として海外から留学生を入れたいのか入れたくないのか、入れるのであれば何名ぐらいを入れたいのか。それによってかける投資コストと人的リソースをどれだけ使うかに尽きるのではないかと考えています。

個別に入試に関する相談を受ける際にいつもお答えしているのは、APUは世界中から留学生が集い、学生の半数を留学生が占めるという特色型の大学をつくることを、開学前に構想し、宣言してしまったということです。その維持、発展のために色々な見直しやデジタル展開にエネルギーをかけてバージョンアップしてきたという経緯があります。在籍する学生の多くが日本で学んだ高校生であれば、ここまでエネルギーをかけるか、そこまで投資をする必要があるのかという疑問はよく分かります。

ですから、どの部分からやっていくのかは国の方針やさまざまなオンライン化の動きなどを見て一つずつ、つぶしていくのがよいのではないかと考えているところです。

APUには本当に多様な学生が留学生として来ています。IBを取ってきた世界の高校生もいますし、西村先生がおっしゃるとおり、新たな探究型の学びをしてきた生徒も入学しています。それを考えた時に、学習内容やキャンパスでの生活について、日本人学生や留学生が満足できる、さらに成長できる教育を、全ての大学でちゃんと提供できるかということが、一方で問われていると思います。この点はAPUも同じ課題があると思っ

ています。

【岩間・司会】　そうですね。前提が大学ごとにより違っているという部分、公立大学での教育の現状を踏まえ、IT・デジタルの技術の利用の可能性についてコメントがあれば中島先生お願いします。

【中島】　なかなか難しい話なのですが、本学においては学内で持っている情報をデジタル化しようという話が1つ課題に挙がっていて、教員と事務局でどうやったら効率的にできるかといった話が立ち上がったところです。何年か前に入試の手続きに関しても、デジタル化といったら少し語弊があるのですが、今までの事務局の方などが手作業でやっているものをオンライン化できないかという話が出てきたところです。なかなか難しいだろうなというのが現状ですが、やっていかないともうどうしようもなくなるだろうなと考えています。

大嶋先生が言われたことがもっともで、この国際入試に関しては目的が何なのかとか、海外の、日本人と価値観が違うような人をどのくらい大学に受け入れたいのか、受け入れるべきなのかということの議論をきちんとしないといけないのではないかなと思っています。やはり小さいところが多いので、そこだけにお金をかけるというのはなかなか難しいだろうなというのが、今、率直に思うことです。

ただ、最後のスライドにありましたアンケートは書類から変えなければいけないだろうなというのが思っているところです。

【飯田】　北大では、オンライン出願を行っていたり、面接を Skype で実施している募集単位もあつたりするのですが、全体としてはやはり小規模・局所的といえるかと思いません。局所的というのは、ISP や MJSP は相対的に多くの志願者を確保できています、その一方で、私費や帰国子女は規模が小さいということです。そのため、国際入試に限って言えば、それだけ予算をかけてインフラを構築する意味があるのかという議論になるのではないかなと思います。

予算については、競争資金の獲得が条件になりますので、例えば、ISP や MJSP の 2 つについては、スーパーグローバル大学創生支援事業の予算から奨学金の費用などを捻出していました。そういう意味では、インフラも含めて何か新しいことを、他にはないことをやるのであれば、大きな資金が獲得できているのかが非常に重要な問題となるのではないかなと思います。

教育については、他の大学においても、LMS (学習管理システム)、もしくはコロナ禍以降であれば Zoom などのサービスを授業で活用されているかと思えます。私は高大連携講座を担当している関係で、第2学期(後期)5講時の授業のシラバスをチェックする機会があるのですが、以前よりそういったIT・デジタル技術を活用する授業が増えている印象があります。

今後は、フローニンゲン宣言などの影響から、資格証明や学修歴のデジタル化が世界

規模で進み、日本でもそれに関連する取り組みが進められていくのではないかと思います。

しかし、北大ではあくまでも一般選抜がメインであって、国際入試については一部で推進されているものの、やはり小規模・局所的なところがあり、なかなか積極的に予算をつけて改革するという流れにはなっていないのが現状だと思います。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。西村先生に関しては、高校側から見た場合、中等教育学校側から見た場合の、IT・デジタル技術の活用について教えていただけますでしょうか。

**【西村】** 現場としては、国内ではGIGAスクールがスタートしており、生徒たちのタブレット端末を使う技術は非常にたけていると思います。とりわけ、本校においては1人1台学習道具として使っていて、私の感覚で言うと教員よりも生徒のほうが活用の技術としてはたけている状況かなと思っています。

それから、オンライン出願が導入された場合には、技術的な、テクニカルな部分ではできるかと思っています。ただ、高校、中学校においては色々なものがまだデジタル化されていないという現状があります。ですので、例えば、証明書の提出時に一人ずつ用意するといったことも難しい場面が出てくるのではないのかなと感じています。

あとは、生徒本人の出願ということになるとは思いますが、保護者がそういったやり方についてあまり理解されていないことが多いかなと思いますので、その辺りの難しさが出てくるのではないかなとも思います。

**【岩間・司会】** ありがとうございます。時間も迫ってきましたので、論点がまだ2つあるのですが、そのうちの1つ、先ほど大嶋先生からもありましたが、IT技術を使うにしても目的を明確にする必要があるというところで、そのベースにある教育に焦点を当てて話を伺いたいなと思っています。

まず、引き続き、西村先生に伺いたいのですが、IBの教育プログラムを受けた生徒たちの大学教育に対する期待というものはどのようなところがあるのか。あとは、国内の大学での学習に対する卒業生の意見や感想をご存じであればということですね。この点については大学側も課題として認識しており、何か関連する情報を教えていただければと思っています。

**【西村】** IBの特にDPを取得した子どもたちが時々言っているのは、大学に入ると試験が例えばマーク式のテストになっている、あとは知識を問う試験で成績がつけられてフィードバックがないということです。特にDPをやっていく生徒たちは常に教員からのフィードバックや共同の学びの場面がありますので、非常に思考が深くなり、広がっていきます。そのような経験を持っていますので、大学での、1つの答えを求められるテストに対してはがっかりしたと言う学生がいます。そういった意味では、進学した生徒たち

は、大学の先生たちと対話できる環境を求めているところではないかなと感じています。

【岩間・司会】 APU が実際に取り組んでいる、入学する前の段階で先生方とやりとりできる機会が設けられることは、大変貴重な機会になりうるということなのではないでしょうか。

【西村】 そうですね。入学前もそうなのかもしれないのですが、入学後の一般教養において担当の先生との対話が持たない、他の学生とのディスカッションをする機会が少ないです。その深まりがないところへの不満というのでしょうか、そういったものはあります。

また、入学後、実際に英語を使う場面があるのかといいますと、国内大学に進学する学生たちはほとんどないと。そういった時に求められていた英語力はどこで使うのだろうか。英語がネイティブの先生たちとの話し合いのところで使うぐらいで、英語でディスカッションという場面はなかなかありません。それが現状なのかなと思います。

【岩間・司会】 ありがとうございます。では、最後に大嶋先生に 1 件だけ伺って終わりにしたいと思います。国内教育プログラムを受けて入学してきた日本人学生の適応など、その学生たちへの国際学生の影響について教えていただければと思います。

【大嶋】 先ほどの西村先生の話で補足的に APU の立場から考えている課題を一つ述べさせていただきます。

実は APU は IB の生徒を世界中から多く受け入れています。国内の IB 校も同様です。海外から来た学生が言うことは、IB で高いスコアを取っている場合、そのスコアによって、アメリカなどの大学ではいわゆる初年次(100 番台)の共通系の科目は免除されます。単位認定され、速やかに次のレベルの科目を履修していくというのは当たり前です。

しかし、日本においては、文科省の大学設置基準上、College Board が行っている Advanced Placement Test の結果や IB のスコアは大学の授業ではないため、一切単位認定ができません。IB で高いスコアを取っている学生は、受け入れた大学が基準を明確に示して、例えば大学で提供する共通のこの科目については修得済みとして単位を認定してあげればよいのにできない、というつらい事例は本当にたくさんあります。海外では当然可能なことであっても、文科省の設置基準上は認められないわけですね。いまだにそういった規制はたくさんあります。この辺りは大変大きな課題だと今も悩んでいるところです。

それから、国内の教育課程・プログラムを受けて入学した日本人学生について、冒頭申し上げましたとおり、APU は地方である大分県別府市にあります。別府市の人口は 12 万人弱です。そのようなキャンパスにありますので、ある意味、そういう地方の大学でこのようなユニークな大学に行きたいから APU を希望するという学生が大変多いです。この間の特徴として、首都圏などの出身者の入学者割合が大変高くなってきている傾向があります。入学前の段階から、決して都会ではない APU でこのようなことを勉強した

い、このように自分はネットワークをつくっていききたい、このような学部でこのように成長していきたいという具体的なイメージをもって出願してきている生徒が多いというのが、私が2000年から日本人学生を見て感じている印象です。

学生たちは当然いろいろな形で成長を遂げ、変容していきますが、ユニークな大学であるからこそ、どのような初年次教育をしていくのが重要だと考えています。高校で未来を先取りした面白いプログラム、面白い教育を受けてきた世界中の学生や日本の学生が、大学に入学して「何だ？この授業」と思うことがないように、多文化の協働学習やグループワーク、学生の海外経験の有無に応じて英語を使う機会をレベル別につくるなど、さまざまな仕掛けをつくっていく、いわゆる「隠されたカリキュラム」のようなものを適切に置いていくということが必要で、APUでも毎年改善をしています。

また、キャンパスでの寮生活について希望者は全員入寮としています。今年、キャンパスに学生寮を一つ増やしました。やはり大学の授業のみによらない学生の成長というのは当然大きいですし、授業以外での留学生と日本人学生の混ざり合いは大学生活での適応の鍵になっている確信が、私にはあります。

国内出身の学生は、海外からの留学生に比べて、勉強の仕方や、将来の最終学歴の目標も大きく異なります。最終学歴は学部卒業の学位でいいという留学生は、今は本当に少ないですね。将来のキャリアや大学の学部での学びに対する留学生の考え方が、日本人学生に対して大変いい影響を与えていることは間違いないです。

**【岩間・司会】** ご丁寧にお答えいただき、どうもありがとうございました。

私自身、国立大学の教員の立場としては、国際入試に対してまだまだ対応し切れていないというところで課題が山積しているなと感じた次第です。今回の全体会を通して、各大学が、国際入試を今後改善していく際の参考となり、またそれに向けて指導される高等学校や中等教育学校の参考になれば幸いです。

それでは、お時間になりましたので、この全体会を終えさせていただきます。ご発表いただいた先生方、それから、ご参加いただいた聴衆の方々も併せましてどうもありがとうございました。

**【一同】** ありがとうございました。■



## 「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に 向けて」

司 会： 川嶋 太津夫（大阪大学特任教授）・荘島 宏二郎（大学入試センター教授）

趣旨説明 総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて .... **185**  
川嶋 太津夫（大阪大学特任教授）

報告 ① 総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価方法 ..... **189**  
椎名 久美子（大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授）

報告 ② 基礎学力以外の意欲・関心・態度の効率的・効果的な評価方法 ..... **206**  
竹内 正興（香川大学アドミッションセンター教授）

報告 ③ 探究学習等の成果の評価方法 ..... **235**  
本郷 真紹（立命館大学文学部特命教授）

全体討論 ..... **256**

---

### 内 容：

2022年の出生数は、初めて80万人を下回り、2005年の「我が国の高等教育の将来像（答申）」の予測を10年余りも上回る速さで少子化が進行している。そのため、大学・短大進学率及び入学定員が現在と変わらなければ、理論的には2040年には「大学全入」が実現する。一部の大学では「選抜」が機能するであろうが、多くの大学が志願者の希望とアドミッション・ポリシーのマッチング（相互選択）により、志願者を受け入れる、文字通りの「アドミッション」に変わっていくものと考えられる。

実際、現在でもすでに私立大学入学者の半数以上が、総合型・学校推薦型、いわゆる「年内入試」で進学している。一般選抜が中心の国公立大学も、18歳人口減に合わせて入学定員を減少させない限り、選抜性は大幅に低下するであろう。事実、2024年度入試における国立大学の総合型・学校推薦型の募集割合は19.6%、公立大学のそれは30.8%に達しており、今後その比率は増加するものと思われる。これまでも「選抜から相互選択へ」と言われてきたが、それがまもなく現実になり、従来以上に総合型・学校推薦型の比重が高まると予想される。

相互選択としての入学者「選考」に変われば、アドミッション・ポリシーをより一層明確にし、求める人材像、入学時まで備えておくべき資質・能力をより具体的に提示し、それらを適切に

評価する必要がある。加えて、入学後のミスマッチを防ぐためにも、大学の教育情報公表を充実させなければいけない。

そこで、全体会3では、総合型・学校推薦型選抜で、基礎学力、学力以外のいわゆる非認知的特性及び高等学校での探求学習の成果を適切かつ的確に評価するための課題及び方策について3名の有識者から報告を行うとともに、大学入試における多面的・総合的評価の充実に資する議論を行いたい。

全体会 3 ○ 趣旨説明

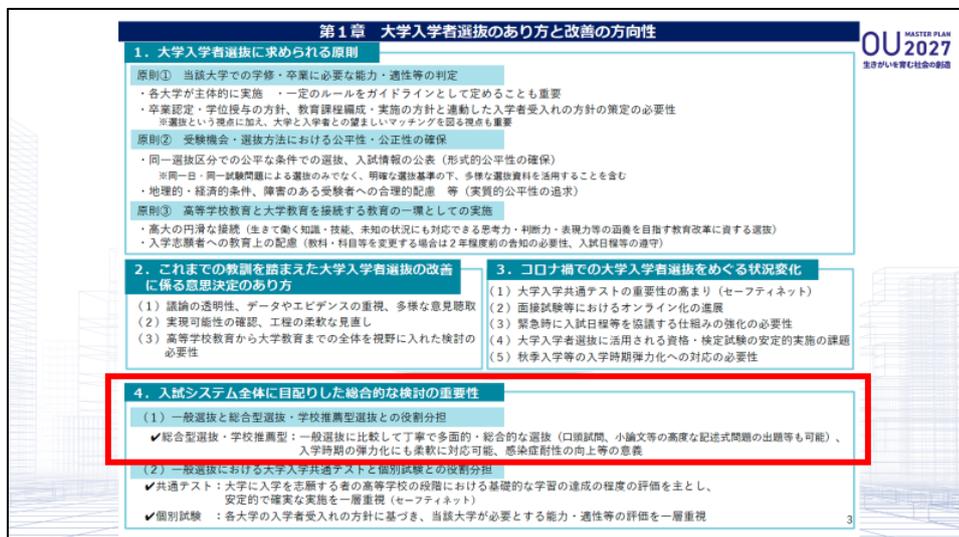
# 総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて

■川嶋 太津夫（大阪大学特任教授）

お時間になりましたので、全体会 3「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」を開始したいと思います。



このセッションの企画の趣旨は、急速な少子化の進展に伴い、現在の大学進学率と大学の入学定員を考慮すれば、今後は現在の大学進学者よりも十数万人減ることが予想されています。一方で、既にご承知のように大学を閉めるという例も出てきています。



**第5章 ウイズコロナ・ポストコロナ時代の大学入学者選抜①**

**1. 令和6年度実施の大学入学者選抜に向けて**

**(1) 第1回大学入学共通テストの実施状況**

- ✓ 幅広い知識を引き出すだけでなく、様々な資料や実社会で用いようデータを読み解いたり、与えられた情報を基に考察したりする問題が一定程度出題されたとの評価。
- ✓ 各大学のアドミッション・ポリシーに照らし、足らざる部分については個別試験における対応が必要

**(2) 大学入学共通テストの科目構成等の見直し（新教育課程への対応等）**

- ✓ 「公共」「情報Ⅰ」の新設等に伴う見直し
- ✓ 継続的で安定的な実施等の観点から、**科目を再編**（6教科30科目→7教科21科目）

※共通テストはPBTで、「情報」は、問題の見解・解決に向けて情報技術を活用する力を見る出題の工夫を期待。大学の入学希望入学者に基づき活用を推進

**(3) 入学後の教育に必要な入試科目の設定の推進**

定期的な実態調査の実施・公表等を通じて共通テストの活用や個別試験で適切に出題  
参考）商学・経済学部の個別試験で数学を全く課さない選抜区分：22%

**2. 秋季入学等の学事暦・修学年限の多様化・柔軟化に対応した大学入学者選抜のあり方**

- ✓ 学事暦・修学年限の多様化・柔軟化と共に入学者選抜方法のあり方の検討も必要
- ✓ 秋季入学への対応は、総合型・学校推薦型選抜など一般選抜とは異なる選抜基準・方法で選抜する方向が適当。
- ✓ その具体的方法や定員のあり方等について、更に専門的な検討が必要

**3. 総合型選抜・学校推薦型選抜の推進**

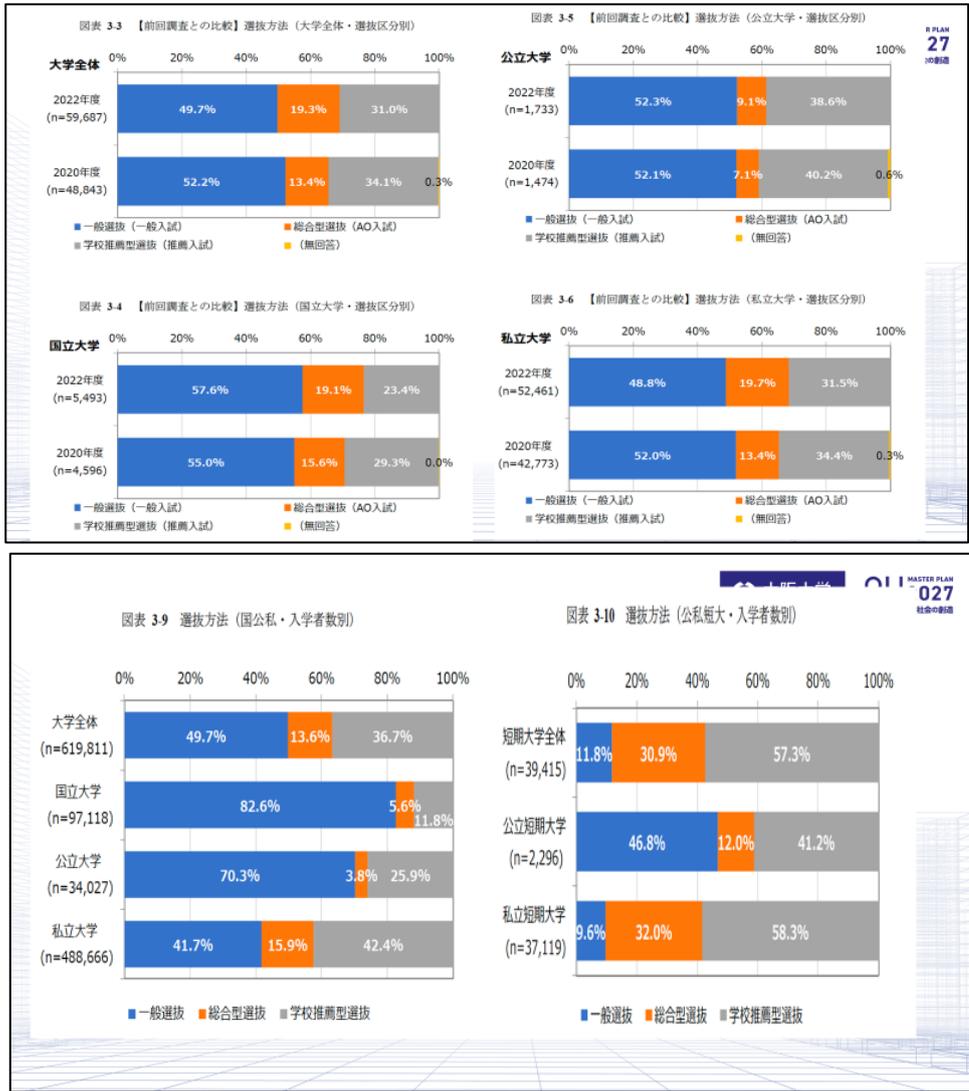
**(1) 求める人材の特性に応じた総合型選抜・学校推薦型選抜の推進**

- ✓ AO入試・推薦入試の入学者数に占める割合は学科系統によって差
- 例 医学24.1% 理学28.0% 工学29.1% 芸術60.8% 家政63.0%
- ✓ 総合型選抜・学校推薦型選抜の意義（1章4.）を踏まえ、実施率が低い分野や人材育成上の必要性がある分野においては、**学力の担保、選抜基準の明確化**を図った上で推進を期待
- ✓ 秋季入学への対応は、総合型・学校推薦型選抜など一般選抜とは異なる選抜基準・方法で選抜する方向が適当。
- ✓ アドミッションオフィスの役割・機能強化、アドミッションオフィサーの育成支援に関する調査研究、専門職団体等との連携

**(2) 総合型選抜・学校推薦型選抜における学力の適切な把握**

例）レポート・小論文作成、口頭試験、資格・検定試験の活用 等

そういうことを考えますと、今後、大学入学者選抜は、一部の大学を除き、選抜という機能よりは、大学が求める人材像と志願者の学力やその他の特性をどのようにマッチングさせていくかという、相互選択の入学者選考に変わっていくのではないかと考えられます。



現在でも既に私立大学では学生の半数以上が学校推薦型・総合型選抜で入学していますし、国立大学でも 2 割程度、それから公立大学でも 3 割程度という状況になっていますので、今後、一般選抜よりも総合型選抜・学校推薦型選抜で大学に入学する高校生が増えてくると考えられます。そうしますと、いわゆる多面的・総合的な評価をさらに充実させなければならないのですが、現状では様々な課題があります。



目次	
はじめに	4
令和3年度大学入学者選抜における好事例の試行的な鑑定結果について（鑑定委員会所見）	5
別添 大学入試のあり方に関する検討会議（令和3年7月8日開催）（抄）	6
北海道大学「総合型選抜」	7
小樽商科大学「グローバル総合入試」	8
高城大学「総合型選抜」	9
東京外国語大学「英語スピーキング試験」	10
東洋大学「英語外部試験の利用」	11
金沢大学「KUGS特別入試」「国際特別入試」	12
藤田医科大学「ふじた未来入試」「一般入試」	13
京都大学「特色入試」	14
京都工芸繊維大学「グレンチ入試」	15
奈良女子大学「探求力入試「Q」」	16
信州大学「へるん入試」	17
高知大学「総合型選抜Ⅰ（医学科）」	18
長崎大学「一般選抜」	19
国立六大学連携コンソーシアム「ペーパーイングリッシュ」	20
熊本大学「芸術特待生」	21
東京電機大学	22
東洋大学	23
福岡県立大学	24

例えば、基礎的な学力を把握するための大学入学共通テストが 1 月中旬に実施されるため、その時期には多くの選抜が終わってしまう私学の総合型・学校推薦型選抜での活用はなかなか難しいといった問題もありますし、基礎学力以外の非認知的特性をどうやって評価するのかということについても試行錯誤が行われています。



さらに、これから総合型選抜・学校推薦型選抜の志願者が増えますと非常に手間暇のかかる評価をどのように効率化・合理化していくのかという課題もわれわれの前にあるかと思います。そういう観点から今回はこのようなテーマを取り上げてみました。

## 全体会3 ○ 報告1

# 総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価方法

■ 椎名 久美子（大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授）

こんにちは。大学入試センターの椎名と申します。

全体会3  
「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」

報告① 総合型・学校推薦型選抜における  
基礎学力の評価方法

椎名久美子  
(大学入試センター 試験・研究副統括官，研究開発部教授)

2023/5/19      令和5年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3      1

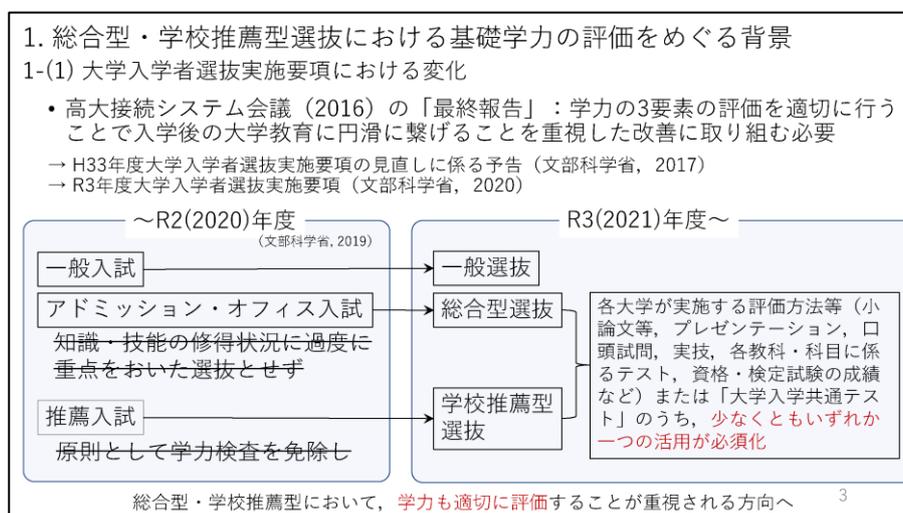
総合型・学校推薦型選抜において多面的・総合的評価が促進される中で、基礎学力も適切に評価することが求められています。各大学の入試で基礎学力をどのように評価しているのか、現状について報告したいと思います。

報告のアウトライン

1. 総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価をめぐる背景
  - (1) 大学入学者選抜実施要項における変化
  - (2) 総合型・学校推薦型選抜による大学入学者の推移
2. 各大学の総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価の状況
  - (1) 令和2年度入学者選抜に関する調査（文部科学省）
  - (2) 令和3年度入学者選抜に関する調査（大学入試センター研究開発部）
3. 基礎学力把握のための簡易な検査とは
  - (1) 「検査」の名称に含まれる語に着目したグループ分け
  - (2) 各グループの「検査」の特徴
4. まとめ

2

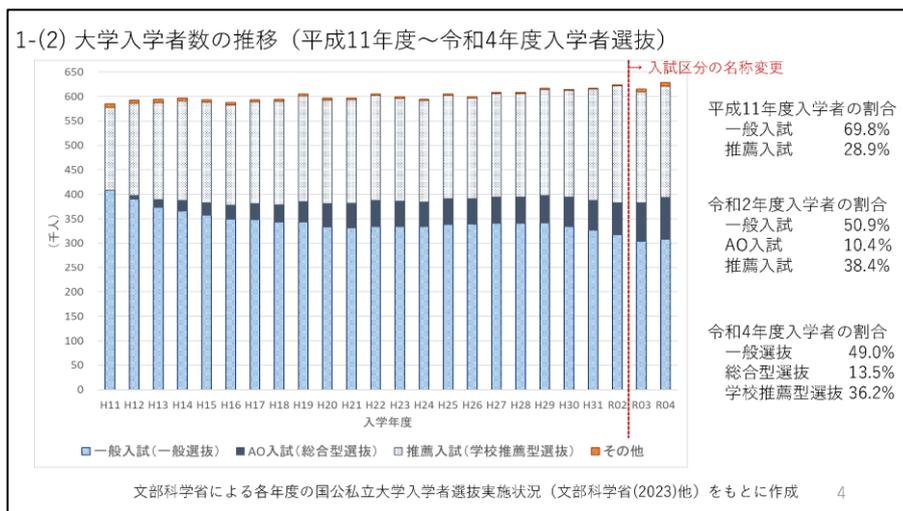
総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価を巡る背景を最初にお話しした後、令和2年度入試に関する文科省の調査と令和3年度入試に関する大学入試センターの調査の結果を基に全体的な傾向を見ていきます。その後、基礎学力把握のための簡易な検査の特徴について、大学入試センター研究開発部が行った分析をご紹介します。



総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価を巡る背景の一つは、大学入学者選抜実施要項における変化です。高大接続システム改革会議の最終報告では、学力の3要素の評価を適切に行うことで、入学後の大学教育に円滑につながることを重視した改善に取り組む必要があると指摘されました。

この指摘が「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」を経て、令和3年度大学入学者選抜実施要項に反映されました。入試区分の名称の変更だけでなく、総合型・学校推薦型において、大学教育を受けるために必要な学力も適切に評価することが重視される方向が示されています。

スライドに令和2年度と3年度の実施要項を並べて示していますが、総合型選抜に関しては、従来、アドミッション・オフィス入試に関して記載されていた「知識・技能の習得状況に過度に重点を置いた選抜とせず」という文言が実施要項から削除されました。学校推薦型選抜では、従来の推薦入試に関して記載されていた「原則として学力検査を免除し」という文言が削除されました。その代わりに、総合型・学校推薦型選抜ともに、調査書等や推薦書だけでなく、各大学が実施する評価等（小論文とプレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に関わるテスト、資格・検定試験の成績など）、または大学入学共通テストのうち、いずれか一つの活用が必須化されることになりました。



このグラフは平成11年度以降の大学入学者数の推移を入試区別に積み上げて示しています。ご存じのとおり、平成11年度は一般入試による入学者が約7割でしたが、令和2年度、すなわち選抜実施要項が変わる直前の年度では、一般入試による入学者の割合は50.9%にまで減り、AO入試は10.4%、推薦入試は38.4%でした。

このグラフで示す年度のうち、推薦入試による入学者の割合が一番高かったのが令和2年度です。直近の統計である令和4年度を見ますと、総合型と学校推薦型を合わせて49.7%となり、一般選抜による入学者の割合とほぼ同じです。多面的・総合的評価の枠組みの中でこういった入学者が大学で学ぶための基礎学力を身に付けているかということの評価することは、高大接続から見ても重要な課題と言えると思います。

2. 各大学の総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価の状況

2-(1) 令和2(2020)年度入学者選抜に関する調査（文部科学省）  
（AO入試、推薦入試）

2-(2) 令和3(2021)年度入学者選抜に関する調査（大学入試センター研究開発部）

5

総合型や学校推薦型選抜において、どのような資料を用いて学力を評価しているのかという状況を見るために、令和2年度入学者選抜に関する文科省の調査と令和3年度の入学者選抜に関する大学入試センター研究開発部による調査の結果をお示しします。

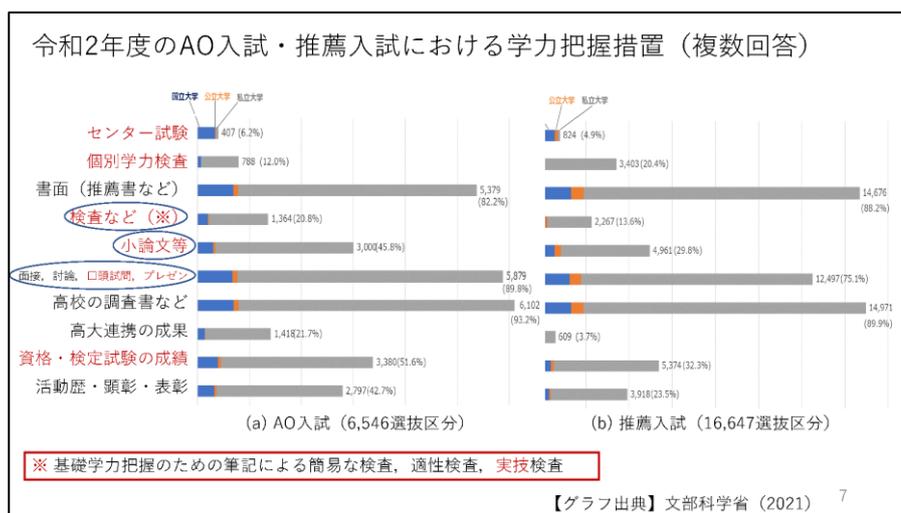
なお、令和2年度については、入試区分の名称が変更になる前ですので、AO入試・推薦入試に関する項目の調査結果となります。

2. 各大学の総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価の状況  
 2-(1) 令和2(2020)年度入学者選抜に関する調査

- 「大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の実態調査(令和2年度)」(文部科学省, 2021)
  - ▶ 令和2年7月14日～9月14日：全大学(771大学)を対象に実施
  - ▶ 719大学から回答あり
  - ▶ 選抜区分ごとに回答を求めたもの
- ▶ AO入試における学力把握措置
- ▶ 推薦入試における学力把握措置

6

まず、令和2年度の入学者選抜に関する調査は、「大学入学者選抜における英語4技能評価および記述式問題の実態調査」として文科省が実施したものです。この調査は全大学を対象に実施され、それぞれの大学の選抜区分ごとに回答を求めたものです。様々な質問項目で構成されている結果が公表されています。

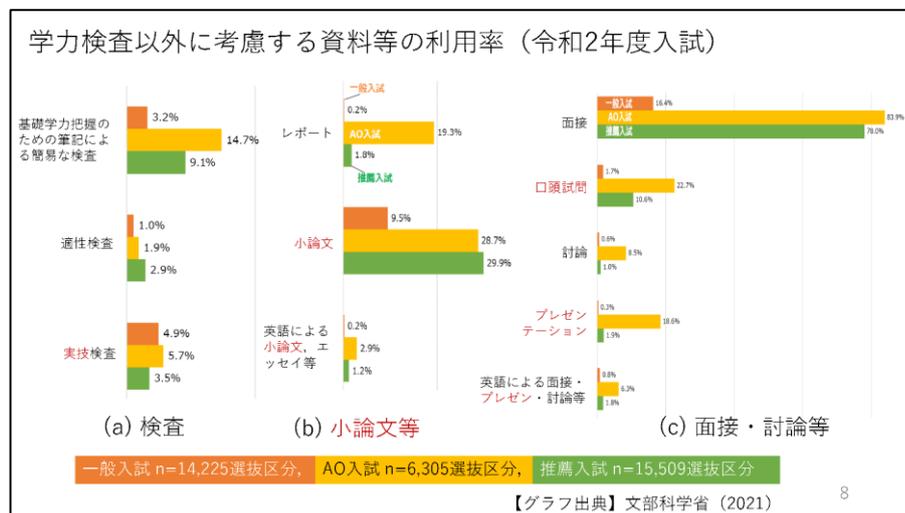


その中から「AO入試及び推薦入試における学力把握措置」に関する項目に着目してみます。このグラフは文科省の調査から引用したものです。左端に示す選抜資料に関して、選抜区分ごとにどれを利用しているかということを探っています、複数回答になります。

左がAO入試、右が推薦入試に関するグラフで、利用している選抜区分の数が国公立ごとに色分けされて棒グラフになって積み上がっています。また、全ての選抜区分のうちで利用している選抜区分の割合もかっこ内に示されています。

左の項目のうちの一部を赤字にしたのは私ですが、これらは令和3年度以降の実施要項で「いずれか1つの活用」が必須化されたものに相当するものです。令和2年度入学者選抜に関する調査ですので必須化される前の年度ではありますが、着目すべき項目として赤字にしました。

赤字にしたもののうち、利用する選抜区分の割合が最も高いのは AO 入試・推薦入試とともに「面接、討論、口頭試問、プレゼンテーション」です。「資格・検定試験の成績」や「小論文等」も比較的高い利用率となっています。「検査など」というのは具体的にはスライドの下部の赤字内のものですが、これは AO 入試では約 2 割程度の利用率となっています。



先ほどのスライドの左端で赤字にしたもののうち 3 つの項目について、含まれる資料をもう少し細かく示したのがこのスライドです。縮尺が違っているグラフを無理やり 1 枚のスライドに収めたので見づらくて申し訳ありませんが、左が「検査」、真ん中が「小論文等」、そして、右が「面接・討論等」を細かく見たものになります。黄色い棒が AO 入試、緑が推薦入試です。

先ほどのスライドの項目分けで最も利用率が高いのは「面接、討論、口頭試問、プレゼンテーション」でしたが、このスライドで細かく見てみますと、それらの中で圧倒的に利用率が高いのは AO・推薦ともに「面接」です。令和 3 年度から活用が必須化される資料に相当する「口頭試問」や「プレゼンテーション」に関しては、AO 入試で 2 割程度となっています。

真ん中の列は「小論文等」を細かく示しているものです。グラフを見ますと「小論文」を利用する選抜区分は AO でも推薦入試でも 3 割近くになっています。「検査」については、一番上の「基礎学力把握のための筆記による簡易な検査」が AO 入試では 14.7%の利用率になっています。AO 入試では、小論文以外にもいろいろな資料が使われる傾向です。以上が令和 2 年度の状況ということでご紹介しました。

2. 各大学の総合型／学校推薦型選抜における基礎学力の評価の状況  
 2-(2) 令和3(2021)年度入学者選抜に関する調査

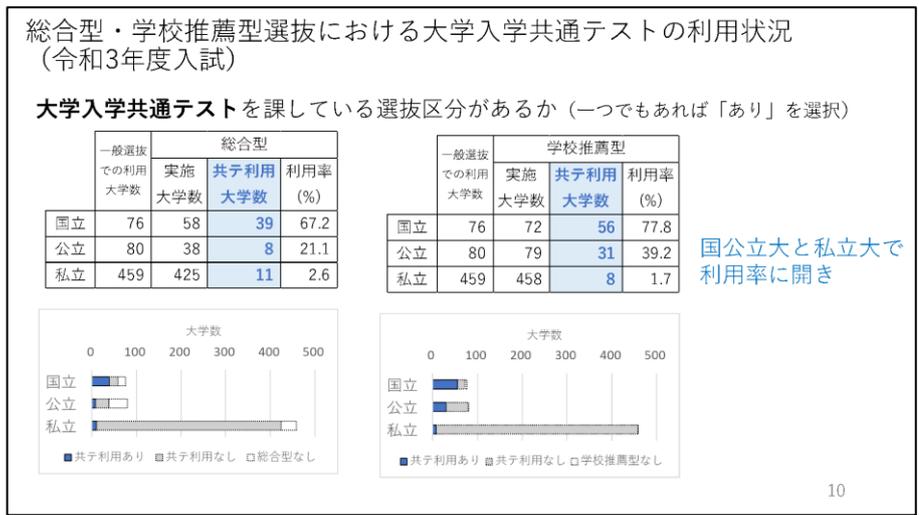
- 「令和3年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」(大学入試センター研究開発部編, 2023)
  - 令和3年9月22日～11月22日：大学入学共通テスト利用大学を対象に回答を依頼(757大学)
  - 615大学から有効回答あり(有効回答率81.2%)
  - **1大学1通**の回答(webフォームへの回答入力)

➢ 総合型／学校推薦型選抜における大学入学共通テストの利用状況  
 ➢ 総合型／学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価方法

荒井・伊藤・椎名・桜井・大塚・花井(2023) 9

令和3年度の入試に関しては大学入試センター研究開発部が行った調査結果を紹介いたします。この調査は大学入学共通テスト利用大学を対象に回答を依頼したもので、依頼した大学の約8割から回答を得ました。先ほどの文科省の調査では選抜区分ごとの回答だったのですが、この調査では1大学1通とし、各大学の入試全体を把握している方に回答していただくようお願いしました。

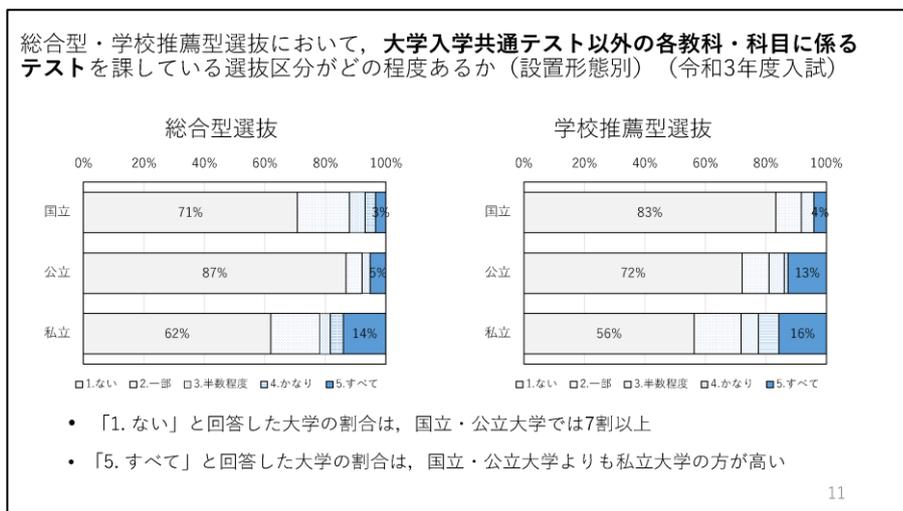
調査項目のうち、「総合型・学校推薦型選抜における共通テストの利用状況」と「知識、技能、思考力・判断力・表現力等の評価方法」に関する結果をお示しします。



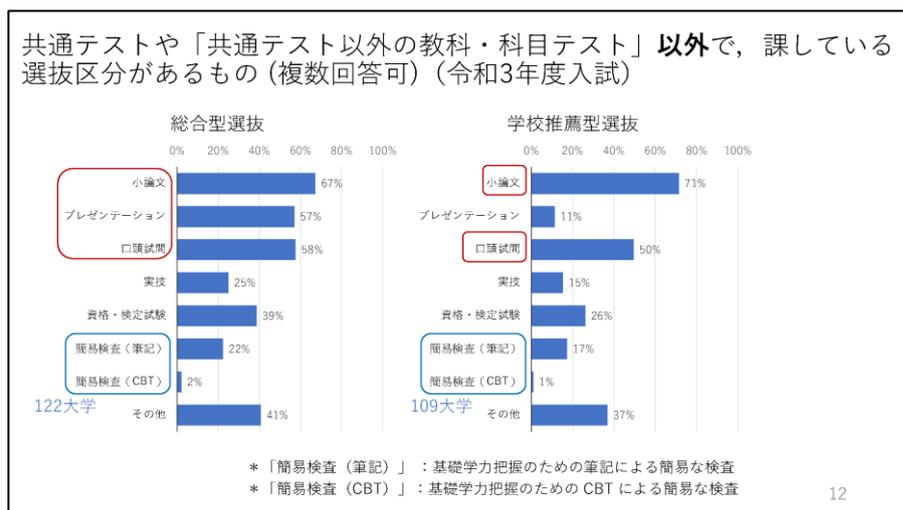
共通テスト利用大学のうち総合型選抜や学校推薦型選抜において共通テストを利用する区分があると回答した大学はどれぐらいあるかを設置形態別に示しているのがこちらの表で、左が総合型選抜、右が学校推薦型選抜です。

総合型や学校推薦型選抜を実施している大学の数、及びそれらの中で共通テストを課す選抜区分があると回答した大学の数を青字で示しています。下のグラフは、それぞれについて、共通テストを課す区分があると回答した大学の数を青で示して棒グラフで示しています。

この結果を見ますと、国立大学では共通テストを比較的に利用されていますが、私立大学では総合型や学校推薦型で共通テストを利用する区分がある大学は非常に少ない状況です。利用している大学には、共通テストの実施日程や成績の提供日程の適切さや、難易度や識別力の適切さについての評定を回答してもらったのですが、日程の適切さに関する評定が低いという結果であり、共通テストを総合型や学校推薦型で利用する際の日程的な難しさが示唆されています。



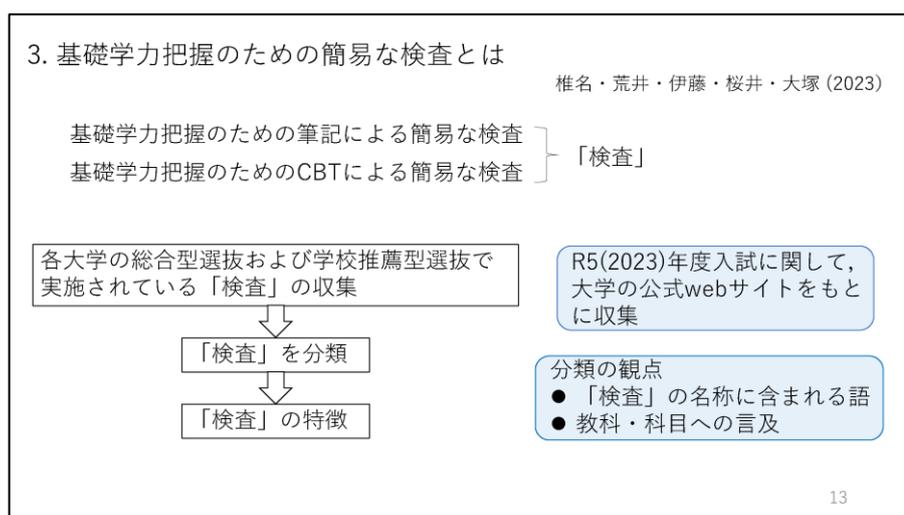
こちらのグラフは、共通テスト以外の各教科・科目を課す選抜区分がどれくらいあるかという回答を、総合型・学校推薦型のそれぞれに関して設置形態別に示したものです。「課している選抜区分がない」と回答した大学の割合がそれぞれ一番高く、国公立では7割以上、私立でも6割程度あるのですが、一方で「全ての区分が教科・科目テストを課している」と回答した大学の割合は私立大学が国公立よりも高くなっています。



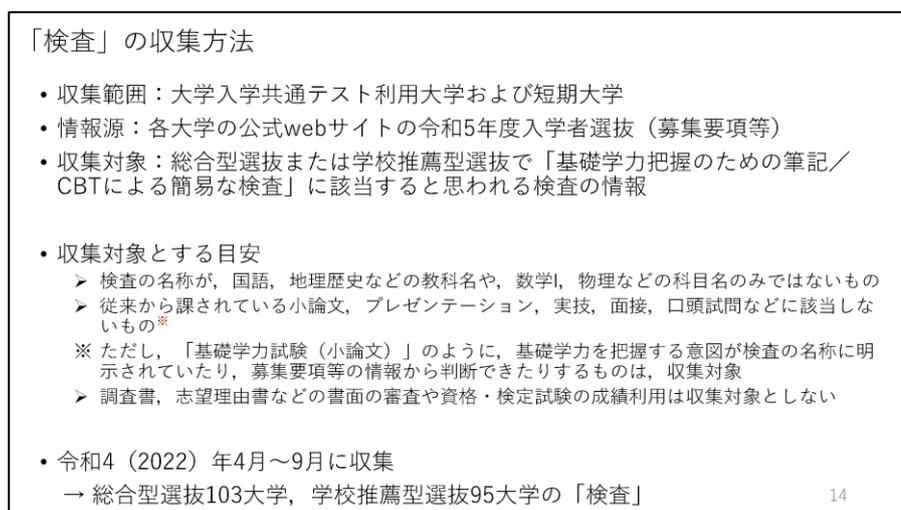
では、いわゆる教科・科目テスト以外ではどのようなものを課しているのかという点について、左にある選択肢の中から「課している選抜区分がある」というものを全て選択してもらったのが左右のグラフです。左が総合型、右が学校推薦型に関する結果です。

総合型に関しては、「小論文」「プレゼンテーション」「口頭試問」を課している区分がある大学が半数を超えています。学校推薦型では「小論文」と「口頭試問」を課している区分がある大学が半数を超えています。

「基礎学力把握のための筆記による簡易な検査」を利用する区分がある大学は、総合型では 22%，学校推薦型では 17%です。「CBT による簡易な検査」については、利用する大学の割合としてはごくわずかですが、筆記と CBT による簡易な検査を合わせると、総合型では 122 大学，学校推薦型では 109 大学におきまして「基礎学力把握のための簡易な検査」を利用する選抜区分があるという結果でした。この結果から、それらの「検査」がどのようなものなのかを見ておく必要があるだろうと考えました。

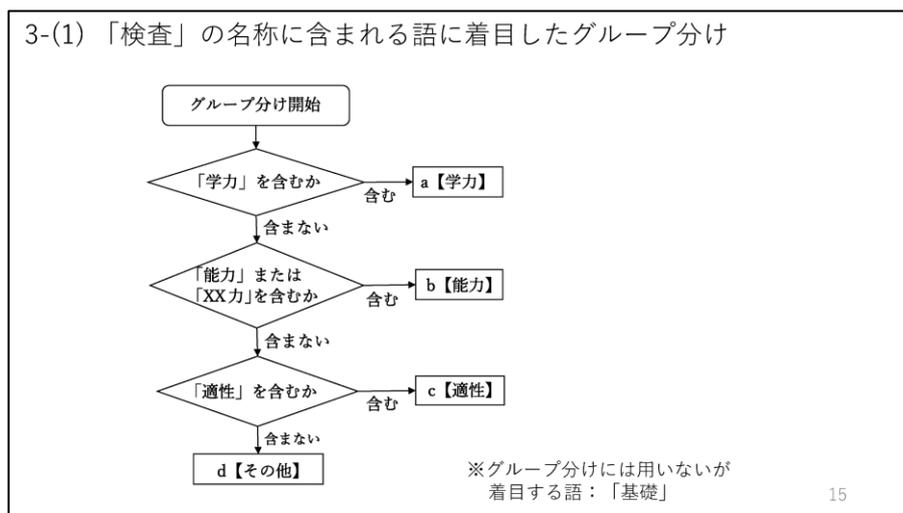


ここからお話しする「基礎学力把握のための簡易な検査」に関する分析結果は、われわれの研究グループが令和 5 年度入学者選抜に関して各大学の公式ウェブサイトから収集した情報に基づくものです。総合型や学校推薦型選抜で実施されている「検査」に該当すると思われるものを収集し、検査の名称に含まれる語に基づいて 4 つのグループに分類しました。各グループの検査の特徴を教科・科目への言及という点から分析した結果をご紹介します。



このスライドには、どういうものを収集したかという目安を書いています。名称が教科・科目名だけではないもの、つまり「基礎学力 (英語)」のような名称のもの、そして、従来から実施されていた小論文、プレゼンテーション、実技、面接、口頭試問には該当しないものを目安に収集しました。

令和 4 年 4 月から 9 月にかけて、各大学の公式ウェブページで公開した令和 5 年度入学者選抜に関する情報をもとに、総合型では 103 大学、学校推薦型では 95 大学の検査を収集しました。なお、一つの大学で複数種類の検査を行っているケースがありましたので、検査の数としては大学の数よりも少し多めです。



検査の名称に含まれる語に着目したグループ分けとして、まず、検査の名称に「学力」を含むものをグループ a としました。次に、検査の名称に「学力」を含まないものの、「能力」または、「理解力」や「分析力」のような何とか力（「XX 力」）を含むものをグループ b としました。次に、グループ a やグループ b に入らないもののうち、検査の名称に「適性」という語を含むものをグループ c、含まないものをグループ d としました。また、グループ分けに用いた語以外に、「基礎」という語も含むかどうかにも着目しました。

「検査」の名称に含まれる語のパターンと各パターンの「検査」を実施する大学数

	「検査」の名称に含む語					総合型選抜		学校推薦型選抜		
	学力	能力	XX力	適性	基礎	各パターン の大学数	「基礎」の 有無別の計	各パターン の大学数	「基礎」の 有無別の計	
グループ	a 【学力】	1	0	0	0	1	33		42	
		1	0	1	0	1	2	38	1	43
		1	0	0	1	1	3		0	
		1	0	0	0	0	3	3	2	2
	b 【能力】	0	1	0	0	1	2		5	
		0	1	0	1	1	1	9	0	9
		0	0	1	0	1	6		4	
		0	1	0	1	0	1		1	
		0	1	0	0	0	3	14	0	2
		0	0	1	1	0	1		0	
c 【適性】	0	0	1	0	0	9		1		
	0	0	0	1	1	1	1	1	1	
d 【その他】	0	0	0	1	0	22	22	13	13	
	0	0	0	0	1	7		8	8	
	0	0	0	0	0	35	35	26	26	
	計*					129		104		

※ 同じ大学が複数のパターンでの「検査」を実施している  
ケースを重複してカウントした計

16

スライドの表には、グループ分けで着目した語が検査の名称に含まれるパターンを示しています。1は「含む」、0は「含まない」ということを示しています。着目した語を含むかどうかというパターンと、各パターンの検査を実施する大学数の集計結果を、総合型選抜と学校推薦型選抜に分けて示しています。

名称に「学力」を含むグループ a の検査は、ほとんどが「基礎」という語も検査の名称に含まれていることが分かります。「基礎」と「学力」がセットになって含まれている傾向が非常に強いということです。名称に「能力」や「XX 力」を含むグループ b の検査については、「基礎」という語を検査の名称に含むかどうかについて、特に目立つ傾向は見られません。検査の名称に「適性」という語を含むグループ c や、その他のグループ d に関しては、検査の名称に「基礎」を含まないもののほうが多い傾向です。

3-(2) 各グループの「検査」の特徴

各グループの「検査」の特徴をとらえるために、教科・科目への言及に着目

- 「検査」の名称で教科・科目に言及しているかどうか
- 「検査」に関する募集要項等での説明で教科・科目に言及しているかどうか

「言及あり」とは

- ・ 高校で履修する教科名や科目名（の一部）を含む
- ・ 「1教科」「2科目」「教科」「科目」（教科・科目を基盤とすることが分かる語）を含む
- ・ 特定の科目における特定の分野や単元に言及した説明
- ・ 特定の教科の履修を前提することを明示する説明

		募集要項等での説明	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし		
	言及あり		

17

次に、各グループの検査の特徴を捉えるために、検査の名称で教科・科目に言及しているかどうかという点と、募集要項の説明の中で教科・科目に言及しているかどうかという点に着目しました。

検査の名称と募集要項それぞれにおいて、教科・科目への言及があるかどうかという観点から分けた場合、この表のような4つのセルができます。青で示した3つのセルが何らかの形で教科・科目に言及がある検査ということになります。

各グループの「検査」における教科・科目への言及（総合型選抜）（表中の数字は大学数）

**a【学力】**

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	5	30
	言及あり	1	6

教科・科目に基盤をおく傾向が強い

**b【能力】**

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	12	5
	言及あり	3	5

教科・科目に言及しない大学数 < 言及する大学数

**c【適性】**

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	10	13
	言及あり	0	2

教科・科目に言及しない大学数 < 言及する大学数

**d【その他】**

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	22	19
	言及あり	0	7

教科・科目に言及しない大学数 < 言及する大学数

18

このスライドは、先ほど分類した 4 つのグループに関して、総合型選抜において、それぞれのセルの検査を実施する大学の数を示しています。ちなみに「言及あり」というのは、特定の科目の特定の分野や単元に関する説明があるとか、特定の教科の履修を前提としていることが明示されている、ような状態を指します。

左上の「学力」のグループ a の検査の表を見ると、検査の名称か募集要項の少なくとも一方で教科・科目に言及する「検査」を行う大学が多くを占めます。その傾向は左下の表に示す「適性」のグループ c に関しても同様で、教科・科目に言及する検査を実施する大学が 13 足す 2 で 15 あり、教科・科目に言及しない大学が 10 あるのに比べて、少し多くなっています。一方、右上の表に示す「能力」のグループ b に関しては、検査の名称でも募集要項でも教科・科目に言及しない検査を実施する 12 大学に対し、言及する検査を実施する大学が 13 で、ほぼ拮抗しています。右下の表に示す「その他」のグループ d については、教科・科目に「言及あり」の 2 つのセルを合わせると 26 大学になり、教科・科目に言及する大学のほうが多いのですが、4 つのセルの中で一番多いのは、検査の名称でも募集要項でも教科・科目に言及しない検査を実施する大学（22 大学）です。

各グループの「検査」における教科・科目への言及（学校推薦型選抜）  
 （表中の数字は大学数）

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	4	32
	言及あり	2	10

教科・科目に基盤をおく傾向が強い

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	4	5
	言及あり	2	2

教科・科目に言及しない大学数 < 言及する大学数

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	1	10
	言及あり	0	3

教科・科目に言及する大学が大多数

		募集要項等	
		言及なし	言及あり
「検査」の名称	言及なし	9	20
	言及あり	1	5

教科・科目に言及しない大学数 < 言及する大学数

学校推薦型のほうが総合型より、教科・科目に基盤をおく「検査」を実施する大学が多い傾向 19

このスライドに示すのは、さきほどと同じことを学校推薦型選抜で実施される「検査」に関して集計した表です。左上に示す「学力」のグループ a の検査については総合型選抜と同じ傾向で、「検査」の名称か募集要項の少なくとも一方で教科・科目に言及する検査を行う大学が多くを占めています。左下の表に示す「適性」のグループ c では、教科・科目に言及する検査を行う大学が大多数になります。そして、右上の表に示す「能力」のグループ b に関しては、教科・科目に言及する大学の数は 5 足す 2 足す 2 で 9 になり、言及しない大学の数を上回っています。グループ b の検査を実施する大学自体は少ないのですが、教科・科目に言及するかどうかで比べてみると、言及する大学数が上回っているということです。右下の表に示す「その他」のグループ d でも、教科・科目に言及する大学の数のほうが多くなっています。

すなわち、学校推薦型選抜で実施される「検査」では、「学力」だけでなく他のグループにおいても、総合型選抜で実施される「検査」に比べて、教科・科目に基盤を置いた

検査を実施する大学が多いことが分かります。

グループa【学力】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称  
(総合型選抜)

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
「検査」の名称での教科・科目への言及	言及なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎学力検査</li> <li>基礎学力検査(総合問題)</li> <li>基礎学力試験(小論文)</li> <li>高大連携授業に関連する筆記試験・基礎学力試験</li> <li>適性検査(基礎学力)</li> </ul>	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎学力試験</li> <li>基礎学力テスト(マークシート方式)</li> <li>基礎学力テスト</li> <li>基礎学力審査</li> <li>基礎学力調査</li> <li>基礎学力確認テスト</li> <li>基礎学力を問う試験</li> <li>基礎学力確認試験</li> <li>学力調査</li> <li>適性をみるための基礎学力試験</li> </ul>	30
	言及あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎学力テスト(数学I)</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎学力テスト(英語・数学・理科より出題)</li> <li>基礎学力検査1科目</li> <li>基礎学力(国+英)</li> <li>基礎学力検査(英語・国語)</li> <li>基礎学力確認テスト(英語)</li> <li>基礎学力確認テスト(数学・英語)</li> <li>英語についての基礎学力審査</li> </ul>	6

20

ここから4枚のスライドは参考資料としてお示しするものです。総合型選抜で実施される検査について、4つのグループそれぞれで実際にどのような名称の検査が実施されているのかを、検査の名称と募集要項での教科・科目への言及の有無で分割した4つのセルに分けて示したものです。今、見ていただいているのが総合型選抜で実施される「学力」のグループaの検査の名称を示す表です。学校推薦型選抜については割愛しますが、検査の名称は、総合型選抜と大体似たようなものが使われています。

グループb【能力】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称  
(総合型選抜)

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
「検査」の名称での教科・科目への言及	言及なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎能力検査</li> <li>基礎能力検査</li> <li>読解・表現力試験</li> <li>資料読解力・文章表現力審査</li> <li>文章読解力審査(多肢選抜方式)</li> <li>日本語活用能力試験</li> <li>講義理解力試験</li> </ul>	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎能力試験</li> <li>基礎能力検査</li> <li>基礎能力適性検査</li> <li>基礎力評価</li> <li>講義等理解力試験</li> </ul>	5
	言及あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語の能力を見るテスト</li> <li>英語基礎力診断</li> <li>英語の総合力を問う問題</li> </ul>	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>数学能力検査</li> <li>英語能力検査</li> <li>国語・数学・英語に関する基礎力検査(2教科選択)</li> <li>国語・数学・英語に関する基礎力検査(1教科選択)</li> <li>理科に関する基礎力検査</li> <li>理科・数学基礎力検査</li> <li>英語力試験</li> <li>国際適性試験(英語力)</li> <li>科学適性試験(理科系能力)</li> </ul>	5

21

グループc【適性】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称  
(総合型選抜)

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
教科・科目への言及	言及なし	・学部適性試験 ・学科専攻別適性試験 ・適性テスト ・適性検査 ・適性検査(言語運用力・数理分析力) ・適性検査(面接含む) ・適性問題	10	・適性試験 ・適性検査 ・適性検査I ・志望分野に関する適性検査 ・学群適性検査 ・適性をみるための基礎試験	13
	言及あり		0	・適性検査(数学, 理科, 英語) ・適性をみるための数学・理科試験	2

22

グループd【その他】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称  
(総合型選抜)

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
「検査」の名称での教科・科目への言及	言及なし	・基礎テスト ・リーディングスキルテスト ・ペーパーテスト ・総合検査 ・総合(日本語) ・筆記試験 ・授業のまとめ ・ノートテイキング ・AP試験	22	・基礎確認テスト ・復習テスト ・講義に関する確認テスト ・総合基礎 ・筆記試験 ・一般教養 ・筆答試問 ・実験室入試 ・グローバルコミュニケーションテスト①ライティング ・ポートフォリオ入試	19
	言及あり	・確認テスト ・総合問題試験 ・講義型試験 ・探究総合問題 ・筆答試問 ・講義・レポート作成 ・課題レポート ・ポートフォリオ入試 ・多様な名称	0	・基礎数学 ・化学・生物の基礎テスト ・英文法の話題と英文の読解 ・教科I科目 ・「数学」に関するセミナーを行い、その理解度を問う筆記試験 ・「数学」および「物理」に関するセミナーを行い、その理解度を問う筆記試験	7

23

これら3枚のスライドは、総合型選抜で実施される検査に関して、「能力」のグループb, 「適性」のグループc, 「その他」のグループdごとに、検査の名称をまとめた表です。

グループa【学力】で、募集要項等において教科・科目への言及がある「検査」の説明例

- 「基礎」「基本」
  - 「高校までの基礎学力の定着を審査」
  - 「入学後に必要とされる数学および英語に関する基礎学力の確認」
  - 「日本語と英語の基礎的な語彙(読み, 書き, 表現, 読解, 要約など)」
- 難易度の目安
  - 「高等学校教科書の章末問題と同じ水準の問題」
  - 「教科書程度の内容が十分理解できているか」
  - 高等学校卒業程度認定試験の過去問題
- 範囲・分野の限定
  - 「生物の特徴, 遺伝子とその特徴, 生物の体内環境(生物基礎)」
  - 「高分子化合物の性質と利用を除く(化学)」
- 問う力
  - 「数学(数学I・数学A)に関する基礎的な知識, 理解力, 考察力を評価」
  - 「文章・図表・図形などから情報を読み取り判断する論理的思考力を問う」

24

このスライドは、「学力」のグループ a の検査について、どのように教科や科目に言及しているのかという例の一部を示すものです。「高校までの基礎学力の定着を審査」という文言や「日本語と英語の基礎的な語彙」のように「基礎」や「基本」といった語を使った説明がなされているものが見られます。あるいは、「教科書の章末問題と同じ水準」「教科書程度の内容」のように、教科書を参照とした説明があったりします。一部の大学では、高等学校卒業程度認定試験の過去問題から数値を変えたものを出すと予告されているなど、別の試験を参照して難易度の目安を説明しているものがありました。

また、生物のこの分野から出す、あるいはこの分野は除くといった、範囲や分野の限定に関する説明も見られました。除外されているのは高校 3 年の最後のほうで学習する内容かと思われます。また、問う力については、教科や科目と絡めて、理解力や考察力あるいは情報の読み取り、判断、そして論理的、思考力などの語を使った説明がなされています。

グループ c【適性】で、募集要項等において教科・科目への言及がある「検査」の説明例

- 「基礎」「基本」
  - 「志望する分野の適性及び基礎能力を評価」
  - 「大学教育に必要な基礎学力，特に〇〇学部で学ぶための基礎的な英語・国語・数学の総合問題」
  - 「数学に関する基礎知識」
  - 「理科の基礎問題」
  - 「英語と国語の基礎学力試験」
- 範囲・分野の限定
  - 「『無機物質の性質と利用』の範囲より出題，ただし薬学部では全範囲（化学）」
  - 「『生命現象と物質』の範囲より出題，ただし薬学部では全範囲（生物）」
  - 「無機物質の性質と利用，高分子化合物の性質と利用は除く（化学）」
  - 「生態と環境，生物の進化と系統は除く（生物）」
- 問う力
  - 「国語の読解力」
  - 「外国語の読解および日本語の表現力」
  - 「化学実験などに関する動画や資料（写真や図表など）を題材に，知識のみならず論理プロセスも重視した化学や科学的思考力に対する適性を評価」（佐賀大学，2022）

25

このスライドは、「適性」のグループ c の検査での教科・科目への言及の例です。「基礎」「基本」や範囲の限定については、「学力」のグループ a と同様の説明が多く見られます。問う力の説明に関しては、佐賀大学の例を挙げさせていただきましたが、化学に言及しつつも「知識のみならず論理プロセスも重視した化学や科学的思考力に対する適性を評価」といった語を使って説明しているという記述が見られます。

4. まとめ

令和2年度選抜

- AO入試では、小論文を用いる選抜区分が約30%、レポート/口頭試問/プレゼンを用いる選抜区分が20%前後
- 推薦入試では、小論文を用いる選抜区分が約30%、口頭試問を用いる選抜区分が約10%

※「基礎学力把握のための筆記による簡易な検査」を用いる選抜区分は、AO入試14.7%、推薦入試9.1%

令和3年度選抜

- 総合型選抜：小論文、プレゼン、口頭試問←課す選抜区分がある大学が50%以上
- 学校推薦型選抜：小論文、口頭試問←課す選抜区分がある大学が50%以上

※ 簡易な「検査」を課す選抜区分がある大学は、総合型も学校推薦型も約20%

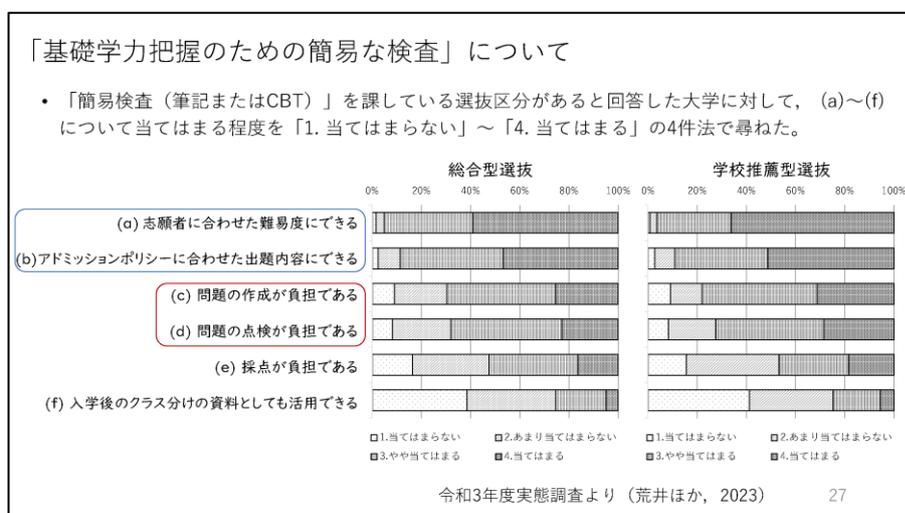
令和5年度選抜における「基礎学力把握のための簡易な検査」

- 名称に「学力」を含む「検査」：特定の教科・科目に基盤をおいて基礎学力を評価しようとする大学が多い
- 名称に「学力」を含まない「検査」：学校推薦型のほうが総合型より、教科・科目に基盤をおく傾向が強い

26

令和2年度入学者選抜、及び令和3年度入学者選抜の結果を見ると、総合型選抜ではプレゼンテーション、小論文、口頭試問が比較的多用される傾向があり、学校推薦型選抜では小論文や口頭試問が多用される傾向があることが分かります。

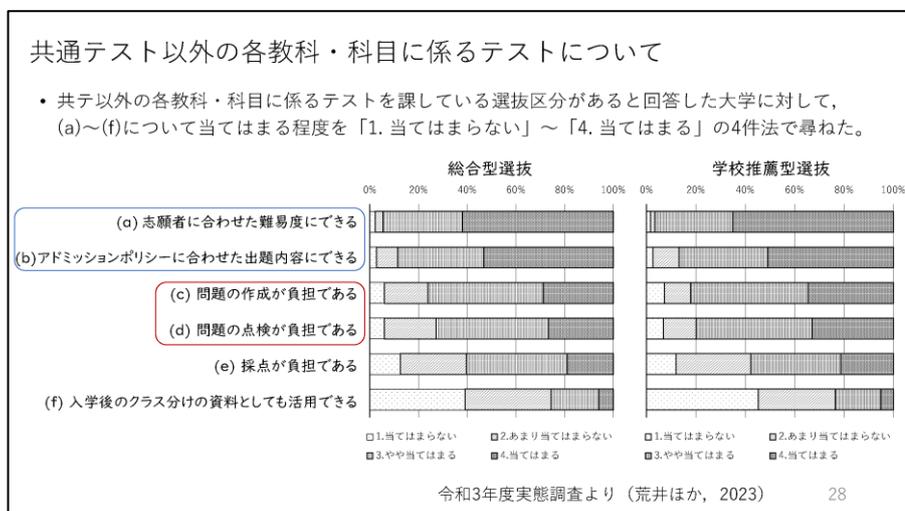
基礎学力把握のための簡易な検査については、名称に「学力」を含む検査では、特定の教科・科目に基盤を置いて基礎学力を評価しようとする大学が多い傾向があります。名称に「学力」を含まない検査についても、総合型選抜よりも学校推薦型選抜において教科・科目に基盤が置かれる傾向が示唆されます。



ここで、私たちが実施した令和3年度入学者選抜に関する実態調査に関して、基礎学力把握のための簡易な検査に関する大学の捉え方に関する回答の集計結果をご紹介します。

このグラフは、「基礎学力把握のための簡易な検査（筆記または CBT）」を課している選抜区分があると回答した大学に対して、(a) から(f)の6項目に関して当てはまる程度を4段階で評価してもらった結果です。「志願者に合わせた難易度にできる」「アドミッション・ポリシーに合わせた出題内容にできる」ということに関しては、「当てはまる」や「やや当てはまる」を選択した大学が非常に多いです。一方、「問題の作成が負担であ

る」「問題の点検が負担である」といった項目についても、「やや当てはまる」と「当てはまる」を選択した大学を合わせると、総合型選抜でも学校推薦型選抜でも 70%程度になります。難易度や出題内容についてのメリットがある一方、実施する負担も大きいことが示唆されています。



この傾向は、「簡易な検査」に限って見られるものではありません。共通テスト以外の各教科・科目に係るテストに関しても、課している区分があるという大学に回答してもらった結果は、先ほどの「簡易な検査」に関する結果とほぼ同様の傾向でした。志願者に合わせた難易度やアドミッション・ポリシーに合わせた内容にできるといったメリットについて肯定的な一方で、問題の作成や点検にかかる負担感がかなり大きいことが示唆されます。

各教科・科目テストであれ、先ほどご覧いただいた簡易な検査であれ、問題の作成や点検に関する大学の負担感はかなり大きいということで、この点は安定した品質のテストや検査を持続的に実施していく際に考慮しなければならない点かと思われます。

参考文献

荒井清佳, 伊藤圭, 椎名久美子, 桜井裕仁, 大塚雄作, 花井渉 (2023). 令和3年度の総合型選抜・学校推薦型選抜における知識・技能, 思考力・判断力・表現力等の評価資料の利用実態. 大学入試研究ジャーナル, 33, 226-232.

大学入試センター研究開発部 (2023). 令和3～5年度理事長裁量経費研究報告書「令和3年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」(大学入試センター研究開発部(編)).

高大接続システム改革会議(2016). 高大接続システム改革会議「最終報告」(平成28年3月31日). 文部科学省. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232\\_01\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf)

文部科学省(2017). 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告について(通知)(平成29年7月13日). [https://www.mext.go.jp/content/20200416-mxt\\_daigakuc02-000006597\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200416-mxt_daigakuc02-000006597_9.pdf)

文部科学省(2019). 令和2年度大学入学者選抜実施要項(令和元年6月4日). [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/06/05/1282953\\_001\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/06/05/1282953_001_1_1.pdf)

文部科学省(2020). 令和3年度大学入学者選抜実施要項(令和2年6月19日). [https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt\\_daigakuc02-000010813\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt_daigakuc02-000010813_4.pdf)

文部科学省(2021). 大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の実態調査の結果(令和3年4月20日大学入試のあり方に関する検討会議(第25回)配布資料) [https://www.mext.go.jp/content/20210419-mxt\\_daigakuc02-000014254\\_13\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210419-mxt_daigakuc02-000014254_13_1.pdf)

文部科学省(2023). 令和4年度国公私立大学入学者選抜実施状況(令和5年1月25日). [https://www.mext.go.jp/content/20230123-mxt\\_daigakuc02-000027141\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230123-mxt_daigakuc02-000027141_03.pdf)

佐賀大学(2022). 2023年度(令和5年度)佐賀大学入学者選抜要項. <https://www.sao.saga-u.ac.jp/PDF/R5/sennbatuyoukou.pdf>

椎名久美子・荒井清佳・伊藤圭・桜井裕仁・大塚雄作(2023). 大学入学者選抜における基礎学力把握のための検査に関する特徴分類の試み. 日本テスト学会誌, 19(1), 印刷中.

次のスライドは、お示ししたスライドで使った参考文献になります。  
私からは以上になります。

---

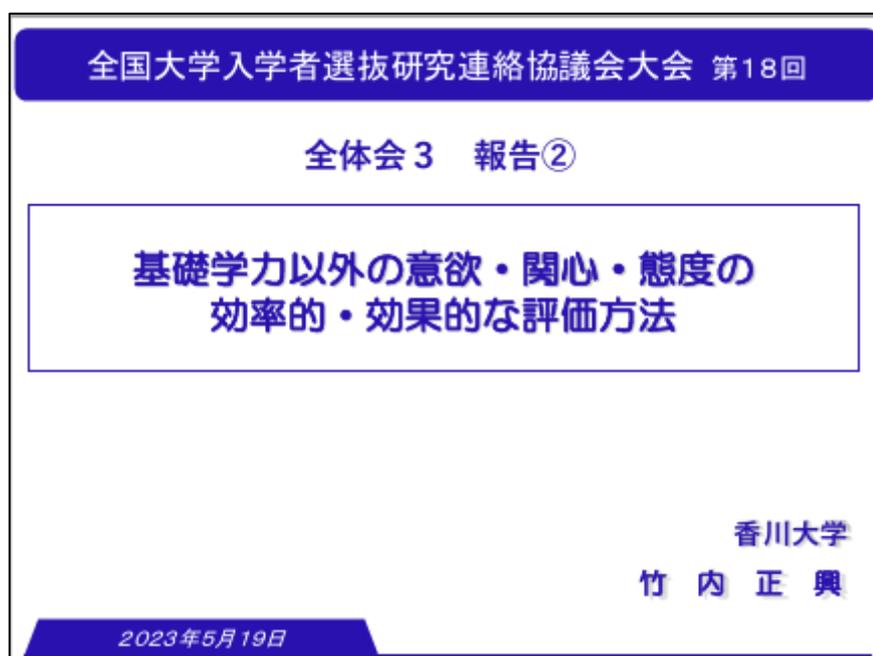
**【川嶋・司会】** 椎名先生，ご報告ありがとうございました。椎名先生のご報告は基礎学力をどのように把握しているかというご報告でしたが，続いての報告は，基礎学力以外のいわゆる非認知的な要素をどのように評価しているのか，あるいは，それを効率的・効果的にどのように評価しているのかという点について，竹内正興先生からご報告をお願いします。■

## 全体会 3 ○ 報告 2

# 基礎学力以外の意欲・関心・態度の効率的・効果的な評価方法

■竹内 正興（香川大学アドミッションセンター教授）

香川大学アドミッションセンターの竹内と申します。今日はこのような貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。

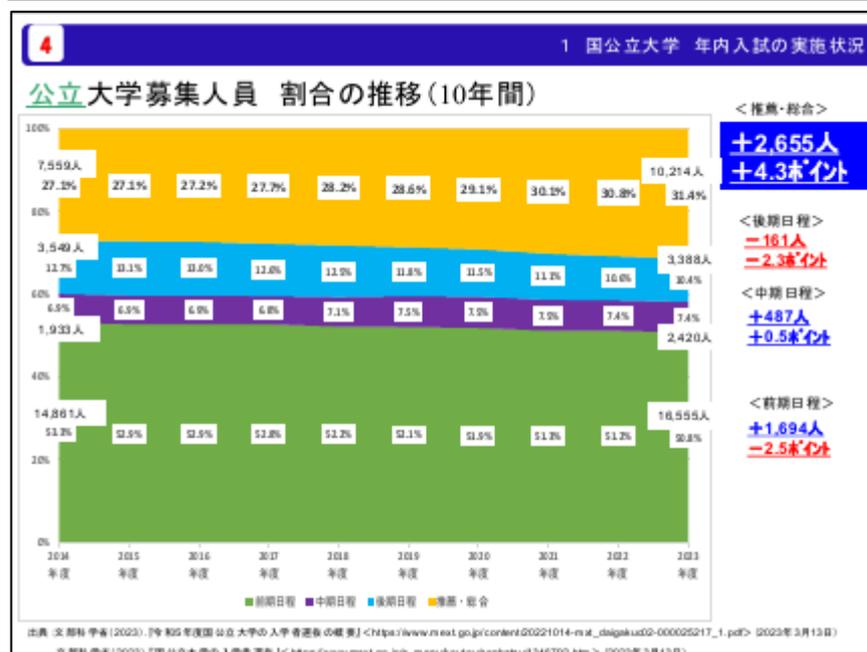
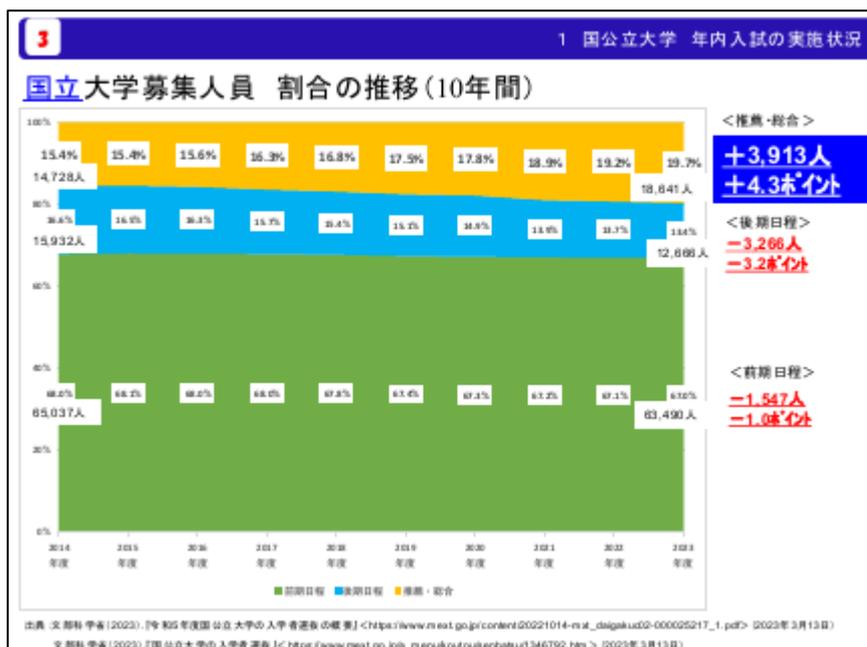


それでは、私からは、「基礎学力以外の意欲・関心・態度の効率的・効果的な評価方法」というタイトルでご報告させていただきます。

2	報告内容
<b>&lt;報告内容&gt;</b>	
<b>1. 国公立大学 年内入試の実施状況</b>	
<b>2. 大学入試における意欲・関心・態度の評価</b>	
<b>3. 共同での入試設計・実施の可能性</b>	
<b>&lt;事例1&gt;活動報告書(出願書類)</b>	
<b>&lt;事例2&gt;ペーパー・インタビュー</b>	
<b>4. まとめ</b>	

私からの報告内容はこちらの3点が中心となります。1点目は、公立大学を含めた国立大学の立場から、年内入試の実施状況についてご報告させていただきます。2点目に、大学入試における意欲・関心・態度の評価について説明させていただきます。そして、3点目では、大学間共同での入試設計・実施の可能性ということで、本日、私が最も強調させていただきたい点です。

全体会1及び2でも、「共同」をキーワードとして挙げられている先生がいらっしゃいましたが、私からも「共同」の重要性や可能性について報告させていただき、ご意見を頂ければと思います。その中で、活動報告書、ペーパー・インタビューの2つの事例についてご報告させていただきます。ペーパー・インタビューについては、私が所属している大学ではありませんので、これまで公表されている論文等から引用させていただく形でのご紹介となります。現状と先行研究の整理、実施事例の紹介を中心とし、その上で私自身の問題意識と今後考えられることについてご報告させていただくという流れで説明させていただきます。

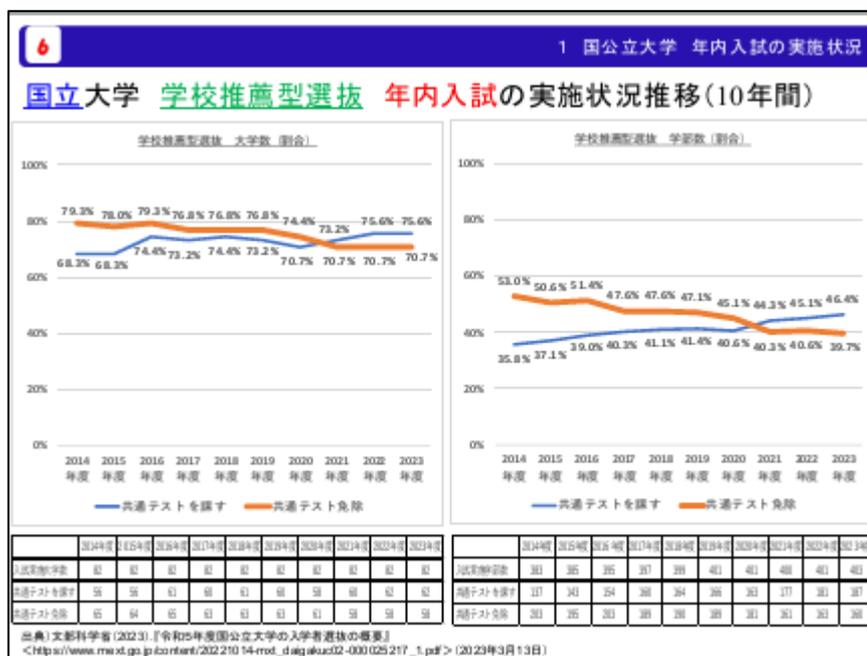


まず、1点目の国公立大学の実施状況を整理したものです。これはよくご覧になれる数値かと思えます。2014年度から23年度までの10年間の入試区分ごとの募集人員の割合の推移ということで、本日のテーマである学校推薦型、それから総合型が一番上のオレンジ色になります。

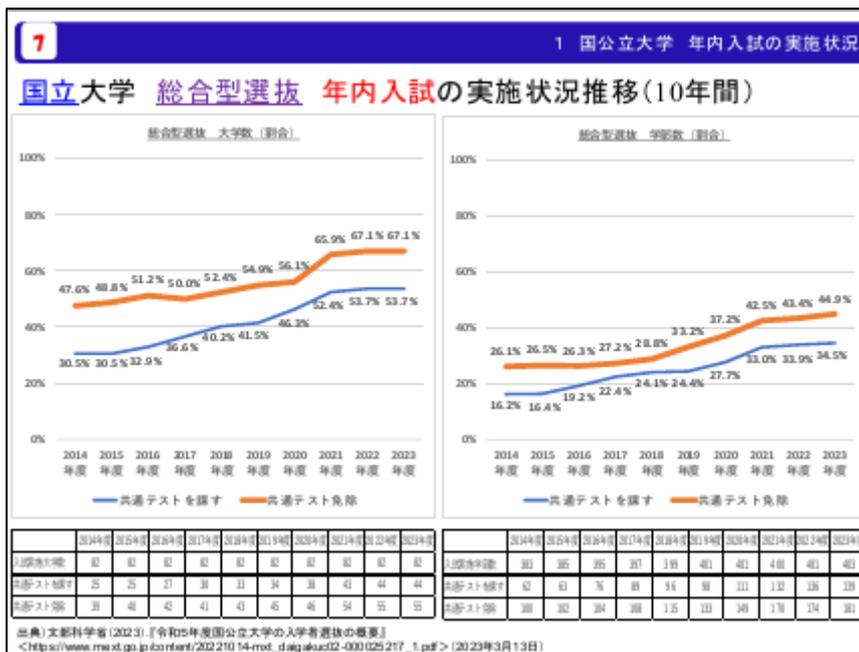
総合型、それから学校推薦型についてはこの10年間で募集人員が約3,900人、4.3ポイント上昇しています。公立大学についても同様です。一番上のオレンジ色を見ていただきますと、推薦・総合が2,600人ほど、4.3ポイント増えています。先ほど川嶋先生からもありましたとおり、国立大学で推薦・総合型の割合が約2割、公立大学で約3割ということなのですが、これをもう少し細かく見ていきたいと思えます。

5		1 国公立大学 年内入試の実施状況		
国公立大学 学校推薦型選抜, 総合型選抜の枠組み				
	国立大学	公立大学	共通テスト	
学校推薦型選抜	18,641人 (19.7%)	10,214人 (31.4%)	免除 (I型)	年内入試
			課す (II型)	
総合型選抜	<2023年度>	<2023年度>	免除 (I型)	年内入試
			課す (II型)	

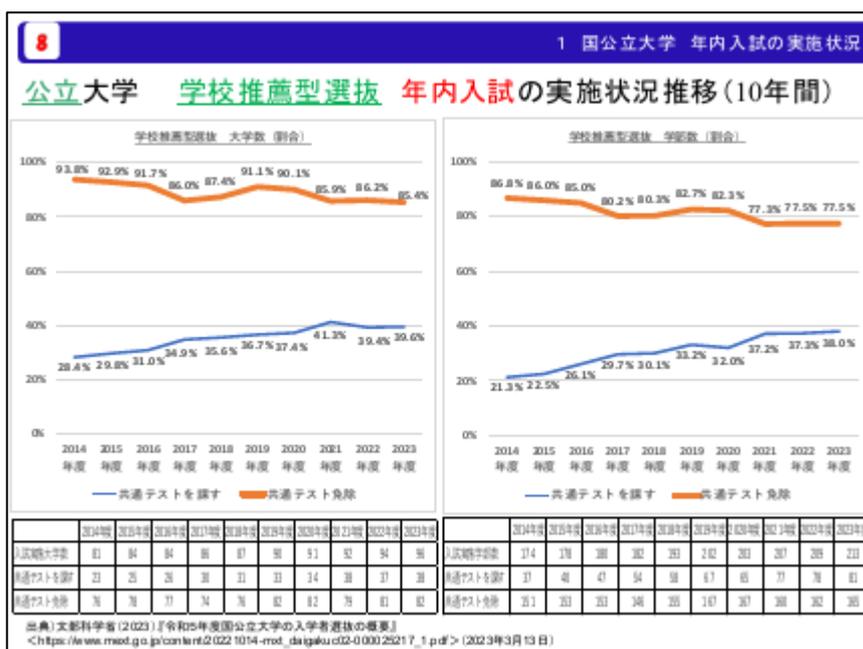
推薦・総合型には、大学入学共通テストを課すタイプII型と免除するタイプI型がありますが、I型が年内入試であるため、I型に着目し、10年間の年内入試の実施状況を見てまいりたいと思います。



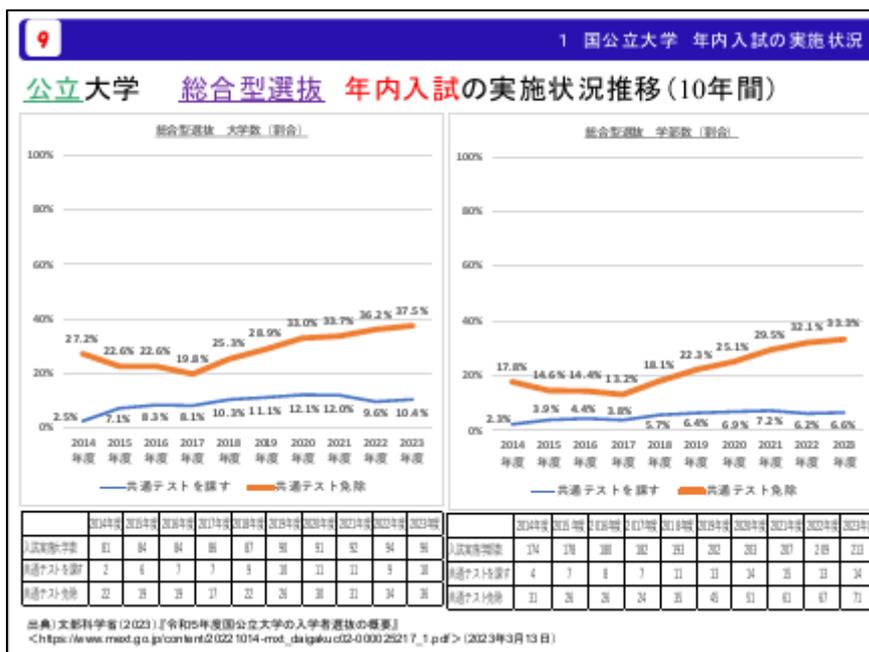
まず国立大学の学校推薦型選抜なのですが、左が大学数、右が学部数です。オレンジ色の太い折れ線グラフが共通テスト免除の年内入試型ですが、徐々に減ってきており、2021年度入試で共通テストを課すII型が少し多くなっていることが分かります。



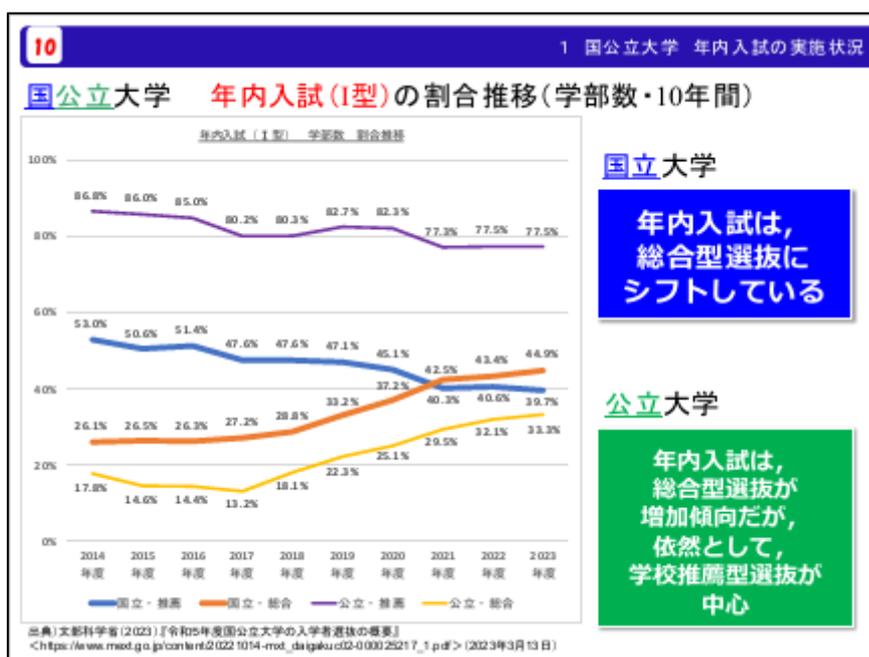
国立大学の総合型選抜については、両方が増えていますが、共通テスト免除のI型が大学数・学部数ともに割合として高いです。



公立大学の学校推薦型選抜について、この10年間で大学数・学部数ともに少しずつ減ってきていますが、依然として共通テスト免除のI型が圧倒的に多く、割合としても高いです。



また、公立大学の総合型選抜については免除型が徐々に増えています。



これらを年内入試に絞って整理します。国立大学については、学部数の割合から見ると、年内入試は総合型選抜に徐々にシフトしてきているのではないかとと言えます。

一方、公立大学については、年内入試は総合型選抜が増加傾向ですが、依然として学校推薦型選抜が中心であることが分かります。

2 大学入試における意欲・関心・態度の評価

**11**

**学校推薦型選抜**

出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、以下の点に留意して評価・判定する入試方法。

① 大学教育を受けるために必要な知識・技能、思考力・判断力・表現力等も適切に評価するため、高等学校の学習成績の状況など調査書・推薦書等の出願書類だけではなく、入学志願者本人が記載する資料の他、エッセイ、面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会や顕彰等の記録、総合的な学習の時間などにおける生徒の探究的な学習の成果等に関する資料やその面談等、又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用し、その旨を募集要項に記述する。

② 推薦書の中に、入学志願者本人の学習歴や活動歴を踏まえた第1に示す三つの要素に関する評価や、生徒の努力を要する点などその後の指導において特に配慮を要するものがあればその内容について記載を求める。

出典：文部科学省（2022）「令和5年度大学入学者選抜実施要項」令和4年6月3日

続いて、大学入試における意欲・関心・態度の評価について整理していきたいと思えます。まず、学校推薦型選抜の定義についてです。これは文部科学省から出されている令和5年度大学入学者選抜実施要項です。「出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、以下の点に留意して評価・判定する入試方法」とあります。

下線を引いてある箇所がいわゆる基礎学力以外の評価方法に当たるものと考えられます。調査書・推薦書や入学志願者本人が記載する資料、エッセイ、面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会の記録等になります。

2 大学入試における意欲・関心・態度の評価

**12**

**総合型選抜**

詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・判定する入試方法。

この方法による場合は、以下の点に留意する。

① 入学志願者自らの意志で出願できる公募制という性格に鑑み、入学志願者本人の記載する資料（入学志願者本人が記載する活動報告書、大学入学希望理由書及び学修計画書等）を積極的に活用する。

② 総合型選抜の趣旨に鑑み、合否判定に当たっては、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する。なお、高度な専門知識等が必要な職業分野に求められる人材養成を目的とする学部・学科等において、総合型選抜を実施する場合には、当該職業分野を目指すことに関する入学志願者の意欲・適性等を特に重視した評価・判定に留意する。

③ 大学教育を受けるために必要な知識・技能、思考力・判断力・表現力等も適切に評価するため、調査書等の出願書類だけではなく、小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績等、又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用し、その旨を募集要項に記述する。

出典：文部科学省（2022）「令和5年度大学入学者選抜実施要項」令和4年6月3日

総合型選抜の定義は「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・

判定する入試方法」とあります。

ここで、改めて注目したのが、「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接を組み合わせる」ということです。従来から言われているとおり、非常に手間がかかる選抜であり、募集人員の規模が小さければ求める人材像に沿って丁寧な選抜ができますが、規模が拡大した場合、様々な課題が生じると言えるかと思えます。これについてはまた後ほど報告させていただきます。

**13** 2 大学入試における意欲・関心・態度の評価

学校推薦型選抜, 総合型選抜 評価方法の内容

国立大学	学校推薦型選抜 (n=75)		総合型選抜 (n=63)	
	面接	96.7%	調査書	61.9%
調査書	65.3%	面接	60.3%	
小論文	54.7%	口頭試問	44.4%	
大学入学共通テストの利用	50.7%	大学入学共通テストの利用	41.3%	
口頭試問	32.0%	小論文	39.7%	
活動報告書	25.3%	活動報告書	39.7%	
実技試験	20.0%	プレゼンテーション	38.1%	
プレゼンテーション	10.7%	教科・科目に係るテスト	17.5%	
教科・科目に係るテスト	9.3%	実技試験	15.9%	

公立大学	学校推薦型選抜 (n=80)		総合型選抜 (n=34)	
	調査書	67.5%	面接	47.1%
面接	65.0%	調査書	47.1%	
小論文	57.5%	活動報告書	41.2%	
大学入学共通テストの利用	27.5%	小論文	26.5%	
活動報告書	21.3%	プレゼンテーション	23.5%	
教科・科目に係るテスト	15.0%	口頭試問	23.5%	
口頭試問	8.8%	大学入学共通テストの利用	11.8%	
プレゼンテーション	5.0%	実技試験	8.8%	
実技試験	5.0%	教科・科目に係るテスト	5.9%	

\*各入区分について、選抜を行わない大学を除く、複数回答。

出典：文部科学省(2019)『2021年度入学者選抜に向けた各大学の検討状況に関する調査研究 調査報告書』平成31年3月、より作成

次に、先ほどの椎名先生と重なる部分があって恐縮ですが、国公立大学の総合型・学校推薦型選抜の評価方法について、文部科学省の2021年の報告書より抜粋したのになります。総合型・学校推薦型ともに、上位の2項目は調査書と面接です。3番目は、推薦は小論文、総合型は口頭試問や活動報告書となっています。

**14** 2 大学入試における意欲・関心・態度の評価

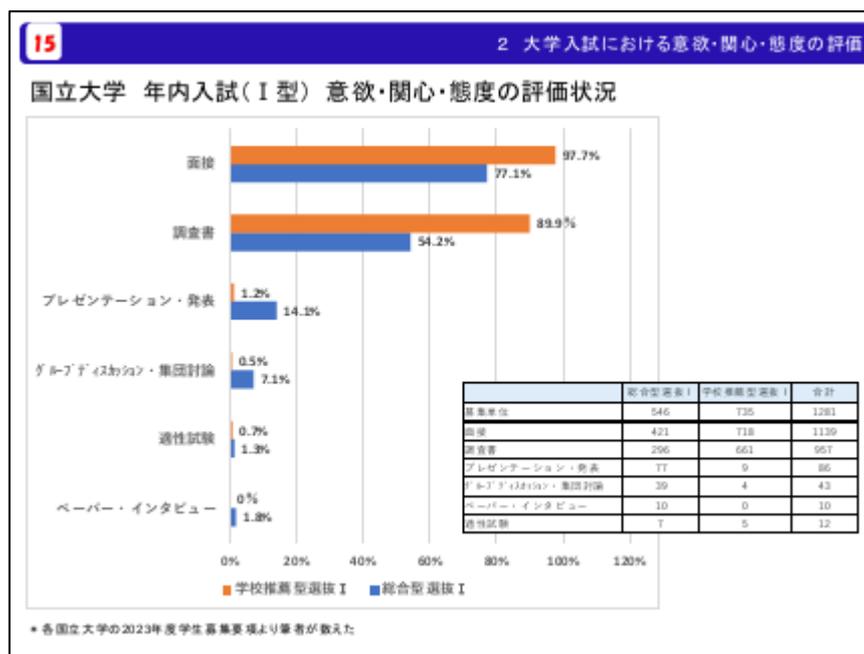
学校推薦型選抜, 総合型選抜 評価方法の内容 **私立大学**

私立大学	学校推薦型選抜 (n=523)		総合型選抜 (n=468)	
	面接	54.9%	面接	52.1%
調査書	54.5%	調査書	47.6%	
小論文	39.6%	小論文	31.8%	
教科・科目に係るテスト	22.8%	活動報告書	27.8%	
活動報告書	20.1%	プレゼンテーション	25.4%	
口頭試問	14.7%	口頭試問	15.4%	
実技試験	9.2%	教科・科目に係るテスト	14.5%	
プレゼンテーション	6.1%	実技試験	12.8%	
大学入学共通テストの利用	0.8%	大学入学共通テストの利用	1.3%	

\*各入区分について、選抜を行わない大学を除く、複数回答。

出典：文部科学省(2019)『2021年度入学者選抜に向けた各大学の検討状況に関する調査研究 調査報告書』平成31年3月、より作成

私立大学も同様です。私立大学の場合は選抜区分にかかわらず小論文が 3 番目に多い結果となっています。



先ほどの統計資料は、年内入試 I 型と大学入学共通テストを課す II 型の合算ですので、国立大学について、年内入試に絞ったものが次の資料になります。

私自身で 2023 年度入試の募集要項から実施状況をカウントしたものですので、誤差がありましたらご容赦いただければと思います。オレンジ色が学校推薦型選抜 I、ブルーが総合型選抜 I ですが、学校推薦型選抜については圧倒的に面接と調査書が多いです。

調査書については、評定平均値を利用する場合を数えています。例えば、これに履修制限等を加えれば 90% 台後半になりますので、補足いたします。いずれにせよ、学校推薦型選抜については面接と調査書が多いです。総合型選抜については、面接と調査書に加え、プレゼンテーションや集団討論・グループディスカッション、ペーパー・インタビューなどがあり、各大学が求める人材像に応じて様々な評価方法を取り入れていることがうかがえます。

16 2 大学入試における意欲・関心・態度の評価

国立大学における入試区分の外形的な特徴

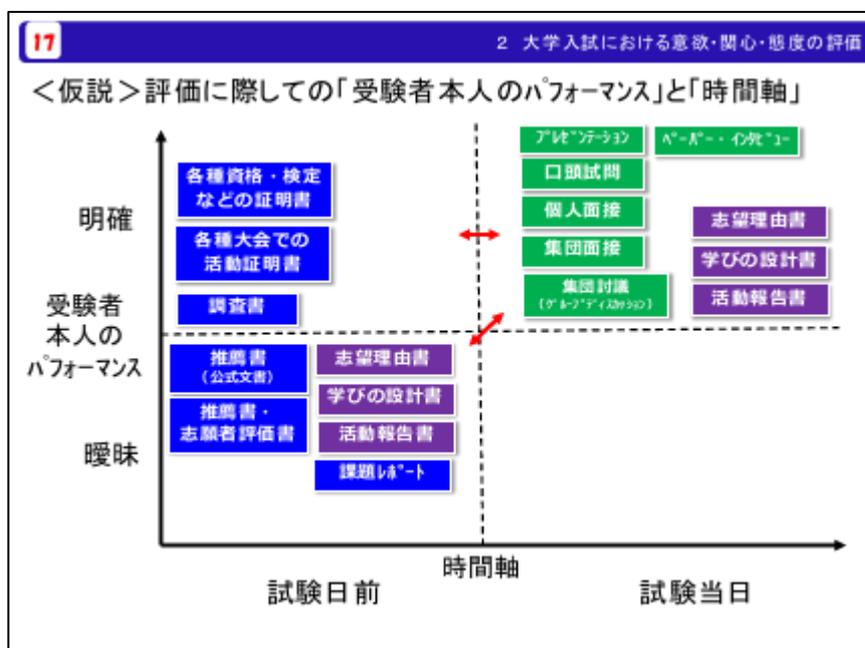
	学校推薦型選抜	総合型選抜
推薦書	学校長による推薦	受験生の自己推薦
定員	5割まで	制限を設けない
出願資格	主に卒業見込者	主に制限を設けない
出願時期	11月以降	9月以降
合格発表時期	12月以降	11月以降
主な選抜方法	出願書類、面接、小論文、学力検査などを含めて多様	
共通テスト	大学・選抜単位によって異なる	
入学義務	あり	主にあり

詳細な書類審査  
と  
時間をかけた丁寧な面接  
を組み合わせる  
質保証の課題？

出典：林篤幹「日本の入試制度概論」大阪大学高等教育・入試研究開発センター編『未来志向の大学入試デザイン論』7章、109-126。出願資格については筆者が加筆した。

こういった中で外形的な入試区分別の特徴を見ていきますと定員の問題があります。学校推薦型選抜については5割までということで規定がありますが、総合型選抜については制限を設けないことになっています。

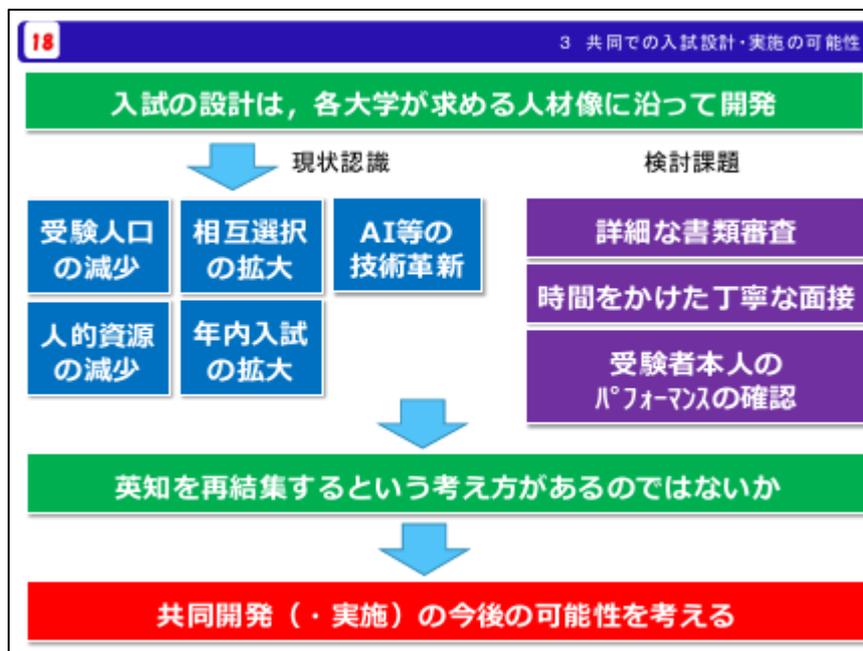
そうしますと、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接を組み合わせることについて、規模が拡大した時にどのように質を保証するのかという問題があるのではないかと改めて認識しています。



加えて、私の仮説として、評価に際しての受験者本人のパフォーマンスと選抜の時間軸を常に気にしています。横軸の「選抜の時間軸」は、右側が試験当日に行うものを指し、試験当日に行うものであれば、本人のパフォーマンスであることが明確ですので、

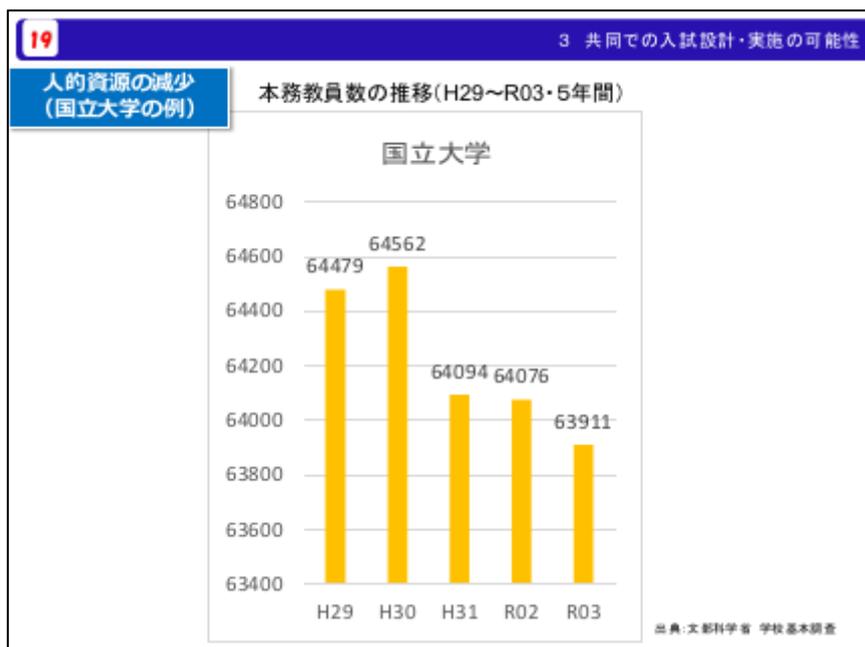
第1象限に入れていきます。

一方で、「試験日前」と書いてありますのは、出願書類の中で一定の評価をするものを指します。もちろん受験者本人のパフォーマンスであるのですが、試験当日に確認するものと比較すると、見えにくい部分が若干あるのではないかと認識しています。ここ最近は生成系 AI の影響もあり、この部分の問題認識を深めていくことが重要ではないかと考えています。

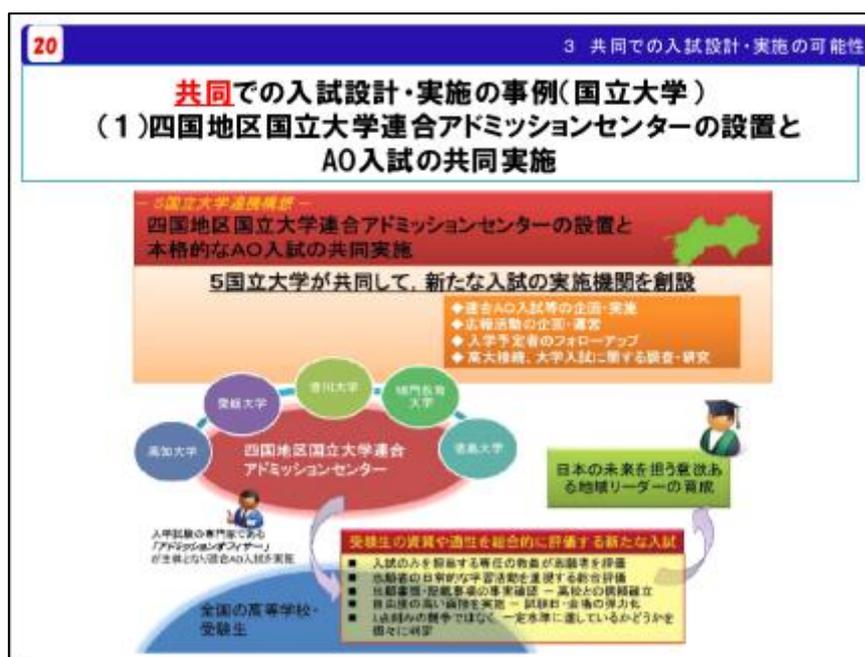


こういった中で、ここからは大学間共同の可能性について報告いたします。入試の設計は、各大学が求める人材像に沿って開発するものであり、各大学が行うものです。

ただ、受験人口の減少や相互選択の拡大、AI の影響、大学教員数の減少、年内入試の拡大といった現状認識があります。さらに規模拡大の中で、丁寧な選抜と本人のパフォーマンスの確認を実現しなければならないという課題を踏まえると、大学間で英知を再結集していくという考え方が必要ではないかと認識しています。大学間での共同開発・実施の可能性を考えるということを強調したいところです。



こちらは国立大学の教員数の推移を示すものです。参考データとしましてご覧いただければと思います。



ここからは 2 つの共同という事例についてご紹介させていただきます。1つ目は、四国地区の5つの国立大学が共同で新たなAO入試を行うという取り組みです。これは2012年度からスタートして、今、11年目です。国立5大学とは愛媛大学を基幹大学として高知大学、香川大学、鳴門教育大学、徳島大学を指します。

本入試では、入試のみを担当する専任の教員が志願者を評価しています。そして、志願者の日常的な学習活動を重視する総合評価、出願書類・記載事項の事実確認については、複数の大学のアドミッションセンターの教員が集まって企画しており、画期的な事

例の一つではないかと思います。

<b>21</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>共同での入試設計・実施の事例(国立大学)</b> <b>(1)四国地区国立大学連合アドミッションセンターの設置と AO入試の共同実施</b>	
<事業実施の背景>	
5大学が連携して解決に当たるべき共通する課題として、まず考えられるのは、 <u>人口減少が確実視される中、志願者をいかにして安定的に確保するか</u> です。本来これは、入試広報や選抜方法の工夫だけで解決できる問題ではありませんが、広報や選抜方法の改善は、5大学の存在感を高め、四国という地域に目を向けさせる一手段にはなりません。	
5大学が連携して入学者選抜方法やこれに関連する業務の <u>少なくとも一部を共通化すれば、スケールメリットが生まれ、受験生等へのアピール力も高まります。</u>	
<small>出典：四国地区国立大学連合アドミッションセンターホームページ&lt;<a href="https://shnuo-ac.adm.shime-u.ac.jp/about-us/">https://shnuo-ac.adm.shime-u.ac.jp/about-us/</a>&gt;</small>	

これはホームページから抜粋させていただいたものです。人口減少が確実視される中、志願者をいかにして確保するかという問題意識のもと、大学間共同によってスケールメリットが生まれ、受験生へのアピールも高まるとうたわれています。

<b>22</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>共同での入試設計・実施の事例(国立大学)</b> <b>(1)四国地区国立大学連合アドミッションセンターの設置と AO入試の共同実施</b>	
連合センターの「活動報告書」 →WEB出願とのリンク	
「活動報告書」 ルーブリックの共同開発と共同採点	

具体的な取り組みとしましては、四国の5大学の連合センターにおきまして出願書類の活動報告書を開発し、それを利用してウェブ出願とリンクさせています。そして、その活動報告書についてルーブリックの共同開発と共同採点という点が大きな特徴ではないかと考えます。

23 3 共同での入試設計・実施の可能性

連合センターの「活動報告書」→WEB出願とのリンク

志願者から出願書類として提出を求める**活動報告書**(主要な活動の経歴、成果等を志願者が作成するもの)をオンラインで入力するシステムを**5大学連携により独自開発**し、このことにより志願者を多面的・総合的により丁寧に評価し選抜することが実現した。



出典：西国地区国立5大学連合アドミッションセンターホームページ<<https://nuc-ac.adm.shime-u.ac.jp/about-us/>>

活動報告書とウェブ出願とのリンクについて、「今ログ」という名称で行われています。志願者はオンラインで入力した活動報告書を出願に使うことができます。開発は共同で行いますが、どの項目を採用するかは各大学の判断に委ねられています。志願者は、入力したものを使って5大学に出願する場合、記録した内容をウェブ出願時に呼び出すことができ、連携の特徴と言えます。

24 3 共同での入試設計・実施の可能性

連合センターの「活動報告書」→WEB出願とのリンク

あなたについて「記録」してみませんか？

高校生活の記録を記録し、活動報告書として活用し、大学の入試に活用することができます。

自分で取り入れて  
いること

興味があること  
書いてほしいこと

友人や仲間と一緒に  
取り組んでいること

記録する

連立支援サイト「今ログ」で**記録できること**。

あなた自身の進路に関する考えや以下のような活動態を記録しておくことができます。  
あなた自身にあった活用方法を見つけよう。

1 進路に関心したこと

2 活動内容

3 資格・検定  
コンテスト等

**WEB出願時に、記録した内容を呼び出すことができる**

<特徴>

- ◆活動の種類を制限していない
- ◆どの項目を活用(採用)するかは、各大学の判断に委ねられる

<入力フォーム>

1. 意欲的に取り組んだ活動

(1)活動名(活動の種類) (2)活動期間(選択)

(3)活動の説明(300字) (4)参考資料(郵送)の有無

2. 課題研究

(1)テーマ(題名)

(2)このテーマを選んだ理由(選択)

(3)概要・成果の説明(300字)

(4)個人研究・グループ研究の区別(選択)

(5)研究の期間(選択)

(6)補足欄(300字)

(7)問い合わせ先(指導教員名)

(8)参考資料(郵送)の有無

3. 資格・検定等

(1)名称 (2)級、スコア、賞等 (3)取得等の年月

出典：井上敬憲氏が(2017)「西国地区国立5大学共通のインターネット出願と多面的・総合的評価への取り組み」『大学入試研究ジャーナル』27、91-96

3 共同での入試設計・実施の可能性

**「活動報告書」→ルーブリックの共同開発**

	○段階	○段階	○段階	.....	○段階
I 知識・理解 思考力・判断力・表現力等					
II 主体性・多様性・協働性等 の情意領域					

想定事例をもとにした  
アドミッションオフィサー全員での採点

評価点とその判断根拠を蓄積した評価事例集  
を作成し、評価間のばらつきの減少を目指す

出典：井上敬憲ほか(2017)「四国地区国立大学共通のインターネット出願と多面的・総合的評価への取り組み」『大学入試研究ジャーナル』27, 91-98.

そして、活動報告書のルーブリックの共同開発についても、例えば、こちらは愛媛大学の井上先生などが発表されているものですが、知識・理解や主体性・多様性・協働性等の領域について数段階でルーブリックを作ります。その上で、想定事例を基にしたアドミッションオフィサー全員での採点を行います。そして、事例を積み重ねてばらつきをなくしていくということです。

3 共同での入試設計・実施の可能性

**「活動報告書」→ルーブリックの共同開発**

**1. 意欲的に取り組んだ活動**  
**「部活動」に関するチェックリスト**

学力の3要素		AP	評価項目	基準:3点				
				減点項目	加点項目			
主体性を持って 多様な人々と 協働して学ぶ態度	主体的に 活動できる	活動の主体						
		活動量(期間・頻度)	・2年未満 ・内容が乏しい:文章が短く(150字以下)、参考資料からも読み取れない					
	活動内容・成果		・通常の活動以上の創意工夫・独自性 ・具体的な成果がある ・心からの学びがある					
	多様な人々と 協働できる	多様な人間関係		・学外など多様な人々への働きかけがある				
協働作業			・部長、キャプテン ・他者をまとめるような働きがある					
総合評価			0	1	2	3	4	5

出典：大塚智子・藤村仁朗(2021)「一般選抜における活動報告書の評価項目の作成方法—主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度のAPに基づいた評価—」『大学入試研究ジャーナル』31, 380-385.

これは高知大学の先生方が発表されたものを引用したものです。意欲的に取り組んだ活動の部活動に関するチェックリストですが、5点満点で基準点は3点です。例えば上から2つ目の「主体的に活動できる」の「活動量」の減点項目の記述や、一番下の「協働作業」加点項目の記述は誰が見ても評価がすぐできるかと推測します。

その一方で「多様な人間関係」の加点項目にある、「学外などさまざまな人々への働きかけがある」、「心からの学びがある」といった記述は、複数の大学のアドミッションオフィサーが話し合い、事例を積み重ねていくというところではないかと推測します。

このような取り組みが続けて継続的に行われており、今も四国の5大学連合は2週間に一度ミーティングを行い、様々な意見交換を行いながら次の展開を考えています。



2つ目は、千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学の国立六大学が連携したコンソーシアムの協議会の中の入試専門部会での取り組みについてご紹介します。こちらは2013年から発足されています。

28 3 共同での入試設計・実施の可能性

**共同での入試設計・実施の事例(国立大学)**  
**(2)ペーパー・インタビュー**

**評価方法を複数の大学が共同開発**

**国立六大学連携コンソーシアム「ペーパーインタビュー」**  
 - 資質や特性、能力等の評価を書面で行う新たな筆記試験 - ※熊本大学で導入

令和3年度  
**大学入学者選抜における  
 好事例集**

有記録担当  
 立命館大学高等学務課

国立六大学連携コンソーシアム（千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学及び熊本大学で構成、平成25年に設立）の入試専門部会において、「**多面的・総合的評価**」のためのペーパーインタビュー（口頭でのやり取りで得たい情報を紙面に書かせ、従来の面接に代わり資質や特性、能力等の評価を書面で行う新たな筆記試験）を開発。

**意欲・関心・態度の  
 評価方法の仕組みを  
 複数の大学が共同開発**

こちらの六大学の入試専門部会ではペーパー・インタビューを開発し、文部科学省が公表した令和 3 年度の大学入学者選抜における好事例集に採択されています。採択された 18 件のうちの 1 つです。テーマ別に見ますと、「高校との連携をはじめとする高大接続改革の推進」というテーマで採択された 6 件のうちの 1 つとして評価されたものになります。

こちらのペーパー・インタビューについて、「口頭のやりとりで得たい情報を紙面に書かせ、従来の面接に代わり」とあります。面接に代わるものということですね。複数の大学の入試の担当の先生方が集まって、意欲・関心・態度の評価方法の仕組みを共同開発されたということで非常に意味があるものではないかと認識しています。

3 共同での入試設計・実施の可能性

### 六大学連携専門部会入試事業の概要

H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)
情報収集		高校トライアル実施・検証		結果の利用	
高校ヒアリング	高校ヒアリング	高校ヒアリング	高校ヒアリング	高校ヒアリング	高校ヒアリング
調査書データ化	調査書データ化 調査書分析	調査書活用のご 紹介(入研協報告)		実際の入試への ガイドライン一 註適用	実際の入試への ガイドラインの 適用
面接の実態調査	面接実験 →トレーニング、 構造化の効果  小論文実験 →問い方、 採点の信頼性  面接に代わる筆 記試験の試行	トライアル(1) →事前面接研修 →小論文 (記述式) →面接に代わる 筆記試験 →既存入試との 比較	トライアル(2) →ペーパーイン タビュー (面接に代わる 筆記試験)作 問研修 →構造化面接 →ペーパーイン タビュー		
	シンポジウムの 開催	ガイドラインの 改善・調整  面接ガイドブ ックの制作	ガイドラインの 改善・調整  各大学入試への 適用の検討  中間報告書の発 行  シンポジウムの 開催	ガイドラインの 改善・調整	事業報告書の発 行
ガイドライン ver.1 の策定		新たな選抜方法の開発・試行		大学間連携入試の実施	

事業継続は未確定

出典：石井ほか(2019)「大学入学者選抜改革に対応する高校トライアルの概要について」国立六大学連携コンソーシアム教育連携機構入試専門部会事業一「岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要」第4号、140-147。

こちらは岡山大学で発表された論文から引用したものです。六大学連携専門部会の概要としては、2016年にまず情報収集からスタートし、高校でのトライアル実施・検証、そして、結果の利用を積み重ねた上で導入に至ったということで、少なくとも6年間準備された取り組みです。

29 3 共同での入試設計・実施の可能性					
六大学連携専門部会入試事業の概要					
H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)
情報収集		高校トライアル実施・検証		結果の利用	
高校ヒアリング 調査書データ化 面接の実態調査	高校ヒアリング 調査書データ化 調査書分析 面接実験 →トレーニング、 構造化の効果 小論文実験 →問いつか、 採点の信頼性 面接に代わる筆記試験の試行	高校ヒアリング 調査書活用のご 括(入研見報告) トライアル① →事前面接研修 →小論文 (記述式) →面接に代わる 筆記試験 →既存入試との 比較 ガイドラインの 改善・調整 面接ガイドブ ックの制作	高校ヒアリング トライアル② →ペーパー・イン タビュー [面接に代わる 筆記試験]作 問研修 →構造化面接 →ペーパー・イン タビュー	高校ヒアリング 実際の入試への ガイドライン一 部適用 事業継続は未確定	高校ヒアリング 実際の入試への ガイドラインの 適用 事業報告書の発 行
ガイドライン ver.1 の策定		新たな選抜方法の開発・試行		大学間連携入試の実施	

出典：石井ほか(2019)「大学入学者選抜改革に対応する高校トライアルの概要について」国立六大学連携コンソーシアム教育連携機構入試専門部会事業一岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要、第4号、149-167。

長崎大学の吉村先生の論文から引用したのですが、ペーパー・インタビューとは、可能な限り紙面上で構造化面接試験を再現しようとするものであるということです。

また、他の岡山大学の先生方からの引用を見ると「口頭でのやりとりで得たい情報を紙面に書かせるもの」、「一般選抜前期日程では、受験者が多数で、時間的、人員的に面接の実施が困難である。その中で、多面的・総合的評価を行うための方法である」と述べられています。ペーパー・インタビューは受験者数が多い一般選抜を中心に導入されていますが、総合型選抜が今後拡大していく中で、適用される入試区分が広がっていく可能性があることを示唆しているのではないかと考えます。

31 3 共同での入試設計・実施の可能性	
<b>ペーパー・インタビュー 面接試験との比較</b>	
<p>○面接と比べて冷静に考え、緊張せずに<u>落ち着いて解答が書ける。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・想定外の質問に対する臨機応変な対応を見ることは難しい。</li> <li>・文章力や創作力で差がつく。</li> </ul> <p>○入試で面接を実施すれば試験日が1日増えるが、ペーパー・インタビューでは、<u>1時間の枠で実施できる。</u></p>	
<p>出典：石井ほか(2019)「大学入学者選抜改革に対応する高校トライアルの概要について」国立六大学連携コンソーシアム教育連携機構入試専門部会事業一岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要、第4号、149-167。</p>	

ペーパー・インタビューは、「面接と比べて冷静に考え、落ち着いて回答ができる」、「面接は1日かかるのに比べ、1時間の枠で実施できる」といったメリットがあると考えられています。一方で、「100%は面接と同様にはできないため、想定外の質問に対する臨機応変的な対応を見ることがなかなか難しい」、「文章力で差がつく」という指摘もあります。

32
3 共同での入試設計・実施の可能性

**<ペーパー・インタビュー 先行研究からの知見>**  
 ・受験者全員に面接を課すことが、時間的、人力的に実施困難な入試における有効性が確認された。

一般選抜  
前期日程

小規模組織

十分な試験日程が  
確保できない

出典：石井 洋か(2019)「大学入学選抜改革に対応する高校トライアルの概要についてー国立六大学連携コンソーシアム教育連携機構入試専門委員会等ー」岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要、第4号、149-167。

・評価が高い答案には、勉強、部活、文化祭などの振り返りが具体的に読みやすく記述されているという共通点がみられた。

出典：吉村 聖・石井 志昂(2021)「ペーパー・インタビューの試行結果についてー面接に代わる筆記試験の有効性の検討ー」大学入試研究ジャーナル 31、161-166。

ペーパー・インタビューの先行研究からの知見としまして「受験者全員に面接を課すことが、時間的、人力的に実施困難な入試における有効性が確認された」ということで、例えば、受験者数が多い一般選抜前期日程、また、実施する側の規模が小さい場合や、十分な試験日程の確保が難しいケース等において、有効性があると考えています。

33
3 共同での入試設計・実施の可能性

**ペーパー・インタビュー実施例**  
 (岡山大学教育学部養護教諭養成課程 一般選抜前期日程)

- ◆ 個別学力検査

- ・小論文
- ・ペーパー・インタビュー(面接に代わる筆記試験)

- ◆ ペーパー・インタビューの内容等

養護教諭養成課程で勉学・研究に必要な理解力・思考力や表現力並びに主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度について評価する。

- ◆ 一般選抜における学力の3要素対応表

知識・技能	思考力・判断力・表現力等の能力	主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
大学入学共通テスト	小論文 ペーパー・インタビュー	ペーパー・インタビュー

出典：岡山大学2023年度 一般選抜(前期日程)学生募集要項

次に実際にペーパー・インタビューの実施例を幾つか見てまいりたいと思います。まず、六大学の中の一つ、岡山大学の教育学部です。一般選抜の前期日程で実施されています。募集要項によると、ペーパー・インタビューは面接に代わる筆記試験とされています。学力の3要素の対応表では「思考力・判断力・表現力等の能力」と「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の2つに記載があります。

<b>34</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>ペーパー・インタビュー実施例</b> (三重大学生物資源学部 一般選抜後期日程)	
◆ 個別学力検査	
・個別学力検査(数学, 化学, 生物から1) ・ペーパー・インタビュー(面接に代わる筆記試験)	
◆ 出題方針・内容	
主体性・多様性・協働性を多面的・総合的に評価するため, 志望理由や学修への意欲を問う記述試験を行う。	
◆ 採点・評価基準	
大学入学後の学修への関心・意欲等が確認できる課題を提示して記述させ, 主体性・多様性・協働性を多面的・総合的に評価します。	
出典:三重大学2023年度 一般選抜学生募集要項	

<b>34</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>ペーパー・インタビュー実施例</b> (三重大学生物資源学部 一般選抜後期日程)	
◆ 個別学力検査	
・個別学力検査(数学, 化学, 生物から1) ・ペーパー・インタビュー(面接に代わる筆記試験)	
◆ 出題方針・内容	
主体性・多様性・協働性を多面的・総合的に評価するため, 志望理由や学修への意欲を問う記述試験を行う。	
◆ 採点・評価基準	
大学入学後の学修への関心・意欲等が確認できる課題を提示して記述させ, 主体性・多様性・協働性を多面的・総合的に評価します。	
出典:三重大学2023年度 一般選抜学生募集要項	

こちらは三重大学の生物資源学部の一般選抜後期日程です。こちらにもペーパー・インタビューは面接に代わる筆記試験であり、学力の3要素の対応表では、「表現力」と「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」という2つに丸が付いています。

3 共同での入試設計・実施の可能性

**36** **ペーパー・インタビュー実施(予告)例 \*2025年度入試~**  
**(福島大学食農学類 一般選抜後期日程)**

・ 個別学力検査等の学力検査(数学・英語から選択)と面接を廃止し、ペーパーインタビュー(注)を導入します。

	学力検査						ペーパー インタビュー	小計	総点
	国語	地歴・ 公民	数学	理科	外国語	情報			
共通テスト	200	100	200	200	200	100		1,000	1,100
個別学力検査等							100	100	

(注) ペーパーインタビューは、本学類が求める能力を多面的・総合的に評価するために、紙面に記載された質問を読んで回答を記述する筆記型の試験です。詳細については、令和5年度中に公表する予定です。

出典: 福島大学(2023)「令和7年度入学希望者選抜における学力検査実施教科・科目等に関する予告および共通システム理工学類・食農学類の選抜方法の見直しについて」令和5年3月29日 <[https://www.fukushima-u.ac.jp/news/Fa/s2/023/03/7\\_c0ba1693d32c038337b19a4a49a819.pdf](https://www.fukushima-u.ac.jp/news/Fa/s2/023/03/7_c0ba1693d32c038337b19a4a49a819.pdf)> (2023年4月4日アクセス)。

こちらは、今後実施予定の福島大学食農学類の一般選抜後期日程です。これは予告のものなのですが、面接を廃止し、ペーパー・インタビューを導入するという事例になります。

3 共同での入試設計・実施の可能性

**37** **ペーパー・インタビュー問題例**  
**(熊本大学 総合型選抜 グローバルリーダーコース入試)**

問: 現在、勉強やそれ以外の趣味などで指導者や教科書などの学びの枠を超えて、あるいはそれらの学び以外に、自ら進んで努力していることがありますか。それはどのようなことですか。具体的に教えてください。もし該当する事柄がなければ、これからやってみたいと思っていることや過去に行ったことでも構いません。複数思いつく人はその中からどれか1つを選んで教えてください。どんな些細なことでも構いません。下記の①～⑥の質問に留意して解答してください。

- ① いつ頃、どのようなことか。
- ② 自ら進んで努力しようと思った理由は何か。
- ③ 具体的に行っている努力はどのようなことか。  
それを行うことでどのようなことを期待しているか。
- ④ 現在も努力を続けているか。継続の理由は何か。  
努力を止めている場合は、その理由を述べる。
- ⑤ すでに何か結果・成果を得ているなら記述する。  
最終的な目標はどのようなものか(より具体的に記述する)。
- ⑥ その努力を通して得たことは何か。  
今後、問と同じような状況になったらどのように行動するか。

※これは、あくまで問題例の一つであり、問題の出題形式や解答用紙の様式等は変更の可能性あります。

出典: 熊本大学ホームページ<[https://www.kumamoto-u.ac.jp/hyoushi/gakubunyuushi/index\\_file/4sp2cn](https://www.kumamoto-u.ac.jp/hyoushi/gakubunyuushi/index_file/4sp2cn)> (2023年3月23日アクセス)。

熊本大学の総合型選抜のグローバルリーダーコース入試の問題例が大学のホームページで公開されています。「現在、自ら進んで努力していることを具体的に教えてください」と書いてあり、「1から6の質問に留意して回答してください」とあります。当然、何度もやりとりできるものではなく、一回、示して、それに対して書いてもらうものですから限界はあると思うのですが、面接と比べますとかなり細かく質問されています。

37
3 共同での入試設計・実施の可能性

**ペーパー・インタビュー問題例**  
**(熊本大学 総合型選抜 グローバルリーダーコース入試)**

問：現在、勉強やそれ以外の趣味などで指導者や教科書などの学びの枠を超えて、あるいはそれらの学び以外に、**自ら進んで努力していること**がありますか。それはどのようなことですか。**具体的に答えてください**。もし該当する事柄がなければ、これからやってみたく思っていることや過去に行ったことでも構いません。複数思いつく人はその中からどれか1つを選んで答えてください。どんな些細なことでも構いません。下記の①～⑥の質問に留意して解答してください。

- ① いつ頃、どのようなことか。
- ② 自ら進んで努力しようと考えた理由は何か。
- ③ 具体的に行っている努力はどのようなことか。  
それを行うことでどのようなことを期待しているか。
- ④ 現在も努力を続けているか。継続の理由は何か。  
努力を止めている場合は、その理由を述べる。
- ⑤ すでに何か結果・成果を得ているなら記述する。  
最終的な目標はどのようなものか(より具体的に記述する)。
- ⑥ その努力を通して得たことは何か。  
今後、問と同じような状況になったらどのように行動するか。

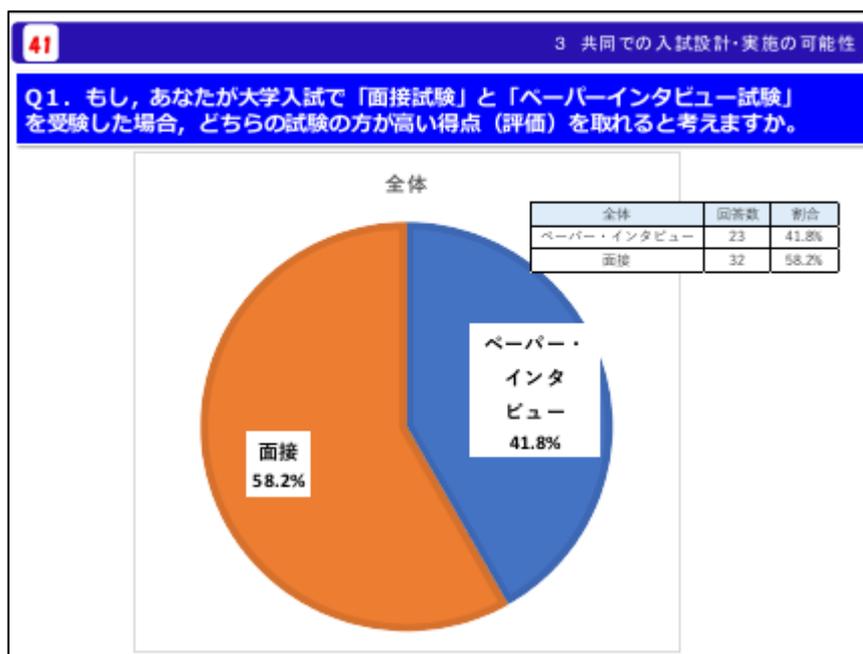
※これは、あくまで問題例の一つであり、問題の出題形式や解答用紙の様式等は変更の可能性あります。

出典：熊本大学ホームページ<[https://www.kumamoto-u.ac.jp/phyuue/igakubunyushi/index\\_file/4sp2cn](https://www.kumamoto-u.ac.jp/phyuue/igakubunyushi/index_file/4sp2cn)>(2023年3月23日アクセス)。

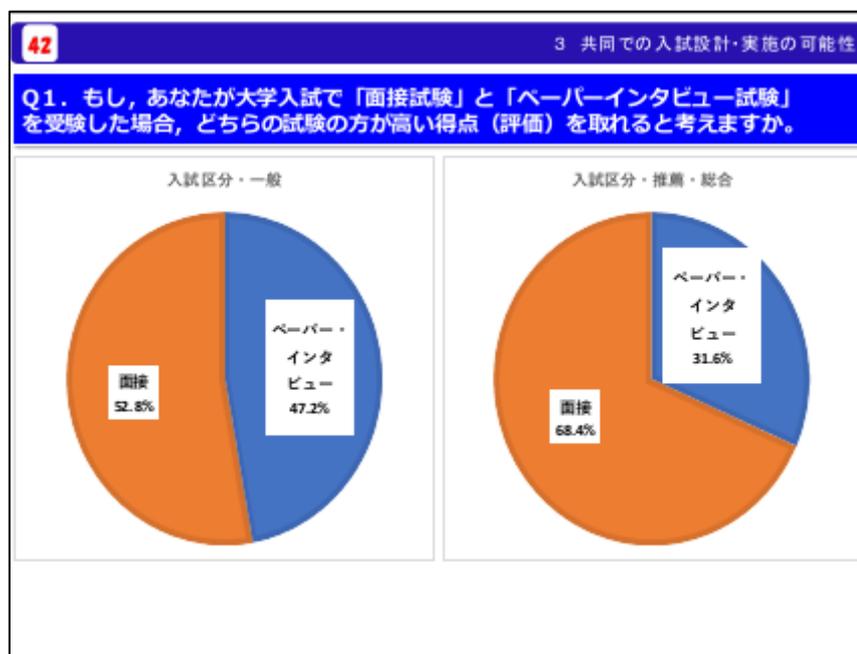
熊本大学では、各学部共通のペーパー・インタビューの評価基準として、リーダーシップ、協調性、自己表現能力、課題解決能力等を挙げています。他の面接や論述審査、口述審査なども、学部により行われているということで、意欲・関心・態度等について複数の評価手法を用いて非常に丁寧に評価されていることがうかがえます。

こちらのスライドは投影のみの報告になります。私が実際にペーパー・インタビューを受験した生徒がいる高校から受験の感想をいくつか拾ったものになります。共通しているのは「時間が足りない」、「問題が多い」、「質問が多い」、「書く量が多い」ということです。それ以外に上から2つ目は「一文で書く練習をしたほうがよい」という対策も述べられています。実際に2022年度の三重大大学の人文学部の後期日程では、「一文で書いてください」と指定されているケースもありました。この方が三重大学を受験されたかどうかは不明ですが、このような感想もありました。

それから、4番目で「作文の練習をしていたほうがよい」ということでペーパー・インタビューと作文に親和性を感じている受験生がいるようです。「小論文とは違う」という感想もありました。違うのは当たり前だと思うのですが、改めてそう書いている受験生がいました。

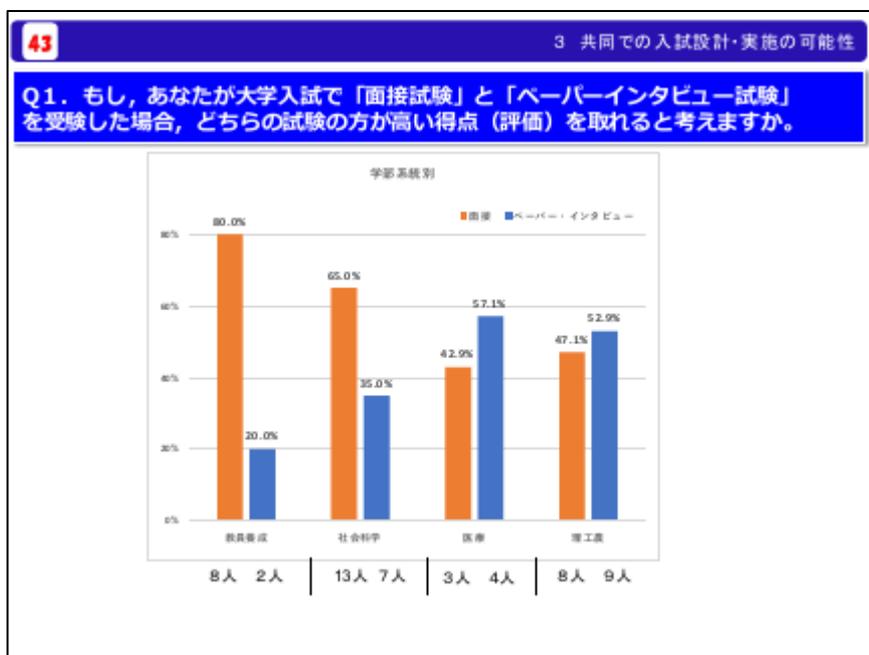


ペーパー・インタビューが導入されていない K 大学において、どのような印象を持っているのかということ把握するために調査を行いましたので、報告させていただきます。調査は、新1年生と上級生が交ざっていますが、55人を対象としました。55人のうち36人が一般選抜を経た入学者、それから19人が学校推薦型選抜・総合型選抜を経た入学者になります。



質問項目は「もしあなたが大学入試で面接試験とペーパー・インタビュー試験の両方を受験した場合、どちらのほうが高い点数（評価）を取れると考えるか」、そして「その理由を教えてください」というものです。

全体としましては、約 6 割が面接、約 4 割がペーパー・インタビューという結果でしたが、入試区分ごとに見ると、一般入試で入学した学生については拮抗して半々ぐらい、推薦・総合で入学した学生は面接のほうが多いという結果でした。



ここまでは大体予想どおりでしたが、学部系統別に見ると、教員養成系や社会科学系は面接のほうが高い点数が取れそうだという回答割合が高く、医療系や理工農系ではほぼ拮抗しているといった状況がうかがえました。

続いて、さらに人数が細かくなりますが、一般と推薦・総合に分けてみました。文系学部と比較すると理系の一般選抜などではペーパー・インタビューを導入しても受験動向には大きな影響がそれほどないのかなと感じています。

44 3 共同での入試設計・実施の可能性

Q2. Q1を回答した理由を教えてください。

ペーパー・インタビュー					面接				
順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度	順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度
1	緊張	1.712125	8	8	1	得意	1.722348	4	4
2	かんがえる	1.696097	7	11	2	話す	1.399013	10	12
3	ある	1.385768	3	3	3	面接	1.280944	7	7
4	出来る	1.066394	5	7	4	思う	1.279079	11	11
5	伝える	1.01368	3	5	5	伝わる	1.260238	8	9
6	思う	0.979705	4	4	6	言葉	1.218115	4	5
7	自分	0.951601	5	7	7	表情	1.199584	6	7
8	纏める	0.907231	4	5	8	見える	1.190292	2	2
9	回答	0.854977	3	3	9	出来る	1.148226	5	9
10	ペーパー	0.828564	3	3	10	その人	1.059757	5	5

理由の回答内容の重要度をキーワード分析、テキスト分析で出したものを見ると、ペーパー・インタビューではキーワードとして上位の2つにあがってきたのが「緊張」「考える」です。面接では「得意」「話す」ということでした。

<b>45</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>Q2. Q1を回答した理由を教えてください。</b>	ペーパー・インタビュー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・考える時間があるから。ゆっくり考えたいから。</li> <li>・面接だと緊張してうまく伝えられる自信がないが、ペーパーだとまとまった文章で伝えることができるから。</li> <li>・対面だと過度に緊張してしまい、本来の力が発揮できないため。</li> <li>・その場で即座に回答を求められる面接試験と違い、自分の思考を整理して答えられるから。</li> <li>・対人ではないため緊張が少なくなり高パフォーマンスが期待できるため。</li> <li>・口頭での質問に直ぐに答えられないと思うから。</li> <li>・対面の面接では緊張で本来の回答ができないと思うから。</li> <li>・ペーパーの方が緊張しなくて良いから。緊張したら声が出ないので、紙に書いた方が答えやすい。</li> <li>・話すよりも簡潔にまとめられると思うから。</li> <li>・喋嗟に喋ることは喋嗟に書くことより苦手だから。</li> <li>・答えが決まっているペーパー試験の方が対策しやすいから。</li> <li>・自分の言いたい事を口頭で説明するよりも、文章を用いて説明した方がうまくまとめられると思うから。</li> <li>・口頭ではスムーズに言葉が出ないことが多いが、筆記だと考えていることを素早く文字にできるから。</li> <li>・自分の回答についてじっくり考える時間をつくることができるから。</li> <li>・人と向かいあってその場ですぐに口で考えを言うと自分の考えをあまり上手くまとめることができないが、紙に自分の考えを書くと頭の中できちんとまとめることができ、自分の考えをまとめることができるから。</li> <li>・口頭試験だと試験官と対面した時に緊張で考えてきたことを思い出せずに、その瞬間で考えた文章で話すことになって、伝えたいことが伝えきれないことがあったから。</li> </ul>	

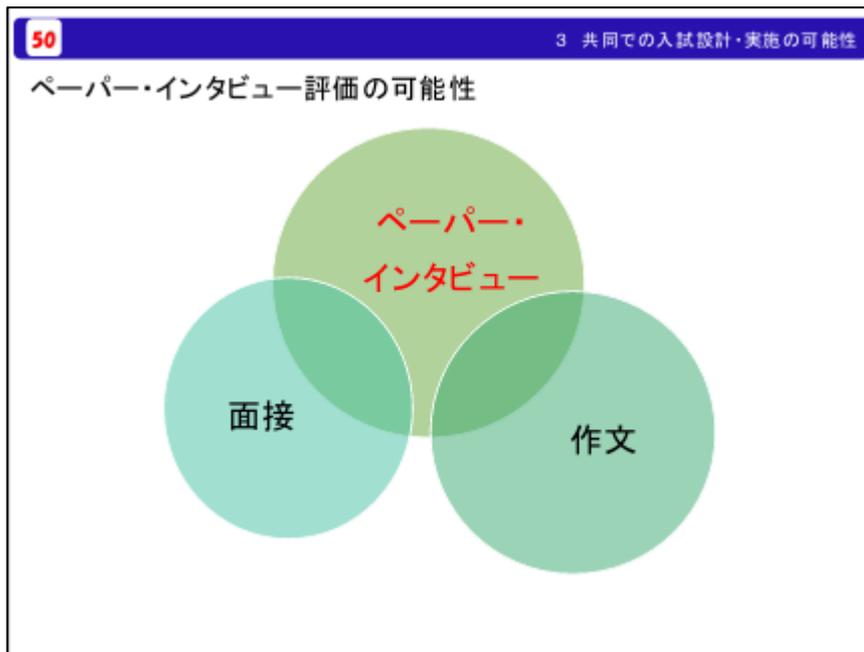
具体的な理由について、先ほどあげた上位 2 項目は赤字にしています。例えば、一番上理由は、先行研究と一致しています。「考える時間があるから」、「ゆっくり考えたいから」、「ペーパーだとまとまった文章で伝えることができるから」といった意見が多く見られました。

中ほどから少し下のところに「答えが決まっているペーパー試験のほうが対策しやすいから」という記述があります。受験生は、どちらの方が対策しやすいのかということを考えるのだなと改めて感じたところです。

<b>46</b>	3 共同での入試設計・実施の可能性
<b>Q2. Q1を回答した理由を教えてください。</b>	面接①
<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉にして伝えることで熱量等も伝わると考えたから。</li> <li>・ペーパーでは人柄が伝わらないと思うから。</li> <li>・自分の雰囲気や、性格がより伝わると思うから。</li> <li>・話す方が自分をアピールできるから。</li> <li>・面接だと、その人の仕草や表情から性格や雰囲気が読み取りやすいから。</li> <li>・動作や言葉で自己表現をすることが得意だから。</li> <li>・対面でないとその人の特徴を捉えられないから。</li> <li>・面接で直接会うことでコミュニケーションをより密にとることができ、互いの思いや考えを理解することができると思うから。</li> <li>・面接会うからこそ必要となる、対応力を見てもらえると思ったから。また、自分の長所が活かせる入試形態であるから。</li> <li>・面接の方が得意だから。</li> <li>・面接の時に抑揚をつけて話したり、表情を通じて伝えることもあったりと思ったから。</li> <li>・実際にその人のやる気や本性がわかると思ったから。</li> <li>・直接の面接であれば、本人の考え方だけでなく、その人自身の雰囲気であったり発言する能力も加味されるため、知識が先走りするような印象を与えないと思ったため。</li> <li>・文字だと自分が本当に伝えたいことや熱量が伝わりにくそうだから。</li> <li>・話す言葉の方が表情や口調などから言葉のニュアンスを受けとってもらえると思うから。</li> <li>・人柄とか性格とかが伝わるし、話した方がその人の熱量とかもしっかり伝わると思ったから。</li> </ul>	



と思います。



51 3 共同での入試設計・実施の可能性

ペーパー・インタビュー評価の可能性

【仮説】ペーパー・インタビュー 今後の利用の可能性(面接との比較)

選抜区分		個別試験	
		共通テストを課さない 共通テスト前の実施	共通テスト後の実施
一般選抜		/	面接の代替
総合型選抜 学校推薦型選抜	共通テスト 免除 (I型)	面接との組み合わせ	/
	共通テスト 有 (II型)	面接の代替	面接の代替

今後のペーパー・インタビューの評価の可能性についてです。国公立大学について、縦が選抜区分、横が共通テストを基準とした実施時期として分類しました。今後は、総合型選抜の年内入試拡大の可能性が想定されることから、面接の代替に加え、面接との組み合わせがポイントになると考えられます。各大学は求める人材要件に応じてどのような組み合わせがあるのか、あるいは代替するのか、さまざまな利用方法があるのではないかと認識しています。

選抜区分		個別試験	
		共通テストを課さない 共通テスト前の実施	共通テスト後の実施
一般選抜		/	面接の代替
総合型選抜 学校推薦型選抜	共通テスト 免除 (I型)	面接との組み合わせ	/
	共通テスト 有 (II型)	面接の代替	面接の代替

最後にまとめです。今後の大学間共同開発・共同実施の可能性を考えるということで整理させていただきました。基礎学力系においては、大学入学共通テストや入試過去問題活用宣言が共同の実績と考えられるのではないかと思います。一方で、基礎学力以外のところで見ますと、今日、報告させていただいた活動報告書、それから、ウェブ出願とのリンクという研究は、詳細な書類審査のための共同開発と捉えることもできるのではないかと考えます。

それから、ペーパー・インタビューは規模が拡大してきた時に、時間をかけた丁寧な面接をどうやって担保していくかといった点を踏まえた共同開発ではないかと認識しています。

大学間共同開発のメリットとしましては、大学コミュニティの共有財産の活用ができるということです。英知の再結集により最適性の追求が可能です。加えて、学力試験と比べて同一日時での実施に縛られにくいということが挙げられると思います。PBTの学力試験は同時刻の実施が求められますが、基礎学力以外については、共同開発して実施を各大学に委ねられれば、必ずしも縛られないと認識しています。一方で、検討を要する事項としては、開発段階で各大学のアドミッション・ポリシーの整合性を確認しながら進めていく必要があると考えています。

以上、私からの報告とさせていただきます。ありがとうございました。

【川嶋・司会】 竹内先生、ありがとうございました。先ほどの椎名先生のご報告が各大学は基礎学力をどのように把握しているのかということだったのに対し、基礎学力以外の非認知的な能力をどのように評価したらいいのかということ、及び効率的・効果的な実施のために大学間の共同は非常に重要であるというお話でした。

### 全体会 3

別の入試に関するシンポジウムでも、最後のまとめにもあったとおり、個々の大学が実施するというのと共同で実施することのどこにバランスを求めるのかという話がありました。大変、興味深いご発表でした。ありがとうございました。

それでは、最後になりますが、令和 5 年度から高等学校に導入されました総合的な探究活動の時間について、これまでも探究活動の成果を大学入試にどのように生かしていくかという議論がされていました。今回は探究学習等の成果の評価方法に焦点を絞り、立命館大学の本郷真紹先生からご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。■

## 全体会 3 ○ 報告 3

## 探究学習等の成果の評価方法

■本郷 真紹（立命館大学文学部特命教授）

どうもありがとうございます。立命館の本郷です。「探究学習等の成果の評価方法」という題でお話しさせていただきます。



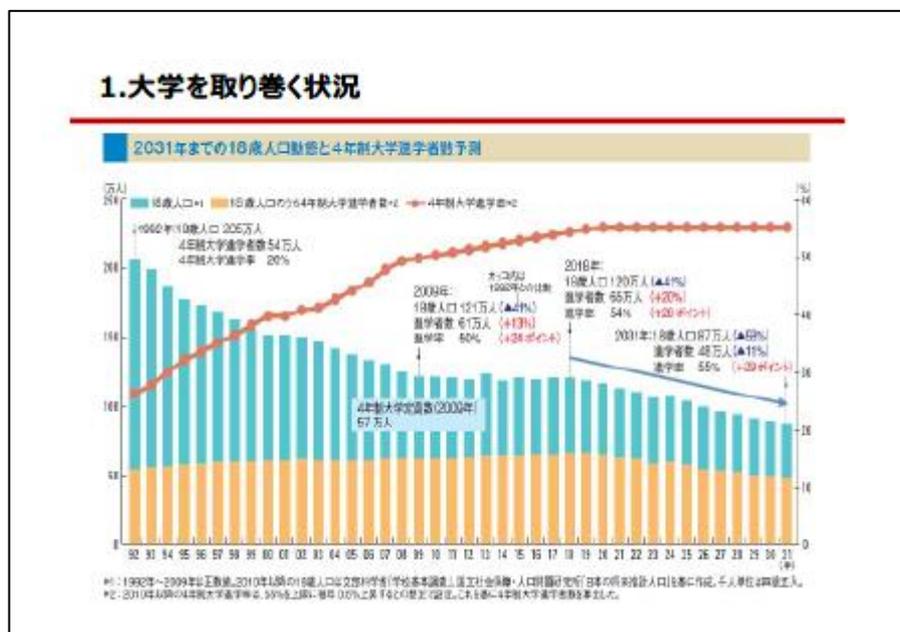
1990年代以来、AO入試・特別入試と、その都度、試行錯誤を繰り返してまいりましたが、その軌跡をたどりながら、改めて、今日の一つのAO入試の手段、総合選抜の手段となっているという実態をお示しさせていただきます。

## 本日の内容

1. AO入試を取り巻く情勢
2. 立命館大学のAO選抜概要と課題意識
3. 課題に対する新たなアプローチ(UNITE Program)
4. 探究型学習等の評価事例とこれからのAO選抜

2

本日の内容は、①AO入試を取り巻く情勢、②本学におけるAO選抜の概要と課題認識、③課題に対する新たなアプローチであるUNITE Programについてです。最後に、④新たな入試取り組み結果から見る今後の大学のミッションについてお話しさせていただきたいと思います。



まず、簡単に触れるにとどめますが、AO選抜どころか大学を取り巻く状況は非常に激動しており、18歳人口の激減の中で大学入試のありようが多様化しています。

一方で、大学への進学層は増えていきますので、現時点では志願者や入学者等に大きな影響は及んでいませんが、中長期的にはかなり厳しい状況が訪れるということです。

その中で、国立大学は入学者全体の3割を推薦入試、AO選抜、総合型の選抜によって

選抜するというアクションプランを提示しました。これまで AO・推薦といった総合選抜に頼る部分の大きかった私立大学は、国公立大学との兼ね合いでどのような入試を模索すべきか、大きな課題として課されているところとなっています。大学を取り巻く状況はご覧のとおりです。

## 2. AO選抜に関わる入試政策変遷

- 自己推薦から教学的素養を重視する方式への変革
- 15学部19方式で学部独自方式のAO選抜を展開（2024年度入試）

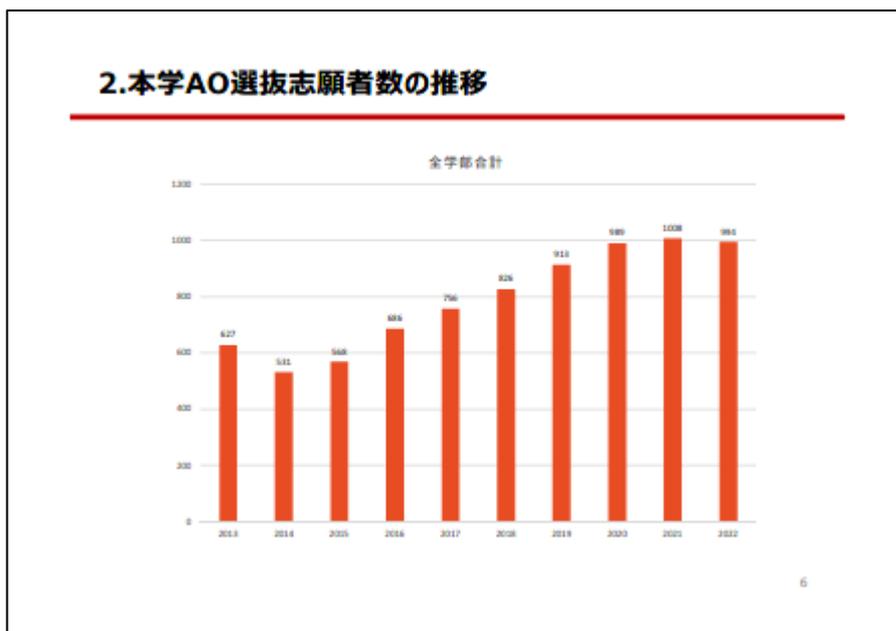
年代	立命館大学 AO選抜の変遷
1990年代	全学的に自己推薦特別入試を導入。アドミッションズオフィスを設置し、学部独自のAO選抜の新しいタイプとして「法学セミナー方式」を導入。
2000年代	各学部のアドミッション・ポリシーを明確にし、法学部以外の各学部においても「学部独自方式」を導入。
2010年代	自己推薦特別入試の廃止に伴い、AO選抜を「国際方式」「学部独自方式」に再編。各学部のアドミッション・ポリシーやシンプル化の観点から、さらに方式を整理し、「国際方式」を廃止。
2020年代	UNITE Program + AO選抜で新たな入試スキームを開発し、単元レベルでアドミッション・ポリシーを明確化した入試を実現。2024年度入試では、15学部19方式で学部独自方式のAO選抜を展開。

立命館大学の AO 選抜に関わる入試政策の変遷を見ますと、1990 年代に慶應大学 SFC で最初にアドミッション・オフィス入試が行われたことを受け、それに追随するような形で、本学もすぐに AO 入試を導入しました。全学的には自己推薦の特別入試を、法学部では法学セミナー方式を導入しました。この二本立てで始めたのですが、2000 年代には、各学部が法学部に追随するような形で、それぞれのアドミッション・ポリシーにのっとった独自方式を導入し、自己推薦と学部独自方式の二本立てで AO を展開するようになりました。

2010 年代には、志願者それぞれの取組みを独自に訴えてそれを評価する、自己推薦特別入試を廃止し、国際方式と学部独自方式に再編しました。国際方式とは、いわゆる英語の 4 技能の成果をベースとするような AO 入試になります。これも 2010 年代の後半期には廃止し、学部独自方式に一本化しました。

2020 年度になってから、UNITE Program + AO 選抜で新しい入試スキームを開発し、教科・科目の中でどのような内容が各学部での学びに必要なかという観点から、単元ごとの検証という形でもう一度設定し直しているというのが現状です。

最後の UNITE Program についてはまた少し後でも触れさせていただきたいと思います。2024 年度入試では、15 学部 19 方式でそれぞれ学部独自の AO 入試を展開する運びになっています。



AO 選抜志願者層の推移については、今年（2022年）は昨年（2021年）に比べ微減しましたが、2013 年から2022 年に至るまで、ほぼ増加の傾向にあります。

### 立命館大学のAO選抜入学試験

- ・ 志望理由や意欲・素養と、各学部の「求める学生像」とをマッチングさせる入試方式。
- ・ 立命館大学の〇〇学部を第一志望とし、そこで学び研究すること、学部で用意しているプログラムへ参加すること、等、入学後の学びへの高い意欲と具体的なビジョンがある人のための入試方式。
- ・ 学部ごとに異なる選考方法で実施。
- ・ 高校生活での学びや活動経験が、志望する学部での学びやプログラムへの志望に、どのようにつながっているのか、その具体性を評価。
- ・ 課外活動の内容や水準などを評価する自己推薦型の入試（いわゆる「一芸入試」）ではありません。  
→「スポーツ能力に優れた者の特別選抜入試」または「文化・芸術活動に優れた者の特別選抜入試」をご確認ください。

AO 選抜の基本方針として、志望理由や意欲・素養と、各学部の「求める学生像」とをマッチングさせる入試にしたいということがあります。

2 番目に、第 1 志望の学部を明確にして、そこで学び、研究すること、それから、学部で用意しているプログラムへ参加することなど、入学後の学びへの高い意欲と具体的なビジョンがある人のための入試方式であると規定しています。

学部ごとに異なる選考方法で実施します。高校生活での学びや活動経験が志望する学部での学びやプログラムへの志望にどのようにつながっているかということの具体性を評価します。

特に、今日、高校の指導要領が大幅に改編される中で、4番目の項目の内容の充実化を図っていかねばならないわけですが、いわゆる自己推薦型の課外活動の内容や水準などを評価するものではありません。俗に一芸入試といわれる、いわゆるスポーツ選抜や文芸ではないということです。あくまでも成果をベースとする探究型の学びの内容を検証する方向で行うということです。

**AO選抜入学試験の概要①**

---

**■ 立命館大学で学ぶ明確な意志を審査する**

⇒ **本当にやりたいことができるのがその学部なのか**

⇒ **「志望動機の実体性」「学部理解の正確性」「志望理由の明確性」「大学における学びの具体性」が大切！**

- **エントリーシート／志望理由書の作成**
  - ⇒ 「熱意」「意欲」は大事ですが、それらについての記載内容が具体的・客観的であることが重要です。学部によって記載項目が異なります。何を書くことが求められているのか、よく考えよう。
- **面接・口頭試問はほとんどの方式で行われます**
  - ⇒ 受験生1名に対し面接者2名が基本。身だしなみや礼儀は大事ですが（制服か私服かは問いません）、より重要なことは、面接者からの問いに対して応答がしっかりと行えることです。具体的に簡潔に口頭で回答を行うことが大切ですが、予め用意した内容を明確に主張できることよりも、その後の問いに的確に応答できるかどうかを重視しています。

概要ですが、立命館大学で学ぶ明確な意志を審査するというものですから、まずこの点が大事になります。

かつては指定校推薦などで、学校側からの要望を受けて指定校に入学してきていました。生徒本人は、具体的にその学部で何を学ぶのかをさほど意識せず入学し、いざ大学の授業に出てみると思っていたのと大きく違っていたということがありました。学部の名称だけでは十分に中身を理解できない可能性があり、漠然とでありながらも彼ら彼女らが抱いている自身のキャリアビジョンや志向性と、その学部での学びがそぐうものなのかを厳しく検証し、ミスマッチをなくす仕組みが必要だということになりました。志望動機の実体性、学部理解の正確性等、様々な手だてで広報は打っていますが、そのミスマッチがなくなるのかということなのです。

そのため、志望理由の明確性や大学における学びの具体性を審査するための選考方法として、エントリーシートや志望理由書の作成、さらには面接や口頭試問などを通してその中身を確かめています。

### AO選抜入学試験の概要②

■ 立命館大学で学ぶ力を審査する  
 ⇒ 「読む／聴く」力、「要約する」力、「書く／発言する」力、「意見を表明する力」を問う。  
 ⇒ 「独創性」「論理性」「思考力」「表現力」が大切！

- セミナー型／小論文・課題論文型
  - ⇒ 講義や資料の内容を理解し、解答する。内容を要約し、それを踏まえて自分の意見を述べるレポートを作成するもの、内容理解に関わる設問に解答するもの、などがある。
- 課題論文の作成（入学後に学びたいテーマなどを書く場合）
  - ⇒ エントリーシートや志望理由書が、自分の志望動機や理由、熱意、大学での学びがどう将来につながると考えているのかを書くのに対し、入学後に学びたい研究テーマなどを書く場合の課題論文は、どういふことに関心があり、大学でどのように深めたいと考えているのかを書くものです。その違いをよく考えて書こう。

2番目に、もう一つの大事な点として、学ぶための力があるのかということです。読む／聴く力、要約する力、書く／発言する力、意見を表明する力などを問います。これを基礎学力と言っているのかどうかということになるわけですが、加えて独創性、論理性、思考力、表現力といった今日の3つの学力で求められている内容をどの程度兼ね備えているのかということ併せて確かめます。

選考方法としては、セミナー型、小論文・課題論文型、あるいは、入学後にこのようなことを学びたいという、自分自身が課題意識として持っている内容やテーマなどを書く課題論文の作成など、様々な手だてで検証を行っています。

### AO選抜入学試験の方式一覧【文系】

法学部	※AO入試の募集はありません
産業社会学部	産業社会小論文方式
国際関係学部	国際関係学専攻講義選抜方式 グローバル・スタディーズ専攻総合評価方式 ジョイント・ディグリー・プログラム総合評価方式
文学部	人文学プロポーズ方式 国際方式（英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・中国語・朝鮮語）
経営学部	英語重視方式 ※経営学科のAO入試の募集はありません。
政策科学部	政策科学セミナー方式
総合心理学部	総合心理学部課題論文方式
グローバル教養学部	4月入学総合評価方式(10月選考) (12月選考)
映像学部	プレゼンテーション方式（映像撮影型、絵コンテ作画型）
経済学部	英語重視方式 数学重視方式
スポーツ健康科学部	CREA方式（グローバル・アスレティックトレーニング型、教員熱望型、課題発見・解決型、数学的素養型）
食マネジメント学部	プレゼンテーション方式（課題論文型、基礎数学型）

### AO選抜入学試験の方式一覧【理系】

情報理工学部	下記以外のコース	※AO入試の募集は廃止になりました
	Information Systems Science and Engineering Course	ISSE方式
理工学部	数理科学科 数学コース データサイエンスコース 物理科学科 電気電子工学科 電子情報工学科 機械工学科 ロボティクス学科 環境都市工学科	理工セミナー方式
	建築都市デザイン学科	※AO入試の募集はありません
生命科学部	応用化学科 生物工学科 生命情報学科 生命医科学科	探究活動評価方式★
薬学部	薬学科	課題探究型方式
	創薬科学科	

11

時間の関係で個々にはご説明申しませんが、文系の学部では全ての学部でそれぞれ特色ある学部独自の方式を取り入れています。それは各学部のアドミッション・ポリシーを反映したものですので、独自のやり方をとっています。理系でも同様に、各学部にとって最も望ましいと思われる方式で行っています。

### AO選抜・探究学習等の評価に対する課題意識

**①基礎学力の担保**

やりたいことが明確で意欲が高い学生を評価する一方で、それを入学後に実現するために必要な基礎学力を提示できていない、確認する方法がない。

現状の履修歴や評定平均値による出願資格では測り切れない。また学習指導要領外の学習歴の志願者を図らずも排除してしまう。

**②高校までの学習成果と入学後の学びのマッチング**

探究学習等、高校での多様な取り組みの成果が、志望学部での入学後の学びとマッチングしていることが重要。

12

その上でAO選抜・探究学習等の評価に対する課題意識としては、志望者の目的意識や入学後・卒業後のビジョンを持っていることに加え、これが非常に大事だと思っているのですが、自分はどのような形で社会に貢献できるのかという点についての意識をどれだけ明確に持っているかです。こういった点を積極的に評価していきたいと思っておりますが、「言うは易し行は難し」で十分になし難い現状があります。

課題の一つとして、選抜方法の追究による執行業務の負担増加があります。大学側が

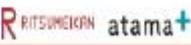
よりよい評価体系や選抜方法を検討して実行していきたいと試行錯誤を重ねると、選抜に係る入試執行の業務の負担がトレードオフの関係となり、実現にハードルが生じてしまうということになるのです。

話が横道にそれますが、20年ほど前、AO入試を始めてちょうど5年がたった頃に今日でいう探究学習の重視と同じような課題意識を抱き、高校生が日常的に課題として取り組んでいることとミスマッチなく、大学の学部での学びにつながり、真の高大接続を成し得るにはどうすればよいかを議論しました。その結果、「立命館サマーカレッジ」という合宿形式のイベントを催しました。本学を志望してくれる高校生を夏休みに集めて、全学部が基礎となるような講義を提供し、2日間で最低6つの学部の講義が聴ける仕組みです。

それを受講した上で、残りの2日間、大学院生をバディにつけて、アトランダムにグループを編成し、近くの琵琶湖を舞台にフィールドワークを行いました。グループの課題とそれについての探究内容についてプレゼンテーションをさせ、みんなで議論する形の催しをやりました。当時は、自己推薦型を行っていたので、自分のやった成果をそこに盛り込んでレポートに出すということをやったのです。

こちらは何せ自己推薦型のAO入試であり、自ら訴える重要なポイントになるということもあり、2年目には100名を超える高校生がエントリーしました。結局、收拾がつかなくなってしまって数年で終えてしまったのです。やろうとした意図や方向性としては望ましいことであったと思っていましたので、後で時間があればご紹介しますが、そういったことを参考に、現在、国立青少年教育振興機構で催されている探究学習のアワードで制度設計に生かしてもらっています。

これは後にまたご説明を申し上げます。元へ戻りまして、もう一つが2番目にあります基礎学力の担保です。やりたいことが明確で意欲が高い学生を評価する一方、入学後にそれを実現するための基礎学力が重要ですが、それを明確に提示できていない、確認する方法がないという課題があります。つまり、現状の履修歴や評定平均値等によりましては計りきれないものがあり、また、学習指導要領外の学習歴の志願者を図らずも排除してしまうことにもなっています。いわゆる学力の検証をどういう形でこの入試に含めるかということは非常に重要な問題になっています。

**課題① 学習歴を踏まえた新たな入試企画検討の問題意識** 

---

**履修主義から修得主義への転換の必要性**  
 学科試験を実施しない入試（AO、推薦入試など）では、高校等での科目の履修有無や学習成績の状況が選考に用いられていたが、必ずしも履修＝修得となっていない現状。

**学部毎に重視する単元の存在**  
 高校で学習する科目の総合的な学力は前提としつつ、大学進学後重視する基礎学力は科目レベルではなく単元レベルで、学部ごとに一部異なる。

**明確なアドミッションポリシーの発信**  
 各学部が入学希望者に求める学力を科目の各単元レベルに細分化し、アドミッションポリシーをより明確化・発信することで、学部での学びに特に重要な学力を入学前にしっかりと身につけてもらう必要性。生徒にとっては、入試のためだけでなく、入学後に高校の学習が大学での学びにつながることを明示。

**学習歴の多様化への対応**  
 近年増えつつあるオンライン学習を取り入れた高校や、IB、海外で学んだ帰国生徒など学習指導要領にとられない教育課程を含め、多様なカリキュラムで学んだ生徒の受け入れに大学として対応する必要性。

11

そういった経験から導き出された一つの方向性として、基礎学力と意欲・ビジョンを測るためには、まず履修主義から習得主義への転換が必要ということです。「一応、この単位を取りました」、「評定値はこうです」という履修主義ではなく、本当の意味で自らが大学で学ぶための基礎学力にするために習得するということです。

学科試験を実施しない入試では、高等学校での科目の履修の有無や学習成績の状況が選考に用いられていましたが、それは本当の意味でのその学部の学びのために必要な学力の習得には、必ずしもなっていないということです。それをどのように真の意味での習得に変えていけるのかという問題があります。

2番目に、学部ごとに重視する単元の存在です。高等学校で学習する科目の総合的な学力、学習指導要領にのっとった全ての教科・科目に対する履修は重要です。ただし、大学進学後、特に必要とする不可欠な基礎学力は、科目レベルよりさらに細かな単元レベルで見た場合、学部により異なっているということです。

私立大学ですと数学という入試科目を課さない選抜もありますが、例えば、経済学などを学ぶ上では、やはり数学の、ある単元はどうしても必要となってきます。それを入学後にリメディアルという形で再履修させるのは時間的にもかなり不合理なところがありますので、もう少し細かく単元ごとに指定して、例えば「経済学部に進学するのであれば、数学の中でもこの単元だけは履修してきてもらうことが望ましい」といった形で示す必要があるということです。

3番目に、明確なアドミッション・ポリシーの発信です。2番目とも関連しますが、各学部が入学希望者に求める学力を科目の各単元レベルに細分化して、アドミッション・ポリシーをより明確化して発信するということです。どういうことがどういう形で大学での学びに役立つかを確信させるということです。学部での学びに特に重要な学力を入学以前にしっかりと身につけてもらうことが必要であるということです。

それにより、生徒にとっては、入試に合格するためではなく、入学後にそれが大学で

の学びに生かせる、それが一番基礎になるという意識が高まり、学ぶモチベーションとインセンティブが生まれると考えられます。このような観点から、効果的な学びを導く重要なポイントになるのではないかと考えているわけです。

最後に学習歴の多様化ということで、最近では、オンライン学習のみでほぼ卒業が可能となる高校のシステム、あるいは、海外で学んだ帰国生徒等、従来の学習指導要領にとられない多様な形の高校卒業生が実際に出てきていますので、そういう者たちを受け入れる際に、大学として、必要な基礎学力をどのようにして求めるのかということを考えていかなければいけません。こういうことが基本的な企画の方針として想定されます。

**課題① 学習歴を踏まえた新たな入試企画検討の問題意識** RITSUMEIKAN atama+

---

**履修主義から修得主義への転換の必要性**  
 学科試験を実施しない入試（AO、推薦入試など）では、高校等での科目の履修有無や学習成績の状況が選考に用いられていたが、必ずしも履修＝修得となっていない現状。

**学部毎に重視する単元の存在**  
 高校で学習する科目の総合的な学力は前提としつつ、大学進学後重視する基礎学力は科目レベルではなく単元レベルで、学部ごとに一部異なる。

**明確なアドミッションポリシーの発信**  
 各学部が入学希望者に求める学力を科目の各単元レベルに細分化し、アドミッションポリシーをより明確化・発信することで、学部での学びに特に重要な学力を入学前にしっかりと身につけてもらう必要性。生徒にとっては、入試のためだけでなく、入学後に高校の学習が大学での学びにつながることを明示。

**学習歴の多様化への対応**  
 近年増えつつあるオンライン学習を取り入れた高校や、IB、海外で学んだ帰国生徒など学習指導要領にとられない教育課程を含め、多様なカリキュラムで学んだ生徒の受け入れに大学として対応する必要性。

11

現在、取り組み出した企画は、UNITE Program という学部指定の単元 AI 学習プログラムです。現在は 3 学部で行っています。各学部での学びに必要な教科の「単元」を指定していただき、提携している atama+ の株式会社から提供していただいている AI 教材で学習してもらいます。各単元の習得認定試験に合格してプログラムを修了することを AO 入試の出願要件とするということです。AI 学習プログラムを受ければ無条件に合格、あるいは、その AI 教材での学習を試験という形で検証する、ということではなく、あくまでも基礎資格とし、その上で各学部が準備する AO 入試を受けていただくということです。

こうすることにより、評定値が出願要件として課されていると出願できなかった、多様な形の高校卒業生たちに対応できる部分が表れてくるということです。また、単元レベルの習得状況を確認したくてもこれまでは可視化するすべがありませんでしたが、少なくともその単元に関しては一定期間学んできており、学習内容もきちんと確かめられていることが大学としても確認できるというメリットがあります。

## UNITE Programに込めた想い

### 高校での学びから大学の学びへの接続

- UNITE Programを通じ、大学の学びに特に重要な科目・単元を修得できているかを確認したい。

### 単元のレベルでアドミッション・ポリシー（入学者受入れ方針）の明確化

- 高校での学びが大学での学びにどのような意味を持つか、またそれが入学後の教育にどのように繋がり活かされるか、を具体化。

### 基礎学力の重要性

- 基礎学力は入学者に求める最も重要なもののひとつ。atama +を使い、入試出願前に学習し、各学部が指定する単元、つまり入学後の学びの質を高めるための力となる基礎学力を修得することでAO選抜の出願資格が得られる。

**多様な入試方式の中でも、特にこの入試では学部での学びでリーダーシップを発揮する、数学的素養、データリテラシーを持つ（・持ちたいと思っている）学生に入学してほしい。**

15

高大接続の観点から、大学の学びに特に重要な科目・単元を習得できているかを確認したいということです。また、単元レベルのアドミッション・ポリシーの明確化により、高校での学び、特に単元の学びや習得がどのような意味を持ち、入学後どのように役に立つのかを高校生に意識させるということです。

さらには、基礎学力の重要性です。各学部が指定する単元を入学前に学習することで、入学後の学びの質を高めるための力となる、真の意味での基礎学力を習得し、それによってAO選抜の出願資格が得られるので、結局はミスマッチをなくすことにつながります。

特にこの入試では、多様な入試方式の中でも、学部での学びでリーダーシップを発揮する数学的素養、データリテラシーを持つ／持ちたい入学生を望んでいます。

これはなかなか難しい問題と思われます。一つ、身近な例として、私は文学部の日本史の教員なのですが、極端な言い方をしますと、あえて語弊があると申し上げておきますが、高等学校の日本史を通じて非常に細かな日本史の用語や知識を持ち合わせて入ってくれることよりも、数学的なロジック、あるいは、国語の文章読解力や構成力を基礎学力として持って入ってきてくれるほうが本来は望ましいのですね。

基本的な歴史の流れだけ分かってくれば、入学後に必要な知識を習得させることはとても簡単ですが、ロジックや文章読解力などに難がある場合、これをリカバーすることは非常に難しいです。「高等学校の履修段階で意識して学んでください」ということを、こういう手だてで訴えることがむしろ効果的なのではないかと考えています。

### 学習内容

- 高等学校の**数学全体**（atama+内 78単元）のうち、**各学部が5～8単元を指定し、atama+のAI学習システムで学ぶ。**
- 所要時間の目安は、1日1時間学習した場合半月～1か月程度\*

科目	単元分野	経済学部	スポーツ健康科学部	食マネジメント学部
数学I	2次関数(2次関数とグラフ)			○
	データの分析(データの散らばり)	○		○
	データの分析(データの整理)	○	○	○
数学A	集合の論と導理(素数)	○	○	○
	集合の論と導理(集合の論)			○
	集合の論と導理(部分)			○
	集合の論と導理(集合の補)			○
数学II	数列と数列(数列・数列の応用)	○		
	整式の因数分解(因数分解の応用)	○	○	
	整式の因数分解(積と因数)	○	○	
数学B	数論(数の性質)	○		
	数論(いろいろな数論)	○		
	空間ベクトル(ベクトルと距離)		○	
終了までの所要時間(目安:分)*		1873	1094	1802

\*本データは統計値であり、実際に要する時間は該当単元の習熟度により個人差があります。

具体的な学習内容はこのとおりです。経済学部とスポーツ健康科学部と食マネジメント学部で、atama+のAI学習を取り入れていますが、数学I、数学A、数学II、数学Bのうち、学部の学びで必要になる単元を習得してもらうということです。



プログラムへの出願が5～8月なので、その間に必要な atama+ の ID を取得していただき、指定単元を学習してもらいます。指定単元の習得認定試験に全て合格し、AOの出願資格を得た生徒に、9月にエントリーしていただきます。その上で、学部が指定する第1次から第2次選考、これは従来のAOで行っていたそれぞれの志望内容や、高等学校で自らが課題として取り組んだ事柄などについて、小論文や面接などの方法を通じて学部独自の方式で聞いていき、それによって合格を決めます。

合格者には、再び atama+ を使って、入学後に必要となる単元をさらに深める入学前教育を行っています。

### 学習方法

- 受講生はPC、タブレット等でオンライン学習
- 受講生毎にAIで個別最適化された教材が提示され、自分のペースで学習を進めることができる



AIを活用した学習教材とは

一人ひとりの「得意」「苦手」「伸び」「つまずき」「集中状態」すべてをAIが分析し「自分専用レッスン」をつくります。

学習コメント



小問ひとつひとつから、複合的に弱点を分析、学習すべき単元まで具体的にコメントします

×

パーソナルカリキュラム



atama+を使って、ひとりひとりに合わせたカリキュラムで学習し、最短の学習につなげます

18

学習方法はタブレット等によるオンライン学習になりますから、それぞれのペースで進めることができます。将来的に反転学習がもっと大きく取り入れられるようになれば、それに即応したものと言えるのではないかと思います。GIGA スクールなども同じようなものだと思います。

### 受講者数、修了者数、志願者数 RITSUMEIKAN atama+

- 受講者、修了者ともに当初期待の2倍を上回る結果に
- 開始当初の期待：受講者100名、修了者50名

学部	新AO入試 志願人数	プログラム 受講者数 (=受講者数× 修了人数)	プログラム 修了者数 (=修了者数× 修了人数)	AO入試志願者数 (=志願者数× 修了人数)
経済	10名	67名 (6.7倍)	31名 (3.1倍)	27名 (2.7倍)
スポーツ健康科学	15名 <sup>※</sup> (5名) <small>※426名(12.891倍)</small>	62名 (12.4倍)	39名 (7.8倍)	36名 (7.2倍)
食マネジメント	20名 <sup>※</sup> (10名) <small>※226名(11.3倍)</small>	98名 (9.8倍)	70名 (7倍)	65名 (6.5倍)
合計	25名	227名 (9.1倍)	140名 (5.6倍)	128名 (5.1倍)

19

受講者数、修了者数、志願者数はこのとおりです。プログラム修了者数が 140 名、志願者が 128 名です。出願資格を持った 140 名のうち、志願した者が 128 名であったということです。



プログラム受講者数についてです。高校種別としましても、特に食マネジメント学部はIB、インターナショナル、海外、工業と、満遍なく様々なタイプの高校から受講していることがわかります。



学習時間の傾向について、修了者と未修了者の総学習時間を集計したところ、未修了者はいったん受講したが持続できずに早期に離脱する人が多いのに対して、修了者は、かなり長い時間、十分に履修したことが確認できます。それは紛れもなく本人の持っているモチベーション、あるいはインセンティブであり、こういったものを測ることも可能となっています。

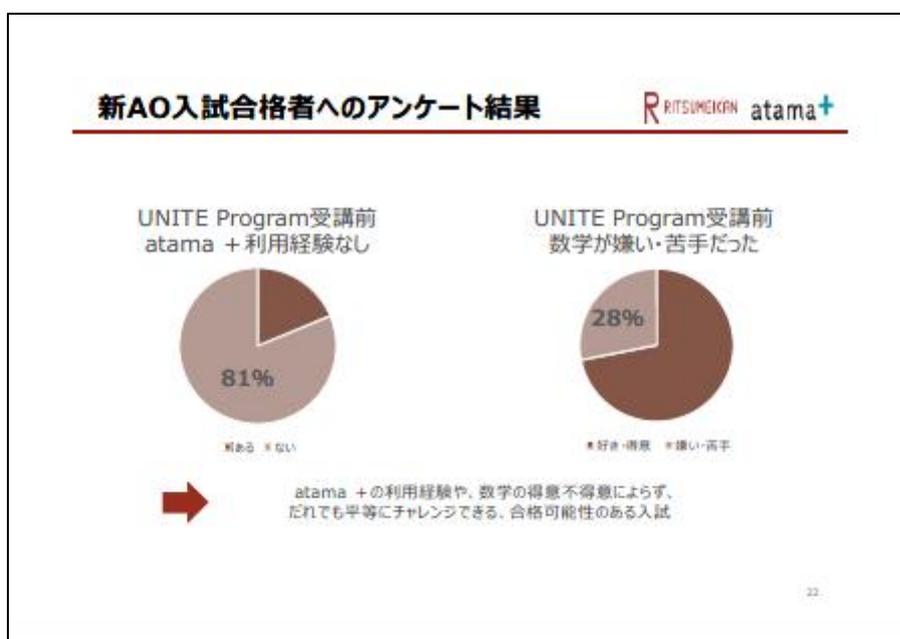
対象入試の評価方法の事例について、例えば、経済学部の数学重視方式の第1次選考

では、志望理由等の出願書類で、2番目の項目をご覧ください。ここが本日の課題に即したものだと思うのですが、出願書類の中で自らの数学やデータ分析への興味・関心のきっかけについて高等学校以前の具体的な取り組みを問う項目を設けています。

例えば、中学校の時に校外学習で、自分なりに統計を取ってこういう意見を提出したということなど、何か自分自身で数学やデータ分析に関して取り組んだ経験があるかということを知りたいのです。

これは高校以前と書いていますが、高等学校で探究学習の一環としてやったことについて聞く項目ももちろんあります。高等学校ではこういうことに自分に取り組んできたということを書いてもらい、経済学部における学部としての学びとの連動性について、担当の教員が判定していくことになります。

その上で、経済学専攻への志望動機や経済社会や数学やデータ分析に関する興味・関心の程度等を推し量るということですね。これがAO選抜の数学重視方式で今年度初めて取り入れられた方法です。



対象のAO選抜合格者へのアンケート結果では、それ以前から atama+ という AI 学習を行っていたかという質問に対しましては 80%以上がやったことがなかったということでした。

受講前に数学は嫌い・苦手だったかを聞いたところ、むしろ好き・得意とする人間がこれを受けていたということが分かります。つまり、atama+ の利用経験や数学の得意・不得意によらずに誰でも平等にチャレンジできて合格可能性のある入試であるということですね。

### 新AO入試合格者へのアンケート結果



---

質問
他のAO入試もある中で、この入試方式を選択した理由、修得まで継続できた理由

- ・数学が好きor得意で強みを生かせると思ったから
- ・将来数学の知識を生かした研究をしたり、職業に就きたいとっていたから
- ・志望学部の学びに数学的素養が必要となることを知り、入学前にしっかり学べる点に魅力を感じた
- ・志望学部の重要単元を知ったが、商業高校で数学を十分に学べていなかったから
- ・自分のペースで部活動との両立が行いやすく、目標が明確にあるので継続できた

➡

指定単元が一つのアドミッションポリシーの形として伝わり  
学習意欲のある多様な学習歴の志願や学習行動につながった

27

同じく、この入試方式を選択したのはなぜか、また習得まで継続できたのはなぜかという質問には、「数学が好きあるいは得意であったから」、「将来、数学の知識を生かした研究をし、職業に就きたいとっていたから」という回答がありました。

注意していただきたいのは、これは全て文系の学部の受験生の回答であるということです。理系志望でしたら、数学が好きであること、それを生かした将来のビジョンを持っていることは分からないでもないのですが、あえて文系の経済学部や食マネジメント学部に進みたいと思いつつも、一方で、自分は数学に少なからず興味・関心を抱いていたということで、ならば、その中で何がどう役立つかを明確に把握して認識した上で、それを活かして入試選考に当たるということを経験していくことになろうかと思えます。

### 新AO入試合格者へのアンケート結果



---

質問
受講後、数学や指定された単元に対する意欲や実力に変化はあったか

- ・データの分析の単元で分からなかった概念の部分が新しく学べた
- ・学校ではあまり触れなかった単元もあったため、新たな知識が増えた
- ・指定単元の範囲の模試やテストの成績が良くなった
- ・今まで数学を何に使うか理解出来なかったが、経済学に繋がっていると考えると数学に対する意欲が変わり、意欲的に学ぶようになった
- ・数学を解くのが楽しくなった、強みになったと感じた

➡

学部ごとに重要な単元を指定して修得してもらうことで、  
高大接続の観点からも最適な学力素養や意欲の醸成につながった

28

「受講後に数学や指定された単元に対する意識や実力に変化はあったか」という質問について、これは非常に手前みそですが、かなり効果はあったということです。「新たな知識が増えた」、「今までは何のために数学を勉強するのか、もう一つ確信が持てなかったが明らかにこれから自分が学ぼうとしている経済学に対してこれが重要だと認識できた」、「より意欲的に学べるようになった」、あるいは「楽しみを感じるようになった」という回答がありました。学部ごとに重要な単元を指定して習得してもらうことで、むしろ当初目指していました高大接続の意味がさらに深まり、そういう意欲の醸成につながったといえるのではないかと思います。

## 今後の展開

---

- ① 現行学部の募集枠拡大や他学部、APUの入試への横展開（次年度以降）**

  - 今年新AOを導入した3学部は、この方式に手ごたえを感じている。次年度以降募集枠をさらに拡大することを検討中。
  - 他学部や立命館アジア太平洋大学（APU）でも、アドミッションポリシーと高校生の学びの接続を改めて議論し、このスキームを使った入試方式導入を検討予定。
- ② 入学前教育へのatama+教材活用（今年度から実施）**

  - 新AO入試の合格者は全員、入学前教育として学び続けatama+で別の単元を学習し、さらに高度な内容を身につけてもらう。
  - 経済・工学・食マテの3学部の指定校推薦合格者にも、atama+での学習を推奨する。
- ③ 高校と大学の学びの接続に向けて**

  - 修得主義にもとづいた未来志向入試の拡大
    - 過去の成績や資格の評価のみならず、受験生が努力すれば平等にチャレンジ可能な入試を広げる。
  - 入試・教育DXのさらなる推進
    - 定量化・可視化された学習情報を活用し、新しい高校と大学の学び接続を推進する。
  - 共同研究会の発展
    - 今回の成果を他大学にも共有し、ともに研究会を発展させていく（今年度中に実施）。

## 課題② 高校までの学習成果を評価する現状の入試事例

A O 選抜入学試験 経済学部「数学重視方式」※2023年度新設

- 選考方法**

第1次選考：志望理由等の書類選考 第2次：プレゼンテーション+面接  
 ※出願資格にUNITE Program修了条件を設定
- 探究学習に関する評価方法**

出願書類の中で、数学やデータ分析への興味関心のきっかけについて、高校以前の具体的な取り組みを問う項目を設けている。第2次選考では、書類選考に記載された内容を踏まえて質疑応答を実施する。
- 評価ポイント**

経済成功への志望動機の強さ、データ分析に関連した学習意欲の具体性、経済社会や数学やデータ分析に関する興味関心の程度、論理的に伝える力、など。

今後の展開としては、学部の募集枠の拡大あるいは他学部や立命館アジア太平洋大学（APU）でも導入を検討したいということで、来年から薬学部の化学で導入します。立命館アジア太平洋大学でも導入が予定されています。それから、先ほど少し触れた入学前教育への教材活用も始まっています。

高校と大学との学びの接続に向けて、習得主義に基づき、過去の成績や資格の評価のみによらず、受験生が努力すれば平等にチャレンジ可能な入試を広げたいということで、一定、ここでの検証を重ねながら重点化を図っていきたいと考えています。

### **探究型学習等の評価に関する今後の展望**

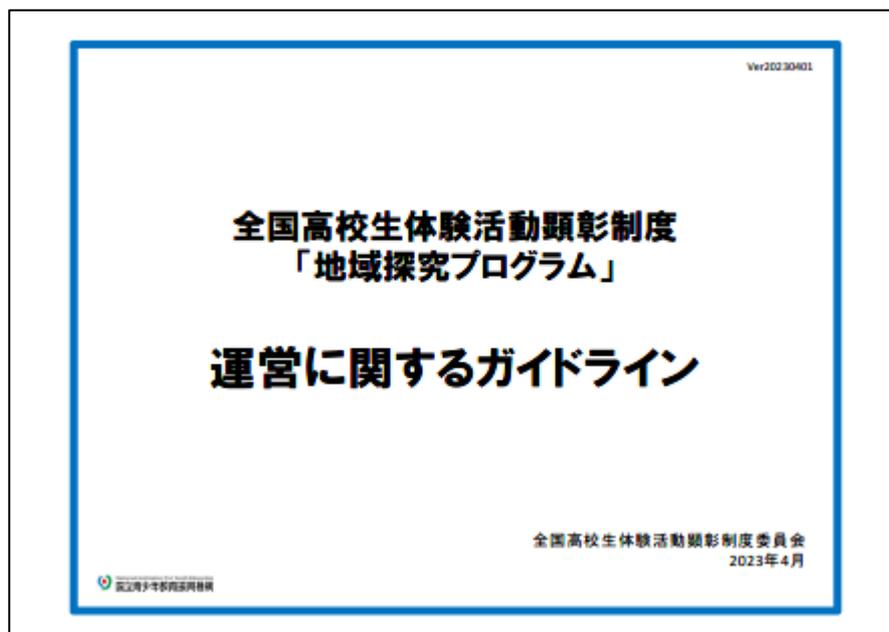
- ・何をやってきたか、だけを見ることはしない**
- ・あくまでも最重要なのは、学部での学びとの紐づけ、入学後の学びに対する学びに対する意欲**
- ・やってきたことを入学後の学びにどう結び付けて考えられるか、それを明確に伝えられるか、を志願者には期待する。**

27

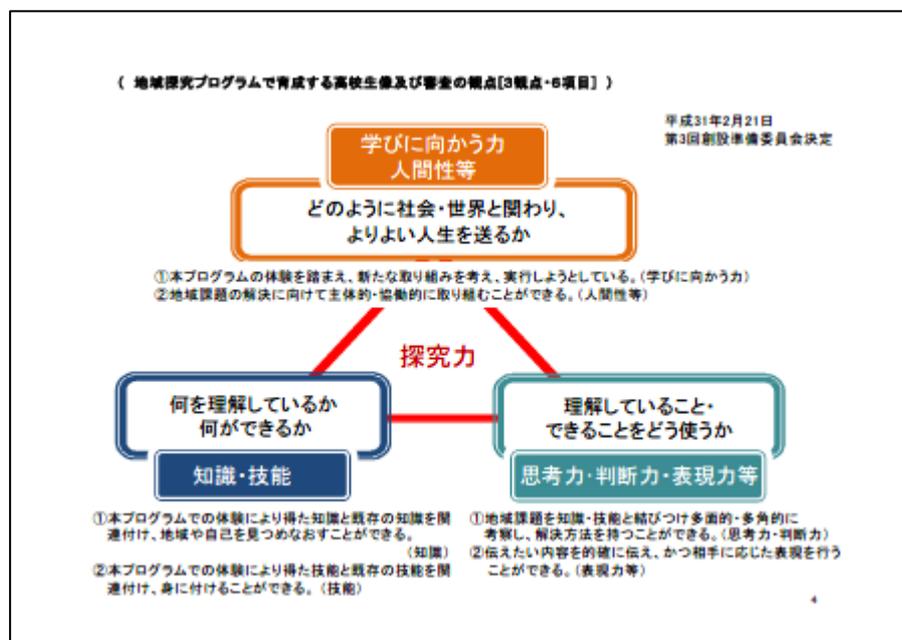
最後に総括です。入試のための勉強ではなく、やりたいことを実現するために重要な単元を指定するという大学からのメッセージを発信して、本当の意味での高大接続の理念になるべく近付きたいということです。志願者が単元の得意・苦手、得手不得手によらずに自分が本当にやりたいことを実現するために主体的に学習する行動が明確に確認できたと思っています。すなわち、目的が伝われば子どもたちは主体的におのずから学習することになるということです。

その際に AI 教材を活用することにより、結果として、課題であった教員等の入試執行業務の負担を増やすことなく理想的な形に近付けることができたということです。

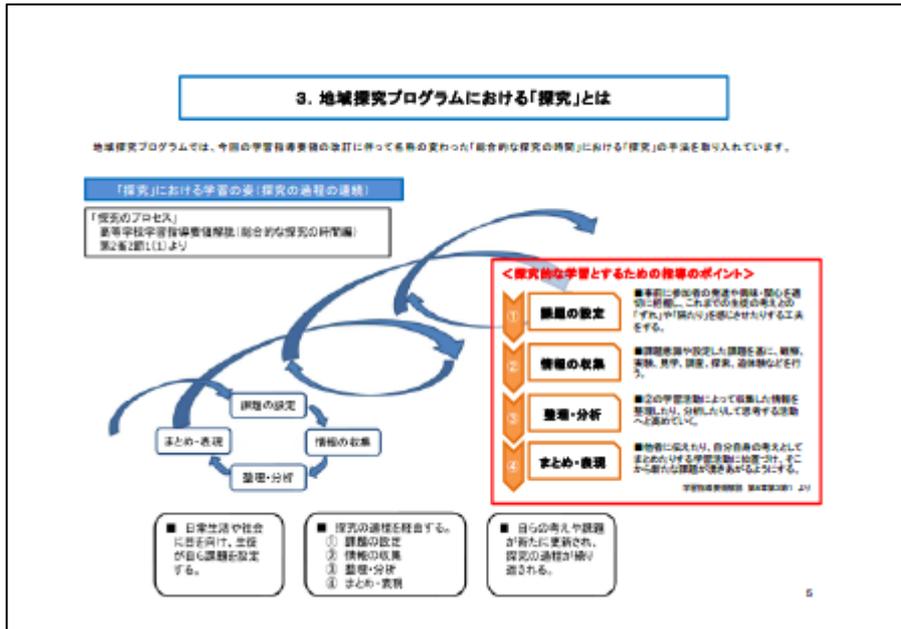
そういうことで、今後、高校までの探究学習の成果を踏まえて自身のやりたいことやビジョンあるいは目標を育ててしっかりと評価するという方向の仕組みをさらに発展させていきたいと考えています。



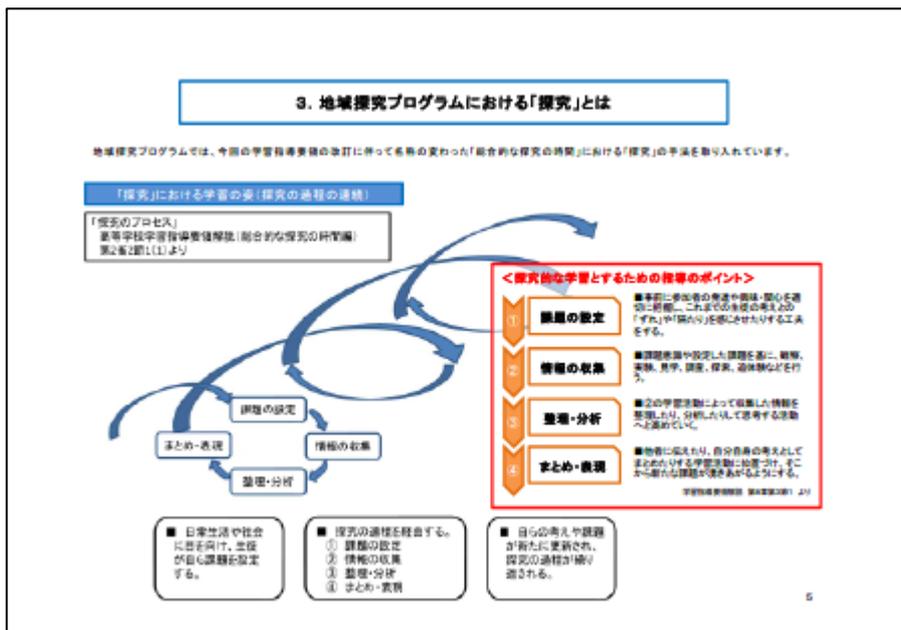
最後に、先ほど少し触れた、かつて立命館でやっていた立命館サマーカレッジは、高等学校の生徒を集めて各学部の提供する講義に触れさせて、その上で、グループワーク、フィールドワークを行ってプレゼンテーションをするというものでしたが、そのノウハウを制度設計の時から参考にさせていただき、現在は国立青少年教育振興機構が実施している全国高校生体験活動顕彰制度の地域探究プログラムについて若干紹介させていただいて終わりたいと思います。



学びに向かう人間性、知識・技能、さらには理解していることやできることをどう使うかという思考力・判断力・表現力がトータルされたものがまさしく探究力であるということです。この探究力を高校生の段階で表彰することで、より一層、学びの内容を内実化する方向へ持っていきたいという意図でなされました。

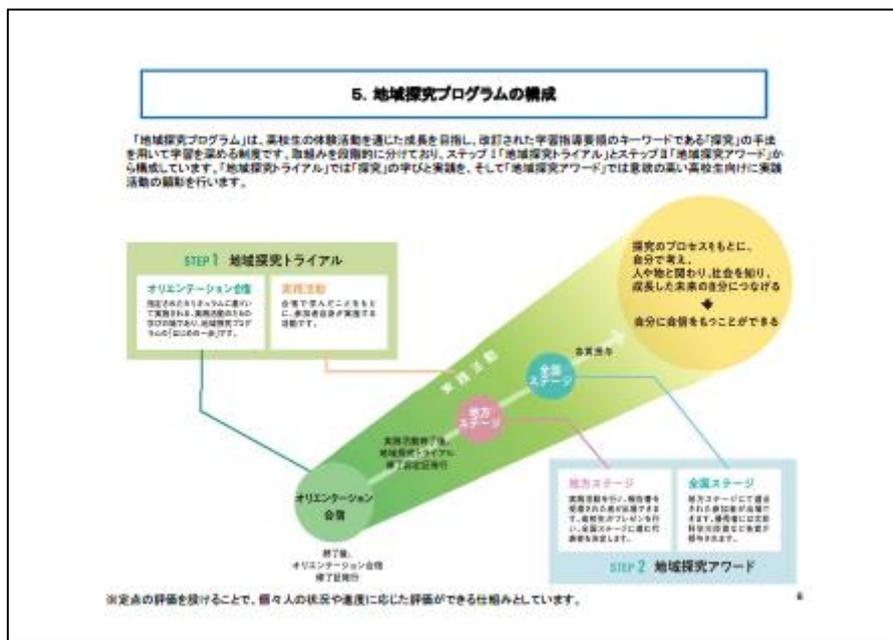


地域探究プログラムにおける探究とは、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ、表現するというサイクルでグループ作業を行います。最終的に、このアワードそのものには個人もしくはグループでエントリーすることになっています。



メリットとしましては、何が出来るようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかということを含め備えた一つの重要な機会を高校生に与えることになるということです。

もう一つは、ここにありますがように集団宿泊活動の促進です。もちろん学校単位でエントリーされているところもありますから、その場合は日常で学んでいる友達同士が新たにこういう機会に接することになるのですが、場合によっては違う学校の同じ高校生同士が新たなグループを構成して、共通の課題に向けてグループワークを行うという重要な経験をさせています。



全国にある青少年自然の家でオリエンテーション合宿を行いまして、課題探究とはどのようなものか、どういうことを通じて何が問題なのかということ自分なりに把握して、そのために何ができるか、他者の意見も参考にして聞きながら進めていきます。最終的には書類でエントリーしていただき、地方ステージと全国ステージを経て表彰する対象を絞り込んでいくことになるわけです。

プレゼンテーションをする時には、スキルを用いて、それぞれが独自のやり方で自分たちの訴えを行っています。こちらが予想した以上はかなり意欲的に取り組んでおり、傾聴に値するような提言もよく出されています。

実際にこれでアワードを取った学生に話を聞くと、入試に連動させることを目的に参加したわけではありませんでしたが、結果としては、自分が行きたい大学や学部を絞り込んで自らのキャリアビジョンと矛盾なく結び付けた上でその道に進んでいるという実例が出ています。

たくさんの参考資料のファイルをご提供いただいていますので、ここに付けておきましたので、ご参照いただければと思います。

私の報告はこれで終わらせていただきます。どうぞご清聴ありがとうございました。

【川嶋・司会】 本郷先生、ありがとうございました。総合型選抜、AO入試において、大学入学後に必要な学力を具体的に志願者に示すことによって、これまでの高校の探究活動の意味を改めて振り返ること、大学入学や進学の意味を考えさせるという新しい取り組みのご紹介だったと思います。ありがとうございました。■

## 全体会 3 ○ 全体討論

# 総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて

■椎名 久美子 (大学入試センター試験・研究副統括官, 研究開発部教授)  
/竹内 正興 (香川大学アドミッションセンター教授) /本郷 真紹 (立命館大学文学部特命教授) /川嶋 太津夫 (大阪大学特任教授 ■司会) /  
荘島 宏二郎 (大学入試センター教授 ■司会)

---

【荘島・司会】 サブ司会の大学入試センターの荘島です。頂いた質問を先生方に振ってご回答を頂きたいと思います。Q&Aにご質問を何件か頂いています。私のほうで代読してまいりますので、質問された先生方は適宜ご回答いただけたらと思います。それでは、私から読み上げたいと思います。

まず、竹内先生へのご質問です。3点あり、まず1つ目です。「竹内先生のご発表の資料の18ページにAI等の技術革新についてというところがあります。志願者がChatGPT等を利用して事前課題への回答を作成してしまうというリスクを指すのでしょうか。この場合、対抗策等の展望があるでしょうか」というご質問ですが、いかがでしょうか。

【竹内】 今ご指摘いただいたとおりです。対抗策としては、それ単独で評価はしないということが重要ではないかと思えます。つまり、例えば、出願に作成された書類を見ながら実際に面接で利用して確認するといったことですね。評価の組み合わせが重要な点ではないかと思えますし、その他についても今後考えていくべき課題の一つだと思っています。

【荘島・司会】 ありがとうございます。2点目のご質問は、ペーパー・インタビューの作問についてです。「過去問は公表されている大学もあるが、今後の作問上の難しさ（一定程度の時期を過ぎると類似問題になりやすいのか）等について展望があれば教えてください」というご質問ですが、いかがでしょうか。

【竹内】 今回、ペーパー・インタビューを事例として報告させていただいたのですが、どのような選抜の方法を用いても、新しいことを取り入れれば時期がたてば対策が進み、それにどう対応するか検討することになるのは、どの試験でも同じかと思えます。

私見になりますが、私自身は2つの対応方法があるのではないかと考えています。対

策が立てられないよう、設問を工夫して出題していくというのが一つの考え方だと思います。もう一つとして、対策はされてもいいという考え方もあるのではないかと思います。なぜかといいますとこれは教育効果につながるからです。つまり、選抜という過程の中で、受験生が、大学への志望動機といいますか、進学動機を明確にしてその中で学びに向けて成長していけば、それは一つ効果があるのではないかという考え方があるかだと思います。

ただ、この場合、ほとんどの方が高評価となる傾向が出るかと思しますので、評価基準を併せて検討することが必要です。先ほど冒頭で川嶋先生から選抜から相互選択へというお話がありましたが、まさしく相互選択へに移る中で一つのポイントになるところかなということで、教育効果を狙った選考といいますか、選択はあるかなと思います。以上です。

**【荘島・司会】** ありがとうございます。最後、3点目です。「一般論として」というカッコ付きなのですが、入学後の学生の追跡についてということで「多彩な入試で入学した学生について、例えば選抜の種類ごとに在学成績や進路先を分析して入試の改善に反映させる等は一般的になされているものなのでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

**【竹内】** 全ての大学について知っているわけではありませんが、私が知る限りでは多くの大学で、入試区分ごとの入学後の追跡調査はされていると認識しています。つまり、追跡調査の結果を踏まえて、入試区分ごとの割合をどうするか、この入試区分は続けていくか等の検討する大学が多いのではないかと認識しています。

**【荘島・司会】** 竹内先生、どうもありがとうございました。続きまして、本郷先生へ「普通科以外のプログラム受講者のうち、どのくらいが習得認定試験に合格し、どのくらいが出願に結び付いているのでしょうか」というご質問ですが、いかがでしょうか。

**【本郷】** 先ほど報告の中の表でお示しさせていただきましたとおり、普通科以外の受講者は29名ですね。全体で227名受講した人がいるのですが、29名の受講者がいます。そのうち最後まで履修して認定書もらった人は8名です。

8名のうちどれだけ志願したかということですが、この試みは、もともと本学の当該学部を第1志望で受けることを前提に志望理由書まで書いて出していただくものです。プログラムの修了まで来れば、ほぼ全員、正確には140名中の128名ですから9割以上がそのまま志願していくことになりました。手元に正確な資料はありませんが、恐らく修了した8名はそのまま志願してくれているものだと思います。

**【荘島・司会】** どうもありがとうございました。本郷先生に続けてご回答いただきたいと思います。「出願前の atama+での学習は他大学の入試対策としても有効でしょうか。

その場合、自主学習ツールとして活用する高校生もいるのでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

【本郷】 先ほどご説明申し上げましたように、大学入学後の学部での学びの基礎学力として必要な単元を、各学部から指定いただき、それを atama+ を通じて提供して履修してもらうものになります。確かにその単元については、より一般的な学びの深化につながると思います。果たしてそれが他大学の例えば一般の数学入試の対策になるかと言われましたら、それは全く役に立たないことはありませんが、若干、趣旨が違うとしか申しようがありません。自主学習ツールとして活用する高校生もいるかということですが、入試対策学習の手だてや手段としては少し性格が違うと思います。

さらに、生徒さんは志望理由書まで出していただき、本学の当該学部を受けたいという意志を明確にお持ちの方です。それを確認した上で受けていただいていますので、他の大学の志望にも役立てられるという性格のものではないとご理解いただきたいと思います。

【荘島・司会】 ありがとうございます。それでは、続きまして椎名先生へのご質問です。「基礎学力把握のための簡易な検査という『簡易な』というレベルをどのくらいのレベル感でお考えでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

【椎名】 われわれも「簡易な」というところをどうやってつかまえようかという点は非常に苦労したところなのです。大まかに言いますと多面的・総合的評価を行うという枠組みの中で、他の選抜資料と組み合わせ検査を実施するという前提で、普通の数学や英語といった通常の教科・科目テストほどはヘビーではないが自分の大学で学ぶのに必要ところはクリアしてきてほしいというところを確認する意味合いが強いということでの「簡易」ではないかと考えています。

大学の募集要項等を見ると「簡易な」というところは大学の実情に応じて解釈して運用していると思われました。大学によっては、非常に短時間、例えば、10分で作る大学もあれば30分というところもあるのですが、例えば、90分などというところは少なくとも比較的短時間で測る傾向が見受けられます。時間的なところからすると、そこは一つの「簡易な」というところなのかなと思います。

難易度については、先ほどスライドの中で教科書の章末問題レベルといった説明が見られたと報告したのですが、授業の中で、通常、章末問題はやるでしょうからそこはクリアしてくださいというメッセージのようにも思います。

また、難易度に関しては非常に大学によって捉え方がさまざまだと思っています。「簡易」というところで難易度は一概に言えないと思っています。中には、義務教育レベルを「簡易」として要求しているかなというケースもあります。分数の加減乗除や割合を当てはめた計算の確認、濃度計算や小数点の理解などを問うといったことを募集要項の中で明示している大学もあり、そういったいわゆる義務教育レベルのことを問うという

ことで「簡易」としているところもありました。

さらに、分野について入学後の学びに直結するようなところにぎゅっと絞ったというケースも見られます。先ほど本郷先生のお話の中で、学部でどうしてもここはというところを幾つか絞ったというプログラムが紹介されましたが、割とそれに近いような特定の単元に絞って聞くといったところを「簡易」と捉えているところもありました。これで回答になりますでしょうか。

**【荘島・司会】** ありがとうございます。それでは、再び、竹内先生にご質問を差し上げたいと思います。「ペーパー・インタビューは一斉に実施できるため面接に比べて試験当日の時間をかなり減らすことができると思うのですが、採点作業について作業時間が増加するのではないかと思います。導入された事例からこの辺りのフィードバックや実際の対応事例（工夫）などがございましたらご教示いただけますでしょうか。可能な範囲でご教示いただけますと幸いです」というご質問でした。いかがでしょうか。

**【竹内】** まず、今回の事例について、具体的にどのような採点をされているのかについて私は把握できていませんので、あくまでも自分自身のこれまでの経験等を踏まえてということになりますが、2つの考え方があると認識しています。

一つは、ご指摘いただいたとおり、採点の負担が増えるのは事実だと思います。採点の負担が増えることと、試験当日の面接の負担が大きいことのどちらが負担が少ないかという視点があります。私自身は、採点のほうが負担は少ないと考えました。これが一つです。

もう一つは、これは私自身のこれまでの経験則になりますが、こういった問題を設計する際には、必ず採点基準も一緒に検討して、例えばループリックなどを利用してかなり詳細に採点基準を決めておくということがポイントになってくると考えます。もし仮にループリックがあれば、それを採点者に共有して事前研修をしっかりと行っておけば、1日～2日はかかるかもしれませんが、何日も何日も時間がかかるものではないと認識しているところです。

つまり、試験当日に面接を行うことの時間的負担との比較という視点をもった上で、採点の負担を減らすために問題作成時点から採点基準を精緻化し、それを関係者へ事前共有し研修をすることがポイントではないかと考えています。

**【荘島・司会】** ありがとうございます。参加者の方より情報提供がありましたので代読させていただきます。「竹内先生のご発表の中で言及のあった六大学連携入試事業についてですが、この事業の一環として作成した面接・ペーパー・インタビューについての教員向けの教材動画（Blu-ray ディスク）が多数余っています。興味、ご関心のある方は、返信用のレターパックなどを同封の上、長崎大学入試課へご請求ください」ということです。どうもありがとうございます。

【莊島・司会】 続いて、本郷先生へのご質問です。「貴学新 AO 入試は志願者との時間を十分にかけて入学許可される形と存じます。AO（総合型選抜）は、推薦入試とも違い、入学自体、かつ在学中の断念もあるかと思いますが、本入試による合格者は就学の意欲がより固いように想像できますので、この先、本入試経由の辞退状況や在学生の動向を追跡していただけたら幸いです」というご質問といたしますか、ご要望といたしますか、そういったコメントがありました。

【本郷】 在学生の動向という点については、何せこの形式の入試による入学制はこの 4 月が 1 期生であり、また 2 カ月もたっていないので、就学状況はどうか、あるいはどれだけ熱心に取り組んでいるか、成績がどうかということについてはまだ検証するすべを持っていません。入試経由の辞退状況ということなのですが、結果として最終的にこの方式で受けて最終合格になりながら辞退した生徒というのは、関わっている中では 1 人だけです。エントリーする段階から明確に大学・学部に対する志願というものの意向を持っているということを具体的に記して志望理由書を出していただいています。については基本的には入学辞退はこちらも想定していないわけなのですが、これが現状です。

今後、この入試方式で入った学生が、他の方式あるいは一般入試の学生と比べてどうなのかということについて検証を行った上で、しかるべき場で報告をさせていただきたいと思います。

【莊島・司会】 どうもありがとうございました。今のところ、頂いたご質問は全部ご回答いただきました。いったん、川嶋先生に司会をお返しします。よろしく申し上げます。

【川嶋・司会】 ありがとうございます。他の全体会とも、相互に関係があるのかなと思いますので、何点か先生方にお尋ねしたいことを整理してみました。

それぞれのご発表の中でこの論点について言及されているところもあるのですが、改めて投げかけさせていただきたいと思います。

冒頭に私から申しましたように少子化とか大学全入化が現実のものとなりそうなのですが、まず報告者のそれぞれのお立場、所属されている大学から考えて今後の総合型選抜・学校推薦型選抜の役割とかその行方をどのように予測されているのか、お考えになっているのかについてご意見をお伺いしたい。

2 つ目は、これは既に各ご報告の中で言及されているかとは思いますが、総合型選抜・学校推薦型選抜を量的のみならず質的にも充実させるための課題は何なのかということをお聞きしたい。

3 つ目は、昨日、行われた全体会 1、それから、先ほど午後に行われた全体会 2 から総合型選抜・学校推薦型選抜を質的・量的に充実させるためのヒントや示唆は何かありましたでしょうか。

この 3 つの問いかけを改めてさせていただきたいと思いますので、まず 1 つ目についてそれぞれのお立場からご発言をお願いしたいと思います。まず椎名先生はいかがで

しょうか。センターとしてどのようにお考えなのか、対応されているのか。別にセンターとしての公式見解ではなく、椎名先生の個人的なご意見になるかと思いますが、お聞きしたいです。いかがでしょうか。

**【椎名】** 私の個人的な考えという回答になりますが、トレンドを見ますと、一般選抜での入学者が段々減って、それ以外の総合型や学校推薦型の人、特に総合型が拡大していますが、共通テストでその人たちの基礎学力を把握するのは時期的な問題からするとなかなか難しいことになるのかなと思います。ただ、役割的には多様な入り口を用意しておくということは必要なことではないかと思っています。

**【川嶋・司会】** ありがとうございます。既に言及されている箇所もあるかと思いますが、竹内先生はいかがですか。

**【竹内】** 重複してしまうところもありますが、私見について 2 点申し上げさせてあげたいと思います。私は、今現在、香川大学という四国の国立大学に勤務していますが、香川大学は推薦・総合の募集枠が 3 割を超えている大学です。30%を超えている大学は少ないため、学校推薦・総合型で多く取っている大学といわれています。その中で感じることは 2 つあります。

一つは、志望度が高いということですね。一般選抜は共通テストの結果を見て、自分の希望と合格の兼ね合いを見ながら出願校を決めるというシステムになっています。それを比較すると、ぜひここに行きたい、学びたいと思う大学に出願できる選抜区分であり、志望度が高い人材を獲得できるというところに大きなメリットを感じています。ですので、どこまで拡大できるかというのは議論がありますが、学校推薦型選抜・総合型選抜は一定割合必要だと考えています。

もう一つは、多様な人材を確保できるということになります。もちろん一般選抜で入学してくる学生は共通テストを経て基礎学力が一定以上あって入学してきますので、入学後の授業もきちんと対応できます。ただ、様々な入試形態で入学した学生を迎え入れることで、学生同士がお互いに異質な人たちと触れ合う中で刺激を受けて知的レベルを上げていると感じています。繰り返しになりますが、やる気がある学生が多く集まりやすいという点、そして、多様な人材が集まって知的な刺激を受け合って、知的な触発の機会が増えるという点から見て、総合型選抜・学校推薦型選抜は大きいですし、これからも維持していくべきと考えています。

**【川嶋・司会】** ありがとうございます。国立大学は全体として 30%を総合型・学校推薦型で募集するという国大協全体の目標を掲げていましたが、全体ではまだ 2 割弱という状況です。その中で 3 割を超えているという大学はまだ少ない中で、今後の展望をお話しいただきました。

次に、本郷先生、私立大学あるいは立命館大学というお立場から。既に私立大学では

入学者の半数以上が総合型選抜・学校推薦型で入学しているわけですが、この2つの選抜方法についてどのような方向性を考えておられるのか。もう既に5割を超えている状況の中で今後の課題という、この2つ目の論点と併せてお話しいただければ幸いです。

**【本郷】** ご承知のとおり、もう既に大学全入時代が実際に訪れていて、特にあまたある私立大学の中には、入学時における競争的環境が維持できず全員を受け入れざるを得ない、それでも入学定員を満たさないということで、残念ながら大学そのものをやめてしまうということも出てきているのが現状です。

その中で、今後の情勢を見計らった場合に、もししかるべき政治的・経済的援助によって子どもたちが大学で学ぶ機会がより多く提供されたとするならば、これまでのような画一的な評価指標によって学力を判断するとはじき出される層に対し、どう手当てをするのかということが当然重要な問題になってくるのだろうと私は思います。

確かに、いわゆる教科科目学力に関しては、大学の学びには十分とは言えないということで入学の機会が損なわれるということがあります。一方で、ベンチャーなどをあえて志すような学生の中にはそういう人が多いということです。やはり画一的な手法では判断し切れないような、多様な個性を持ち、ずるい言い方ですが、大学で何に接して大化けするか分からないという学生がたくさんいます。そうなってくるとより一層のこと、そういう学生に機会を提供するというのが、今後の私立大学として果たすべきミッションではないかと考えているわけです。

その場合に、一番大事なことは、先ほどのご報告でも申し上げましたように、ミスマッチを起こさせないということです。つまりこの大学にはどのような特色があり、どのような人材を育成することを目的として教育に取り組んでいるのか、正確に分かりやすく伝えることが重要です。その上で、彼らのモチベーション、あるいは、インセンティブをより高めるための手だてを考えた上で、明確な志望を持ってその大学・学部を目指す仕組みをなるべく多様につくっていくことが当然必要であろうと思います。

そのために何ができるかということで、われわれは先ほどご説明したとおり、入学後の学びの一番基礎となる学力を示し、この単元を重点的に習得することで、一層自分のやりたいことへの展開、発展ができるということを確認させて入学していただく仕組みをつくったところです。

入試とは、従来のように志願者を選別するのではなくて、むしろ志願するモチベーションを導き出すための手段として入試の仕組みを築いていくということが大事なのではないかと考えています。やりたいことができ、なりたい自分になれるということ伝えられるような、そのメッセージとなるような多様な入試の仕組みが今後の総合型選抜に求められるものではないかと考えています。

私どもが取り組んでいる具体的な試みについては先ほどご報告申し上げたとおりです。

**【川嶋・司会】** ありがとうございます。これから増えたとするとミスマッチをいかに防ぐかということで、入学のための学びと入試に至る道筋を明確にするというご意見だ

ったと思います。

竹内先生、既に香川大学では 3 割という状況のようですが、これをさらに割合を増やすとすると何か課題などはありますでしょうか。

【竹内】 今のところ、増やすという議論は出ていなくて、3 割に到達できた点を評価しているところなのです。さらに増やすという議論があるとすれば、先ほど川嶋先生が 2 点目に挙げられた質的なところを選抜でどのように維持していくか。そこが非常に大きな課題ではないかと考えています。その際にポイントとなりますのは、先ほどの報告とも重複しますが、選抜の組み合わせではないかなと考えています。

出願前の基礎学力の担保、出願時の書類審査の工夫、実際に試験当日に来てもらった時の説明、面接等の組み合わせをどのように行っていくか、その中でどのように量的なものを解決していくのか。その辺りが議論をしていかなければならない点かなと考えているところです。

【川嶋・司会】 ありがとうございます。椎名先生、基礎学力の評価として共通テストを使うとすると実施時期が問題ではないかという話がありましたが、それを含めて、今後総合型選抜・学校推薦型選抜が広がった際の課題など、もしお聞きすることがありましたらお願いしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

【椎名】 基礎学力の担保については、総合型・学校推薦型でも必要になってくるわけですが、量が拡大した時に、一定程度、何らかの基礎学力を確認のために見るという仕組みを、求めるレベルが似ている、共通している複数の大学が共通して使えるような仕組みも必要になってくるのかなと思っています。

【川嶋・司会】 椎名先生たちが研究されておられた、第 2 の共通テストではありませんが、入学後の教育につながる基礎的学力テストなどが、先ほど竹内先生からご紹介にあった再利用のコンソーシアムといった形で広がっていくのか、まさに大学間共同が広がればいいというご意見でした。

ただ今、大学関係者の 3 名の方からご意見を伺っている中で Q&A に高校関係者の方からもご意見やご質問が挙がっているようなので、荘島先生、ご紹介いただけますか。

【荘島・司会】 頂いたご質問を代読させていただきたいと思います。「高校現場の立場を考えると、年内入試拡大により教員の先生方には個々の生徒の志望理由書作成や面接対策が新たな負担となっているのではないかと危惧しています。本来であれば、高校 3 年生は教科学習において最も大事な 1 年であるはずで、とめどもなく年内入試が拡大する現状を黙認せざるを得ないのか。先生方のご所見をお伺いできれば幸いです」。

これは皆さまに対する質問だと思いますが、時間も差し迫っていますので簡潔に順番に先生方にお答えいただけたらと思います。まず、椎名先生、いかがでしょうか。

【椎名】 現状で総合型など、いわゆる年内入試が増えているという現状はあります。ご質問では高校の負担について触れられていますが、多面的・総合的な評価のやり方は、かなり限られたリソースでやることになり、大学にとってもかなりの負担ではないかと思っています。私は大学の事情については把握していませんが、とめどなく拡大する状況に大学がどこまで耐えられるのかという点は私も疑問を持っています。

【荘島・司会】 続いて、竹内先生お願いします。

【竹内】 私見になってしまいますが、受験生の方が教科・科目の勉強をしている時に志望理由書の作成もしていくのは大きな負担であるということは理解できます。

一方で、受験生にとっては、志望大学に合格することはもちろん、入学した大学で充実した大学生活を過ごすことがさらに大事ではないかと認識しています。そのために高校 3 年間のどこかのタイミングで、志望理由をきちんとまとめておくという作業は絶対に必要だと思います。

私も、仕事柄、高校現場に伺わせていただくことが多いですが、そうお考えの高校の先生方も多くいらっしゃいます。高校 3 年の 8 月から志望理由書を書くことは負担であるとする、どのように対応しているか、一つの事例をご紹介します。大学進学希望者全員、高校 1 年、あるいは 2 年のロングホームルームや総合的な学習の時間の中で志望理由書を書かせる時間を設けて、それを 2 年生の終わりまでにいったん仕上げおき、3 年生で受験大学を決めていく時に精緻化していくそうです。高校 3 年間のどこかで自分が行きたい大学をきちんと見据えて志望理由を固めておくという作業は欠かせないと思います。

ただ、それを高 3 の段階で行うことに負担があれば、早い段階からやっておくというのも一つの考え方かと思っています。大事なことはミスマッチを防いでいくことだと思っています。

【荘島・司会】 続いて、本郷先生お願いします。

【本郷】 高校現場を預かる先生方からしますとこれは由々しき事態であり、高校 3 年生の後半期において、入試によって本来の授業が損なわれてしまうという懸念を持たれるのは理解できるのですが、結局、子どもたちがどの時点で自らのキャリアビジョン、あるいは、進学意識を持つかということが非常に重要な意味を持つてくると思います。

早くからある程度固まっている生徒は、時間的に比較的余裕のある時から志望理由書を書いていくことができると思うのですが、高校における学習を一通り終えた上で考えるということになってきますと、それが高校 3 年生の段階であれば、当然のことながら気が付いた時には書かざるを得ない段階に達しているということですね。

今後、本課題をどのように捉えていくのかというのは非常に重要な問題です。ある意味では、大学においても 4 年生はほとんど就活に飛び回っているようなことになってい

ますから、本来の3年間や4年間の教育の意味をどう考えるのかということは必要になってくると思います。その中で、致し方のない部分があるといいながらも、私はこの場で大学の関係者と高校の関係者が本当の意味で膝を合わせて、いわゆる円滑な接続とは何なのかということをもう一度議論していく必要があるのかなと思います。

その上で、制度的な制約もあるかもしれませんが、本当の意味での基礎となる力を付けてもらいたいという大学側のメッセージと、高校側からのこれだけの力を付けたいということの中で、意見の一致が得られれば、それに沿った入学者選抜の形はどういうものなのかと改めて考える必要があるのではないかと思います。

ただ、一方で、大学の経営という観点からしますと、やはり総合型選抜が充実されれば前倒しになっていくのはある意味で致し方ないところがあります。国公立大学において総合型選抜の枠組みが大きくなって、その分、秋入試を重点化されるとなると、日本の大学の場合、私立大学はまず先に合格を出して、国立大学へ抜けていく方は見送った上で、どう補充するかという形で入学定員を確保していくのが通常の形になっています。できるだけ歯止めがかからないように、何らかの工夫を加えていく必要があるだろうという認識は持っています。今のところ、申し上げられることはそのようなことです。

**【荘島・司会】** ありがとうございます。続きまして、もう1件ご質問がございました。

「高校から大学へ、入学後の大学教育に円滑につなげるためについてのお話をありがとうございました。大学から社会へ、入職後の働きに遠隔につなげるための検討も進んでいると思います。高校現場では生徒の5年後10年後の自分の姿を考えさせることもありますから少々気になった次第です。」というご質問といたしますか、ご感想を頂きました。先生方、いかがでしょうか。

**【椎名】** 質問の意図としては、大学教育の中でどれぐらい卒業後の働くことについて、円滑につながるようになっていくのかということかなと思います。大学のシラバスなどを見ると、何十年か前に自分が学生だった時に比べて、特定の資格を得るためにこの科目が必須ですということが明示的に示される傾向が最近強くなっているかなと思います。

入職後の働きをどう捉えるかにもよると思うのですが、この科目を学ぶことでどういう力が、あるいは、どういう資格ということにつながるのかということが割と昔よりも明示されるようになっていくかなと思っています。

**【荘島・司会】** 続きまして、竹内先生いかがでしょうか。

**【竹内】** まず、5年後10年後を考えるということは非常に重要なことであると思います。以前は学年が上がってから将来を考えていく機会を多く設けている大学が多かったと思いますが、今は多くの大学がもう入学後1年次からいわゆるキャリア教育的な、キャリアデザインの科目を用意するなど、考える機会を多く持たせていると認識しています。

大事なことは考える機会を生徒たちに多く持たせて、その中で試行錯誤しながら将来

の自分を考えていく機会を教育機関は提供していかなければいけないと私自身も日々考えて望んでいます。

【荘島・司会】 最後に本郷先生、お願いします。

【本郷】 既に両先生がお答えのとおりなのですが、最近、大学でも早い学年の段階から、インターンシップ等で自分の将来の働く場で様々な経験をする中で試行錯誤を繰り返して、改めて大学で何を学ぶのかを自覚させることが重要であるということで、どの大学でもそういう取り組みが行われていると思います。

つまり、働きの経験をしながら学びの内容を決めていくということ、それをより深めるということを行っています。それが大学と社会を結び付ける一つの道になっているとすると、同じことがある意味では大学と高校でも言えるのではないかと。つまり大学で何を学ぶのか、そのために高校で何を勉強していかなければいけないのか。何を経験しなければいけないのかについて、もっと大学のほうはいろいろな形で発するメッセージを通じて、なるべくミスマッチがなく、本当の意味で本領が発揮できる大学に進めるように、それに導く手だてを考えていくことが必要ではないかと思っています。

【荘島・司会】 ありがとうございます。

【川嶋・司会】 予定した時間となりました。ご報告者の方、それから視聴していただいた皆さま、大学入試センターの事務担当の方、お世話になりました。

大会冒頭の文科省からの挨拶で、少子化時代の大学教育の在り方について、今後、大学分科会で議論されるというお話がありましたので、少子化あるいは大学全入時代の大学入試、入学者選抜の在り方についてもぜひ議論をしていただければと思います。

最後に、私見になりますが、私は高校側と大学側がそういう両方の観点から見た時に、高校 3 年間の学習や様々な活動の先に大学入試があるという発想に今後変えていく必要があるのかなとも思っています。

本日はご参加いただきまして、ありがとうございます。これにて閉会とさせていただきます。

【一同】 ありがとうございます。■

## 令和5年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回） 実施結果

### 1. 大会実施概要

期 日 : 令和5年5月18日(木)～20日(土)  
 主 催 : 独立行政法人大学入試センター  
 共 催 : 北海道大学  
 参加費 : 1人 3,000円(税込)  
 開催形式 : Zoomによるオンライン開催  
 参加申込者数 : 400人 (令和4年度参加者数 430人)

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合計
参加申込者数		150(151)	83(74)	108(123)	37(55)	22(27)	400(430)
内訳	教員・研究者	98(100)	45(36)	35(27)	36(53)	0(1)	214(217)
	事務職員等	52(51)	38(38)	73(96)	1(2)	22(26)	186(213)

単位：人 ( ) は前回大会の参加申込者数。

### 2. 日程・プログラム

日 程	プログラム	時 間
【1日目】 5月18日 (木)	全体会1 (センターセミナー) 「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の 有機的な連携に向けて」	13:00 ~ 16:00
【2日目】 5月19日 (金)	主催者挨拶, 来賓挨拶 全体会2 「国際入試の現状と展望」	9:40 ~ 10:00 10:00 ~ 12:30
	全体会3 「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価 の充実に向けて」	14:00 ~ 17:00
【3日目】 5月20日 (土)	研究会 (交流の場: 各30分を含む)	
	◆オープンセッション (第1部)	
	・第1セッション [総合型選抜, 学校推薦型選抜]	9:30 ~ 12:00
	・第2セッション [入試広報]	9:30 ~ 12:00
	・第3セッション [アドミッション・ポリシー, 志願者動向, 入試方式]	9:30 ~ 12:00
	◆オープンセッション (第2部)	
・第4セッション [段階評価, 多面的評価]	13:30 ~ 16:00	
・第5セッション [高大接続, 高大連携]	13:30 ~ 16:00	
・第6セッション [選抜方法, 入学後の教育]	13:30 ~ 15:40	
	◆クローズドセッション(第1部) [選抜方法, 英語試験]	9:30 ~ 12:00
	◆クローズドセッション(第2部) [高大接続, 志願者動向, 多面的評価]	13:30 ~ 17:10

# 大学入試研究の動向

**41号**

令和5年12月

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

**<https://www.dnc.ac.jp/>** ☎03-3468-3311

編集/試験企画部試験企画課